
魔法少女あまた☆マギカ

naonao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女あまた☆マギカ

【Nコード】

N4975R

【作者名】

nao na o

【あらすじ】

『眼球』と『詩』をテーマとした魔法少女まどか☆マギカの二次創作となっております

前奏曲＜オーヴァーチュア＞（前書き）

サブタイトルを変更しました。
他は一切変更しておりません。

前奏曲＜オーヴァーチュア＞

願い事を何でも叶えてくれると言われたら、貴方は何を御願いしますか♪

億万長者になりたい？

それとも、モテモテの美少女になりたい？

はたまた、世界を統べる王になりたい？

やっぱり、色々な御願い事が思い浮かびますよね♪

十人十色、人によって心に思い浮かべる願い事は異なる筈です。当然、私にも叶えたい願い事があります。

それはね♪

目が欲しいの・・・

私には生まれながら眼球がないの・・・常に暗い闇しか見る事しか出来ないの・・・

だから、私は毎日神様に御願いしたんです。

目が欲しい・・・御母さんが何時も話してくれる世界を見てみたいの・・・

黒色以外の色を見てみたいの・・・

「神様、御願い・・・私の御願いを叶えて・・・目を頂戴・・・」

部屋からは音一つしないので、私はぼやく。

母親や父親が居れば、間違い無く心配や悲しませるのは確かなので、私一人の時にしか言わない呪^{おねがい}詛。

だけど、この日・・・私の14歳の誕生日の日は違った・・・

「叶えてあげよっか？その代わり、僕と契約して魔法少女になってよ！！」

悪魔の声が返って来たのだ・・・

その日から、私の空洞には綺麗な綺麗な水晶玉で埋まり、綺麗な色を見る事が出来たの♪

だけど、また新しい物を失っちゃった・・・

先ずは両親・・・私の空っぽの窪みに突如現れた眼球に、近所が大騒ぎし始めたのだ。

挙句の果てには、最近行方不明になった子供の眼球を私に移植したとか云う噂まで出始めたのだ・・・

毎日の様に家には石が投げ込まれ、遂に耐えきれなくなった両親が首を吊った・・・

次に失ったのは平和・・・

キュウベえと呼ばれるフェレットの様な、謎の生命体^{あくま}に願いを叶えて貰った代償として、魔女と呼ばれる異形の物体を討伐しなくてはならなくなったのだ・・・

そして、現に今も・・・

——魔法少女あまた☆マギカ——

始まります・・・

第一話 これが新しい魔法少女だよ

辺り一面が綺麗な青色で、地面には空き缶や空き瓶、大量のプラスチックゴミ等が沢山転がっている。

そして目の前には、全身に黄色のギザギザした模様が入っている魚。大きさは、人の子供大。そして、その周りには、取り巻きであるオタマジャクシの様な生物が無数に集まっている。

オプタラム・アニメ
「魂之眼球!!」

私の叫び声とともに、宙に無数の眼球が出現する。

これが私の魔法・・・

『見る事を御願いした』結果がこの魔法である。

この無数の眼球に映った物は、全て私の目で見たと同様に脳内で処理される。

私が今迄以上の苦痛を感じるようになった全ての元凶であるキュウベえ曰く、魔法少女になる際に叶えて貰った願い事によって、その魔法少女の使う魔法の方向が決定するらしい。

例えば、他人の傷を癒したい等の願いの場合は治癒能力に優れる魔法少女になり、時間を巻き戻してやり直したいという願いなら時間操作の魔法少女が誕生する。

私の場合は、色を見る為の眼球が欲しいと願ったので、このような魔法を扱う魔法少女になったらいい。

360度全方位を把握し一切の隙を作らない事も出来るし、眼球だけを別の場所に飛ばして探索する事も出来る。

この眼球は攻撃されて破壊されても、術者である私には一切のダメージが生じないので、私は魔女の張った結界に侵入する際には必ずと言って良いほど、この魔法で探索をしてから入るようにしている。

今回の場合は、魔女の使い魔であるオタマジャクシの数が非常に多いので、何時もより多くの眼球を召喚する。

私の白色のソウルジェムが少し穢れを見せるが、ちっとも私は気にしない・・・

こいつを倒せば、グリーンシールドが手に入り、私のソウルジェムの穢れを浄化できるからである。

「それじゃ、始めますか・・・」

刹那、私と魔女の使い魔は動く・・・

敵の膨大な数は私の力の前には相性が非常に悪い。

私を倒すのであれば、少数精鋭の方が圧倒的に有利に運べる。

両腰のフォルダーに入れられた銃を両手に持ち、迫り来る使い魔へと銃口を向けて撃つ。

何匹かは、私の死角を狙って襲って来ているが、私の能力の前には意味なく、簡単に認識されて、足の太腿に装着された魔法少女の意思によってトリガーが引かれて発射される念動銃によって、銃弾の餌食と化す。

使い魔に銃弾が当たると、使い魔のオタマジャクシは丸い体を風船のように膨張させて破裂する。

その際に盛大な血しぶきを上げて、私の純白の衣装を深紅に染め上げる。

その度に私の心には狂気が湧き上がる。

殺して殺して殺しまくる！！

使い魔の数がある程度減らしたら、そのまま宙に滞空し、銃口を魔女の魚へと向ける。

「私の為に死になさい♪」

両手にしっかりと握られてる拳銃のトリガーを引く。

銃口より発射された二発の銃弾は魔女の頭に的確にめり込み、魔女の体を爆発させる。

魔女が死ぬと同時に、まだ半分は居た魔女の使い魔が消滅し、次に空間が揺らぎ始める。

これは、魔女が死んだ事によって結界が崩壊している事を意味しているのだ♪

つまり、私の勝ちって事だね♪

辺りが本来私達が過ごしている空間に戻ると、私は数メートル先に転がっている黒い宝石の様な物を拾いに歩を進める。

この黒い宝石はグリーンフィールドと呼ばれる魔女の卵である。

魔女の卵と聞くと、一見危険そうないメージが思い浮かぶであろうが、これは私達魔法少女にとっては非常に大切なアーティファクトである。

これを使う事によって、ソウルジェムの汚れを浄化することができ、それによって私達魔法少女は再び自由に魔法を使うことができるようになるのだ。

あっ、そうそう♪

私の敵だった魔法少女がソウルジェムの汚れを全く気にせずに魔法を使っていたら、魔女になっちゃったんだよ！！

いや、私も以前はあまり気にしてなかったけど、あれ以降はちゃんと手に入れるようにしてるのだよ♪

あと、魔女の結界内はその人の心情風景が影響してるらしいんだ♪だから、さっきの魔女の結界で簡単に説明すると、さっきの魔女に

なった魔法少女は生前に海に関係する人間だった。

次に、ゴミが海底に捨てられていたので、海底に捨てられたゴミに何かしら思いが有った。

うゝん・・・まあ、アレだよ？

今話題の海人^{うみんちゅ}って奴だよゝ♪

つうか、キュウベえの野郎・・・契約前や後にこういう大切な事を言えよな・・・

ああゝ、また頭に來始めた・・・次会ったらハチの巣にしてやるし！！

魔法少女の事を一切説明せずに、契約を持ちかけて來たあの悪徳商^{あくま}法野郎め・・・

「やあ、御疲れ様♪」

とか何とか思っていたら、神出鬼没な奴は姿を現して、私の目の前に転がっているグリーンフシードに体に乗っけて、ムカつく声で私に話しかけてくる。

なので、取り敢えず撃ち殺す事にしました♪

「うわっ、怖いなあゝ！！僕を殺す気い！？」

運悪くも私の一撃をキュウベえは回避し、私に怒鳴り返してくる。
ただ、この不思議生命体は表情を一切変化させないので、声が怒鳴っていても怒ってるようには感じられない。

「うん♪」

そして、悪魔キュウベえにも負けない飛びっきりの笑顔で返す。
つまり、無表情よりちよつとマシな笑顔ってことです♪

「即答かい・・・まあ、良いや・・・」

良いのかよ・・・

「君に御願いが有るんだ」

「何？」

「いや、実はね♪鹿目まどかって少女に魔法少女になるように頼んで欲しいんだ♪」

「成程・・・つまり、全力全開でアンタを止めろって事ね？大丈夫、一人で悩まなくて良いよ？私が居れば、もう怖くないよ？さあ、私に頭を向けてちょうだいな♪」

「うわぁ、違う違うよ！！僕を止めるんじゃないで、まどかを勧誘して欲しいんだよ」

「勿論、却下に決まってるでしょ？こんな呪われた力なんて、私達だけで十分なのよ・・・それに、魔法少女の行きつく果てに關しては分かってんのよ・・・」

「うーん、そっか・・・じゃあ、僕だけで頑張る事にするよ。あつ、そうそう。アマタは、マミって魔法少女を知ってるだろ？」

アマタは私の名前であり、マミとは巴ハイムマミさん。

私と同じで魔法少女であり、私が魔法少女になったばかりの時に、

私の命を助けてくれた魔法少女である。

彼女の単発マスケツト銃の乱撃が、今でも私を魅了しており、私が戦闘武器の一つとしマスケツト銃も扱う事を決めるきっかけとなった魔法少女だ。

「巴マミさんでしょ。私の命の恩人よ？知らないわけがないでしょ？」

「そうそう。でね、彼女なんだけど・・・魔女との戦いで負けて死んじゃったんだ♪」

その悪魔の言葉に、私は手に持つ銃を落とし、目の焦点が定まらなくなる。

キユウベえは、こちらが聞くまでは一切真実を喋らないが、嘘は言わない事を知っている。

それに、魔法少女が死んだなんて嘘を、魔法少女を生み出す存在である彼が吐く必要が有る訳がない・・・

「何でマミが死んだか分かるかい？彼女はまどかによって孤独を克服したからだよ？」

言ってる意味がさっぱり分からない。

孤独を克服したから何だと云うのだろうか？

それが、マミさんの死へ直結するのかが私には理解できない。

「貴方の言ってる意味が分からないわ」

「そうだねえ。分かりやすく言うと、孤独を克服した事によって、心に余裕が発生したんだ。それがマミの隙だったんだよ♪だから、彼女は魔女にその隙を突かれて殺されたんだ♪アマトは気をつけて

ね♪」

アデアット
「召喚！！」

私の右手付近の空間が一気にねじ曲がり、腕と巨大なマスケット銃が一体化する。

銃口を向ける先は当然ムカツク顔をした悪魔である。

「あれ、怒ってるのかな？」

「当り前でしょ？ 貴方はマミさんの事を馬鹿にしたからね・・・」

「僕は馬鹿になんかして無いよ？ 彼女は僕にとって大切な手駒まほうしやうじよだっ
——」

「ティロ・ファイナーレっ！！」

弾丸を発射する。

弾丸はキュウベえに着弾すると同時、彼の体をグリーンフシード諸共、木端微塵に粉碎する。

さて、キュウベえを粉微塵にした事で、私の気分も少し満足。

でも、やっぱり心の何処かにポツカリ開いた部分までは満たしてはくれない。

だが、その代わりと言っては何だが、私に鹿目まどかに対する興味が湧く・・・

「鹿目まどか・・・どんな子かしら？」

ちよっと、見てみようかな・・・

第二話　こんなにキュウベえを殺すなんて絶対におかしいよ（棒読み）（前書き）

これがやりたかったから書き始めたのだよ（笑）

QB ザマァ!!!!!!

おっと、ここで暴走すると別の作品での自分の印象も悪くなりますので、ストップストップ（笑）

マミさんが最終話で復活しないかと少し楽しみにしている・・・

まどか「私に関わって死んだ魔法少女の皆を生き返らせて!!」

QB「御安い御用さ〜♪ぴるぴるぴるぴるぴ〜♪」

なんて展開をちょっぴり期待（笑）

第二話　こんなにキュウベえを殺すなんて絶対におかしいよ（棒読み）

さて、皆さんに質問です♪

私は大事な事を一つ忘れてました♪

さて、それは何でしょう？

？鹿目まどかの顔を知らない♪

？鹿目まどかの居場所を知らない♪

？グリーンシードを破壊しちゃったこと♪

さあ、どうれだ？

答えは全部だよ♪

正解した君には、おめでと～の拍手♪

ハズレた君には、キュウベえとの契約権をあげようじゃないか♪

えっ、俺は男だから無理だって？

じゃあ、そんな君は女装でもして契約してみなよ♪

もしかしたら、キュウベえが契約してくれるかもよ♪

「そんな訳無いに決まってるだろ・・・」

ちっ、現れたな・・・

「ねえねえ、あと貴方の代わりは何体居るの？」

キュウベえという生物は、何度殺しても記憶を共有した全く同じの

個体が出現し、魔法少女を製造し続ける。

一度、奴の寝床に侵入して、ゴキジェットをぶっかけてやりたいよ！！

台所の黒い悪魔と双壁をなす、この白い悪魔をね♪

「うーん、無限とも言えるかな？僕の代わりは幾らでも居るからね♪」

「ふーん・・・じゃあ、ストレス発散したい時はキュウベえ蹴りでOKだね♪」

「一応は記憶等が別の個体にも伝達されるから、止めて欲しいかな・・・当然、痛覚も伝達されるわけだし」

「じゃあ、是非とも殺そう！！これから、毎日キュウベえを殺そうヨ！！」

私は可愛らしく両の手をぎゅっと握りしめて、胸の前で軽くシェイクする。

「そんな満面の笑顔で物騒な事を言わないで欲しいよ。これだから君は困る」

アンタの方がもっと困るし、アンタに困ると言われれば本望だよ。なんて、言葉を私は飲み込む。

正確には言わなくてもこいつには伝わっていると判断したからなのだが・・・

「まあ、良いや♪丁度良い時に出没したわね♪貴方のエンカウント率がスライム並みで良かったわ♪」

まあ、逃げる速さはメタルスライム並みだけどね♪

うふふふ、これで討伐したら希^{グリーフシード}少道具を落としてくれるなら、色々
と面白そうなんだけどな♪

「で、僕に何か用かい？」

「鹿目まどかの居場所を教えなさい」

「まどかに魔法少女になるように頼んでくれる気になったのかい？」

表情変化は乏しいが、声の上がり方より、キュウベえが喜んでいる
のは確かであるが。

ところがギツチョンパ！！アンタの御願いを誰が聞いてやるもんで
すかい♪

「いや、ちょっと興味が湧いただけよ。もし、ムカつく様な人間な
ら、無理矢理アンタに御願いを言わせて、魔法少女に仕立ててあげ
るわ」

「分かったよ。じゃあ、取り敢えず僕について来て♪まどかの居る
場所まで案内してあげるよ♪」

「御願いするわ♪」

キュウベえは私の肩に乗るや否や、耳元でカーナビよろしく道案内
を開始する。

そういえば、最近のカーナビはアニメの声優さんの声の奴が有るら
しいね♪

まあ、間違いなくこいつの声でやった日には、運転手及び乗客の末

路は事故死OR契約しかなさそうだけどね♪

さて、鹿目まどかの元に向かう最中にスクリーンの向こうの皆さんには私の魔法について更に詳しく話しておこうかな♪
あつはっは、メタ発言はアウトとか思っちゃった？
じゃあ、これは私の独り言って事で済まして頂戴♪

私の能力の一つ目が無数の眼球による広範囲認識能力。

そして、二つ目が拳銃召喚。

そんで三つ目がマミさんの必殺技『ティロ・フィナーレ』を私風にアレンジした砲撃。

で、今回紹介するのが四つ目こと最後の能力です♪

使い魔召喚と呼ばれる能力。

魔女になる前の魔法少女がこの能力を開花させるのは、キュウベえ曰く非常に希少^{レア}らしい。

私としては、魔女が使えるのだから魔法少女が使えて何が可笑しいとか思っちゃってるんだけどね♪

私の召喚するのは口に眼球を咥えた烏である♪

烏自体には戦闘能力は無いが、敵の錯乱、攻撃に対する生贄^{スケープゴート}として用いる事が出来る上に、口に咥えた眼球は当然の如く、私が認識する事を可能とする魂之眼球^{オプタラム・アニマ}である。

ただし、欠点としては負担が大きいのか、ソウルジェムに対する穢れが非常に大きい。

なので、グリーンシードのストックが沢山有るか、余程の事が無い限り使用される事が無い魔法である。

残念な事に、前回の魔女戦ではグリーンシードを回収し損ねたので、暫くは御目にかかれないうちかもしれないね♪

「ほら童話を見てごらん♪烏が盲目少女に恋したよ♪死人の眼球抉

って差し出した♪これで僕を見てくれと♪」

天気も良く、辺りは緑が一杯なので、テンションも上がってきて、何時の間にか鼻歌を歌いだすのだが・・・

「うわ・・・白昼堂々、アマタが危ない歌を歌いだしたよ・・・」
キュウベえより突っ込みが入る。

「ほら肩のこいつを見てごらん♪こいつは盲目美少女に恋したよ♪魔法の眼球を差し出した♪これで魔法少女になってくれと♪」

なので、歌詞をオリジナルより少し変えて、歌う事にしたみた。

「僕は君に恋なんてした事はないよ？それに、少女の前に美が付いてる気がするんだけど？僕の気のせいかい？」

「貴方の眼球を、偶然にも胸ポケットに入っている、この純銀製スプーンで抉ってあげよっか？きつとそうすれば、美少女に見えるところだよ？」

「目を剝り抜かれたら、君の顔が見えないから美少女かどうか確認できないよ？」

「なら、今の私を永遠に脳内にインプットしなさい♪」

とびつきりスマイルで、私の肩に乗っかるキュウベえの右の眼球にスプーンを突き刺す♪

ぐちゃっという嫌な音と共に、ぐりぐりとスプーンを掬じり引き抜く♪

スプーンの掬う部分には、キュウベえの右目に有った筈の水晶体が、スプーンで掬った一粒のキャビアやイクラの様にちょこんと乗っている。

流石に、両者と違って食べる気は起きない♪

「酷いなあ、本当に挟り取るなんて？」

そして、剝りぬかれた本人は対して慌てる様子を見せない。

何時も通りのムカつく声で返してくる・・・

と云う訳で、もう一個の目もサービスサービス♪

今度はスプーンの代わりに、拳銃だよ♪

素早く召喚した拳銃を、早打ち♪

でも、私ってハリウッド映画とかで出てくるガンマンみたいに、早打ちは出来ない訳♪

だから、ちよっと手が滑ってキュウベえの頭を撃ち抜いちゃった♪

「てへっ☆」

可愛らしくオデコを軽くグーで叩く。

「てへっ☆じゃないよ・・・これで君に殺されたのは24回目だよ・・・どれだけ僕を殺せば気が済むんだい？」

うおー！！また新しい個体がエンカウトしたよ！？

しかも、私の肩の上から落ちたキュウベえ（故）を食べてるし・・・

「一日一匹くらい？一日一匹三日で三匹、だーから走って殺しちゃえ♪」

「もきゅっぷ♪」

きやあゝ、奥さん!! キュウベえがゲップしましたわよ!!
汚いわねゝ♪しかも、もきゅっぷって・・・

食事後はゲップをして、可愛さアピール狙ってる!?

新手の萌え要素として、キュウベえ萌えを流行らす気なの?

「君の歌での例えは実に物騒だね・・・君の傍にこれ以上居たら、
また殺されそうだから僕はこれで失礼させて貰う——」

「逃がさないよ♪」

餌^{したい}を食べ終えた事もあって、逃げようとするキュウベえ(新)を当然の如く逃がす訳はなく、にこやかに驚掴みする。

「ほら、次の案内ヨロシクね♪」

「分かったよ・・・」

諦めたかのようにナビゲートを開始するキュウベえ(新)。

私はこの後20分後に鹿目まどかが住んでいる街に到着する事が出来たのだ♪

当然だが、キュウベえ(新)の犠牲が有った上で・・・

いやゝいやゝ、ワタシモワルギハナカタアルヨ?

ただ、道を間違えた時に「どうして君は僕の言う事を聞かないんだい?」とか言われたから、「アンタの言う事を聞くと碌な事が無いのよ!!」って握りつぶしちゃった♪

あっはっは、キュウベえの血液が服にべっとり付いちゃったから、服の御着替えが必要だね♪

参った参ったよ♪

第三話 もう謎キャラ出現だよ（前書き）

本作品は20時ジャストに投稿されるように、今後も常に予約投稿がされています。

なので、20時に投稿されてなかったら、その日投稿の分は書き終わらなかったと思って下さい・・・

一応全部で10話〜20話以内で終わらせるつもりです。

目標は毎日投稿とアニメ終了までに作品完結です（笑）

第三話 もう謎キャラ出現だよ

「占拠っ、占拠、明るい占拠おっ♪」

さて問題です♪獣の血で汚れてしまった私の新しい服を調達する為に、私は安くて高品質のユニクロに行きました♪

だけど、血で汚れた服で入ると通報されちゃう恐れがあるので、私はとある方法を使って通報を回避しました♪

さあ、どうやって回避したでしょう？

？血で汚れた服を脱ぎランジェリーのみで突入

？スッポポンで突入

？魔法少女の格好で突入

？店員及び客を全員殺害して店を占拠

さあ、どれだ？

まあ、今回は簡単だよね♪

開始早々、面白い歌を私が歌ってるしね♪

先ずは？と？はハズレだよ♪

こんな事をするのは、「生きているからHAPPYさあ」なんて言ってる草食系男子へんたいだけだよ？

残りは？と？に限られてくるヨネ・・・

さあ・・・私の性格をよく考えて答えてね・・・

あっ、そうそう・・・今、私の入ってる試着室の床は真っ赤な血で一杯だよ？

じゃあ、答えを発表するよ♪

答えは・・・

？でした♪

流石に私もキュウベえと魔女以外を殺すのは心が痛むからね。

勿論、床の真っ赤な血はキュウベえのだよ？

レディーの着替えを見られなくなかったの♪

この、淫獣めえ♪

そして、30匹殺害まで後4匹いっ！！

記念すべき切り番の殺害方法はどうしようかな？

スタイリッシュ☆殺☆害で決めたいよね♪

おっと、閑話休題だよ♪

通報は回避したけど、店員にはちよつと危ない人に見られたよね・

全身真っ白のウェディングドレスみたいな衣装に、太腿には拳銃の入ったホルスターが付いてたりとね・・・

いやあ、考えてみれば、拳銃の所持で警察を呼ばなくてよかったよ♪

玩具と勘違いしてくれたのかなあ？

まっ、どっちにしろ、玩具でも所持して店に入ったらイケないんだけどね♪

昨日と本日で既にキュウベえを4匹も殺して、その度に服を染色しているの、染色しても大丈夫な赤色をメインに上下を選択する事に。

先ずは真っ赤なフレアワンピース♪

そして、動きやすさも重視して、下には黒の5分丈レギンスを着用する♪

レギンスって言うよりはスパッツって言った方が、伝わりやすいかな？

靴は最初から履いている学校指定靴・・・

うう、靴まで買う金銭的余裕が無いので、ここだけは微妙になっているのが何か泣けてくる・・・

「別に良いんじゃないかな？どうせ靴なんて誰も気にしないだろう？」

うわっ！！また別の個体がやって来て、キュウベえ（故）を食べてるし！！

って言うか、御願いだからくちやくちや音を立てて食べないで！！それで無くとも、少し鉄の香りがしちやってるんだから！！

「もきゅっぷ♪」

そして、このゲップとドヤ顔・・・

怒っても良いですかい？

殺しても良いですかい？

『アンタ・・・好い加減にしないと殺すわよ？』

『何を言ってるんだい？既に26回も僕を殺したくせに・・・』

流石に試着室内で一人でしゃべるのは拙いので、念話と呼ばれる全

ての魔法少女に共通して与えられる能力を発動する。

説明しよう!!

念話とは、魔法の力で通話する物であり、実際に喋って会話するのではなく、脳内で思った事を相手に伝える非常に便利な会話法である。

どんな時に使えるかと云うと、学校で3人で会話してる時に、1人だけKYな人間が居た時なのだ♪

そりゃまあ、KY人間を除く2人でさんざん悪口を口に出さずに言ったりできるからね♪

KYの発言は竹輪耳発動で、右から左へと受け流す♪

あ、KYってのは、空気を読む気が無いの略だよ♪

稀に、『K_こんなの絶対におかしいY_よ』って略す人が居るらしいからねえ、付け加えてみてみたり♪

『絶対にそんな読み方はしないと思うよ・・・そんな読み方をするのはアマタだけだと思うよ?』

『私は『Kill You』って意味で使う事が多いかな?』

やっぱり、こいつに突っ込まれるのはムカつくので、拳銃を頭にしっかりと当てて、言葉返す。

『アマタらしい略し方だね♪』

『でしよ♪じゃあ、キュウベえにもKYしてあげるね♪』

『僕は毎日のようにされてるから、そろそろ別の人にしてあげたらどうだい?』

これ以上この場で殺すと、床の血が明らかに試着室の外に広がる事

は確実ですので、外で絶対に殺す事に決定。

この調子なら、本日中には30キュウべえ達成だね♪

私は購入決定の服を一旦脱ぎ、再び魔法少女姿に変身する。

そして、購入決定の服をカゴに入れて、レジへと向かう。

「ど、合計3150円になります」

レジの店員さん(♂)は私の魔法少女での格好に、少々・・・いや、完全にドン引きを・・・

私もマミさんみたいな服にすれば良かった・・・

マミさんの服なら、歩き回っても品の良い御嬢さんで済んでそうだし・・・

マミさん・・・何で、あんなに性格も良くて可愛い人だったのに死んじゃったんだろう・・・

マミさんの事を思い出すたびに、私の胸の中には悲しみが込み上げてくる。

「あ、あの・・・御会計の方ですが・・・」

「あっ、すみませんっ」

レジ係り(♂)の言葉で、私は慌てて財布を取り出して、会計を済ます。

そして、商品を受け取り、急いで店の外へと出る・・・
拙いなあ、マミさんの事で頭が一杯で、別の事が考えられなくなってるよ・・・

『アマタ、マミの事で悩んでるのかい？』

『そうよ？悩んでたら悪いの？』

『誰もそんな事は思っていないさ♪ちよっと、面白い事を教えてあげよっか？』

相変わらず私の肩に居座る悪魔が、囁きを開始する。

こいつが面白いと言い始めたら、十中八九誰かに不幸が降りかかる・

『面白い事って何？』

『マミを生き返らせる方法が有るんだ♪』

マミさんの事で悩んでる今の私には、悪魔の囁き・・・
恐らく、その方法に関しては予想はつく・・・

『鹿目まどかによる、あなたとの契約での御願いでかしら？』

『察しが良いね♪まどかには、君達のような普通の魔法少女とは違って、才能が有るんだ♪それは、神様が作った世界を改変する事も出来るくらいだね♪』

やっぱりね・・・

『しかし、それは鹿目まどかと云う少女の犠牲が有ったの上の方法でしょ？』

『勿論♪でも、奇跡を得る為には、それなりの対価が必要なんだよ

「別にまどかの命が無くなる訳じゃないし、それでマミが生き帰るんだったら安いと僕は思うけどな？」

『だけど、そんなの絶対におかしいよ!!』

私のちっぽけな良心の叫び・
・
・

当然、キュウベえはこれに対しても、悪魔のささやきで流すだろう・

そして、私の良心を汚染し、鹿目まどかと呼ばれる少女に毒牙を掛けさせるであろう・・・

「その通りよ……」

彼女が来なかったら・
・
・

「拙いね．．．来ちゃったか．．．」

ありいゝ、キュウベえが念話中断したわねえゝ．．．

てか、私とキュウベえの念話が聞きとられてたみたいだねえ……

「貴方、何者？」

声の発信源こと、私の前に無表情で立っている長くて黒い髪を持つ女を睨む。

向こうからは疑問には返事が無い。

なので、私は推測してみる事にした・・・

私とキュウベえとの念話を聞きとると云う事は、魔法少女である。

そして、残りの情報は肩のキュウベえが教えて・・・つてえ、キュウベえいねええええええええええええええええええええええええええええ！？

あいつ、逃走しやがった!!

ちっ、まあ良いわ♪

取り敢えず、目の前に居る奴に直接聞く事に・・・

って、こっちもおおおおおおおお!!?

私がキュウベえ失踪に氣を向けた僅かな時間のうちに、目の前の女も消えてるではないか!?

休日の真昼間と云えど、大都会と比べれば人通りはあまり無く、周リを見渡せば見つけれる筈なのに、彼女の姿は何処にもない・・・

いやあ、御姉さんビックリだよぉ♪

まさかどいつもこいつも目の前から消えちゃうなんてさ♪

まあ、色々と考えても話は始まらないので、私は人気のない露地裏へと、ユニグロで購入した服に着替えに行く。

今の僅かな時間で起きた出来事で、頭からはマミさん死への悲しみに対する悩みは消えていた・・・

まあ、簡単に言うと、私の空いた空間を別の事で埋め尽くしてくれたからだ・・・

マミさん、キュウベえの意図、謎の魔法少女・・・そして、それらを動かす鹿目まどかという少女・・・

その中心人物への興味かなめまどかが更に湧いて来たわ♪

さあ、私も鹿目まどかと云う単体個体の存在に運命を動かされてみようかな♪

手をオデコに当て、
蒼い青い碧い葵空を見上げた・
・
・

第四話　こんなの絶対に面白いよ（前書き）

まどか最新話を見ました♪

ほむほむの能力、これを用いれば、幾らでも原作とは異なる世界で二次創作を書けますね♪

それはつまり？

naonaoクオリティで、暗い雰囲気をぶち壊して、好き放題や
って良いつて事だね☆

「こんなの絶対におかしいよ」

とか思った人は、スターライトブレイカーです♪

第四話　こんなの絶対に面白いよ

純白のドレスを身に纏う少女と、淡いピンク色のドレスを纏う少女。淡いピンク色のドレスを纏う少女は涙を流し目を何度も擦る。純白の少女は鬼気たる形相で睨み、敵意を通り越して殺意を向ける。

「鹿目まどか・・・アンタ見てると本当にイライラするんだけど？何時も、いいいじと悩んで、それに周りを巻き込む・・・はつきり言って、反吐が出んのよ！！アンタを見てっと！！」

ピンクのドレスを纏う少女を鹿目まどかと云う・・・

「どうして・・・どうして、アマタちゃんはそんな酷い事を言えるの・・・」

純白のドレスを纏う少女をアマタと云う・・・

アマタの睨む眼差し、そしてナイフのように鋭い言葉。

それはまどかの心を切り刻み、まどかの瞳から大粒の涙、口から悲しさを表現する言葉が呪詛の様に紡ぎだされる。

明らかに友好的な関係ではないのは、一目瞭然である。

「アンタの所為でママさんが死んだんだよ！？アンタが・・・アンタがああああああああ！！」

アマタは目を一杯見開き、地面に横たわる黄色の髪の少女を指さす。黄色の髪の少女は、二人とは異なり変わったドレスには身に纏っておらず、何処かの学校の指定制服を身に纏っている。

そして・・・見開かれた眼球の瞳孔が開き切っており、生気すら感じさせていなかった・・・

アマタはまどかの首に両手を伸ばし、ギュッと握りしめる・・・

何度も呪詛の様に、「アンタの所為」と攻め続ける・・・

首を絞められた事で、苦しみに耐えきれず、まどかの顔は次第に醜く歪み始め・・・

最後にはゴキヤツという鈍い音と共に、まどかの目が床に転がっている少女と同じように見開かれて、生命活動を停止する。

彼女の首にぶら下がっている宝石も、少女の生命活動の停止と共に輝きを無くす。

輝きを無くすと、絶望の闇が一気に噴出し、周りを包み込む・・・それが、この風景の最後・・・

そして、風景がまた一転。

先程と全く同じ白色のドレスを身に纏うアマタが、槍を持った赤色の髪の少女と戦闘を繰り広げ、赤色の髪の少女を撃ち殺すシーン・・・

また、別の風景では・・・

サーベルを所持する青色の髪の少女を、右手と一体化した巨大なマスケット銃で、骨すら残さずに殺すシーン・・・

彼女が映る風景に平穏な風景は何一つ無い・・・

いや、良く見ると一つだけあった・・・

それは黄色の髪の少女と一緒に居る時である。
その時に限って、アマタの顔には笑顔が溢れており、何処にでも居る幸せそうな女子学生の顔だった。

けど、結局はそれから狂気の顔へと派生される・・・

黄色の髪の少女が死ぬと、それを皮切りとして・・・

壊れたように狂喜し、凶器を持って、狂気を働く・・・

その行為によって、何度も運命を変えられた少女が居た・・・

自分の望む結末をぶち壊された少女が居た・・・

たった一つの因子^{ファクター}によって・・・何度も何度も・・・

折角積み上げた、未来と云う名の積み木を、何度も何度も崩される・・・

正直、それが少女には歯痒かった・・・

だけど、同時に自分と似てると思われ、恨む事は出来なかった・・・

彼女もまた、自分と同じで一人の少女に動かされる存在であるから・・・

「今回は来ちゃったのね、アマタ・・・いや、星屑^{ほしくず}アマタ・・・」

そう、曉美ほむらと呼ばれる一人の少女は・・・

子猫ちゃん 子猫ちゃん どこへ行つてたの？

ロンドンまで女王様に会いにいったの♪

子猫ちゃん 子猫ちゃん そこで何をしたの？

女王様の椅子の下にネズミに噛みついたの♪

さあ、ユニグロの服に着替え終わって準備万端な私は、今何処に居るでしょう？

？この町を見渡せる高い高いマンションの屋上

？エリザベス女王の椅子の下

？鹿目まどかが居ると思われる学校

？魔女の結界付近

今回は焦らす事無く回答発表♪

正解は？です♪

いやゝ、それがねえ♪

町の地理が分からず、夕方まであちらこちら探索してたの♪

それで、夕刻も終わりかけ、闇よるが来るかなあゝとか思える時間帯になると、「俺、この薬を混ぜたら・・・天国に行くんだ・・・」と

云う、死亡フラグを通り越し自殺フラグを匂わせる発言をするサラリーマンや、「死ネバ貴方モモット幸セ」と体をYのポーズにして宗教勧誘宜しく台詞を片言に綴りつつ歩く主婦。

「何処って？それは、ここよりもずっと良い場所ですわ♪カナメさんも是非一緒に♪そうですわゝ、それが素晴らしいですわゝ♪」と内容は別として品の良い話し方をしつつ、ピンク色の髪の少女を

勧誘する少女。

「塩基系漂白剤と酸性洗剤、混ぜるのイクナイ!!」とか言いつつ、両手の袋一杯に塩基系漂白剤と酸性洗剤を入れているサンダルを履いた御姉さん。

と、色々と面白い町の住人がエンカウントし始めた訳♪

いやゝ、この町って本当に面白いなあゝ♪

虚ろ眼でそんな事を言われると、凄く「今から死にます」という雰囲気があるよゝ♪

くふふっ♪私も交ぜて貰おうかしら？

あつ、当然交ぜて貰うと云うのは、集団自殺について意味じゃないよ？この現象は魔女による物である。

彼等には共通して、魔女の口づけと呼ばれる、魔女のターゲットとなった人間に現れる印が首筋に付いているからなのだゝ♪

これを付けられた人間は、無性に脱力感、無気力感に襲われ、死にたがってしまう傾向にある。

あゝ、後追記だけど、この魔女の口づけの絵柄は魔女を露わす印でもあるの♪

例えば、今回の印は二人の天使の絵柄。

これが意味するのは、相手が天使を模した魔女もしくは使い魔ってことなのさゝ♪

さて、この魔女の口づけによって呪われた人間達は、魔女が生息する付近に移動してから一斉に自殺を図り魔女の餌となる。

なので、この大名行列宜しく列をなす集団について行けば、魔女に会える事は間違いない。

そして・・・魔女を狩る為の魔法少女に会えると云う事も・・・

昼に出会った黒髪の少女が確実に出張って来るであろう。
今度こそはちゃんと話をして、正体を聞かないとね♪

てな訳で、私は魔女の口づけの印を受けた住人と一緒に目的地へと歩き始めた。

話し相手もおらず、普通に向かっても面白くないので、華麗なムーンウォークを披露しつつ、眼前のサラリーマンを強制的に話し相手に決定し、会話しながら向かう事にした。

「へーい？生きてるってHAPPYさあ〜♪」

「へーい？この薬を混ぜたらHAPPYさあ〜♪」

と、私の言葉を少し変えて返してくる。

うんうん、ハッピーハッピー♪

「ねえねえ、『キュウベえバーベキュウキュウベえキュウキュウ詰め』って早口で3回言ってみて」

さあ、スクリーンの向こうの皆もレッツチャレンジだよ？

私の激ムズ御手製早口言葉をクリアできるかな？

「キュウベえバーベキュウキュウベえキュウキュウ詰めキュウベえバーベキュウキュウベえキュウキュウ詰めキュウベえバーベキュウキュウベえキュウキュウ詰め」

うわっ、一人目の挑戦者でクリアされたあ！！

何？魔女の口づけを受けた人間は早口マスターになれるの！？

「幸せは♪歩いて来ない、だから？」

「追うのを諦める」

凄いや、この人！！

面白すぎるよ♪

魔法少女にも魔法の口づけみたいな魔法って使えないのかなあ？
もし使えるなら、今直ぐにこんな人を作って、私用の暇潰し人形に
仕立て上げるのに♪

その後も色々と会話を言い、気付けば倉庫に着いていた。

魔法の気配もするし、ここがこの人間達の人生の終点になる可能性
も高い場所である。

しかし、魔法少女の気配がちっともしないなあ♪

数分待っても魔法少女が来る気配は無い・・・

一人ほど、魔法の口づけを受けてない人間が交じっていたのか、必
死に止めようとするが、当然魔法の口づけを受けた人間は聞く耳を
持たない。

倉庫の奥のおばちゃんがポリタンクに液体をしっかりと詰めて来たし、
そろそろ危なそうなので、私も止めに入りますかい・・・

と、私が動こうとすると何と！！

魔法の口づけを受けてない人間が、既に塩基性もしくは酸性のどち
らかの液体が入ったバケツを倉庫の外に投げ捨てたではないか！！

これで、「そぉーい！！」とか「まそっぷ！！」とか言ってくれれ
ば、面白かったんだけどなあ・・・

「「「「「うおおおお・・・」」」」」

まそっぷ!?

何か自殺用アイテムを捨てられた人間達が、魔女の口づけを受けてない人間の首を絞めようと動き始めたではないか・・・

動きが少々ゾンビっぽくて、バイオナハザードを思い出してしまっ
た・・・

捨てた人間こと、桃色の髪の少女は急いで隣の部屋へ駆け込む。

間一髪で隣の部屋へ逃げ込んで、魔女の口づけを受けた人間によっ
て殺されることは無かったが・・・

隣の部屋から魔女の結界が展開される気配を感知する。

どろりで、魔女の正確な位置を感じなかったわけだ。まだ結界を展
開して無いんだから、私の能力じゃ完全には位置を感知出来ないか
らね♪

さってと、これだけ待っても黒髪の少女も出て来ないし、私が出張
るしかないわね♪

序に、あの子は洗脳はされておらず自我を持ってるので、恩を押し
売りして、今晚の宿をゲットだね♪

それに、あの子が来てた制服が黒服の少女と同じ制服だったし、
もしかしたら新情報ゲットかも♪

そして最後に魔女が落とすグリーンシールドもゲット♪

なんて、一石三鳥♪私って、本当にてんさうい♪

策を実行しようと、首にぶら下げているソウルジェムに手を伸ばし
た時、私の目の前を蒼い風が駆け抜けた・・・

それは、青い碧い蒼い魔法少女だった・・・

第五話 約束（前書き）

一話3000文字を少しOVERな代わり殆ど毎日投稿

一話10000文字近くにして、週一投稿

どちらが楽かと考えると、どうしても「3000文字が毎日」にな
ってしまうのは自分だけだろうか？

第五話 約束

蒼い魔法少女？

私の前を駆け抜けたのは、昼に見た黒髪の少女とは異なる魔法少女。この町には二人も魔法少女が居るの？

普通は、魔法少女が別の魔法少女と同じテリトリーを持つ事は無い。魔法少女が魔女と戦う大きな理由はグリーンフィールドに有るからだ。多くの魔法少女がテリトリー内に居ると、グリーンフィールドの回収率が下がってしまい、ソウルジェムの維持が難しくなる。

なので、同じテリトリーに複数の魔法少女が居ると、基本殺し合いになってしまう・・・

現に私のテリトリーに土足で入り込んで来た魔法少女とは、幾度も私は殺し合いをしている。

ただし、マミさんは特別に、私のテリトリーに入る事は許してただね♪

寧ろ、土足で入って来てくれたら逆に嬉しいし、ずっと居座って貰ってもかまわなかったけどね♪

結局は私のテリトリーに来てくれたのは、私が死にかけた時と、私が御礼に御茶を御馳走した時の計2回のみである。

マミさんにもやっぱり守るべき場所が有ったからね・・・

おっと、今はそんな事よりも、蒼い魔法少女だね♪

結界内に直接侵入して見たいけど、黒髪の少女とは異なり、行き成り敵として認識されたりしたら困るから、ここは様子見かな？

「魂之眼球・・・」

私の前に一つの眼球が出現する。

出現した眼球は、宙にぷかぷかとたゆたいながら、ゆっくりと移動しつつ隣の部屋へと向かう。

隣の部屋に眼球が入ると、私の脳内にもう一つの映像が焼きつけられ始める。

未だにゾンビポーズで少女と突入した魔法少女を、悪魔の口づけを受けた人間達が待つ風景に加えて、海の色に類似したマリンブルーの空間に子供が殴り書いたような粗末な天使達が、蒼色の魔法少女に次々と切られる風景が映る。

天使達に交じって、悪魔の羽が生えたデスクトップパソコンのモニターが映っている。

それが、魔法の本体だろう・・・蒼い魔法少女は、魔法を渾身の一撃で殴り飛ばし、宙へと舞いあげる。

そして、何かを叫び、手に持つサーベルで魔法に突き刺す。

恐らく「これで止めだく！！」とか「こいつでもくらいな！！」とか「まそっぷ！！」って叫んでいるのであろう。

いやゝ、私の能力では視界は得れても、音までは取る事が出来ないからね♪

魔法少女の口の動きとイメージで想像するしかないわけだよ♪

蒼い魔法少女の一撃は、モニターを貫通し、スクリーンを粉微塵に砕く。

砕かれたスクリーンより、魔法の大量の黒い血液が噴出し、結界が揺らぐ。

それと同時に、魔法の口づけの印が次々と消え、洗脳されてた人間達が意識を取り戻し始める。

さてっと、これ以上ここに居ると拙い事になりそうだから、私は撤退するとしますかい♪

私は他の人間に存在を気付かれないように、早足で倉庫の外へと出る。

この町には二人も魔法少女が居ると云う事しか収穫は無かったけど、この町に関する情報ゼロだった私には十分かな♪

それよりも、気になる事が一つあった・・・さっきの魔女のモニターには、何故かママさんが映っていたのだ・・・
ママさんの画像がモニターに映し出されてたということによって、考えられるのは・・・

？さっきの魔女はママさんの末路である

？さっきの魔女になった魔法少女はママさんに影響を受けた人間だった

？さっきの魔女とママさんが過去に戦闘した事がある

？さっきの魔法少女もしくは、女の子のどちらかがママさんに関係がある人間である

この4択のどれかだろう・・・

いや、？は違うね・・・

キュウベえは魔女に殺されたと言ったから、違うわねえ・・・

そう言えば、この町は元々ママさんのテリトリーだから、？の線が濃いかなあ？

？もあり得ない事は無いけど、それは違うと信じたい・・・

理由は、死んだママさんも、自分が影響を与えた魔法少女が魔女化したなんて知ったら、成仏できなさそうだし・・・

？もあり得そうだね・・・

恐らく、関係が有るとしたら、蒼い魔法少女だろう。

ピンクの髪の少女は・・・まあ、無いでしょっ♪

マミさんに関係があるとしたら、魔法少女の可能性がって・・・

いや、魔法少女じゃなくて関係の有る人間が居たわね・・・

鹿目まどか・・・

もし、あのピンクの髪の少女が鹿目まどかだったら、彼女の勇敢な行動の数々も納得ね。

でも、あの魔法少女と仲良く会話すると云う事は、あの魔法少女が友達で多くの情報を貰ってるから動じないとも考えられる。

鹿目まどかな様な気もするけど、まだ決定的な証拠が無いからなあ・・・

まあ、もし彼女が鹿目まどかなら、現時点での私の評価は高いよ？魔法少女じゃないのに、勇敢にも立ち向かう姿勢。

ちよっと、無鉄砲な気もするけど、私はそんな元気な子は大好きだし、同様にマミさんも気に入るであろう。

「もし彼女が鹿目まどかなら、キュウベえから守らないとね・・・」

ありゃ、性にも無くやさしい言葉を口に出しちゃった♪

右よし、左よし、周りには誰も居ませ〜ん♪

私は慌てて、空にぼっかりと浮く真ん丸な月明かりと、少しレトロタイプな外套の明かりがミックスされた光に照らされ、夜でもしっかり周りが見えるくらいに明るい倉庫周りを見渡す。

本当に周りに誰も居なくてよかったよお〜♪

特にキュウベえなんか居たら、恥ずかしくて恥ずかしくてやれない

よお〜♪

「やさしいのね・・・」

いや、居たねえ・・・

闇夜よりも真っ黒な髪の毛を持つ少女・・・

そう、私の探し人が・・・

今回は、魔法少女の格好で御出ましのようだ♪

グレーの地味なドレスに、腕に付けているラウンドシールド。

武器らしきものは一切見られないのが少々気になる・・・

「そうかしら？」

「ええ・・・貴方はやさしい、それ故に壊れやすいの・・・」

私の疑問に黒髪の少女は、私の事を知ってるかのように返してくる。
昔、この子に会った事なんて有ったかしら？

「そうよ♪私の純情乙女ハートは、ガラス細工の様に繊細で壊れやすいの♪」

「貴方に忠告・・・今直ぐに、元居た町に戻りなさい、星屑アマタ・・・」

むむむ、私の名前を知っている？

キュウベえから私の名前を既に聞いたのか？

もしくは、本当に昔に会った事が・・・

「御断りよ、真っ黒クロスケさん♪私は鹿目まどかに興味が湧いてるの♪」

「言っても無駄の様な・・・」

「無駄無駄無駄無駄無駄あ！！」

しっかりと伸ばした右腕の手の人差し指だけをしっかりと伸ばし、少し引き気味の左腕は腰の位置に構える。

そしてちよっぴり腰をひねって下ろし、膝を軽く屈める。

まあ、あれだね♪巷で男子に人気な漫画で、スタンドって言う能力を持つキャラクター達が意味も無く構えているあのポーズだよ♪
「分かったわ。じゃあ、約束して・・・決して鹿目まどかを憎まない、キュウベえの言葉に惑わされない、巴ミミを生き返らせようなんて馬鹿な事を考えないで」

黒髪の少女も、私のポーズを見ると嘆息し、条件付きで諦める事にしたみたいだ。

そこで、条件を要約すると・・・

「要するに、鹿目まどかを魔法少女にするなって事かい？」

「もう一つ・・・貴方は決して恨みを溜めて魔女になっちゃ駄目・・・」

「安心しなさいな♪私は魔女にはならないわよ♪」

それ以前に、誰が好き好んであんな化け物になるもんですかい！！

「なら、良いわ。じゃあね・・・」

無愛想な黒髪少女は、その別れの言葉を残した瞬間に、私の目の前から一瞬にして消える。

何かしらの魔法を行使して、消えたのであろう・・・
姿を消す魔法？それとも、一瞬にして移動する魔法？

今の一瞬しか情報を得なかった私には、彼女の魔法の正体の特定はできない。

そして、もう一つ特定出来ない物が有る・・・

それは・・・

名前だった・・・

「ちゃんと、自己紹介ぐらいしろおおおおおおお!!」

私の叫びが、月夜に木霊した・・・

第六話 キュウベえって何で出来てる？（前書き）

行き成りの更新一時停止申し訳ありません。

本日より更新を再開とさせて貰います。

本日は更新再開という事も有りますので、午後8時よりもう一話投稿されるように予約を入れております。本日より、毎日最低1話更新できるように頑張ります。

オマケで、中学高校時代に美術赤点の人間が10分で描いた絵が入っております。

一応、キャラは星屑アマタとなっております・・・

文才もなければ絵の才能もないOTL

第六話 キュウベえって何で出来る？

さあゝて、恒例のクイズの時間だよ♪

「いや、そんな事をする必要はないと思うよ？」

「やっと顔出しやがったわね、キュウベえ？」

「いやゝ、ちょっとさやかって子と契約したり、杏子って魔法少女と話しをしたりしていてね♪忙しくて、アマタの所に居る暇が無くてね♪」

契約？

また、軽い気持ちで御願いを叶えて貰い、この呪われた輪廻に閉じ込められた犠牲者が増えたの？

「そうなんだ？で、質問なんだけどさあ？あの黒い髪の魔法少女は何者だい？」

「僕にもわからないんだ。名前が曉美ほむらと云う事しか」

「アンタが契約したのに、何で彼女の事が分からないの？」

キュウベえが契約したと云う事は、キュウベえと会話したり何かしらの付き合いが有る訳。

なのに、契約した本人が、魔法少女の事を名前しか知らないなんて可笑しな話である。

当然、私は疑問を抱き、問いかける。

「そうとも言えるし、違うとも言える。あの子は極めつけのイレギュラーだ」

契約したけど、契約してないとも言える？

そりゃまあ、アンタは何匹もいるから、別の個体が契約すればそう言い切れるわよ。

それだけでなく、私が結構殺してるしね♪

「ふーん・・・曉美ほむらねえ・・・って、ちょい待ちい！！この町には魔法少女が何人いるのよ！！！」

キュウベえにとってイレギュラーな存在と云う事は、キュウベえの思惑を阻止する人間ってことだ。

つまり、曉美ほむらの事を知る事は、キュウベえの思惑を知る事に直結できる。

そうそう、それとだけど、最初のキュウベえとの会話で、杏子って子があの黒髪の子かと勘違いしてたよ！！

「マミが死んだ今では、美樹さやか、佐倉杏子、曉美ほむらの3人だよ」

3人も魔法少女が居るんかい！！

てか、それなのに鹿目まどかって子も魔法少女にして何がしたいの？魔法少女同士で殺し合いでもさせる気？

それとも、魔法少女の成れの果ての魔女を増やす気？

今一、キュウベえの行動が理解できないのよねえ・・・

魔法少女が存在すると云う事は、同時に魔女を増やす事でもある。魔法少女の目的は、魔女の討伐なのに、魔女を生み出す原因でもあ

る。

つまり、こいつは何かしらの考えが有って無限にこの悪循環を生みだしてる訳だ。

まあ、それを妨害してるのが曉美ほむらって存在な訳。

彼女と御近付きになると云う事は、真実への近道って事ね♪

「あっ、そうそう、キュウベえ。私の事を曉美ほむらに少しでも話した？」

「僕が話す訳無いだろ？僕にとって君はイレギュラーに対抗する為のイレギュラーだからね♪」

ふむう・・・じゃあ、彼女はどうかやって私の情報を手に入れたのかしら？

あっ、そうそう♪そっれっと♪

「キュウベえ、キュウベえ♪」

「何だい？」

「剣山どおーんっ☆」

今日は色々と迷惑かけられたので、御礼として剣山をプレゼントだよ♪

あっ、剣山って生け花で使うあのトゲトゲした奴の事ね♪

私はキュウベえの顔面にバスケットのダンクシュートを決めるようにぶち込む♪

いや、剣山がキュウベえの顔面に突き刺さり、開いた無数の小さな穴から血がどろどろと流れ出す光景は中々乙な物だよ♪
そして、これで27匹目っ☆

本当はキュウベえ Dank 殺しで切り番こと30回目を決めるつもりだったけど、今日は色々とムカついているので、とっておきの殺傷方であの世送りさ♪

「勘弁してくれないかなあ？君の周りには常に複数の僕を待機させておかないと、君との会話が成り立たないじゃないか？」

「ふむ、なんてっきたい・・・これが需要と供給の問題って奴ね？」

「いや、言葉の使い方が間違ってる上に、君一人が殺すのを止めてくれたら、十分に解決する問題だと僕は思うよ？」

と、愚痴りつつも新しい個体が出現し、死骸を食べ始める。

何時も美味しそう(?)に食べてるけど、キュウベえってどんな味なんだろう？

そして、肉体構成材料は何だろう？

男の子はぼろきれとカタツムリ、女の子は砂糖とスパイス。

じゃあ、キュウベえは何で出来てるんだろう？

うん、碌な物では出来てないわね・・・

さてさて、味はどうなんだろう・・・

「ねえ、キュウベえ。キュウベえってどんな味なの？」

「僕の味？君達の世界では例えるのが少し難しいかなあ。知りたいなら、食べてみたら良いよ♪もきゅっぷ♪」

私にどうぞと言わんばかりに、キュウベエの死骸の耳の辺りを口に咥えて、私の足元に持ってきて、私に差し出す。

耳の辺りは顔面部分にダクシュートした剣山の所為で、真っ赤に染まった上にところどころに穴が見られる。

当然だが、そんなグロテスクな物を食べる気にはならない・・・

「遠慮しとくわ・・・」

「そうかい？」

私がノーセンキューすると、キュウベエは再度耳を咥えて口に入れる。

そして、相変わらずの無表情で咀嚼を開始する・・・

「もきゅっぷ♪」

そう言えば、キュウベエのゲップ音って何処か「まそっぷ」と似てるよねえ♪

閑話休題・・・

「あと、聞きたい事がまだあるんだけど。鹿目まどかつてのは、あの倉庫の中に居るピンク色の髪の少女かな？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ、続いて二つ目♪蒼い魔法少女の名前は？」

「彼女は美樹さやか、さっき僕と契約した魔法少女だよ」

成程お、出来立てはや^{まは}の犠^ぎ牲^{しやうじ}者^{しや}って訳ね。

どうりで、さっきの戦闘で直線的な動きが多いうえに、無駄が多かった訳だ。

ていうか、敵の魔女も雑魚だったからアレで済んでたかもしれないけど、もし強力な奴が来てたら返り討ちに会ってたかもしれないわね。

まあ、万が一敵が強くても、曉美ほむらや私が居たし、彼女か私が何かしらの方法で介入して助けてたかもしれないから、死ぬことは無いと思うけどね・・・

特に曉美ほむらは、現在美樹さやかと何か話してるみたいだし♪

え？何で、話してるのが分かるのかって？

いや、まだ魂之眼球を解除してないから、倉庫の奥の部屋の光景が私の脳裏に映し出されているのだよ♪

「ふむふむ。じゃあ、私も欲しい情報が手に入ったから、アンタはもう帰ってもいいわよ？」

「そうかい。じゃあ、僕はまた不条理な殺され方をする前に、君の前から姿を消させて貰うよ」

ゆっくりと私から距離を取り、闇の中へと駆けて行く。

真っ白で闇夜には目立つ筈なのに、不思議な事にキュウベえの姿は直ぐに見えなくなる。

さあ、私も寢床に帰るとしますかい♪

丁度、町の近くで立地条件が最高な廃教会を見つけたしね♪

ちよっとぼろっちいけど、雨風防げるし、鍵も掛けれそうだったから、こんなにか弱い私でも安心して眠れるよ♪

いや、捨てる神あれば拾う神がいる♪

捨てられた教会でも、喜ぶ子羊がいるのだよ♪

取り敢えず、鹿目まどか、美樹さやか、暁美ほむらの会話が終了したみたいなので、私は魂之眼球を解除して、教会へと歩を進める事にした。

そうそう、途中で、パトカーがファンファンファン喧しく鳴らして私の隣を通ったけど、怖いわねえ♪

本当に女の子一人じゃ怖い♪怖い♪

そうこう思考を巡らして暇潰してる内に、ぼろっちい教会に到着する。

ぼろっちい教会の中からは明かりが漏れているのが確認できる。

廃教会で誰も居ないと思っていたが、誰か居るようだ・・・

「すみませ〜ん。誰か居ませんか？」

教会のドアにも鍵が掛けられており、教会内に入る事が出来ないの
で、ドアを叩いて中の人間に出てくるように訴える。

「あ、ちょっと待ってね」

教会の中から少々ハスキーボイスな女性の声が聞こえる。

「こんな夜分になんだい？」

鍵の外される音と共に、ドアが開かれ、中から赤色の髪で、八重歯とポニーテールが特徴な少女が顔を出す。

非常にラフな格好した少女は、口にロリポップを咥えており、他人と会話するにも関わらず口から食べ物を離す気配がない。

「いやゝ、ちよつち訳ありでね♪暫くの間、泊めてくれたら嬉しいなあゝとか♪」

「構わねえよ？ただ、電気とかガスとか水道とか止まってるぞ？」

それって、全部止まってるじゃん♪
まあ、背に腹は代えられないわね♪

「いえ、泊めて頂けるだけで嬉しいです♪あつ、私、星屑アマタつて言います♪」

「アタシは佐倉杏子。宜しくな」

へえゝ、佐倉杏子ちゃんかあ・・・
って、はあああああああああああああ！？

「オマケ」

>i20472—2802<

幕間　く御菓子の詩くトモダチサガシく（前書き）

オマケみたいなものです。

意味は各自色々想像してみてください。

今後幕間と云う形で詩を書くつもりです。

幕間 〈御菓子の詩<トモダチサガシ>〉

キャンディ、ケーキ、チョコレイト、ドーナッツ、チーズが大好き。
御注射、御薬、病院食が大嫌い
人形、リボン、可愛い洋服が大好き
お医者さん、病気、癌が大嫌い

約束約束 『元気になるねって』

懇願懇願 『元気になってよって』

御注射我慢、御薬飲んだ、御菓子我慢、病院食食べた

疑問疑問 『何時退院できるの』

回答回答 『モウジキダヨ』

御注射増えた、御薬増えた、頭痛が増えた、ママとパパがやってくる回数が増えた

挨拶挨拶 『ママ、パパ、いらっしやい♪お仕事は良いの?』

返答返答 『今日は御休みを貰ったんだよ』

ママとパパの声が震えた、ママとパパの眼が潤んだ、私の疑問が増えた、でもママとパパに会えて嬉しいから良いや

苦痛苦痛『イタイヨイタイヨ体がイタイヨ』

嗚咽嗚咽『頑張れ頑張ってくれ!!』

ママとパパが大泣きした、ママがパパに抱きついた、私もママとパパに抱きつきたい、良いな良いな羨ましいな

無言無言『何も考えられない、体が動かない』

絶叫絶叫『いやあああああああ!!』

ママとパパが泣き叫んだ、御医者さんが首を項垂れた、看護婦さんも泣いた、機械が高い音で鳴いた

く僕と契約して魔法少女になってよく

声が聞こえた、聞いた事のない声、不思議な声、運命を変えてくれる声

契約契約『元気になって御菓子が一杯食べたいな』

了解了解『君の祈りはエントロピーを凌駕した。解き放って御覧、その新しい力を』

私は元気になった、ママとパパはもっと泣いちゃった、御医者さんは啞然とした、機械は鳴き方を変えた

美味美味『御菓子って美味しいね』

嬉々嬉々『一杯食べてね!! 御母さん、ケーキとクッキーとドーナツを焼いて来たわ!!』

御菓子美味しい、一杯食べたい、もっと食べたい、御腹一杯食べたい

祝福祝福『オメデトウ、遂に退院出来るね』

感激感激『これで毎日ママとパパと暮らせるね』

私の言葉に皆が泣いた、牧師さんが十字架を握りしめて涙を流した、カメラを持った人が私を映した、神様の奇跡だと言って

運命運命『魔法少女になった少女は魔女と戦わないといけないんだ』

拒絶拒絶『嫌だ嫌だ』

赤色の宝石が黒くなった、気分が悪くなった、だけど無視、御菓飲めば大丈夫

警告警告『これ以上ほっとくと、大変な事になるよ』

撥無撥無『絶対に嫌だ。もう、戦いたくない!!』

もう、戦いたくないもん・・・もう、我慢したくないもん・・・もう、痛い嫌だもん・・・

くパリンッく

何かが碎ける音がする

すると、私は小さな小さな可愛い人形になっていた
私が望むと、御菓子が空から降って来る、私は絵本で読んだハラペコ青虫の様に地面を這って、御菓子の近くに移動する
御菓子が齧り付くと、甘い味が口中に広がる、美味しい味が口中に広がる、幸せな味が口中に広がる

でも、望んでもチーズだけが降ってこない・・・

だから、私はチーズを探して来てくれる御友達を望んでみる
すると、空から一杯御友達が降って来る

御友達はぴよこぴよこと早足で歩いてチーズを探しに行く

チーズっ♪チーズっ♪チーズっ♪チーズっ♪

御友達は沢山のチーズを私の所に持って来てくれた
やったあ〜♪

美味しい♪美味しい♪美味しい♪美味しい♪

けど・・・

寂しい・・・

ママに会いたい、パパに会いたい・・・

パパじゃママじゃなくても良いから、誰か来てくれないかな？

それで、私と御友達になってくれないかな？ 傍に居てくれないかな？

ある日、黄色い髪のお姉ちゃんがやって来た

くるくるとチョココロネみたいな、美味しそうな髪をした御姉ちゃん
んがやって来た

だから、私は椅子に座って出迎える
クラッカーとミルクを一杯用意して

一緒に御話しよう

けど、黄色い髪のお姉ちゃんは私を銃で叩くの、撃つの、虐めるの

御腹に弾が突き刺さる

この人は友達じゃない、病気の菌だ、ウイルスだ

だから、食べちゃおう、頭から食べちゃおう、次は体を食べちゃおう

けど、病原菌は一つじゃない、もう一つ居たよ？

黒い髪の毛のウイルス

こっちも食べちゃおう、頭から食べちゃおう、体も食べちゃおう

けど、ウイルスもとっても強い、最後には私は負けちゃった・・・

でも、これでもう戦わなくて良いんだよね？

もう、ゴールしても良いんだよね？

第七話 新しい出会い（前書き）

ちよっぴり文章を分り易く弄りました＞＜
今回の変更によって、今後の展開に発生する問題は一切ありません。

第七話 新しい出会い

いやいや、佐倉杏子って、アレでしょ？
キュウベえが言ってた魔法少女の一人でしょ？

待て、まだ慌てる時間じゃない・・・

佐倉なんて名字は日本では結構見る方だし、杏子って名前も意外と居る。

偶然、名前が一緒なんて可能性もあるから、まだ、決めつけちゃ駄目だね。

「じゃあ、杏子ちゃんだね♪よろしくね♪」

「ちゃん付けは止めてくれねえか？ちょっと、恥ずかしいからな？」

「ごめんね、杏子ちゃん♪」

「手前、わざとか？」

「あははは、ごめんね♪普段から、女の子にはちゃん付けしちゃう癖があるからね♪」

ただしマミさんを除く！！

私は自分より上の存在にしか『さん』という敬称は用いない。

基本はフルネーム、もしくはちゃんを用いており、敵対する人間に關しては名前すら呼ばない。

敵には名前なんて要らない。敵は敵と云う名前があれば十分である。それは全ての人間においてもそうである。魔女にも名前と云う物の

が存在しているが、魔法少女は一々敵対する魔女の名前をちゃんと呼ぶかな？

例えば昨日私が殺した魚の魔女は『タージエンTagen アシュリーAshrey』という名前のオーストラリア在住の魔法少女が魔女化したものであり、『アシュリー』と云う。性質は『狂気』。

キュウベえとネットを用いて色々と調べてみると、生前は海を守る団体に属しており、日本の漁船に対する妨害活動中に海に転落した際、偶然近くに居たイルカに四肢を食い千切られる。

その後、キュウベえと契約して四肢を再生して貰うものの、移植手術等もなしに四肢が戻っていたので、世間からは化け物扱い。

遂には団体全員が魔女と扱われ、魔女狩りを行っている何処かの国の国民により、団体本部にて自爆テロが行われ、アシュリーを除く全隊員が死亡。

アシュリーは魔法を使い生き延びるものの、仲間の死を悲しみ、海洋生物を殺した日本人が悪いと歪んだ逆恨みをし、魔法を用いて姿をイルカに変えて海を泳いで来日。

手始めに日本の魔法少女を殺そうと戦闘を開始する物の、軽くないなされ命辛々逃走。最後には田んぼの中で、世界に対する行き場の無い恨みを溜めて魔女化。

だってお〜♪バンバン♪

灰でも被って、別の童話にでも出てやがれ〜♪

ゴホンツゴホンツ、魔女の名前は魔法少女の名前をそのまま用いたり、生前に最も大事だった物になる事が多いらしい。

あと、キュウベえの被害は世界的な物だったんだね・・・キュウベえ恐るべし・・・

閑話休題・・・

「ああゝ・・・もう、ちゃん付けで良いよ・・・ほら、外は寒いから中に入りな・・・」

よし、向こうが運の良い事に諦めてくれた。

しかし、言葉はぶっきらぼうだけど、杏子ちゃんは優しいねえ♪はっ、これがまさか今話題のツンデレって奴か!?

「どうした?早く中に入れよ?」

「あっ、ごめんごめん♪御邪魔しまゝす♪」

ひよこひよここと、廃教会の中に入ると、思っていた以上に中は酷かった・・・

外から見ると住めそうな気配はあったが、入口からしか見てなかったので分からなかった惨状がちらほら。教会奥のステンドグラスや教会の左右の窓ガラスは酷く敗れており、中には隙間風が吹き荒れていた。そして、肝心の明かりは、奥の机に置かれたたった3本の蠟燭のみ・・・

「ねえねえ、杏子ちゃんって、ここの教会の関係者か何かなの?」

「まあゝな。面白くない話だけど、聞きたいか?」

「面白くないなら良いや♪」

「聞っけつよっ!!!」

「イタイイタイイタイイタイ・・・」

ニコヤカに却下したら、頭をぐりぐりされる・・・
親にもぐりぐりされた事無いのにつ!!

「もう一度聞くんが、聞きたいか？」

「イ☆ヤ☆ダ♪」

「外で寝たいか？」

「凄く聞きたいです、宜しくお願いします」

「よし♪」

満足げに頷く杏子ちゃん。

いやゝ、色々と酷いよこの子？
でも、私はこういう子は好きだよ♪

「実はここはアタシの親父の教会だったんだ・・・」

「へえゝ、不法占拠してたわけじゃないのね？」

「アンタ、本当に良い性格してるね・・・」

「いやゝ、そんなに褒められてもおゝ♪はっはっは、照れるじゃないかゝ♪」

「褒めてねえよ!!」

ぐっはあゝ!?! また、杏子ちゃんが拳で私の頭をぐりぐりする・・・

「肉体言語は良くないよお？ 何故、人間は言葉を持ってると思ってるの？」

そう言えば、肉体言語と云えば、鬼畜魔法使い『田中ぶにえ』、管理局の白い悪魔『高町なのは』、未来の天使『三塚井ドクロ』と東方より来たりし三賢者スプラッターが有名だよね♪

今挙げたのはアニメや小説の世界の住民たちなので、リアルなこの現実世界では全く関係ないけどね♪

まあ、でもこの三人の中の一人にきつと、さんぞうほうし説教法師『佐倉杏子』が入ることを切に祈る・・・

「じゃあ、何で人間は耳を持ってるのか教えてくれ」

「そりゃあ、王様の耳はロバの耳♪って云う風の噂を聞く為でしょ？」

「って事は、他人の言葉を聞く為だろ？」

「そうだねえ」

「じゃあ、アタシの話を素直に聞いてくれ・・・」

甘いわね♪私がママさんを除く、人の話を真面目に聞く訳がないじゃない♪

「ふっ、流石は神父の娘ね・・・人を言い包めるのが上手いわね！」

そして、遂に杏子ちゃんのライダーキックが私に炸裂した・・・

「酷い、親にも蹴られた事が無いのに!!」

私は蹴りを食らった右肩を大げさに抑えて、大袈裟に痛がる。

あつ、怪我はしないようにと手加減してくれてたのだろう、少しよろけただけで怪我は一つも無い。

「アタシも、自分の意見がこんなに人に在らぬ方向に話を持って行かれた事はねえよ!!」

何処かやり場のない感情を抑える為に、口に咥えたロリポップを噛み砕く。

そう言えば、ロリポップを噛んで食べると、あれって歯にくっついて嫌にならない?

特に奥歯に虫歯とかあって穴が空いてたら、もう最悪!!
下手すれば、銀歯とか取れちゃう事もあるし!!

「あははは、冗談冗談♪今度は真面目に聞くから話してよ♪」

「もう、良いよ!!あと、今からちょっとアタシは出掛ける用があるから、一人にするけど大丈夫か?」

出掛けるとは魔女狩りの事かな?

でもそれなら、さっきの魔女の時には出てくる筈なんだけどもねえ・

・気配は無かったしい・

はっ!!もしかして、この町の魔法少女は時間帯ごとに担当を決めているのか!?

参勤交代制って奴だね!!

「一人にしちゃ嫌あゝ♪もしかしたら、白い悪魔が『YOU契約を

しちやいなYO』って勧誘に来るかもしれないし、一人は怖いよお
〜♪」

と、ちよつと鎌をかけた台詞と同時に、杏子ちゃんに抱きついて駄
々をこねてみる。

「だあ〜!!抱きつくなあ!!」

だけど、彼女は鎌をかけた台詞には反応をしにくれず、足にしがみ
ついた私をひっぺがそうと、頭を思いっきり向こうへと押しやる。
いや、正確にはひっぺがすのに夢中で、鎌に気付かなかったのであ
ろう・・・

「きゃあ〜、杏子ちゃんのイケず〜♪」

「分かったよ!!連れて行ってやるから離れろっ!!」

「うん♪」

向こうが諦めたので、私は素直に離れる事に♪

いやあ〜、杏子ちゃんみたいな性格の人間って、こういうちよつぴ
りウザい攻撃をすれば、簡単に諦めて許可を出すんだよねえ〜♪

「連れて行ってやるけど、今から見た事は他の奴に喋んなよ」

「えっ、私と杏子ちゃんの二人だけの約束って奴う?きゃっ♪」

「あ〜、そうそう。アタシと御前だけの約束だ・・・」

そして、最後には突っ込むのも止めたみたいだ・・・

まあ、私の本気の前には、暁美ほむらやキュウべえですら打ち崩せなかったのだ。

ツンデレ杏子ちゃんが打ち崩せる筈も無いのは百も承知なのだ♪

「じゃあ、ついて来――」

「態々待ち合わせ場所に来る必要はないよ。アマタがここに居るみたいだから、僕の方から来る事にしたよ杏子」

むむむ、この声は……

「キュウべえ、どうしてここに！？ていうか、何で手前はアマタの名前を知ってんだ？」

「だって、彼女は僕が契約した魔法少女であり、僕がこの町に呼び寄せた魔法少女でもあるんだ」

げっ……キウベえの野郎が喋りやがった……

「アマタ、本当なのか？」

「あつはっは、御免ね杏子ちゃん。でも、私は杏子ちゃんに接近したくてこの廃教会に來た訳じゃないし・・・それに、杏子ちゃんの事は好きだよ!!」

「アマタが言ってる事は本当だよ。彼女は、僕が別目的でこの町に呼び出した魔法少女だからね。君達と敵対しに来た訳じゃないよ」

[illegible]

アンタが仲介するとややこしくなるし！！

「ふくん、でっ、別目的って何だ？」

ほら、現に突っ込まれたし・・・

「そうだねえ♪鹿目まどかって人間の観察だよ♪キュウベえがその子を魔法少女にしたいらしいんだけど、私に勧誘を宜しくって言うてるの。でも、安心して・・・さっき、鹿目まどかって子を見たけど、現状ではあの子を魔法少女にしないように防ぐ側に居るから」
♪

「別にアタシは、誰がどうなろうと、どうでも良いんだよ・・・じゃあ、アタシに敵意を向ける事は一切ないってことだな？」

「勿論だよ♪現状では、杏子ちゃんは好意の対象だよ♪」

「そうか。んじゃ、構わねえな・・・じゃあ、キュウベえ。この町の現状を詳しく説明してくれ」

うわぁくん！！私の告白がスルーされたぁ！！

「分かったよ。じゃあ、先ずは僕が鹿目まどかを見つけた時から話すね」

こうして、私の話は右から左へと受け流され、代わりにキュウベえの話が始まった・・・

第八話 連想ゲーム（赤↓キュウベえの眼球）（前書き）

今回は会話形式のオマケを加えております。

べ、別に見なくても良いんだからね!! ほ、本当だよ!!

何故か途中は書いてないのに、アマタ☆まどかの最終話だけが完成しました（汗）

まどかでHAPPY ENDって本当に難しいですね♪

ちなみに、自分は難しい事に挑戦するのはあまり好きではないです♪

変更内容

シャルロツテがシャルロットになってました……（汗）

第八話 連想ゲーム（赤↓キュウベえの眼球）

見滝原市にて、キュウベえは鹿目まどかに拾われて、彼女をまほうしょうじょ宗教勧誘。

YOU魔法少女になっちゃいなよと勧誘する物の、イレギュラー暁美ほむらによって妨害を受ける。

そして、その数日後にこの町を守っている魔法少女巴マミが魔女によって殉死。

町を守る魔法少女が居なくなったので、杏子ちゃんにこの町に来るように誘う。それと同時に、暁美ほむらに対するイレギュラーとなりうる自分に、鹿目まどかを魔法少女になるように勧誘するようにと招集。

だけど、今日の夕方になって、鹿目まどかの友人である美樹さやかがキュウベえと契約をしたらしい・・・
つまり、それは杏子ちゃんが来たのが無駄になってしまったって訳だよ♪

「つまり、杏子ちゃんの襲来が、骨折り損のくたびれ儲けって事かい？」

「襲来って、人を怪獣か何かの様に扱うな！！」

今度は頭部をグーで殴られた・・・

私が魔法少女と分かった瞬間に攻撃に手加減が無くなったような気がするのだが・・・

「痛い！！杏子ちゃんが虐めるうー！！」

杏子ちゃんと私の夫婦漫才を、黙ってキュウベえが見てる訳もなく・

・

「君達は本当に意味が分からないよ？」

と、突っ込まれるので・・・

「アンタが言うなっ！！」／「手前が言うなっ！！」

当然の如く私が突っ込む・・・って、杏子ちゃんも一緒に突っ込んだしっ！？

はっ、これはまさか私と杏子ちゃんの相性が、有頂天を知る事がな
いってことかい？

やだよだ、私にはマミさんって心に決めた人が・・・

「そうかい？僕は君達に分かりやすいように話してる筈なんだけど
なあ？」

「ただし、色々と省いてる点も有るけどね・・・」

魔法少女の末路が魔女とか、使い魔が人間を食べば魔女になる事、
他にもキュウベえは一般人に見えないとか、キュウベえは沢山居る
とか、エトセトラエトセトラ♪

「アタシも実戦で知った事が一杯有るからな」

「あ、杏子ちゃんも？その度に、キュウベえに殺意が湧いてやれ
ないんだよ♪」

「あっ、それはアタシも分かるぜ」

意気投合。

キュウベえに対する不満で意気投合するとは・・・いや、キュウベえには私と杏子ちゃんの友好関係の礎となって貰おう。

「他に聞きたい事はあるかい？無いのだったら、僕は美樹さやかの所に行かないといけないんだ。これから彼女に魔法少女について説明をしないといけないからね」

そういうのって、魔法少女になる前に言って欲しいよね・・・
後でそんな事言われても、迷惑極まりないし・・・
しかも、クーリングオフも出来ない設定だなんて・・・

「そうかい。んじゃ、さっさと行っちゃまいな。もうアンタに用はないからな」

そして、最後に杏子ちゃんが野良犬を追い払うように、手であっち行けと追いやる。

「じゃあ、また僕を必要と思ったら呼んでね」

「分かったよ」

会話を終えたキュウベえは、廃教会の小さな隙間から出て行き美樹さやかの元へと向かう。

同時に、杏子ちゃんは口の中に新しいロリポップを咥える。ロリポップを包んでいた包み紙は、ゴミ箱にキチンと入れず、その場に投げ捨てる。

まあ、それ以前にゴミ箱なんて物が、この協会には無いんだけどね。

「杏子ちゃんって、何時も口の中に食べ物を入れてるよね？太らな

いの？」

「アタシは動くからな。アマタだって、魔女退治とかで常人よりは遥かに多くのエネルギーを消費してるだろ？」

魔女退治ねえ・・・

私の能力は全方位を認識できるから、無数の攻撃が来ても、無駄なく攻撃を避ける事が出来るので、恐らくはカロリー消費は少ないと思う。

更に、武器も拳銃を用いてる為、激しい動きと云う場面を体験することは滅多にない。

「いやー、杏子ちゃんだから話しとくけど。私の武器って拳銃だから、あんまり動く事が無いんだ♪」

「拳銃なあ・・・つか、アタシだからって何だよ？」

「杏子ちゃんは優しいから信用できるってこと♪」

「や、優しくなんかねえよ!!」

顔を真っ赤にして否定する杏子ちゃん。

これぞ、ツンデレキャラのデレ!!

いやー、まさしく杏子ちゃんはツンデレキャラの王道♪

「あははは、顔をキュウベえの眼球くらい真っ赤にしちゃって♪」

「そして、例え方が最悪だなあ!?!? おいつ!?!?」

「じゃあ、くも膜下出血した——」

「これ以上は止める！？ネタ的に、色々と拙い事になるから！！」

メタ発言をしつつも杏子ちゃんが私の口を手で塞ぐ。

メタ発言は良くないのになぁ♪そんな事されちゃうと、カフェイン慢性中毒が原因でコーヒー片手にPCを必死に叩いてる作者さんも困っちゃうよね♪

あっ、知ってる？

カフェインにもタバコや酒、麻薬と同じように慢性的な中毒性があるんだよ♪

コーヒーを1日に3杯以上飲まないと、気分が落ち着かない人は絶対に慢性中毒になってるからね♪

まあ、他の中毒と違って、強い精神依存や肉体依存が発生しないので、そこまでは問題視はされてないのだよ♪

ちなみに、1日に大量摂取をする事で発生する急性中毒の方は、^{ベルフライン}末期症状になると自殺行為に及ぶ事もあるので気を付けてね？

「もがー、もがもがもがー♪（きゃー、犯されるうー♪）」

まあ、ふざけた対応を取ったこの後に、更にもう一発貰ったのは言うまでも無い・・・

手加減なしの一撃を・・・
ぐすん・・・

巴ミの死亡後に星屑アマタが来たのはこれで3回目。

以前の2回の内、1回目は町に来た早々怒り狂った星屑アマタによってまどかを殺害される・・・

もう1回は、まどかを守る為に私と一緒に動く物の、最後の最後で

キュウベえに良心を拐^{かどわか}されて、バマミ復活の為にまどかを拷問して契約をさせる。

その後は皮肉な事に、蘇ったばかりのバマミと共に、まどかの魔女化のエネルギーで骨も残さず消滅。

また、バマミ生前時に到着したのは4回。

その内の3回は、美樹さやか、佐倉杏子の両者を手に掛けた後に、世界に絶望して魔女化。

そして・・・最後の1回が・・・

まどかを助ける為にバマミを殺めた私を、手に掛けようとして・・・
私によって殺害される・・・

絶対に良い方向へと未来を進めさせてくれない存在だが・・・

私は彼女を助きたい・・・

私がまどかに動かされてるように、彼女もバマミに動かされる存在・・・

私は交わした約束を忘れない為に、彼女は受けた恩を忘れない為に・・・

「悩み込むなんて珍しいね？星屑アマタの出現は君にとってはイレギュラーだったのかな？」

嬉しそうな声で私に話しかけてくる悪魔。

私を出口の見えぬ永遠の輪廻へと閉じ込めた存在。

「別に・・・」

私は心情を悪魔に察せられないように平然を装って返事する。

何度も未来と云う名の積み木を破壊された私にとっては、彼女がこの町に来るのは、非常に好ましくない。

そう言えば、全部キュウベえが呼んでこの町に来たわね・・・
全てに於いて、私に対するイレギュラーと言って・・・

「そうかい？　そう言えば、君は神風突撃部隊って云う、この国の言葉を知ってるかい？」

「それがどうしたの？」

「所詮、僕にとっては魔法少女の存在はその程度に過ぎないんだよ。僕達の未来の為に死に行く存在。それは国を生存させる為に、命を捨てた神風突撃部隊と同じじゃないかなあ？」

「っ・・・黙りなさい！！」

拳銃を取り出して、即座にキュウベえを撃つ。

だが、奴は攻撃を来る事を読んでいたのだろうか、ひらりと躲す。

「あれ、怒ったのかい？　君が怒る理由が、僕には理解出来ないよ・・・
・僕は真実を言ったただけなんだけどな？」

「貴方の好きにはさせない・・・」

「君の努力は、恐らく意味をなさないと思うよ？　全ては僕の予定調和通りにこの世界は動いている。君も最後には僕の言っている事を理解するだろう」

飄々と宣^{のたま}う白い悪魔。

こいつの思う通りには絶対にさせない・・・

私は何度も何度も繰り返し誓った『願い』を心に、そして約束を遂行すると云う『使命』を眼差しに孕み、目の前に居る生物へと睨みを利かせた・・・

『今度こそ、私がまどかを守ってみせる』と・・・

<オマケコーナー>

(Caution!!) (Caution!!) (Caution!!)
(Caution!!) (Caution!!) (Caution!!)
(Caution!!)

今回は御話が短いのでオマケを入れました。

以下の物は、キャラのイメージを更に著しく崩す可能性がある、会話形式のオマケです。

別に見なかったからと云って、本編が分らなくなる事ありません。

(Caution!!) (Caution!!) (Caution!!)
(Caution!!) (Caution!!) (Caution!!)
(Caution!!)

シャルロッテ（以後シャル）「教えて！！マミせんせい！！」

マミ「は〜い♪」

シャル「このコーナーは、私シャルロッテとマミ先生で行う、単語説明コーナーだよ♪」

マミ「そうね、本作品では全く出番のない私達が唯一会話できるコーナーね♪」

シャル「単発だけどね♪」

マミ「取り敢えず、シャルロッテちゃんは紅茶とサンドイッチは要る？」

シャル「サンドイッチはチーズが沢山入ってたら嬉しいな♪」

マミ「あらあら、そうだったわね。じゃあ、チーズは沢山入れておくわね♪」

シャル「じゃあ、マミさんが私のチーズを増量してくれてる間に自己紹介をするね♪私の名前は『お菓子の魔女』になる前の魔法少女だった時のシャルロッテ♪」

マミ「発酵食品が食べれない病気にかかったのよね」
チーズなど

シャル「うん♪同時に癌とか小児糖尿病にも掛ってたけど、キュウベえに治して貰ったんだ♪」

マミ「あらあら、そうなの〜♪」

シャル「うん♪だから、今はい〜っぱい甘い物もチーズも食べれるの♪」

マミ「でも、食べすぎは駄目よ？はい、紅茶とサンドイッチ♪紅茶はアールグレイにしたわよ」

シャル「ほどほどにって奴だねえ〜♪わ〜い、いっただきま〜す♪」

マミ「今回の単語説明は『カフェイン中毒』」

シャル「文中でも説明されてたけど、サラリーマンとか結構なってるよね〜♪まあ、コーヒーが大っ嫌いな私には関係ない事だけだね♪」

マミ「あらあら？今、シャルロッテちゃんや私が飲んでいる紅茶にもカフェインは入ってるのよ？」

シャル「えっ・・・(汗)」

マミ「カフェインと云えばコーヒーを連想する人も多いけど、実は今私やシャルロッテちゃんが飲んでいる紅茶。他にもコーラ、緑茶、ココアに栄養ドリンクにも沢山含まれているの」

シャル「え〜！？私、コーラ片手にチョコが沢山掛ったポップコー

ンとかピッツア食べてアニメを見るのが大好きなのにいゝ(泣)」

マミ「あらあらゝ、典型的なアメリカ人の行動ね・・・カフェイン中毒の前にメタボリックシンドロームになっちゃうわよ・・・」

シャル「うう・・・で、でも・・・コーラにはコーヒー程はカフェインは含まれてないよね・・・」

マミ「そうねえ・・・コーヒーに比べれば確かに少ないわねえ・・・ドリップコーヒーがコップ(150ml)1杯100mgに対して、コーラは会社にもよるけど大体15mg程度になってるわ」

シャル「じゃゝ、安心だね♪」

マミ「でも、シャルロツテちゃんはチョコレート好きでしょ？」

シャル「うん♪チョコレートもだゝい好き♪」

マミ「実はね、チョコレートには50gにつき20mgのカフェインが含まれてるの」

シャル「うぐう・・・」

マミ「あつ、ちなみに紅茶はコップ1杯に30mgね♪」

シャル「そ・・・それで、カフェインをどれくらい摂取すると、PC前でコーヒーを湯水のように飲んでいる作者さんみたいになっちゃうの・・・」

マミ「そうねえ・・・作者さんみたいには、毎日のようにカフェイ

ンを大量に摂取しない限り大丈夫よ♪」

シャル「じゃ、じゃあ、急性カフェイン中毒ってのはどうやったなるの？」

マミ「そっちは、一般的な成人で1時間以内に6.5mg/kg（カフェイン量／体重・体重50kgの場合は325mg）以上のカフェインを摂取した場合は約半数が、3時間以内に17mg/kg以上のカフェインを摂取した場合は100%の確率で急性症状を発症します」↑wikipediaより抜粋

シャル「あ、あれ・・・それって、体重の軽い私の場合は『飲む＝急性カフェイン中毒』って考えて良いのかな？」

マミ「そうねえ・・・小さな子供がコーヒーを飲むと頭が痛いって言うでしょ？それが、まさしく急性カフェイン中毒に当たるわね」

シャル「よろろん・・・」

マミ「あつ、そうそう。カフェインを過剰摂取（コーヒー100杯くらい）すると死に至るので気を付けてね！！イギリスでも、悪ふざけで友人にカフェインを過剰摂取させて死なせた男性も実際に存在してるのよ」

シャル「実はカフェインって怖いんだね・・・」

マミ「そうよ。でも、カフェインの御蔭で癌の発生の抑制や進行を遅らせる事も出来るのよ？」

シャル「ええ！！じゃあ、私の場合は摂取した方が良かったの！？」

マミ「1日1杯程度コーヒーを飲む人間と飲まない人間では、癌になりやすさが倍も違うの」

シャル「じゃあ、もっと摂取したら・・・」

マミ「あらあら♪シャルロッテちゃんは、ちゃんと私の話を聞いてたのかしらあ〜？摂取のし過ぎは駄目なのよお〜」

シャル「よろろん・・・」

マミ「カフェインとは正しく付き合って行く事は、今の社会人にとっては大切なことなのよ」

シャル「決して、作者さんみたいに、『水が無ければ珈琲を飲めば良いのよ〜』とか言って、1日に10杯も飲むような真似はしないでね！〜！」

マミ「じゃあ、皆さん♪また、来週〜♪」

シャル「マミ先生、マミ先生・・・来週って言っても、これは単発企画だから、もう私達の出番は無いよ・・・」

マミ「よろろん？」

シャル「私の台詞取らないでえ!!!」

マミ「冗談よ♪もし、読者さんの評判が良ければ、また私達の出番はあるとの御話ですよ♪」

シャル「へえ、じゃあ次はどんな話題になるのかなあ？」

マミ「そうねえ・・・結局、ここの作者の知識が偏ってるので、医療、科学方面になるのは確かでしょうねえ・・・」

シャル「ふうん・・・でも、そんな知識を読者が必要としてるか
って言う問題があるよねえ・・・」

マミ「こらこら、そんな事は言わないの」

シャル「はあゝい!!」

マミ「じゃあ、今日はこの辺で失礼しますね♪」

シャル「まったね♪」

第九話 「魔法少女を生み出す原因となるマスコット」魔法少女と一緒に女風呂

サブタイトルが最早サブタイトルで無い最新話。

現在、本小説内でワルプルギスの夜が出現するまでに、『美樹さやか』を除くオリジナル魔女を出すか否かで考え中……

そして、杏子生存フラグ……どうするか、否か……個人的には大好きなんだけどなあ……杏子……

追記

書き方を変えました。

☆「……」↓「……」

☆地の文の初めを一個開ける

ここは、こうすれば良いよとかあれば是非とも教えて下さい><

追記その2

この予約投稿をセットした時にふと見ると、総合評価が100になっていた(汗)

今回の話より、アマタさんの危険な性癖が出て来る場面だけに、現段階でこの高評価はちよつと怖いなあ……(汗)

一気に作品の雰囲気が変わりますので(汗)

まあ、そこはn a o n a oだから仕方ないと、諦めて下さい↑おいっ!!

第九話 「魔法少女を生み出す原因となるマスコット」魔法少女と一緒に女風呂

さてさて、ここで問題だよ♪

私みたいな美少女が沢山出てくる御話では絶対に欠かせないシンってな〜んだ♪

？プリチーアマタちゃんの入浴シーン

？ぼろりシーン

？イケ面主人公と曲がり角でごつつんこシーン

？キュウベえ虐殺シーン

さあ〜、どうれだ♪

うんうん、悩むまでも無いよね♪

正解はっ！！

「アマタあ、アタシの方のシャンプーケースが、中身すっからかなんだけど、そっちの取ってくれねえか？」

？でしたあ〜♪

「はいはい♪」

私の前に置いてあるシャンプーを隣の座椅子に座る杏子ちゃんに手渡す。

キュウベえ出役後、私は御風呂に入って無い事を思い出し、杏子ちゃんを連行して近くの銭湯に向かいましたあ♪

いやあ〜、しっかし杏子ちゃんって一銭も手持ちが無いみたいで、魔法を使って御金を払わずに侵入しようとしたのお〜……

取り敢えず、今度は私が蹴りを食らわして、杏子ちゃんの分も御

金を払って入りました♪

「御風呂って良いねえ」

「はあ？」

「御風呂は心を潤してくれる。リリンの生み出した文化の極みだよ。そう感じないか？佐倉杏子ちゃん？」

「御願いだから問題発言はよしてくれないか？」

ガイなんちゃらって企業から苦情が寄せられる可能性があるので、それを恐れる杏子ちゃんからの忠告。

来いよガイ●ックス！！私が相手してやんよ♪

「は〜い♪そういえばさあ……杏子ちゃんって、御金も無いのに沢山の御菓子とか食べてたけど……もしかして、それらって……」

「魔法を自分の為に使って、悪いか？」

ですよねえ〜♪

やっぱり、盗んだのかあ……

「悪いに決まってるでしょ？ふむう、杏子ちゃんには教育が必要のようね……そう、主にうふうふうふう……」

私は手をワキワキさせて、杏子ちゃんへと伸ばす物の、簡単に回避され、シャンプーボトルを顔面へと的中させられる。

どんどん、杏子ちゃんによる私の扱いが悪化して無いかなあ？

「杏子ちゃん、どんどん私への対応の仕方が酷くなってない？」

「アマタの気のせいだ」

「による〜ん……」

やっぱり、今のネタはエロ親父っぽかったから、拙かったかなあ……

もしくは、私が百合^{レスビアン}って思われたのが拙かったのか……まあ、思われた所で否定はしないけどね♪

「その台詞も止めてくれ……」

うんうん、今度は靴の種類っぽいメーカーから、めがつさ怒られるからね♪

その後は、互いに静かに髪を洗い、洗顔をし、体を洗い……特に話が弾む事も無い……

シャワーから御湯が出て白い体に当たる音、周りの他の利用客の喧騒、子供達が走り回る際に水溜まりを踏んで立てる音……

「なあ……アマタはキュウベえにどんな願いを叶えて貰ったんだ？」

流石に無言の雰囲気になんて耐えられなくなった杏子ちゃんが、私に話題を振って来る。

それは私の中でも黒歴史……私が全てを失う原因となった核となる物……

本当なら他人には話したくない過去だけど、杏子ちゃんには話しても良いかなとも思う。

理由は、彼女があ廃教会の関係者であるという事……

人がいなくなった神社や教会と云えど、あそこまで廃^{すた}れたりはない。

あの廃教会は、杏子ちゃんが魔法少女になる原因となった何かしらのキーであると私は睨^{にら}んでいる。

それもきつと……悲しい事件が有った上での……

これは私の推測であるので、現時点では決して真実とは断言できない。

だけど、もし……私が睨^{にら}んだ通りなら、杏子ちゃんも辛い事が有った上での現在の状況。

だから……もしかしたら、私達は分かり合えるのではと思ったのだ……

御互いの全てを曝け出して、裸で向かい合う事によって……

「ねえねえ、杏子ちゃんは私の眼球をどう思う？」

「行き成りなんだよ？目って言われても、普通の目じゃないか？」

行き成り話題を振ったのもあるが、事情を知る人以外には理解が出来ない問いかけに、不思議そうに返す。

「私はねえ、実は生まれながらにして眼球が無かったんだ……眼球が有るべき場所には空洞が有ったの……」

「アマタの願いって、もしかして……」

「そう……私の空洞に綺麗な綺麗な水晶玉を頂戴ってね♪ただけどね……」

トーンを一つ下げて一旦言葉を区切る。

それは、相手により深刻さを伝える常套句。

「だけど、周囲の人間は大騒ぎ。私の両親は耐えきれなくなって首を吊って死んだの……綺麗な景色を手に入れる代わりの代償として、大切な物を全て失ったの……」

先にも増して重苦しい雰囲気。

けど、私は決して口を止めない……

「けどね、魔法少女になってから、新しい宝物や嬉しい出来事もあった……私が最初の魔女との戦いで、魔女に殺されそうになった時にマミさんって魔法少女が助けてくれたの♪」

「バミミって……確かキュウベえが……」

当然、マミさんが死んだ事を知らされてこの町に来た杏子ちゃん
は、恐る恐る返してくる？

彼女がこの町に来たのは、マミさんが死んだ事によって、出来た
空白のテリトリーを自分の物にする為。

「うん、死んじゃったんだよね……奇跡の代償は大きくて、結局は
新しく出来た大切な物も失っちゃうのかなあ？魔法少女って……家
族も、友達も、思いでも、何もかも……」

イケない……マミさんの事を思い出して来て、涙が出てきそう……
私のやっとな手に入れた大切な人が、私の知らない場所で逝
ってしまった事が……心を蝕む……

「ひゃうっ!？」

だけど、行き成り顔面に冷たい水を掛けられた所為で、涙の代わりに間拔けな悲鳴が出てしまった。

犯人は、暗い話を聞いてたのに不思議なくらい明るい顔の杏子ちゃん。

「何暗い顔してんだ？安心しな、アタシは絶対に居なくならねえよ……アタシだって御前の友達だろ？」

春の桜サクラの様に満開の笑み、強固キョウコな意思。

ソレガ彼女、佐倉杏子が私を魅せた宝物……マミさんとは全く異なる魅力……

「杏子ちゃん……ありがとう……」

嬉しかった……新しく手に入れた宝物が……友達が……

「礼なんて言うんじゃないねえ……恥ずかしいだろ……」

柄にもない事を言った上に、私に礼を言われて、恥ずかしさで顔を林檎の様に真っ赤に染め上げる。

「ねえ……杏子ちゃんの御願いは何だったの？」

「私の願いか？あんまり面白くねえぞ……」

今度は杏子ちゃんが語り始める。

私の願いと対照的で、他人の為に御願いを叶えて貰ったが、最終的には報われず、私と同様に全てを失う切っ掛けとなったらしい……

父親の為に御願いを使って契約したのに、皮肉な事にその父親に

は娘として認識されず、最後は杏子ちゃん一人残されて一家心中……
その日から杏子ちゃんは、自分の為に魔法を使う様になったらしい……

やっぱり、杏子ちゃんも私と同じで、孤独の中に生きる人間だったのだ……

「そっかぁ……私達って似た者同士なんだね……」

「そうだなぁ……」

互いの過去を話す事で分かり合えた。

そんな互いの仲を深め、新たな強固な絆を作り終えた頃になって、この絆を作る因子となった魔法少女という存在……

「まあ、魔法少女は皆同じような物だよ？だから、希望を願いを渴望する訳だし」

その契約を取り結ぶキュウベえが……

「んなっ!？」／「えっ……」

女風呂に出没した!!

「何をそんなに驚いてるんだい？」

「手前が女風呂に出現してる事だよ!!確か手前はオスだろ!？」

うん、杏子ちゃんの言う通り、確かこいつは♂だったね……

「所詮人間なんて、炭素と水素と酸素等の元素の集合体、男性と女性の違いなんて生殖器の形の違いと機能だけじゃないか？それに安心して良いよ、僕の姿は君達以外には見えないし、僕の声は念話で君達の脳に直接送られているから、他の人に聞かれる心配はないよ」
♪

いや……そういう問題じゃないし……

どうしようかなあ……他の御客さんも居るし、ここでこれ以上騒ぐと色々と厄介な事になるし……

それでなくとも、杏子ちゃんの叫び声で、他の御客さんの視線がこちらに降り注いでるし……

しょうがないなあ……

ちよつと、グリーンシードの負担は大きいけど我慢しよう……

「使い魔召喚……」

銭湯の中でも肌身離さず首にぶら下げて持っているグリーンシードをギュッと握り、ぼそつと呟く。

すると、歪んだ空間が発生し、そこより血を滴らせる生々しい眼球を嘴に咥えた烏が召喚される。

烏は、嘴に咥えた眼球を床へと落とし、眼球を失った事で口寂しくなった嘴で、女風呂に出現したキュウベえを代わりに咥える。

そして、そのまま女風呂の外へと生餌を嘴に咥えて飛び去る。

あーんど、キュウベえ SATSUGAI 数 28 匹目達成☆

「今のは使い魔だろ？何で、魔女でもないアマタが使い魔を召喚できるんだ？」

「キュウベえ曰くレアな能力らしいねえ〜♪まあ、これが私の能力

の一つだよ♪」

やっぱりレアみたいだねえ、杏子ちゃん凄くビックリしてるし♪
何度も言うけど、何で使い魔を召喚できない魔法少女がこんなに
多いんだろう？

「ふーん……で、キュウベえはどうなったんだ？」

「百舌鳥のはやにえ状態かな♪」

その日、銭湯の近くの枝にキュウベえが刺さっており、それを靈感の高い鳥や猫達が貪るように食べたとか食べなかったとか……また、偶然にも通りかかった魔法少女の資質を持つ少女達が、喰われるキュウベえを見て、気分を悪くしたとかしなかったとか……

それはまた別の時の御話し……

第十話 言葉を発する時は考えて発しましょう（前書き）

本日は4月4日ですのでなんとなく4時に投稿したくなったので、勝手ながら予約時間を変更しました。

「こういう風にぞろ目で揃えなくなったりしない？」と、投げ掛けてみます。

まどか「そんなの絶対におかしいよ!!」

QB「訳が分らないよ・・・」

うん、こんな反応がありそうな気がする・・・

そして、昨晚ありがたい事に、仲の良い作者様よりイラストを頂きました　＞＜

最後に載せております。

なろうで執筆は2年、別のサイトで数カ月で直に3年くらいにはありませんが、イラストを頂いたのは初めての事だけに、非常に嬉しいです＞＜

常にニコニコをモットーとしてるのに、あまりの嬉しさに涙が出て来そうでした。

もう何も怖くない!! 自分がするべき事は、全力全開で皆がニコニコする作品を執筆するだけです!!

第十話 言葉を発する時は考えて発しましょう

これまでの互いの出来事を話し合いながら初夜を終え、翌日の夕方、杏子ちゃんと私は出掛けました♪

さあ、ここで問題です♪

私と杏子ちゃんは何処に出掛けたでしょうか？

？うどん屋に夕食に

？デパ地下にて試食

？美樹さやかと接触

？キュウベえの住処

さあ、どれ——

「遊び半分で首突っ込まれるのってさあ、本当ムカつくんだあ……」

おおっとお！！美樹さやかのサーベルと杏子ちゃんの槍との間で拮抗していた力が、杏子ちゃんの軽い一押しで均衡が崩され、美樹さやかはバランスを崩し後ろずさる！！

生まれた隙を、杏子ちゃんは逃す訳も無く……

突如として槍に無数の堀りが生まれ堀に沿って無数の棒へと分離し、槍が無数の棒と鎖で連結された無数の長獲物へと変形する。

それは軌跡を美樹さやかに読ませぬ不可思議な動きをし、彼女の腹部へと突き刺さる。

先端部の槍は消していた為、殺傷能力は一切ないが、肋の大半が粉碎され全治2、3カ月は確定だろう……

そして、地面へと倒れ伏す彼女の真横に、墓標と言わんばかりに彼女の武器であるサーベルが地面へと突き刺さる。

うつひゃあゝ、杏子ちゃん新人に対しても手加減無いなあ……
あつ、答えは？ダヨ♪

「さやかちゃんっ!!」

美樹さやかと同伴していた鹿目まどかは、地面へと倒れ動かぬ友人を見、悲痛な叫びをあげる。

うゝん……杏子ちゃんがテリトリ確保の為に動くのは別に構わないけど、鹿目まどかの直ぐ傍にキュウベえが居るのが拙いなあ……
鹿目まどかがキュウベえと契約しそうになったら止めに入らないと……

あつ、今私は路地裏の戦闘を見守る為に、路地裏に面した建物の屋上で双眼鏡にて観戦なう♪

うん、やっぱりスポーツ観戦にはポップコーンとコーラに限るね♪

「どうして貴方は止めに入らないの？」

スポーツ観戦は当然一人では盛り上がらない。

私の横には魔法少女の姿で待機している暁美ほむらの姿。

「うゝん、杏子ちゃんに私事だから介入するなって言われたのも有るけど、私の目的は鹿目まどかの観察だからね♪彼女に深刻な何かが起きようとしないう限り、動く気はないわよ♪」

致命的な攻撃を受けた物の、何故か立ち上がる美樹さやかに、杏子ちゃんは不思議そうにもするものの、再び手を休めぬ乱撃の嵐を再開する。

ちなみに、私が動く深刻な何かとは、鹿目まどかのキュウベえとの契約や命にかかわる時等である。あと、杏子ちゃんがピンチな時

ね♪

「そう……悪いけど、止めに入らせて貰うわよ。そろそろ、キュウベえがまどかに契約を持ち掛けるから……」

暁美ほむらの吐く台詞。それは予想でも推測でもない断定の言葉。私でもキュウベえが取りそうな行動は予想できるが、断定する事は不可能である。

「あれえ、貴方は全てを知ってるような口振りね？ 暁美ほむら？」

「ええ……じゃあ、行くわね……」

肯定するや否や、彼女の姿が目の前から消えて、気付けば杏子ちゃんと美樹さやかとの間に割り込むように出現した。

ただ、その際に驚いた事が一つある……

彼女が瞬間的に消える事は、最初の接触と、倉庫の一件で体験済みである。

私が驚いたのは、杏子ちゃんの一撃は地面に倒れている美樹さやかに的中し、完全な止めを刺す筈だった……

だけど、杏子ちゃんの一撃は地面を穿つ。そして、攻撃対象の美樹さやかは動けない筈なのに杏子ちゃんと離れた位置に瞬間移動していたのだ……

さあ……推理を始めようか読者君……
ワトソン

全貌を理解する暁美ほむら、そして瞬間的に移動する暁美ほむら、何時の間にか別の場所へと移動した美樹さやか……

これより、私の知恵の泉で推測できる彼女の能力……

候補としては『時間干涉能力』、『物質転送能力』、『読心能力』である。

一番確率が高いのは、候補その？『時間干涉能力』。これならば、過去や未来を知る事も出来るし、時間を止めて移動が出来る。

ただ問題は、これ程の魔法を発動する事が出来るのかって話だ……私の使い魔召喚ですら、ソウルジェムの負担が非常に大きい。時間に干涉する程に強力な能力だったら、ソウルジェムにどれ程の負担がかかるなんて想像する事すら出来ない……

なので、候補その？『物質転送能力』。

暁美ほむらや美樹さやかは瞬間移動は肉体を転送した為。ただし、この候補だと全貌を理解出来て理由が説明出来ない。

そして、最後に候補その？『読心能力』。

これならば、キュウベエの心を読めるので全貌を知る事が可能だし、私と出会った時に私の目的等に気付ける。

ただし、今度は瞬間移動が説明出来ない……

魔法少女は契約時の願いによって扱える能力が異なる。

なので、もしかしたら？と？の条件を同時に満たす願いだったりしたらどうだろうか？

でも、？と？を同時に満たす願いなんて有るだろうか？

私の発想で思い浮かぶ物は一つも無い……

それともやっぱり、時間干涉能力なのだろうか……

ソウルジェムへの負担が少ない時間干涉能力を得る御願って、どんなだろうか？

恐らく、ここで関わって来るキーワードは鹿目まどか……

暁美ほむらの興味は鹿目まどかにのみ向けられている。現に美樹さやかが杏子ちゃんに凹られてても、急いで介入する様子は無く、鹿目まどかが契約しそうになった瞬間に動いたのが将にそれを証明する。

『鹿目まどかを助けれる強い力が欲しい』

例えば、こんな願いはどうだろう？

仮に未来の世界ではどうしようもない圧倒的な力の前に鹿目まどかが死んだとする。その際に、暁美ほむらがキュウベえにこの御願いをすれば、この願いを叶える為に鹿目まどかがまだ生きてる過去に戻る事も出来るし、同時に鹿目まどかを助ける為に必要な強い力を得れる。

その強い力こそが、燃費良く時間を操作する力なら、合点が行く……

さてと、これが本当か否か確かめる為に、ちょいっと乱入してみますかい♪

もしこの候補？が本当ならば、私の能力を全て理解している筈……

『杏子ちゃん、悪いけど乱入させて貰うね♪』

乱入するとは言うが、下に降りて戦うつもりは微塵も無い。念話を杏子ちゃんにのみ繋ぐ。

『キュウベえの言ってたイレギュラーが乱入してきやがったから、助かる』

『あと、今から魔力砲撃をするから暁美ほむらから距離を取ってね

♪

さあ、杏子ちゃんの攻撃を軽く往^いなす暁美ほむらを見て、私はニヤリと笑い……

杏子ちゃんが距離を取るのを確認すると、ソウルジェムをギュッと握り締め……

「ティロ!!」

右腕付近の空間を歪まして、巨大なマスカット銃を召喚し、右腕と一体化させる。そして、そのまま銃口を暁美ほむらへと向ける。自分へと向けられる殺意に気付き、こちらを暁美ほむらは睨む。

「フィナーレっ!!」

だけど、既に遅いよん♪

銃口の中に眩い光が溜めこまれ、暁美ほむらへと砲撃が放たれる。だが放たれると同時に、彼女の姿は路地裏には無く、私のすぐ後ろに……そして、手には拳銃が有り、その銃口を私の頭部に当てている……

ちなみに、攻撃は路地裏の誰にも被弾せず、攻撃は路地裏に大穴を空けましたあゝカッコ笑いカッコ閉じ♪

「星屑アマタ……今の攻撃は何？」

「いやあ、ちょっと確認したい事が有ってね……貴方の能力は『時間操作』みたいだねえ……」

「どうしてそう思ったの？」

「私の能力は分かってるわよね？魔法の眼球で様々な場所を見る事が出来るの……現に路地裏でも、地面に配置した奴で貴方と美樹さやかの下着の色を……」

「ふざけないで……貴方の能力で、どうやって分かったの？」

今、貴方の台詞で確信しました♪次は過去や未来を体験したかの裏付けが要るわね……

それと下着の件だけど、服はグレーだが、アレは純白なガールには御気に召さなかったかな？

ちなみに、私の好みは魔法少女が持つカラーのストライプ下着かな？出来れば、ブラもそちらで揃えて頂ければ、その魔法少女に対する高感度アップだよ！！

いや、杏子ちゃんの下着の色をチェックする機会が昨夜の銭湯で有ったけど、赤×白のストライプで無いのが残念だよぉ♪
ちなみに、杏子ちゃんの下着の色に関してはCMの後っ！！

「そうねえ……もし、貴方が瞬間移動系の能力者なら、スカートが出現と同時に動いてるかしら？貴方はここまで別の手段を用いて来たのでは？例えば時間を止めたりとか……」

まあ、ここはビルの屋上なので風が強く、それで動いたと言われればそれで終わるが……

先の馬鹿発言の布石がここで来るのだ！！

馬鹿発言を繰り返す事で、彼女の冷静さを奪った筈。冷静さを欠いた彼女がそんな事に気付く筈が……

「そう……でも、ここはビルの屋上よ？風が強くスカートが靡くのは普通じゃないかしら？」

ちきしよおおおめえ!! おくっぱいプルンプルン!!

総統閣下もお怒りだよ、ちきしよおおおめえ!!

ここは何時もの澄ました顔で髪を掻きあげて『流石ね、星屑アマ
タ……私の能力を見破ったのは貴方が初めてよ』や、地面に片膝を
ついて『ぐふっ、流石は私の好敵手……一筋縄では行かないわね』
的な発言しろよお!!

「まあ、良いわ……貴方の発言より私の推測が正しかった事が分か
ったし、今回は見逃してあげるわ!!」

下での杏子ちゃんと美樹さやかとの戦闘が終わったのも有るしね……
杏子ちゃんが暁美ほむらの出現と横槍で、戦う気が失せたみたい
ね……

「あと、暁美ほむら……貴方に聞いておきたい事があるのさぁ♪」

「見逃してやるは私の台詞だと思うけど、そこには突っ込まないで
おいてあげるわ……で、聞きたいこととは何かしら?」

「貴方の目的は、鹿目まどかの幸せかしら? それとも、自分の幸せ
かい?」

「私の目的は……」

暁美ほむらは悩む事も無く、口を動かす……

「まどかの幸せよ……」

それは嘘偽りの無い明確な想い……

「そっか……じゃあ、貴方にとって私は何？」

「私と同じ存在……一人の女性の為に動く存在……」

恐らく、彼女が言いたいのは……

「私達は似た者同士だから、貴方も助けたいの……」

そう、私と彼女も分かり合えると……

ならば、私はその友好の言葉に免じて、彼女の目指す先に貢献してあげようではないか？

運命という濁流にたゆたい流されるだけではなく、必死に抗う彼女を助ける藁ともなれるであろう。

この星屑アマタ様ならね♪

「そっか♪じゃあ、手え出しなさいな♪」

私の言葉に暁美ほむらは戸惑いながらも手を差し出す。

私はその手をギュッと握り……

「既に私の名前を知ってたみたいだけど、‘もう一度’言わせて貰うわね♪私の名前は星屑アマタ。アマタって呼んでね♪」

「ありがとう、アマタ……」

ありがとウサギい♪魔法の言葉で楽しい♪仲間があ♪ぽぽぽぽ♪

とか言うKY発言が喉から出そうになったが、しっかりごっくん

したよ♪

やったね、アマタちゃん♪KY発言防いだよ♪

しかし、無表情の暁美ほむらの表情も和らぎ、互いに友情を結ぶ握手♪実に感動的な場面だね♪

さつと、感動のクライマックスを迎えた事だし、私は杏子ちゃんを回収して帰るとしますか♪

「じゃあねー、ほむらちゃん♪もし、協力して欲しい事が有ったら言って頂戴な♪」

私はそう言い残して、ビルの屋上より飛び降りた……

<有り難き頂き物>

『光沢を持つこんにゃく』さんが書いてくれた『シャルロッテ』です♪

>i21258—2802<

第十一話 初の共同作業（前書き）

ぐふぁ……大学が後少しで始まっちまう……

と云うか、論文をちゃんと書けるのだろうかとかかなり心配……

テーマも決まってる……（汗）

そして、卒業するのに必要な単位も少し足りないし……大学院の勉強も有るし……

いやぁ、今年は昨年にも増して、波乱万丈な大学生活が送れる予感☆

ほむほむの能力がマジで欲しい……！今すぐ、春休み始まる前に戻りたい……！

第十一話 初の共同作業

「杏子ちゃんやあ、美樹さやかはどうだった？」

「あんな奴に、こんな良い場所を任せるなんて勿体無い。今回はキユウベえの言ってたイレギュラーって奴が横槍入れやがったから、仕留め損ねたけど、次会ったら絶対に潰してやる」

「まあ、確かに素人だったねえ、♪だけど、下着の色は水色ストライプで素晴らしくグレイトっ！！あそこには魔法少女上級者の匂い香が感じ——」

「手前は、私が戦ってる間に何してたんだよ！！」

ポップコーンとコーラを食べながら、魔法少女達の下着を見物してました♪

なんて事は口が裂けても言えないし、言ったら言ったで、般若と化した杏子ちゃんによって私の口が裂かれるであろう……

「美樹さやかの観察だよ♪彼女のあの尋常な回復能力は、癒しの力とみたよ……」

「ああ？ どういう事だよ？」

「つまり、杏子ちゃんのあの一撃を喰らっても立ちあがって来たのは、彼女の契約時の願い事が『治癒』に関する物だった為だと思ってるんだよねえ」

詳しく噛み砕いて説明。

杏子ちゃんは少々考えた後、成程と納得してくれる。

……
そう言えば、杏子ちゃんの御願いは『話を聞いてくれ』と云う物

この願いの結果が魔法には現れてるように見えないのだが、気のせいだろうか？

もしや、まだ技を隠し持ってるのかなあ？

「でもね、『治癒系』の願いを叶えて貰った魔法少女は、成長しても攻撃に関しては駄目駄目だよ。現に私がそうだしね♪」

私が武器として銃を選択しているのは、マミさんの影響が殆どだが、実はこれも理由として少しある。

肉弾戦を得意としないので、返り討ちにあうのは目に見えている……

今の美樹さやかのように……

ああ、でも喰らった傷をその場で治し、戦い続けるバーサーカー狂戦士戦法なら、行けない事もないね♪

ただ、そんな美しくない戦い方はしたくもないけどね♪

「ふうん、じゃあ、アイツを倒したいなら、手も足も再生できないくらいに粉々にすれば良いって事か？」

「うん、そうだね♪でも、下手をすればそれでも治して襲ってくるかもだから、首をもぐのが一番かな？」

「それをしたら流石に死ぬだろ……」

えっ？ 殺しちゃ駄目なの？

テリトリー占拠なら、殺した方が良いと思うんだけどなあ……

回復した後に、また襲われたら困るのにねえ？

「ああ！！でも、あの澄ました野郎が本当に腹が立つ！！今からゲ―セン行くぞ！！気分転換だっ！！」

腕時計をチラッと見てみる、現在時刻PM9時45分……

女子校生二人が出歩くには、ちょっと危険な時間である。プリチ―な私達なら、欲求不満な狼たちに襲われる危険性もあるしね♪
まあ、襲ったら襲ったで、手足を引き千切って、コケシにしてやんよ♪

「良いよ♪じゃあ、徹夜で遊びますかい♪」

「勿論だっ♪」

意気投合。そしてゲームセンターに向かい、いざ店内に入ろうとした時だ……

禍々しい気配を感じる……

「ちっ、魔女か！！でも、さっきの使い魔を操ってた奴じゃないな……」

あっ、さっきの使い魔って何って思われる方が多いので説明ね♪
杏子ちゃんが美樹さやかと戦闘を開始する前に、美樹さやかが魔女の使い魔を追っていたのだよ。

使い魔が人間を食べる事で魔女へと成長するらしく、その習性を利用して、『卵を産む前に鶏をメてどうする』と難癖をつけて、口喧嘩になった所で、戦闘を開始した訳♪

「こいつあ、気配的に大物だねえ♪ちと、潰しますかい？」

「ああ、勿論だ。行くぞ、アマタっ!!」

魔女の気配を感じる位置は偶然にも、私達が入ろうとしていたゲームセンターの隣の路地だった……

良く目を凝らして見ると、確かにそこには空間の歪みが見え、この世と魔女の作りだした世界を繋げる入口を作りだしていた……

「それじゃ、暴れますかい♪」

「おうっ!!」

私と杏子ちゃんは魔法少女の格好に変身し戦闘態勢に移行する。

「じゃあ、ちょっと中の確認するから、少し待ってねえ♪魂之眼球♪」

私は5個の眼球を召喚し、それを結界内へと飛ばして、中の様子見を行う。

今回は敵の魔女の気配が強いだけあって、念入りの調査を行う予定だ。

「今の眼球は何だ？」

召喚されたグロテスクな眼球に引きつつも、その能力が知りたくて訪ねてくる。

「私の魔法だよ♪眼球に映す物を、自分の目で見たと同様に認識する事が出来るの♪結界内の状況把握、複数の敵と戦闘する際の全ての敵の認識等に用いてるわ♪」

「ふーん、別にそんないらねえだろ？アタシが居るんだからさ？」

「そうは言っても、中は結構凄い事になってるよ？」

眼球に映し出される結界内の景色。

それは、真っ赤な夕日をバックにした広大なる草原に群れる無数の羊の姿をした使い魔と、それを追いかける1人の猟犬の姿をした魔女……

羊は白色ではなく真っ黒な体、ピジョンブラッドのむき出し眼球、荒い鼻息と、進入させた私の眼球に対し既に好戦的な構えをしている。

そして、それを従える猟犬は、闇夜の草原に身を隠すかのような緑を濃くしたモスグリーンに、漆黒の眼……

こちらにも、既にそのギラギラとさせた眼を私の眼球へと向ける……

「どうなってんだ？」

「にやはははは、かなりの数の羊の姿をした使い魔に、結界内では保護色と化したボディを持つ猟犬の魔女……私が侵入させた眼球には既に気付き、荒ぶってるよ……」

どれくらい荒ぶっているかを表現する為に、片足で立ち、両の手を頭の上で翼を描くように伸ばし、荒ぶる鷹のポーズを取ってみる。

「何が偵察だよ！？気付かれてるじゃねえかよ！！」

が、ポーズに対して杏子ちゃんは反応すらせず、ばれた事にひたすら突っ込みを入れられる。

うん、杏子ちゃんのスルースキルがどんどんと上達してるね。反

応してくれないと拗ねちゃうぞ……

「うーん、普通は気付かれないんだけどねえ……やっぱり、それだけ上級の魔女って事なのかなあ……」

「まあ、上級つつても、アタシとアマタなら大丈夫だろう？」

杏子ちゃんより『アマタなら』と、さっきの無視も帳消しにしちやうくらい嬉しい発言。

これは、少なからず私の事を評価及び信頼してくれているととても良からう♪

「そうだね♪じゃあ、取り敢えず向こうさんも御待ちですから、片付けよっか？あつ、敵さんのグリーンフィードはどうする？」

これを求めて魔法少女が戦う訳であるし、共闘するならこれをどうするかは話し合っていた方が良いと判断し、先ずは持ち出す。

「アタシはストックが結構あるから、アマタにやるよ」

「気前良いねえ♪でも、流石に丸々貰う訳にはいかないから、杏子ちゃんのソウルジェムを一旦浄化してから貰う事にするよ♪」

グリーンフィード1個有れば、穢れの規模にもよるが大体2人分のソウルジェムを回復させる事は出来る。

なので、杏子ちゃんのを回復させても問題は無いし、それにグリーンフィード本体を貰えると云う事は、好きな時に自分のソウルジェムを回復させれるので、共闘の謝礼として穢れをその場で取り除いて貰うよりは有効的に用いる事が出来る。

「そんじゃ、行くぞ？」

「オツケ〜♪」

私と杏子ちゃんは一気に結界内へと突入し、突入と同時にこちらに突進してくる羊の群れに私は銃弾の嵐を浴びせる。

突進に対して真っ向から向かうのは命取りなので、ここは遠距離を得意とする私に対応し……

「まずは私を使い魔の殲滅をするから！！殲滅終了まで、杏子ちゃんは一人で魔女の相手を御願い！！」

「分かった！！」

そして、近距離戦を得意とする杏子ちゃんには、獵犬の姿を取った魔女の対応を御願いする。

使い魔の数もあるし、今回は共闘故にパートナーに迷惑は掛けたくないので、赤字にはなりそうだが手短に決めるとしよう……

「それじゃ、始めますか♪」

私はスカートの端と端を軽く摘まみ持ち上げる。すると、スカートの中より8本のマスコット銃が現れ、それは地面へと落下した後銃口を地面へと突き刺す。

地面へと突き刺さった武器の内各手1本ずつの、両手合せ計2本のマスコット銃を地面より引き抜いて、先よりもお私に接近している羊へと構える。

「魂之眼球！！」

次に召喚するのは先に潜入させた物に加えて、新しい眼球を。

これで先と合わせて計36個の眼球が、私の頭上で等間隔に円を描くように配置される。

これぞ、私がマミさんの戦闘方法を再現する為に、編み出した物である。

360度全ての景色が私の脳内に焼き付けられ、敵の位置を厳重に事細かく把握。

羊をギリギリまで引きつけて、マスケット銃の長い銃口で、先頭の羊の頭部を横殴りし、トリガーを引く。

羊の使い魔の頭部の側面より銃弾が減り込み、的確に敵急所へと叩き込む。

そして、銃弾を放ったマスケット銃は、投擲武器として後続の羊へと投げつけ、武器を投げた事で軽くなった手の方で、また新しいマスケット銃を引き抜く。

その引き抜く作業中に、もう片方の手に握られたマスケット銃のトリガーを引いて攻撃し、武器を投擲。

武器を引き抜いて、トリガーを引いて、武器を投げつけるだけの簡単な作業です♪

嘘です、タイミング良くやらないと、確実に羊の群れに飲み込まれて死にます♪

召喚した8本のマスケット銃全てを使い切っても、慌てず次のマスケット銃を足元に素早く召喚し、また攻撃を再開。

私の方は単純作業みたいな物で済んでるけど、肝心な杏子ちゃんの方はと云いますと♪

狼の魔女と激しい接近戦なう♪

いやー、あれだけ素早い動きをする魔女に対して、あそこまで上手く立ち回って戦えるのは流石だねえ♪

槍を華麗に振り回し、狼の振り下ろした爪を弾き、隙有らば槍を突き刺して魔女を傷付ける。

うんうん、私も格好良い所を見せないかね♪

「一気に決めるよおお♪ティロっ!!」

現在のソウルジェムの汚染度は、ほぼ皆無なので相当な魔法を放つ事が可能である。

通常放っている物とは比べ物にならない巨大さを誇るマスケット銃を右腕に装着。

その大きさ、口径だけで2メートル越え、全長は10メートル。あまりの巨大さに私の足が地面へと付かず、宙へと持ち上げられる形になる。

はつきり言って、右腕だけでぶら下げられているので非常に腕の腱が痛い……

冗談はさておき……

「フィナーレっ!!」

羊の大群に放つ。マスケット銃より放たれた巨大な砲撃は、羊の使い魔を撃ち抜くではなく、飲み込む。

白色の光に飲み込まれた黒い羊達は瞬時にその眩い光によって脱色され、存在その物を消滅させられる。

当然、砲撃は勢いを弱める事も無く次々と後続の使い魔を消滅させてゆく。

そして、直線状の使い魔を全滅させた後には、魔女の結界に突き刺さり、巨大な罅を入れて結界を揺るがす。

うん、結界を破壊しなくて良かったよお……他にも、杏子ちゃんに着弾しなくて……

私の砲撃の予想外の威力に、あちらこちら飛び廻って戦闘を繰り広げている杏子ちゃんも何か怒鳴ってるし……

「だっはっは、めんごめんご♪今から、狙撃でそっちの援護入るからねえ♪」

と親父っぽく返し、あらかた使い魔を消滅させたので、私も魔女本体の討伐に参加する。

とはいっても、当然接近戦はする気は無い、寧ろ杏子ちゃんの邪魔にしかないので、遠距離での銃による攻撃に専念するつもりである。

リボルバー拳銃よりも、威力が高く命中精度の高い十字スコープ付きフリントロック式マスコット銃を1丁召喚し、魂之眼球を十字スコープに密着させて、脳内に十字マーク付きの新しいヴィジョンを呼び出す。

接近戦する仲間が居る戦いなんて初めてするので、実はちよっぴり引き金を引くのが怖かったりする……

もし、杏子ちゃんに攻撃を与えたりしたらとか思ってしまうので……引き金に掛けた指が少し震えている……

「アマタっ!!今からコイツを抑えるから、トドメ頼むぞ!!」

槍を多節棍へと変化させて、猟犬の魔女に絡まらせる。

近距離で多節棍を絡ませてその場から動けなくしているので、杏子ちゃんと魔女との距離は無い。

「アマタあ！！長くは抑えれないから、一気に止めを刺してくれ！」

十字スコープを覗いてる眼球……その眼差しを猟犬へと向ける……

私は十字スコープの真ん中の部分に猟犬の頭部を入れる様にマスケット銃の銃口を向けて……

引き金を引いた……

第十一話 初の共同作業（後書き）

魔女及び使い魔説明

獵犬の魔女

名前ハイジ

性質『守護』

羊の使い魔

名前シュピリ

ハイジに護って貰う存在。1匹では弱いが、群でならもう何も怖くない

第十二話 結束

周る回る廻る……くるくる廻る……

弾丸は、直線の軌跡を描くものの、弾丸自体はくると回転している……

くるくるくるりよ 直線の上で

風が吹いたら 揺れるのよ

先が当たったら 落ちるのよ

その時あなたも 揺りかごも

みんなそろって落ちるのよ

そう落ちちゃうの、地獄の底に……

「きゃあおおおおおおおん!!」

犬の叫び声……

私の放った弾丸は見事に猟犬の魔女の頭部に吸い込まれ、魔女の姿を爆散させる。

見事に仕留めた物の、未だに心臓はばくばくと鼓動する。

「ナイスショット!!」

「にやはははは、アマタちゃん射撃の腕をなめちゃいかんぜよ」
♪

内心を悟られぬように、杏子ちゃんにはテンション高めに言葉返す。

前衛である杏子ちゃんを心配や恐怖に晒させてはいけないからだ

……

後衛を任されるとはそういう事である……同時に、任命すると云う事は、自分の背中とフォローと命を任せる存在として認めるといふ事である。

私はその期待を裏切ってはならないのだ……

「ほお？ その割には指が震えてたぞお？ そんな気張ってんじゃねえよ」

ば、バレてるう……

でも、杏子ちゃんの顔の表情や声色的に怒っては無いのは分かる。寧ろ、良くやったと私に^{ねぎら}労いの言葉を掛けてくれる。

「ほら、ちゃっちゃとグリーンシード回収して、ゲーセン行くぞ」

地面に転がるグリーンシードを杏子ちゃんは拾い、少々呆けている私にアンダースローで緩い放物線を 描くように投げる。

私はそれを落とさないようにと慌てつつも無事キャッチ。

「あれえ？ 杏子ちゃん、ソウルジェムの穢れを回復させないの？」

「ああ？ 別に良いよ、アマタが全部取りな。あれだけの魔法を連発してたら、私のを回復させた残りだと、自分のを完全に回復させる事が出来ないだろ？ アタシはストックも有るから、アマタに全部やるよ」

細かいところまでも、しっかりチェックしている杏子ちゃん♪

杏子ちゃんの優しさって、ママさんとは異なる優しさだよねえ♪

ママさんみたいに、良い意味での優しさを前面には出す感じではなく、小さな所で気付かれないような優しさで相手を満たす。

「流石は杏子ちゃんだね♪細かいところまで全部見てるなんて♪」

「つたりまえだ。パートナーだろ？」

ぐふう……今の台詞は効いたぜ……杏子ちゃんに攻略されても良いと思ってしまったよ……

格好良い王子様に恋する乙女の気持ちがちよっと分かってしまったよお。

「どうしたアマタ？顔が赤いぞ？」

「いやあ、戦闘をこなした事で精神が高揚しちゃった♪」

と、誤魔化す。当然、顔が赤くなったのは言わずもがな、杏子ちゃんの私に対する優しさがムズ痒く恥ずかしいからだ。

そして、彼女の事を格好良いと思い、何処か心の中で友達としてではない、別の好きと云う感情が芽生えつつあるからであろう……

「それはどうかと思うぞ……」

「うふふふ、冗談冗談♪それじゃ、ゲーセンでストレス発散と行きましょうか♪」

魔女の結界が消滅すると、直ぐに隣のゲームセンターに突入。

ゲームセンターなのに禁煙をしてる所為か、全くタバコ臭さを感じさせず、

体を動かしてストレス発散をと、杏子ちゃんはダンスダンスレボリューションの筐体に飛び乗り、何処から手に入れたか知らない100円玉を投入……

うん、今の100円に関しては、色々と突っ込むのは止めておこう……

「アマタも一緒にやらねえか？」

「構わないよお♪でも、私あんまり上手くないよ♪」

そう言えばさあ、意外に上手な人間程「いいけど、俺あんまり上手くねえよ？」って言わない？

それで、太鼓之達人とかビーマニとかユビートとかで高いランク出すんだよねえ♪

「構わねえよ。アタシもあんまし上手くないし、一人でやるのも寂しいからな。下手糞でも笑うなよ……」

「勿論、笑わないよお♪」

と、笑いかけながら私も筐体に飛び乗り、100円玉を投入する。

「曲は杏子ちゃんが先に選んでいいよ♪」

「そんじゃ、遠慮なく選ばせて貰うぜ」

嬉しそうに足元で軽快なタッピング。数多く取りそろえられた曲の名前が、スロットの様に目まぐるしい速度で廻り始めるもの、とある曲でぴったりとストップする。

選ばれたのは最難関とも言われている『Clariss』の『コネクト』と呼ばれる曲……

いや、無理ですから！？しかも、何気に難易度MAXにさせないでくれる！？

「よっしゃあ、やるか!!」

「いや、やるかじゃないでしょ!?!何をさり気無く最難関な曲を選択してるのよ!!」

「えっ?始まるぞ?」

軽快な音楽が流れると同時に、筐体の画面に出現する大量の矢印。
→←↑↓(じょうげさゆう)の大量の矢印が画面を埋め尽くす……
この矢印に合わせて、足元に有る矢印のプレートを踏むのだが……

無理ポ(、V、) p♪

流石に動きを止めると、真面目にやってる杏子ちゃんには失礼なので、足だけは動かす。

ていうか、杏子ちゃんこれ程難しい譜面を現状パーフェクトって何なの!?!?

「よお、今度は何さ?」

そして、後ろに幽霊の如く出現したほむらちゃん存在に気付き、話しかける余裕は何なの!?!?

私なんか、目の前の矢印を認識して足を動かすだけで、せえー一杯なのに!!

「この町を貴方に預けたい……」

「ど〜いう風の吹き回しよ?」

「魔法少女には貴方みたいな子が相応しいわ。美樹さやかでは務まらない」

そりゃまあ、あの程度のレベルの魔法少女じゃあ無理だろうねえ♪

さっき出て来た猟犬の魔女が相手だったら、間違いなく猟犬の牙の餌食になっていただろう。

もしくは、羊の群れに巻き込まれて、夢の中で羊を数える羽目になるね♪

「元よりそのつもりだけどさ、そのさやかって奴どうする？ほっときゃ、またつつかかってくるよ？」

「なるべく穏便に済ませたい。貴方達は手を出さないで、私が対処する」

曲の間奏に入り、矢印が出現しなくなったので、漸く私はほむらちゃんの顔を拝見する事に成功。

うんうん、相変わらずの無表情♪結構結構♪

「まだ、肝心なところを聞いてない。アンタ何者だい？」

曲の間奏終了で、再び矢印の嵐。

もう、これ以降の参加は諦め、画面の方は一切向かず、ほむらちゃんの方を笑顔で向いたまま♪

正確にはこれ以上は無理（足の疲れた意味）と判断したので諦めました……

「一体何が狙いのさあ？」

「2週間後この町にワルプルギスの夜が来る」

ワルプルギスの夜？

超弩級と名高い、最強の魔女だった筈……

色々な街を渡り歩き、そこをテリトリーにする魔法少女を完膚なきまで打ちのめし続ける魔女。

別名は『魔法少女殺し』や『終焉の時を刻む者』……私自身は出くわした事はないので、噂程度の認識とみなしていたのだが、ほむらちゃんが言うならその存在を認めねばなるまい……この町に襲い来る暴虐の存在を……

っていうか、こいつに未来で鹿目まどかは殺されたんじゃないの？意外にあり得そうで怖い……

「何故分かる？」

うん、それは確実に彼女が未来から来たからであろう。まあ、彼女は未来から来た事は言わないようにしてるみたいだし、本当に未来から来たと言う確証は無いので、ここは御口にチャック♪

だって、未来に関係するような発言は禁則事項でしょ？

「それは秘密。ともかく、そいつさえ倒せたら、私はこの町を出ていく。後は貴方の好きにすればいい」

「ふう〜ん？ワルプルギスの夜ねえ、確かに一人じゃ手強いが、3人がかりなら勝てるだろうな」

「にゃはあ〜、その3人目は私かい？それとも美樹さやかかい？」

現時点でこの町に居る魔法少女は4人なので、ちょっと疑問に思っている。

というか、完全に無関係な私をワルプルギスの夜との戦いに巻き込む気かい!?

「何言ってるんだ? アマタに決まってるだろう?」

「何を言ってるの? 美樹さやかじゃ勤まらないわ」

ですよねえ♪

ワルプルギスの夜倒すのって、絶対にソウルジェムに関しては、赤字な気がするんだけど……

「っていうか、何故に私も参加なのかい?」

「おい、食うかい?」

私の突っ込みは無視してROCKY（スクリーンの向こうで言うPOCKY）をほむらちゃんに見せて尋ねる。

っていうか、杏子ちゃんはあるだけ話したりしてたのにスコア2513940つのAAA評価!?そして、私のスコアがなんか444440のC評価って云う不吉な数値に!!

「頂くわ。丁度、甘い物が欲しかったの」

素直にROCKYの箱より2本引っこ抜き、静かにもそもそと食べ始める。

こちらも、当然私の突っ込みは無視。

「あのお、私の問いかけは無視ですかい?」

「アマタは私のパートナーだろ?」／「貴方は屋上で、協力して欲

しい事が有ったら言えと言ったわ」

私達が何とかしなければ、確実に見滝原市は崩壊するのです。ん
ふっ困ったものですね♪

とか、格好良く決めてみるようかと考える物の、発言すれば無視
を決め込まれるのは目に見えるので、 今回も素直に……

「分かったよ、私には利益がないけど、参加してあげるよ♪」

同意する羽目になった……

幕間　く薔薇の詩くコノウラミハラサデオクベキカく　（前書き）

オマケみたいなものです。

意味は各自色々想像してみてください。

ゆっくり、見切れ席（舞台の一部が見れない席の事）で御覧下さい。

幕間 く薔薇の詩くコノウラミハラサデオクベキカく

『ばら』

バラッド、小バラ、ざつくバラん、バラバラ、バラ売り？

でも、ここでの意味は薔薇

薔薇の花言葉は色によってバラバラ

帯紅『私を射止めて♪』

赤色『愛情』

黄色『嫉妬』

白色『尊敬』

桃色『上品』

朱赤色『愛情』

薄オレンジ色『無邪気』

青色『神の祝福』、『奇跡』

また、薔薇の状態によっても花言葉はバラバラ

蕾の状態だと『愛の告白』

葉だけだと『がんばれ』

トゲだと『不幸中の幸い』

また、種類によっても花言葉はバラバラ

ミニバラだと『無意識の美』

バーガディー種だと『気づかない美』

ヨーク・アンド・ランカスター種だと『戦い』

そんな様々な花言葉を持つ薔薇は、最も愛され親しみの持たれる花故に様々な薔薇のコンテストたるものが存在する

それを説明した上で、詩を詠い始める

不信くゲルトルートく

薔薇のコンテスト？

ロンドンで行われるコンテスト？

勝てば名誉、勲章物

エリザベス女王から、褒めて貰えるの

私のパパは10年前のチャンピオン

私のママは13年前のチャンピオン

そんな、私は薔薇造園師のサラブレッド

ママが言った「今年は貴方が優勝するのよ」

パパが言った「トゥルーデなら当然優勝出来るさ」

私は言った「絶対に優勝して女王様から薔薇造園師勲章を貰うの」

ルールは箱庭と呼ばれる場所に、様々な種類の薔薇を使って独自の世界を生み出すと云う物

日に日にアイディア思い浮かぶ
月に月にアイディアどれにするか選択を悩む
火に火に焦り始める
水に水に親から落ち着けと諭される
木に木に薔薇の種類を悩む
金に金に薔薇を用意する御金に悩む
土に土にどんな土にするかで悩む

悩んで試行錯誤

アイディア出来た

コンテスト始まった

作品作る

えっちらほっちら

棘の御髭を落としてやる
綺麗にセット出来た？

花卉のスカートを整えてやる
綺麗に履かせれました？

色々な薔薇の苗を植えてやる
赤白黄色、どの花見ても綺麗だよね？

造園造園、薔薇の造園

作ろう造ろう創ろう独創的世界

ワクワクドキドキ独創的世界

この箱庭が私の結界

そして、私の心を反映した物

綺麗でしょ？

私が箱庭を造って1時間後、女王様が審査を始める
みんなの箱庭観察、^{たび}度に笑顔、薔薇みたいに綺麗

遂に私の箱庭を観察

だけど、女王様は笑顔にならない？

何故だろう？

不思議だ不思議・・・

結果発表、優勝したのは私の隣にいた同じ年くらいの女の子
肩には白くて赤い眼を持った、良く分からない縫い包みみたいな生
物が、ちょこんと乗っている

彼女は私を見てニヤリと笑う？

私はその子を知らないのに、その子は私を知っている？

でも、悔しかった・・・

どうして、負けちゃったんだろう？

疑問疑問湧き上がる

家に帰った

パパもママも怒っていた

パパは言った「どうして、あんな作品に負けたんだ」

ママは言った「折角今晚は腕を振るったのに、残念だわ」

家族の絆バラバラ

部屋に籠りバラツド流す

涙を流す

ざつくバラりと部屋に置いてある熊の縫い包みに吐露する

悔しさ 悲しみ

届かない想い

だけど・・・

縫い包みは言った「そんなに悔しいのかい？」

部屋の縫い包みに紛れて、薔薇造園コンテストの優勝した少女の肩に居た縫い包みが居た

私は言った「うん」

高低、肯定、行程、更訂、コウテイ

縫い包みは言った「君が負けたのには理由が有るんだ。聞きたいかい？」

コウテイ

縫い包みは言った「優勝した子は僕と契約したからだよ」

次々と、バラッド流れる部屋、縫い包みの声がバラバラ、ざっくばらりと紡がれる

縫い包みは言った「つまり彼女は『今後一生、君の作品を女王が見たら邪悪な何かと見間違える』っていう御願いをしたんだ」

酷い、醜い、反則

心には憤怒、憎悪

薔薇造園師としてしてはいけない事・・・

ビッグベンの鐘の音

打ち鳴らす、私の心、打ち崩す、私の心

縫い包みは言った「悔しいかい？なら、僕と契約して魔法少女になつてよ？」

縫い包みは見た事も無いほど綺麗な青い薔薇を、私に手渡した

反魂、ヨーク・アンド・ランカスター種の淡いピンク色の薔薇を縫い包みに渡した

奇跡を信じて戦おう

『私の薔薇園を守る力が欲しい』

それが契約

心が醜くなった私の契約

復讐劇の撃鉄を降ろすのよ

さあ、古い自分の殻を捨てて羽化をしましょう

私は私は綺麗な蝶になるの

I can revenge (私は復讐できるの)

Meanwhile (その間に)

Please guard my rose garden , A
delbert (私の薔薇園を守ってね アルベルト)

Please trim my rose garden , A
nthonny (私の薔薇園を手入れしてね アントニー)

So, I destroy Invader (私は土足で上がっ
て来る奴をぶち殺すから)

幕間　く薔薇の詩くコノウラミハラサデオクベキカく（後書き）

前書きの意味解説。

今回の詩は意味が分かる方と分らない方で分れそうな気がしましたので、舞台が一部見れないとされる『見切れ席』で御覧下さいと書きました。

今後もこの様な詩を挟むかもしれませんが、御了承下さい。

あと、ゲルトルートの愛称はトゥルーデです。

ちなみに、これはドイツ人女性の名前ですが、舞台がイギリスって点に関しては、気にしないでくださいね＞＜

ゲルトルートで有名なアニメキャラを一名あげると、パンツじゃないから恥ずかしいもんより『ゲルトルート・バルクホルン』（笑）

アニメを見てる方は、知ってると思いますが、ハルトマンってキラがゲルトルートの事を『トゥルーデ』って呼んでますんで（笑）

第十三話 夢の御告げ（前書き）

サブタイトルに困り、かなり適当な物を付けてしまったOTL
そして、次の詩はどの魔女にしようか考え中……

あと、書き貯めが切れました（笑）

第十三話 夢の御告げ

白色の眼球と黒色の眼球が
大喧嘩を始めたわけは

黒色の眼球が白色の眼球の

お友達をこわしたからだといいます

そこへ酒樽のようにまるまる太った

大きな歯車がやってきました

片方はそれこそびっくり仰天

喧嘩などしてする場合じゃありません

Tweddledum and Tweddledeeより一部
引用)

それは夢の中……

リアルな眼球の振り子を持つ、大きな振り子時計が煩雑に置かれて、他には何も存在しない真っ白な空間にて、革張りの高そうなソファーに座った私に、スーツを着込んだ犬の顔をした執事が給仕をしている。

「今日の御菓子は何かしら？」

ソファーに座っている私は、時計の針が一斉に3時になり重苦しい鐘の音を鳴らした事もあり、犬の顔の執事に3時のオヤツは何かと聞いてみる。

「癌を抑制するクリームチーズをたっぷり使ったレアチーズケーキに、発癌性を防ぐカフェインを含むコーヒーで御座います」

私の問い掛けに、犬の顔をした執事は丁寧を受け答える。

そして、彼が親指と人差し指の先を当てて、力強く指をパチンツと鳴らすと、何時の間にか空間に綺麗な金細工の入った御盆が出てくる。

御盆には甘酸っぱい香りを放つレアチーズケーキの乗った真っ白な皿、黒い良い香りを放つ液体コーヒーを入れたコーヒーカーップとそれを受けるコーヒースーサー。

「あらあら、私の体を気遣ってくれてるの？」

「勿論でございます。貴方様の眼球を奪った私目は、これ以上貴方のパーツを傷付けようございません」

犬顔の執事は膝を着き、頭を垂れて、丁寧に返してくる。

「まあまあ、何と主人に忠義な犬かしら？」

「御主人様、御主人様、齒車の伯爵が謁見を願ひ申しています」

犬顔の執事を褒めると、次は眼球を啜えた鳥がやって来て、私に報告をします。

「まあまあ、通しなさい」

私はおどけた様に、鳥に命ずる。

齒車の伯爵様は、非常に怖いお方です。少し怒らせただけで、罪も無い女の子たちを凌辱します、絶望させます。

過去にも、何人もの女の子達の夢を碎き、絶望の淵へと追いやっております。

「やあやあ、こんにちわ。眼球の御姫様」

顔を出したのは、齒車の花の束の伯爵様。

言葉は年老いた伯父様風ですが、実は性別は女だったりします。

「お久しぶりです。齒車の伯爵様。本日はどのような御用ですか？」

「いえいえ、今日は貴方に伝えたい事が有って来ました」

齒車の伯爵様は深刻そうな風に装っておりますが、内心はドキドキワクワクで、私の驚く顔を目の当たりにする事を願ってたりしてるのです。

凄くSな御方です。その残酷な所業の数々より超弩級のSと呼ばれてるくらいです。

「なんでしょうか？」

私はそのドキドキワクワクを快く思っておりませんので、感情を一切顔には出さず、簡潔に尋ねる。

「2週間後に宣戦布告しますので、御城から逃げるか、私と戦う覚悟しておいて下さい」

・ ・ ・ ・ ・
■ ○ (・ | ・) ○ パーチ

〔齒車伯爵〕

(ピッ♪) ↓ ■ ? (? ? ? ? ? ? ?) () 。 。 。 サササ〔城〕

「ぬおはあっ!?!今の夢は何っ!?!」

「うっせえぞ、アマタあ!!」

あまりの想像を絶する夢に絶叫した所為で、一つのボロボロベットで身を寄せ合いつつ一緒に寝ている杏子ちゃんより、枕で殴られる。

脳に響くその一撃で、しっかりとおめめも覚めたよ……

現在時刻は携帯電話の時計で確認したところ水曜日の午後2時10分。昨日のゲームセンターでの大暴れで疲れ果て、どうやら今の今迄寝てみたいだ。

あっ、そうそう、今更何だけど私は学校なんて行ってないよ♪

親も居ないし、学校に行く余裕なんてないのさあ♪
生活する為の御金も稼がないといけないしね……

うん? 中学生なのに、どうやって御金を稼いでるのかって?
そりゃあ、手っ取り早く稼げる方法なんて決まってるじゃないの?

さあ、当てる御覧♪

? マッチ売り

? 体売る

? パチプロ

? 親の財産を有効活用

今回はヒント無しだよあ♪

正解は? でしたあ♪

はい、親が良く有り勝ちな資産家って云う設定に作者がしたので、私はその御金をと手に入れた魔法を使って御金稼ぎしてます。

例えば、ヤクザ者相手の裏賭博こと丁半博打。または、麻雀等と、

私の力を行使すれば絶対に負ける事のない賭けで、生活するのに最低限必要な御金を色々な方法で稼いでます。

っていう設定は、どうかな？

にひひいゝ、まあ真実は内緒だよ♪

かの有名な台詞にも、A s e c r e t m a k e s a w o
m a n w o m a n (女は秘密を着飾って美しくなる) ってあるし
ね♪

「ごめんごめん……ちょっと、変な夢を見てね……」

「あんっ？どんな夢だ？」

「眼球の御姫様の所に、齒車の伯爵様がやって来る夢だよ」

杏子ちゃんはぼか〜んとした顔で、どの様な言葉を返せばいいのか悩み始める。

時折呻いたりしている……むむむ、今日はあの日かい？

さてと、今日は何をしようかねえ……

時間的にまだ鹿目まどかは学校と思われるので、観察に行っても
楽しそうだし、杏子ちゃんと親睦を深めるのもまた一興。
ラブラブする

「そこでぼか〜んってしてる杏子ちゃんは、今から何か用は有るのかい？」

「誰の所為でぼか〜んってしてると思ってるんだ？」

寝起き早々、口にペロティー（棒付きチョコレート）の事。アン●

ン●ンとか●面ライダーとかのイラストが描かれた物が存在する）を啜える。

恐らく、低血圧なので、糖分摂取でテンションを戻そうとしているのであろう・・・

あつ、低血圧に効くのは塩分だったね、テヘツ☆

あと、とある御方が言ってたんだけど、アン●ン●ンの伏せ字の仕方って何かエロイよねっ☆

「私の夢の所為であって、断じて私は悪くないとアマタちゃんは懇切丁寧に申し立ててみる」

「よし、一遍蛙顔のドクターに頭を調べて貰って来い」

「そのふざけた考えを私がぶち壊してやる」

「手前の思考全部がふざけてるんだよ!!」

ぐすん……また、杏子ちゃんが枕で殴るうゝ……

おっと、枕で殴った際に寝間着（縦に緑と白のラインが入った物）の肩の部分が少しずれて、白色のスポーツブラがちらりと♪

不幸中の幸い、怪我の功名♪眼福眼福う♪

「杏子ちゃんは今日何かする予定とか有るの？」

「ねえよ。疲れてから、夕方までゆっくり休んで、その後は気分次第さ」

男座りとオヤジ臭い座り方をしつつ、まだ眠いのか右手を口に当て大きな欠伸をする。

これから二度寝を再開する気満々なのは言わずもがな……

「ふう〜ん、じゃあ、私はちよっくら出掛けてくるね♪」

私は杏子ちゃんの攻撃により完全に覚醒してる為、これから二度寝をしようにも無理であろう。

なので、気分転換に外へと出掛ける事にしよう。

「何処行くんだ？」

これから行く所と行う事を思うと少々ニヤケ面になってしまってる私に、冷たい視線を向けつつも訪ねてくる杏子ちゃん。

「ちよっくら、人間観察にね♪」

そう、今からとある場所に人間観察に行く事にしたのだ♪

えっ？それは、何処かって？

そりゃあ、決まってるじゃない♪

「鹿目まどかって奴の所か？」

「そうそう〜♪序でに美樹さやかとほむらちゃんの事も観察してくるよ♪」

「そうかい。で、あいつらの通ってる、中学校の位置は分かるか？」

「勿論、大丈夫だよ♪魔法で探索するから♪」

見滝原市上空に魂之眼球を設置すれば、学校の様な目立つ施設の探索はお茶の子さいさいである。

小学校、中学校、高校の違いの見分け方は、グラウンドの遊具や施設等を見れば一目瞭然であるので、どれが見滝原中学校であるか等と迷う事も無いであろう。

「じゃあ、気を付けて行って来いよお。何かあったら、念話で伝えてくれ」

そう言い残し、ペロティを咀嚼する事で食べ終え、再び枕に頭を置いて、ごろんと横になり眠りの世界へと堕ちる。
数秒後には小さな可愛らしい鼾が聞こえ始める。

杏子ちゃんも寝静まったところで、私もお出掛けするとしましようか♪

先ずは魔法を発動させる為に魔法少女の姿に変身し、見滝原市上空に魂之眼球を設置し、探索を行う。

御目当ての施設は直ぐに見つかり、私はその施設へと駆け足で向かうのであった♪

第十三話 夢の御告げ（後書き）

夢の中の執事が何故人間ではなく、犬なのかですが……
アマタ自身が眼に係してますので、気付いた方も居るかもしれません。
せんが、主人の世話をする盲導犬って意味で、犬にしております。
変な所は拘る n a o n a o であった……

第十四話 友達（前書き）

正直、今回の話はやりすぎたと思ってしまった（汗）
今日から大学開始したので、ねえ……（汗）
うん、小説は公開はするけど、後悔はしない

第十四話 友達

テディベア テディベア

地面に触れてごらん

テディベア テディベア

ぐるっとまわってごらん

テディベア テディベア

下着を見せてごらん

テディベア テディベア

それでいいのよ

くマザーグースのTeddy bearより一部引用く

咲いたあゝ、咲いたあゝチューリップの花があゝ♪

なゝらんだあゝ、なゝらんだあゝ、赤・白・黄・薄緑・水色・

黒・ストライプ・水玉・猫ちゃん・レース付き、リボン付きいゝ♪

どの娘^{はな}見てもおゝ、可愛いなあゝ♪

見える見える見えるうううううう!!

穢れを知らぬ女子中学生の下着姿っ!!

流石は中学校!! ヴィヴァ中学校!! ヴィヴァ女子中学生え!!

うふふふふ、私の能力の最終奥義、必殺☆女子更衣室覗き!!

安全かつ鮮明にうら若き女子生徒の裸体を拝む事が出来る素晴ら

しい能力♪

全国の男性諸君も羨むこの能力♪

『私のキュウベえがくれた初めての魔法

それは魂之眼球で私は14歳でした

その味は甘くてクリーミーで

こんな素晴らしい魔法をもらえる私は

きっと特別な存在なのだと感じました

今では私が魔法少女

男共にあげるのはもちろん覗き写真

なぜなら彼もまた特別な存在だからです』

と、アホな発言をしつつも、次々と乙女たちの半裸体^{メモリー}を脳の海馬に焼き付ける。

しかし、鹿目まどかと美樹さやかは発見した物の、ほむらちゃん
の姿が見当たらない。もしかして、鹿目まどかとは違うクラスなの
かな？

彼女のブラの模様が結構楽しみだったのだが……

っていうか、この御時世に紺色ブルマだと……素晴らしきかな紺
色ブルマ……！

可憐な乙女達の白くて綺麗な太腿、むっちりとした御尻のライン
もしっかりとおく♪

うへへへへへへ、涎が止まらないよお……こりゃあ、暫くの間は
毎日訪れて閲覧ですな♪

しかし、ブルマも乙だが、全裸が見れる機会となるスクール水着
の御着替えの時に訪れたかったものだよお♪

ここの学校の生徒はレベルが高いだけあって、乙女達の閲覧が非
常に楽しいよ♪

「ここで、何してるの?」

「お花見♪」

おや、私の存在を既に察知し、こっちに来たねえ……

現在は魔法少女の格好ではなく、学校指定制服なので、魔法を発動して接近して来た訳ではなく、普通に歩くか駆け足でやって来た事になるのだが……

私の存在に気付くのが早過ぎる。まだ屋上に来て3分も経過していない。

これだけの短時間で、私を察知する事はどう考えても不可能である。

私の魂之眼球は、召喚する私自身が他者に見せようと思わない限りは、基本察知される事は無い。まあ、例外として、昨日の様な高度の魔女には発見される事もあるみたいだけどね……

よって、これより考えられるのは、彼女はここに私が現れる事を知っていた。ほむらちゃん逆行説の成立は益々現実味を帯び始めた。

「即答でその回答はどうかと思うわ……そんなに女性の下着姿を覗くのが楽しい？」

凄いいねえ、お花見って言葉だけで、良く覗き見って理解出来るものだ。

まあ、昨日にあれだけ下着に関する話題をしてるので、連想できない事もないのかな？

「うんっ♪今日は鹿目まどかちゃんは下も上も合わせて桃色×白のストライプっ！！これはレベル高いよぉー！！そして、美樹さやかは淡い水色の下着。ううーん、ストライプや水玉も良いけど、これもこれでピッタリで可愛いねえー♪あっ、ちなみに今朝の杏子ちゃんの下着は、純白の奴に赤のリボンが付いた奴だよ♪杏子ちゃんって、意外と可愛いの履いてるよねえー♪」

捲し立てる様に魔法少女（+a）達の下着紹介をし、満開の笑み。ちなみに、本人が目の前に居るので口には出さなかったが、ほむらちゃんの下着は本日も純白。

もうちょつと、実況のし甲斐のある下着にして頂きたい物だよ♪ほむらちゃんなら、意外と雛とか猫のアニマルプリントなんて似合いそうだよねぇ♪

おっと、想像しただけで涎が……

涎が出掛けた口元を急いで拭う。

「そう、人生楽しそうね……」

「楽しいに決まってんじゃん♪ほむらちゃんは人生が楽しくないの？」

「ええ、楽しくは無いわ……」

即答でその回答はどうかと思うよって、さっきのお言葉をそのまま返してあげようかい？

「そりゃあ、つまらんねぇ♪じゃあ、私がほむらちゃんの人生を楽しくリメイクしてあげよっか？御洒落、満腹感、性的欲求♪私が貴方の望みを何でも満たしてあげようかい？」

「特に最後のは結構よ……」

「にひひ、私よりは鹿目まどかの方が良いかな？『ほむらちゃん、私の胸を触ってみて……ほむらちゃんの事を思うとこんなに熱くなるの……』的な展開を？」

悪戯な小悪魔っぽい笑みを見せて、訪ねてみる。

「な、何を馬鹿な事を言ってるの……」

おっ、初めてほむらちゃんが明らかな動揺を見せた。

これ即ち彼女は、鹿目まどかに私の想像以上の好意を持ってるって事ですな♪

「さてと、私に会いに来たのは、私の趣味に関して聞きに来た訳じゃないでしょ？ちゃっちゃと、本題に入りましょうよ♪」

「ええ、そうね。現状では、鹿目まどかに関してどの様な印象かしら？」

「えっとねえ、先ずは——」

「良い忘れてたけど、下着以外の感想でお願いするわ」

ぬうあつは！？ほむらちゃんが私の考えを先読みし、話をぶった切って突っ込んで来たよ！！

折角、桃色×白のストライプが素晴らしいと大絶賛する気だったのに……いや、しかしあのまだ幼さの抜けない顔に、低い身長なら、猫ちゃんのアニマルプリントの方がピタシかなあ？

「ふっ、当り前じゃないかい……ちゃんとした回答をする気だったよ……」

「そう、なら良いけど……」

「まあ、安心しなさいな♪私は、鹿目まどかが魔法少女になるのを

徹底的に阻止するわ♪」

「どういう心境かしら？」

「私達友達でしょ？それに、ほむらちゃんはゴールしたいんでしょ？鹿目まどかがキュウベえと契約をしない未来を」

問いかけに、彼女は首を縦に振る事で肯定。

「そう……貴方はやっぱり優しいのね……」

む、呼び方が相変わらず貴方に戻るねえ……

「もう一度言うけど、貴方って呼び方止めてくれないかなあ？友達なら、御互い名前で呼ぶ物でしょ？アマタン、アマタ様、アマタちゃん、天照等の愛称もしくは、普通に名前で呼んでちょうだいな♪」

「アマタ……」

「なくに、ほむほむ？」

こんな事もあるうと、猿わたしほむらちあゆしやうは殿の草鞋を懷で暖めて置きました。

「その呼び方は止めてくれないかしら？」

しかし、殿は御気に召さず……

ちよっぴり、ショツクう……その否定は、全国のホムラー（HOMULER…ほむらちゃんが大好きな人間のこと）の方々もショツクな結末だよ！！

作者さんが、ホムラーの皆様から叩かれちゃうよ！！

ちなみにほむらちゃんが好きで好きでやれない連中の事は、ホムラーの他にもホムリストとかホムリズムとかで呼ばれる事もある。

「じゃあ、むほむほ？」

「悪化してるわ……」

「それじゃあ、アケミンとかほむらたんは？ あっ、ホームランなんてどうっ!？」

「訂正するわ、アマタは意地悪ね」

その時、ほむらちゃんは初めて私の前で意地悪そうに笑ってくれた。

前は顔を緩ませるだけで、笑ってくれる迄は至って無かったので、前以上に心を開いてくれた証拠。

それは、とっても嬉しいなって♪

「にやはははあ〜♪意地悪で結構結構コケコッコ〜♪で、ほむらちゃんは次の科目は何だい？」

「グラウンドで体育よ……でも、アマタが来てるからサボる事にするわ」

「駄目だよお〜!! サボるのはルール違反だよ？」

サボられると、ほむらちゃんの下着姿&ブルマ姿を拝見出来ないじゃない!!

「じゃあ、言い方を変えるわ……アマタに下着姿を覗かれるからサ

ボるわ」

ぬうあつは！！作戦がバレテル！！

「大丈夫！！既に下着は覗いてるから♪後はブラだけだから♪」

親指を上立てて笑顔。

「そうね、さっきから私の足元の地面に、充血したアマタの魂之眼球が蠢いてるから、下着が覗かれてるのには気付いてたわ」

うん、あまりにも興奮してて眼が充血してるんだよね♪
てか、今ポロリと問題発言したね♪

さあ、読者の皆様♪久し振りのクイズです♪
ほむらちゃんの問題発言とは何でしょう？

？魂之眼球という名前を知っていた事
？足元の魂之眼球に気付いた事
？下着を見られてるのに動じていない事

さあ、どれでしょう？

まあ、答えは全部だからクイズにもなって無いわね♪

現段階で、魂之眼球の効果は知ってるのは不思議でもないが、名前まで知ってるのは可笑しいでしょ？名前を教えた事も無いしね♪
ほむらちゃん、仲が深まる度に、その辺に關しての慎重さが緩み始めてるよお？

続いて魂之眼球に気付いた事。

今一、見れる相手の条件が分からんなあ？やっぱり一定以上の魔力量を持つてゐる事が条件なのか？

ただ魔法少女は、基本魔女よりも魔力量は少ない。殆どの魔女が見れないのに、その魔女よりも魔力量の低いほむらちゃんが見ることが出来る理由が分からん。

見えると言ったのは、もしかしてハツタリか？

いや、それは無いな……興奮のあまり、魂之眼球が充血してたのも当てられてるし……

今後もこの条件に関しては調査する必要があるわね……

そして、最後に……

ブラは駄目だけど、パンツは見せてくれるのね……まあ、黒ストッキング越しだからってのもあるのかな？

まあ、それでもそんなの絶対に可笑しいけどね♪

第十四話 友達（後書き）

本日の話より、少々アマタちゃんが暴走開始しましたが、これが当初予定の彼女の素ですので（汗）

第十五話 情報（前書き）

ぐふぁ……何とか、20時までに関に合わせましたぜ……

これだけの短さなのに、一話書き上げるのに2時間くらいかかるんだよねえ……

とは言っても、1時間くらいはネタを考える時間なんだけどね……

第十五話 情報

結局その後、絶対に御着替え時間タイムを覗かないと云う約束でほむらちゃんには体育に向かつて貰う事になった。

まあ、確かにブラが確認できないのは痛い、ほむらちゃんのブルマ姿が視姦出来ないのはもっと痛い。

妥協と云う訳なのよ♪

さてと、本日の見滝原中学校の女子の体育は、マラソンの様だねえ♪

発展途上のやや平面では、上下運動も少なく面白みがやや減るのが残念。

寧ろ、胸を突き出してくれる走り高跳びの様な授業が良かったよ
お♪

「アマタはマミに、生き返って欲しくないのかい？」

「そりゃあ、蘇って欲しいけどさあ。ほむらちゃんと約束しちゃったからね……」

何時の間にか私の傍にはキュウベエの姿が有り、私に悪魔の囁きをする。

だけど、もう何も怖くない……

マミさんが居なくても、私を支えてくれる友達が居るから。

「そうかい……少し今回の事は誤算だったよ。まさか、君が曉美ほむらに対してではなく、僕に対してのイレギュラーになるなんてね」

「誰がアンタに使われてやるもんかい♪」

左目を瞑り、右目に人差し指を当てて、舌を出して、キュウベえにあっかんべゝをする。

これは私なりの拒絶であり、その表現法である。

「まあ、別に構わないよ。それならば、僕にもまた別の考えが有るから」

「じゃあ、それを実行する前にアンタを取り敢えず捌っておこうかしら？」

玉響に手には拳銃が召喚され、銃口はキュウベえへと向けられる。

「君も暁美ほむらもそうだけど、別に僕という個体を殺した所で、僕を止める事は出来ないよ？」

一個体の体験は全てのキュウベえにて共有される。

詳しく言くと、キュウベえはキュウベえ同士に意思を共有するネットワーク様な物を構成しており、例えば目の前に居る個体を殺したとしても、既にこのキュウベえの考えが全個体に伝わっているので、キュウベえの考えを止める事は出来ないと云う事だ。

「まあ、ほむらちゃんはどうか知らないけど、私がキュウベえを殺すのはストレス発散だよ♪」

「君は相変わらずだね……」

「アンタもね♪」

「でも、君も鹿目まどかの周りに感化されて、弱くなったね。マミ

みたいに、隙を吐かれて魔女に殺されないように――」

「死ねっ!!」

その言葉で怒髪^{うがみ}天をついた私は、目の前に居るキュウベえに銃弾を発射。ちなみに、発砲音が鳴るのは拙いので、サイレンサーはちゃんと装着させてたりする。

発射された銃弾はキュウベえの頭蓋を撃ち抜き、一撃で生命活動を終わらせる♪

29 匹目 SATSUGAI 完了だよ☆記念すべき切り番こと30 匹目まで後1匹♪

さてさて、どんな方法で殺してやろうかしら♪

「でっ、ここに来たのは、私を怒り狂わせたり、意思を確認しに來ただけなの? キュウベえ?」

個体が殺害された事によって、勿体無い精神全開の別個体のキュウベえがやって来て、ハイエナの如く死体を貪り始める。

「キュップイ♪」

むむむ、本日はモキュップじゃないのね……

「じゃあ話すね。君達が昨日の晩に倒した魔女なんだけど、あの魔女は元々ギリシアの魔法少女の成れの果てなんだ」

「あれ、でも前の魚の魔女はオーストラリアの魔法少女の成れの果てでしょ? 別にギリシアの魔法少女の成れの果てだからと云って、キュウベえが私に伝える必要のある事なの?」

「うん、確かにそうなんだけど……3日前にギリシアにワルプルギスの夜が出現した……」

ワルプルギスの夜がギリシアに？

「ギリシアで5人の魔法少女が戦闘に参加したけど、3人が殺され、残りの2名は絶望して魔女になってしまったんだ」

けっ、ギリシアの魔法少女も役に立たないものね……5人も徒党を組んで挑むくらいなら、ちゃんとぶちのめしなさいよ？

「その内の1人が昨日の魔女？それで、何が言いたいのか？」

「今の君達ではワルプルギスの夜が襲って来たら、間違はなく対処は出来ないと思う。だからこそ、戦力としてまどかは魔法少女になるべきだと僕は思うんだ」

それは、ワルプルギスの夜と私達が激突したら、確実に私達が負けると云う明言。

「私に分かるように言ってくれる？」

だけど、簡単にはそれを認めたくも無いので、理由を訪ねてみる。

「簡単な事さ。魔女の強さは魔法少女の強さに比例するんだ。昨日の魔女にはアマタの魂之眼球が見破られただろ？御世辞ではないけど、アマタの魂之眼球を見破れる魔女なんて滅多に居ないと僕は思っている。魔法少女を生み出す僕だって、認識出来ない時の方が多いからね」

キュウベえの言う事は確かに的を得ている。っていうか、何処で私と杏子ちゃんが魔女と戦闘した事を知ったんだ？

私の魂之眼球が見破られた事を知っていると云う事は、相当近くに居たって事になるよ？

っていうか、良い事聞いちゃった♪キュウベえは、私の能力を認識できない事が多いっ♪

「成程ねえ……それなりの強さを誇る魔法少女5名が相手にしたけど、ボコボコにされたって訳ね……」

「そう言う事だよ。彼女達も決して弱い魔法少女ではなかった。けど、奴もそんじょそこらの魔女とは違う存在だって事だよ」

「悪いわね。私はアマタ様よ？こちとら、アンタに見せてない最終兵器もちゃんと用意してるの。それに、私は一人じゃない！！もう何も怖くない！！」

ちなみに最終兵器とは方便である。キュウベえにこれ以上私に誘惑の声を掛けさせないようにする為の。

残念な事に、私の強さや能力には低い次元にて限界と云う壁が存在している。ほむらちゃんの様に時間を止めるようなチート級の能力、杏子ちゃんの様に圧倒的なスピードとパワー、マミさんの様な空間把握及び射撃能力、そして鹿目まどかの様な天賦の才。私にはそんな物はない。それに近い能力を発揮していたら、とてもじゃないが、この間の猟犬の魔女の時の様にソウルジェムの維持が難しい。だけど、私は一人じゃない。友達が居るから、才能が無くても大丈夫……

「そっかぁ……でも、もし実際に向き合って困った時は、まどかの件は考えてみてね……じゃあ、僕はここらで失礼するよ」

死体を完全に食べ終え、そこで別個体の自分が殺されたという証を消し去ったキュウベえは、てくてくと屋上に設置された巨大な給水塔の方へと歩き始め、最後には給水塔の影に吸い込まれるように消えて行った。

先日の魔女の強さは、確かに本物だったのは認める。

杏子ちゃんと一緒に戦闘して無かったら、私が負けていたという可能性も確かにある。

そのレベルの魔女を生み出す魔法少女が5人も立ち向かって勝てない相手……

私達3人で、ワルプルギスの夜に勝てるのかどうかは不明である。

まあ、それはほむらちゃんの能力と願いを知らない以前の私だったらの話だけどね♪

ほむらちゃんの反則じみた能力を上手く用いて、私と杏子ちゃんがカバーすれば、可能性はゼロではない。

それに、ほむらちゃんの御願いが私の推測通りの御願いなら、勝率がゼロな訳がない。

『鹿目まどかを助けれる強い力が欲しい』と云う願いで逆行して来た上に、その未来で鹿目まどかがワルプルギスの夜に殺されたのならば、ほむらちゃんの持つ戦闘能力はワルプルギスの夜に匹敵する筈。

それが彼女の契約ならば、確実にその願いは叶えられる……今、彼女が苦勞しているのはその願いを叶える為の代償である。

「問題は無い……だけど、一人で背負うには重すぎる不幸だよね……ほむらちゃん……」

目の前でへとへとになりながら走る鹿目まどかを、他の人間には
バレない様に気遣いしつつも、ゆっくりと走るほむらちゃんを見て、
私は微笑んだ。

可愛い 可愛い 子猫ちゃん
無口で 御淑やかな 子猫ちゃん
なんて可愛らしいのでしょう
このあたりで一番の器量よし

さあさあ一緒に 跳ねましょう
さあさあ一緒に 飛びましょう
未来へ進み 過去に下がり
ぐるっと一回り 回りましょう

私と一緒に……幸せな未来を掴みましょう……

くマザーグースの H e y m y k i t t e n , m y k i t t
e n より一部引用く

第十五話 情報（後書き）

ギリシアの魔法少女とワルプルギスの夜の戦闘を、オマケで書くか否か……

書くかどうかで悩んでるくせに、既にキャラクターや簡単な設定は出来上がってるという落ち（笑）

『ミリヤーニア』

紫色の魔法少女であり、キュウベえと『自分より強い者に出会いたい』という願いで契約した魔法少女。

武器はサーベル。接近戦を得意とする。

『ハイジ』

緑色の魔法少女であり、キュウベえと『狼に襲われた羊達を生き返らせて欲しい』という願いで契約した魔法少女。

武器は狼の牙を模したガントレット。接近戦を得意とする。

『メルア』

銀色の魔法少女であり、キュウベえと『頭を良くして欲しい』という願いで契約した魔法少女。

武器は一切なく、魔法少女や魔女や使い魔を見ると事細かな情報を知る事が出来る。頭脳戦を得意とする。

『マリア』

赤色の魔法少女であり、キュウベえと『イケ面の彼氏が欲しい』という願いで契約した魔法少女。

武器は一切なく、自身の影を操作して攻撃できる。接近戦も遠隔戦も得意としているオールラウンダー。

『クフィーユ』

虎縞模様の魔法少女であり、キュウベえと『猫と御話したい』という願いで契約した魔法少女。

武器は一切なく、声による波動攻撃をする。遠隔戦を得意とする。

と、こんな感じ……

マリアに関しては、原作に出て来た『影の魔女』の元と云う設定で作りました。

ハイジはこの間のオリジナル魔女です。

序に初期の星屑アマタさん候補

今回は主人公の設定作る際に4種類の候補を立ち上げて、それから吟味してテーマを『眼球』にしたのですが、候補はこんな感じでしたと、ここで発表♪まあ、久し振りにグリム童話見た後だと、確実に眼に流れてしまうのは、言うまでもない……今思うと、出来レースなのに、何で4つもテーマを作ったのが、テキストメモを見る度に疑問……

飽く迄、最初の設定ですので、実際に書いてみると、かなり変わってたりします(汗)

『眼球』

交通事故で眼を失い、もう一度世界を見てみたいとキュウベえと契約。

予定ヒロイン『巴ミ』

『声』

火事で喉に重度の火傷を負った事で、声が出せなくなり、もう一度話せるようになる為にキュウベえと契約。予定ヒロイン『美樹さやか』

『虐め』

学校で重度の虐めに会い、虐められる自分ではなく虐める立場になる為に力を欲してキュウベえと契約。予定ヒロイン『佐倉杏子』

『独占欲』

何でも他人の物を欲する癖があり、美樹さやかとブルジョワ（名前何だっけ（汗））が上条を取り合いしてるのを見て、上条が欲しくなりキュウベえに上条を自分の彼氏にする事を約束で契約。予定ヒロイン（？）上条

今思うと、絶対に独占欲をテーマにしなくて良かったと思っている（汗）

まあ、それはそれでドロドロして面白かったかもしれないけどね♪
どうも、昼ドラ的なブラックなアイディアだけはどろどろと出て来るなあ……（汗）

もっと、明るいアイディアの方が出てくれば良いのだが……

第十六話 オネダリ（前書き）

予約投稿を入れた4月9日のnaonaoの記録

4月9日土曜日19時18分

ギリギリ当日分の執筆が完了した

毎日投稿が途切れるかとひやひやした

4月9日土曜日20時20分

翌日分の執筆開始

時間的に甘い物が食べたくなって来たので、冷蔵庫よりコンビニで購入した蒜山ジャージャー濃厚ミルクサンド（味は値段の割には普通だった……）を取り出して食べる

4月9日土曜日21時08分

長時間の執筆と昨日が久し振りの大学であった事もあって、少し疲れて来て、睡魔が襲ってきた

4月9日土曜日21時14分

眠気を取り除くために薬物 C^カAーF^{フェイン}EINを体内に大量投与してみる

NESC●FEの900mlペットボトル（無糖ブラック）を一気飲みした事もあり、何だか漲って来た……

4月9日土曜日22時38分

か……ゆ……うま……

ここで、記録が途切れている

第十六話 オネダリ

わたしのところの眼のなる木

桃色の眼球と白色の眼球が実ります

悪魔の使者が訪ねてきたのも

眼がなる木がお目当てなのです

時の中を跳ね 掌の上で踊るわたしは

どんな悪魔でさえ 捕まえられない

マザーグースの had a little nut tree
より一部引用

私の能力で、家庭科の授業中の鹿目まどかと美樹さやかは何かブルジョアっぽい人と+aの4人で班を組み家庭科の授業で御菓子作り。

ほむらちゃんだけは、別の班でやっている。一切会話などせずに、ひたすらホイップクリームの入ったボウルを混ぜている。

ここで、ホイップクリームをぶちまけて、どこぞのグラビア雑誌の表紙みたいにならんかなあ〜と期待しつつ、家庭科室に潜ませている眼球をほむらちゃんに急接近。

だが……一瞬で、ホイップクリームを混ぜる『しゃかしゃか（泡立て器の事）』で、飛んでるハエを掃うかのように攻撃……

「うにゃああああああああ！！眼が廻るううううう！！」

眼球が吹き飛ばされた事で、眼球が360度回転し、ぐるぐる回る光景が脳内に……

うっ、酔ってしまいそう……

そして、回転が収まると同時に、視界がホワイトアウトする。

恐らくだが、誰かのボウルの中にナイスシュートをして、ホイップクリーム塗れになったのだろう。

普通はボウルの方がナイスシュートを決められる筈なのに……あつ、それはボールだったね♪

日本語って難しいよねえ♪そりゃあ、黒船で有名なペリーさんも「ニッポンノミナサン、カイコクシテクダサイヨ」って片言で言う訳だ♪

『ほむらちゃん、掃うのは酷くない？』

取り敢えず、現状を知る為と、抗議をする為に念話を掛ける。

当然、チャンネルは私とほむらちゃんだけである。間違っても、鹿目まどかとミッキーサヤカ（某アニメのネズミキャラっぽい呼び方でやってみる）には繋がらない様に気を付けている。

『御免なさい。ビックリして攻撃してしまったわ』

絶対に嘘だ……

『嘘っだあ〜♪あっ！！ねえねえ、私の魂之眼球の視界がホワイトアウトしたんだけど、何処に飛ばされたの？』

『まどかが掻き混ぜてるボウルに突っ込んだわ。それで、まどかの付けてるエプロンがホイップクリームで汚れて——』

『ちょっと、使い魔の口にカメラ持たして、部屋に突っ込ませて撮影するわ！！』

『じゃあ、貴方の使い魔が、窓から入れない様に閉めないね』

ブッブブー!!これでは、いけませんね?

はい、ほむらちゃん対応ミスです。何がイケないか、読者の皆さんは分かりましたか?

使い魔に一切突っ込みが無い。次に、窓から何故入って来ると分かったのか?

ちなみに、家庭科室が1階ならその発想が出るかもしれないけど、見滝原中学校の家庭科室は3階だからねえ♪飛行出来る使い魔じゃないと、窓から入るのは無理だよな?

『うにゃあ!!止めて!!ほむらちゃんは友達でしょ!!』

『ええ、でも……まどかに手を出すのは許さないわ……』

『くっ、鹿目まどかはほむらちゃんの嫁って事ね……』

『そ、そう云うのじゃないわ……』

と、ほむらちゃんを動揺させておきつつも、静かに建物内に魂之眼球を召喚し潜入させる。

考えてみれば使い魔だと、魔法少女である美樹さやかや、才能を持つ鹿目まどかににバレルじゃん♪

私の召喚する使い魔は、魔女が召喚する使い魔やキュウベえと一緒に緒である。魔法少女や魔法少女の素質のある人間には当然見えてしまうのだあ♪

流石に使い魔特攻させたら、それこそ大騒ぎだよな♪
魂之眼球を素早く操作し、家庭科室に無事に潜入させる。

おお、愛しの楽園がそこに♪

エプロンと顔にホイップクリームを付けて、やや呆けている鹿目まどかちゃんの姿♪

そして、それを可笑しそうに笑う美樹さやかとブルジョアっぽい

人と十^a。

鹿目まどかには何故ホイップクリームが飛び散ったのか理解出来ず、かなり戸惑っている♪

うん、可愛い可愛い♪そのまま、地面に横になってグラビアっぽくポーズ取ってくれないかなあ♪

『あつ、ほむらちゃんやあ♪そう云えば、何作ってるの？』

『シフォンケーキよ……』

シフォンケーキかあ♪そう云えば、最近ケーキ食べてないから食べたいなあ……

よし、ここはオネダリ作戦に出てみるか♪

『私も食べたいから、後で持って来て♪じゃないと、使い魔を大量に突貫させて、美樹さやかを挑発して、家庭科の時間を恐怖の――』

『分かったわ……ケーキが出来たら、時間を止めて持って行くから、屋上で静かにしていて……』

よし、これで少し遅めの3時のオヤツが手に入るわ♪

完成まで時間があるし、紅茶を手に入れに行つて来よつと♪

スツと立ち上がり、助走をつけて屋上より飛び降りる。地面に着地する寸前で、ペンダントの宝石ことソウルジェムをギュツと握り、一切の痛みを遮断。

骨が折れる鈍い音と共に、折れた骨が皮膚を突き破って飛び出るのが、痛みを遮断している為、何も感じない。その後、落ち着いて脚を回復させる。

治癒の願いを叶えて貰った者は、通常の魔法少女と比べて治癒能力に関しては優れている。ちなみに治癒能力に関しては、全ての魔法少女にデフォルトで組み込まれている能力である。

ただ、キュウベえとの契約内容によってその強さが顕著に現れる。恐らく、杏子ちゃんやほむらちゃんの契約内容では、こんな簡単に治す事は不可能であろう。

まあ、それ以前に、華麗に着地するであろう♪

うーん、一々高い所から飛び降りる度に、足の骨を折ってたんじゃない話にならないわね……この間の路地裏のビルの時も着地と同時に足の骨を粉碎したし……

高くジャンプも出来るが、着地すると脚の骨を粉碎する。高く飛べると云う事は、それ相応に足の筋肉が強化されてる筈なのに、何故に骨を折るのが未だに分からない。

さてさて、リアル出血大サービスな着地をし、着地付近の地面を深紅の血液で染めてしまったが、気にもせず、そのままトコトコと近くのコンビニへと向かう。

店員さんはちょっとやる気無さ気な大学生くらいの男性。中学生がこんな時間にコンビニやって来ても、全く気にする事も無く、オウムの様に「いらっしやいませ」とただ淡々と与えられた言葉を喋る。

まあ、私としてもそっちの方が助かるので、気にもせずペットボトル飲料のあるコーナーへと向かう。

さてさて、紅茶はどれにしようかな？

私としては、ペットボトル飲料の紅茶は紅茶ではなく、ジュースであるときなしているけど、今はそんな御茶を沸かして作る事も出来ないで文句は言わず、午後ティーかリプトンリモーネで悩む。

紅茶好きに言わせて貰うと、どちらも味のレベルとしては、好きな方には失礼だが同じくらいである。

というか、「俺午後ティーよりリプトンリモーネの方が紅茶とし

ては美味しいと思ってんだぜ（キリッ）」みたいな台詞を言う奴は、紅茶好きでも何でも無いと突っ込みたい。

それ以前に、レモンティーが甘いって云う事態で、紅茶好きにとっては可笑しいって云うのに……

とか、思いつつ、取り敢えず午後ティー（ストレート）を手に取り、レジへと向かって代金を支払う。

ちよつと、スイーツコーナーに有った、北海道のとあるメーカーのポテトチップスチョコレートが気になったが、1箱の値段が500円くらいと意外に張るので諦め、紅茶だけを購入。

ちなみに、エコ精神なんて一切考えず、レジ袋とストローはちゃんと貰う。

そもそも、エコバッグとか再生紙とか悪いけど全然エコじゃないとか思っている。エコバッグに至っては、スーパールの負担は減るかもしれないけど、産業発展には邪魔にしかないね♪

あと、金属のリサイクルは必要だと思うね♪あの資源だけは、地面に植えたから増えるって訳じゃないしね♪

とまあ、私の感想を述べつつも、早足で中学校へと向かう。

魂之眼球から手に入る情報にて、現在ケーキのスポンジ部分をオーブンで焼いてる最中なので、生クリームを塗る時間等も考慮し、軽く見積もってまだ30分くらいかかりそう。

うーん……この暇な時間を持て余すのも何だし、屋上じゃなくて、校舎の中に侵入して見ようかな♪

魂之眼球を使えば、100%他人にバレないように潜入出来るしね♪

ふっ、今思えばこの100%バレないって云う自身が何処から出て来たのか……

そして、この言葉がフラグだったと云う事に次話で思い知らされる羽目になるとは、1ミクロンも思いもしなかったのだ……

と、メタ発言をして次話に続く!!

オマケ（作者がペイントを使って2分で作った画像）

>i21721—2802<

第十六話 オネダリ（後書き）

北海道のチョコレートポテトチップスとはR●YCEの商品の事です。

決して、生キャラメルで大儲けしたので、他の商品もヒット間違いなしと挑戦し始めた、頭の中も御花畑な牧場さんの物ではありません。てか、あれは粗悪な類似品でしょ……

第十七話 潜入（前書き）

暗い雰囲気は何処に行ったやら、学園コメディー物と化してしまった、本作品……

書いてて思うのが、魔法少女まどか☆マギカの二次創作だよね……
これって（汗）

祝・まどか放送再開＞＜

21日かぁ……後11～13話程度でアマタを完結出来るかなあ……
……

第十七話 潜入

校舎に潜入するも、今は授業中って事もあり、生徒も教師も教室にて授業中♪

スーハースーハ♪

思いつき深呼吸すると、甘美な女子中学生の匂いがあ……

当然する訳も無く、新たに4個の魂之眼球を召喚して、校舎をどんどん歩き進める。

先ずは保健室に潜入して、恐らく用意されているこの学校の女子の制服を頂く事にするわ♪

勿論、私は貰うなんて真似はしないわよ♪飽く迄、拝借するだけだからね♪

校内をある程度自由に歩くようにするには、やっぱり制服が要るからねえ♪

と、もっともらしい事を言ってるが、自身が義務教育で有る筈の中学校どころか小学校にすら通う事が出来なかったので、どうしても制服と云う物に憧れてしまうのだ。

障害者学校には行っただけど、当然制服なんて物が有る訳も無く、私服で通っていたのだ。いや、万が一制服なんて物が有ったとしても、目が見えない私が確認するすべも無かったのだよ……

だから、私にとって制服を着て、皆で楽しく授業を受けられる人間ってのは凄く羨ましい存在なの……

私は生まれながらにして、その何気ない権利すらも与えられず……

ゲフンゲフン、湿っぽくなったね♪

てへっ☆LED電球よりも明るいとっばら評判のアマタちゃん
が、話を暗くするのは駄目だね♪

保健室の位置に関しては、先程家庭科室に配置していた2個の眼球を動かして、既に探索済み。

2個の眼球によって、保健室にてゴーフル（焼き菓子の事）を食べながら茶を啜る保健医の存在が確認されている。

他の人間の存在は確認されないの、1人だけなら手段は色々ある。

じゃあ、3話ぶりのクイズ行ってみよう♪

私の取る手段はどれでしょう？

？使い魔で攻撃して、保健医には眠って頂く

？保健室の外で騒ぎを起こし、保健医が外に出た隙に頂く

？正々堂々、コンビニの袋を手を持ったまま、保健室に突貫し頂く

？THE DOGEZA

さあ、どれでしょう？

答えは〜♪

？でしたあ〜♪

ってなわけで、先ずは保健室まで全速前進だああ！！

と、脳味噌かいばコーポレーションの社長の決め台詞を頂き、魂之眼球で周囲を把握しつつ保健室へと疾走する。

階段なんかは3段飛ばしで駆け登りである♪

勿論、3段飛ばしをしても、足音を殆ど立てないようにと、踵を一切付けない爪先だけで疾走する方法を取っている。

そして、階段を登り切った時には新体操の選手が技を決めた後に
する決めポーズこと、グリコポーズを取る。

あっ？グリコポーズって大阪府民以外には分からないかなあ？片
足で立って、両手を広げて上に上げるポーズでYの字を模している。
ちなみに、このグリコのポーズは何故Yの字かと云うと、グリコ
の初代キャラの健康すぎる子供っぽい何かのキャラが、リアルで怖
いと苦情が多く、グリコの方が困った末にYAWARAKAKUと
云う意味を込めてYの字を取らせたと……

嘘だよ♪グリコ関係者の方及び、大阪府民の方スミマセン♪

本当は子供のゴールポーズが始まりだよ♪

やったね、読者の皆♪無駄知識がまた増えたよ♪

えっ？有名過ぎて知ってた？

むう……

おっと、保健室の前に着いたね♪

じゃあ、この話はこれから終了だよ♪

さあゝて、突撃するとしますか♪

先ずは肉体を強化する為に、魔法少女姿に変身する。

そして、保健室のドアに手を掛け……

突撃したー！！

「な、何だね君は——ぐはっ！？」

先ずは行き成りの闖入者に、驚く保健医（♂）の腹部に上へと抉
り込むような素早いストレートを叩き込む。

女医さんなら、多少は手加減はしたかもしれないけど、♂なら手加減なんて当然しないよ♪

少し浮いた体に今度は横より蹴りを入れて、空きベットへと吹き飛ばす♪

悪いけど、ベットで暫く寝ててねえ♪

とか思ったけど、狙いが逸れて、無数のベットを仕切るカーテンを吊るす為に設置された金属製の支柱に、頭部を当てる。

金属の震動する音と、地面と何かが接触する鈍い音と一緒に、保健医がグツタリと項垂れてピクリとも動かなくなる。

てへっ☆やっちゃった♪

取り敢えず、脈を確認。脈は有るみたいなので、恐らく脳震盪による気絶であろう。

さて、生きてる事も確認したので、魔法少女の姿から何時もの服装に戻して、制服を探す事にしよう。

保健室の奥の方に箆笥があるので、恐らくその中であろう。

トコトコと歩み寄り、1番上の引き出しを引いてみると、中にはギッシリと……男物の制服が……

よしっ、次は2番目の引き出し♪

2番目の引き出しを引いてみると、中には男物のトランクスが……

汚らわしい物を見てしまったわ……

さて、三度目の正直って事で上から3番目を引いてみると、中にはほむらちゃんや鹿目まどかや美樹さやかが身に纏っている物と全く同じ制服が、ぎっしりと詰まっている。

私のサイズの物を順に探してゆく。

卵色のブラウス、タータンチェックのスカート、白色のシャツ、赤色のネクタイ♪

全て発見したら、誰も眼を開けている人間が居ない事を良い事に、どうしようと服を脱いで着替え始める。

いやあ、初めての制服にワクワクドキドキだよぉ♪

着替えた後は、来てた服を近くに畳んで置いて、初制服の嬉しさのあまり、保健室に備え付けられている鏡に向かって、様々なポーズを取ったりしてみる♪

ふっふっふ……とまあ、初めての制服の嬉しさに警戒を解いていたのが不幸の始まりだったのだよ……

保健室の外に配置している魂之眼球より送られてくるヴィジョンに、制服にホイップクリームを着けた鹿目まどかが映った事に、気付くのが数秒遅れる。

鹿目まどかが保健室の前で止まった事に間一髪で気付き、取り敢えず急いで、床で寝んねしている♂豚をベットへと蹴り飛ばして、汚物が眼に入らない様にカーテンを素早く閉めて隔離する。

「失礼します。津村先生、代えの制服を貸してくれませんか？あれ、津村先生は？」

と、この場で暴行沙汰が行われた事を露も知らずに保健室へと入って来る、鹿目まどか。

恐らく、津村とは今隔離されてる汚物のゲフンゲフン、保健医の事であろう。

そして、鹿目まどかは私にその保健医の居場所を訪ねて来る……

「今はちょっと席を外されてるのよ♪どうしたの？」

「えへへへ、家庭科の時間中に制服を汚しちゃって、代えの制服を貸して欲しくて」

と、恥ずかしそうに私に話しかけてくる。今の私は制服に着替えているので、ここの生徒と思われるみたいで警戒は一切されていない。

「ちょっと待ってね。サイズはSで良いかな？」

「すみません」

隔離した津村を発見されと拙いので、鹿目まどかにはさっさと出て行って貰うべく、行動せねばなるまい。

先程、箆笥を漁った甲斐も有って、直ぐに目的のサイズのブラウスを見つけて鹿目まどかに手渡す。

「あっ、ありがとうございます」

「どう致しまして♪あっ、私は向こうを向いておくから、着替え終わったら言ってね♪」

まあ、私が向こうを見ても、魂之眼球でしっかりと見るけどね♪まさかの私が魔法少女だと云う事を露も知らず、ブラウスを脱ぎカッターとスカートと云うラフな格好になる。

しかし、考えてみれば、汚れて脱ぐのはブラウスだけだから、私が反対を向く必要ってないよね♪

でも、鹿目まどかは、私が反対を向いてるのにも関わらず恥ずか

しそうに、ブラウスを脱いでいる。

世間の穢れを知らない乙女って感じで、萌えるわねえ♪

「ねえねえ、貴方の名前を教えてください？あつ、私の名前は星屑アマタって言うの♪」

「えっ？えっと、鹿目まどかって言います……」

行き成りの問い掛けにやや戸惑いつつも、返して来る。

「まどかちゃんかあ〜♪ねえねえ、まどかちゃんは自分の人生が尊いと思う？家族や友達を大切にしてる？」

「えっ!?!」

なんか、物凄い驚いたんだけど……何故だ？

「あり？ちよっと、突拍子も無かったかな？」

「違うの……ただ、ほむらちゃんと同じ事を言ったから。あつ、ほむらちゃんって私の大切な友達なの!!」

にやる程お〜♪ほむらちゃんと同じ事を言った訳ね……って、マジですかい!?!

「あつ、そうなんだあ〜♪で、答えはどうなの？」

「大切だよ。家族も友達の間も、大好きでとっても大事な人達だよ」

「にゃはあ〜、まどかちゃんは優しいね♪それを聞けて安心だよお

♪じゃあ、授業に戻る前に私から一言♪絶対に今のまどかちゃんから変わろうと思っちゃ駄目♪まどかちゃんは、ずっと今のまどかちゃんて居てね♪」

「星屑さんって、ほむらちゃんに何処か似てるね。また全く同じ事を言うんだもの」

ふむう、ここの台詞も同じ事を言うとは……誠に珍事である……

「ああ、星屑さんじゃなくてアマタちゃんって呼んでよ♪何か、名字で呼ばれるの苦手なのよ♪」

「えっとお……アマタ……ちゃん？」

まどかちゃんはどきまぎしながら、ゆっくりと私の名前を絞り出す。

「宜しい宜しい。さてさて、授業に戻りなさいな♪」

「はい。ありがとう、アマタちゃん」

私に礼を言ったまどかちゃんは保健室の外へと出た後、小走りで家庭科室へと向かう。

さてと、無事に気絶する汚物の存在に気付かなかったし、後は汚物の記憶操作をして、屋上でほむらちゃん御手製シフォンケーキを楽しみに待つとしますか♪

そして20分後、屋上にほむらちゃんが持って来てくれたシフォンケーキは……

とっても美味しかった♪

そんなこんなで1日を過ごし、教会に帰宅すると、晩御飯のカッ
プラーメンを作って食べる杏子ちゃんに、本日ほむらちゃんのシフ
オンケーキを食べた事、汚物を消毒した事を報告。

嬉しそうに語る私を呆れ顔で見つつ、私が語り終えると同時に銭
湯へ直行。そして、そのまま帰って即睡眠と、何も無い平和な時間
を過ごす。

翌日に恐ろしい真実に直面すると云う事を知らずに……

第十八話 そうだ学食に行こう（前編）（前書き）

naonaoが学食で気に入ってるメニュー

・海鮮親子丼（期間限定であった丼物。イクラと脂の乗った鮭の刺身が乗ってる＞＜）

・チキンガーリックステーキ

・坦々麺

・タコライス（夏限定）

・鯖の漬け丼

・鍋焼きうどん（冬限定）

・牛とろフレーク丼

・個数限定瓶入り特性プリン（これの為だけに、何度講義を早めに抜け出して……ゲフンゲフン……）

そういうえば、旅行する度にあっちこちの大学に侵入して（えっ…）学食を食べてるけど、色々行った結果、私立の豪華さは異常……つうか、とある大学のキャンパス内には、モスバーガーやらコンビニやらがあるじゃねえかよ！？どういう事だよっ！？

むきゃああああああああああ！！

アマタ「静かにしなさい！！」

キャン！？

バタツ……（naonaoが倒れる音）

アマタ「はい、作者の茶番終了。本編始まりま〜す♪」

※現在執筆状況4月13日までセット完了※

訂正内容

感想で、アマタが眼が見えない故に字が読めないのではないのかと云う事に気付かされたので、メニューを文字でなく写真（絵）に変更しました。

これだったら、漢字が読めなくても大丈夫ですので＞＜

第十八話 そうだ学食に行こう（前編）

さてさて、朝起きてみると、本来なら横に居る筈の杏子ちゃんの姿は既に無かった。

何処かに食料を探しに出掛けたのだろうか？

だけど、テーブルの上には紙に包まれたハンバーガーが山盛りに積んであり、置き手紙が一緒に置いてある。

眠気眼を擦りつつ、重い体をゆっくりと起こして、置き手紙に目を通す。

置き手紙には、『朝飯、昼飯、夜飯だ』とだけ……てか、3食ハンバーガーって私をメタボリックシンドロームにする気ですかい？最近ほぽっちゃり系の女子が平安時代並みにホテルとか聞くけど、私をぽっちゃり系にする気ですかい！？

つうか、朝から晩までパートナーを放ったらかしにして何処に行く気ですかい！！

そんな事されると、寂しさのあまりに、部屋の隅に置いてある杏子ちゃんの下着の入ったバッグの中身の探索をしたくなっちゃうじゃない……

ゲフンゲフン、うん最近誤魔化しの空咳が多い気がするなあ……

まあ、話を戻しまして、実は昨日は私が杏子ちゃんを放ったらかしにしたから、今日はその仕返しかな？

とか思っ普通の人間なら我慢するかもしれないが、私は我儘だから違うのだ♪

「にやははは、杏子ちゃんを捜すと思いますかい！！」

てな訳で、杏子ちゃんのストーキングを執行する事にした♪

勿論、取る手段は先日の学校探索と全く同じ方法で、複数の魂之眼球により見滝原市上空より偵察である。

私の能力の前には1分もあれば簡単に発見され、自分が何をしてるかが私に把握される。

さて、杏子ちゃんは何をしてるかと言いますと……ビルの屋上の上より、見滝原中学校にて授業を受ける1人の少女の観察。

当然、その少女とは授業を真面目に受ける話題の渦中の鹿目ほか……じゃなくて、美樹さやか？

ほむらちゃんから手を出さなって言われてるけど、どういうつもりだろう？

もしかして、ほむらちゃんに見つからない様に殺っちゃうのかなあ？

闇雲に美樹さやかに手を出すのは拙いと思うんだけどなあ……

しょうがない、美樹さやかをストーキングする杏子ちゃんをストーキングする事にしようか♪

今回は杏子ちゃんには魂之眼球の認識をされないようにする為に、視認可能対象より外す事にする。

杏子ちゃんは一切動きを見せない、唯一の行動は、傍に置いた大量の林檎が入った紙袋から、林檎を取り出しては食べるの繰り返し。30分経過しても1時間経過しても動きは一切見せない……動きの見せない杏子ちゃんの観察も、飽きて来たので……

「よっしゃあ！！私も潜入するかいっ！！学校の中に♪」

意気込みの言葉を露わにし、私が行動する事にした♪

実は、昨日の見滝原中学校潜入の際に、うっかり借り物を返さずに帰ってしまいましたので……

まだ、制服が手元に有りますぜい♪

と、スクリーンの向こうの见えない誰かに見せびらかすかの様に、おもむろに取り出してみる♪

いやあ〜♪私も返そうとは思ってたんだよ♪

ただ、昨日は色々問題起こしてるから、返すのが難しかったただけだよ♪

えっ？屋上でほむらちゃん手製のシフォンケーキ食べて午後ティー飲んでた人間が何言ってやがるって？

うっさいわよ！！初めての制服でテンションあがって、制服を返すのがちよつと惜しくなったただけだから……

さあて、素早く着替えて私も出掛けるとするわよ♪

勢い良く服を脱ぎ捨て、素早く制服を身に纏う。当然、アニメや漫画で有り勝ちな視聴者サービス何て物は無いし、サービスをするきは毛も無いわよ♪

そして、見滝原中学校の制服に着替え終わった私は、教会を飛び出した。

〜少女疾走中により、暫くBGMとして『妄想戦士 宮前かなこ』をy●u●t●u●b●eやニコ動画等で聞きながら御待ち下さい b
y作者より〜

はいつ、到着う〜♪

別に『曲がり角で運命の出会いごつつんこ♪』なんて事も一切無く、見滝原中学校の裏口に廻り込む。

何故正面から堂々と乗り込まないのかと云うと、正面からだどビルの屋上より美樹さやかを観察している杏子ちゃんに気付かれてしまうからだ。

裏口より中にどうとうと侵入し、学校中に魂之眼球をばら撒いて、教室外の人間の位置情報を細かに把握する。

現時点では、特に人間は見当たらないので、どうとうと歩き回る事にしよう♪

あつ、そういえば時間的に、後5分くらいで4時間目も終わって昼休みじゃないかなあ？

この学校は中学校の癖に学食を持つ珍しい学校みたいだし、いっその事学食に混ざってみようかな？

どうせ、学校中の生徒が一斉に押しかける学食なら、制服さえ着ていれば部外者が紛れ込んでもバレないしね♪

よしい♪授業が終わるまではメニューの閲覧と行きますかい♪

学食付近に配置された魂之眼球を移動させ、学食のメニューが見れる位置へ。

脳裏に映る何十ものヴィジョンの内の一つに、次々と美味しそうな料理の写真が映り始める。

うどん、ラーメン、蕎麦等の麺類を始め、麦御飯、炊き込み御飯類、カレー、丼物各種と御飯物も充実しており、惣菜も定番もののハンバーグや名古屋県民なら誰もが愛するエビフリヤアやミソカツ、チキンステーキ、若鳥の唐揚げ、挙句の果てにはフグの唐揚げやクジラカツ、焼き鳥と意味も無いくらいに幅広く手を出している。無論、デザートも同レベル……ていうか、この学校何なの……

大学の学食でも、こんなにメニューが揃って無いわよ……

いやあ、しかし、写真で助かったわ……眼が見えるようになったのが14歳の誕生日故に、まだ1年も経ってないし、学校も行っていない所為で、点字とひらがなとカタカナは読めるけど、漢字とローマ字が未だに読めないのよねえ……

まあ、良いわ♪今日は指を咥える訳ではなく、料理を食べれるのだから素直に喜びましょう♪

先ずは、デザートは欠かせないわよねえ♪ヨーグルトババロアにブルーベリーソースが掛かった奴にしよう♪後は、麺類より月見うどん大盛りで決まりね♪

でも、月見うどんの卵が、御汁と混ざるのが実は苦手なのよねえ。じゃあ、何故月見うどんにするのかって？

うん、そりゃあ、うどんを食べ終わった後に、あの卵をチュルンッて丸呑みして、喉越しを楽しむのが好きなのよぉ♪

むむむ、まどかちゃんのクラスが少し早めに授業終わったわね。まどかちゃんは弁当持参かぁ……ほむらちゃんはどうかかなぁ？

『へい、ほむほむ。今、見滝原中学校なう♪学食行こうよ♪』

ツイッターに書き込む様な感じで、念話を送ってみる。

『頭が痛いから保健室に行っても良い？』

『二日目かい？』

『グーで殴るわよ……』

何時の間にか眼前にほむらちゃんが出現。時を止める魔法を使って即刻来てくれたみたいだ♪

ていうか、大勢が居る所で魔法使っちゃまずいでしょ……ほむらちゃんの魔法を普通の人が見たら、その場から行き成り消えてる様にしか見えないんだから。

「にゃはあく♪学食行こうよ♪何なら、弁当持参のまどかちゃんも誘うかい？もれなく、美樹さやかとブルジョワっぽい人も付いてくると思うけど」

「結構よ……それで、本題は何？態々制服にまで着替えて、学食を食べに来てただけな訳ないでしょ？」

「いや、学食を食べに来てただけだよ？それにしても、ここの学食凄いいね♪メニューの数が壮大だよねっ♪」

「本当に貴方の考える事が、良く分からないわ……」

ますます頭痛の種が増えたのであろう、ここは私の出来る限りの優しさとバアフ●リンを合わせて、成分の99・99%は優しさで出来てる何かをそっと差し出してあげるのが、ベストチョイスだろうか？

「分かった方が凄いから安心しなさいな♪じゃあ、学食行くよぉ♪利用者増えて混雑する前にね♪」

ほむらちゃんの手をギュッと握り、学食の存在する方へと引っ張って連れて行く。

嘆息しながらも、とてとてについて来る辺りが可愛い♪えっ？手を引っ張ってるからついて来るんじゃないかって？

本当に嫌なら、そこから嫌でも動かない素振りは見せると思うので、その突っ込みを却下します♪

「所で、ほむらちゃんの学食の御勧めは何？」

矢張り、在学者の貴重な意見は欲しいわよね♪

「月見うどんよ……」

「意外ねえ♪今日の私の予定が月見うどんだったのよ♪」

「ちなみに、卵は丸呑み派よ……」

「にゃんとお！？まさかほむらちゃんもちゅるんと丸呑み派だったのかい！？」

「嘘よ……普通に掻き混ぜて食べるのが好きだわ」

ほむらちゃんの対応が、最初の頃と比べてどんどんと手慣れてきてるわねえ……

いや、コミュニケーションを取ってくれるから良い意味だけど、何か物凄くからかわれてる気が……

「私の情報を知ってるからって、そんな嫌がらせするのは酷いんじゃないかなあ？かなあ？」

「嫌がらせじゃないわ。ただ、コミュニケーションを取ってるだけよ」

「嘘だあ！！」

「それは、ネタ的に危ないわ……」

物静かに冷静な突っ込みを次々と私に浴びせるほむらちゃん。

やっぱり、ネタ的に危ない発言に関しては、ほむらちゃんでもメ
タ発言するのね。

「じゃあ、今後も私の危ない発言を防ぎたいなら、黙って学食に付
いて来るう〜♪行つくよお♪」

てな訳で、ほむらちゃんをズルズルと引っ張りながら、学食に向
かうのであった♪

第十九話 そうだ学食に行こう (後編) (前書き)

※現在執筆状況4月14日まで※

第十九話 そうだ学食に行こう（後編）

「月見うどん大盛りとババロアとエスプレッソ下さい!!」

「あいよっ!!」

注文を受けると、学食にはそぐわないエスプレッソマシンにカップをセットし、スイッチを押す。

そして、エスプレッソが出来るまでに、事前に茹でておいたうどんを器に盛り付けて、カツオ出汁の聞いた醤油スープを入れ、生卵を落とす。

その時間僅か20秒とかなりの早業である……そして、後ろに供えられた大きな冷蔵庫より、可愛いガラス皿に載せられたブルーベリーのリースの掛けられたババロアを取り出し、更に掛けられていたラップを剥ぐ。

月見うどんと一緒に、プラスチック製の緑色の長方形の御盆に載せた所で、エスプレッソもタイミング良く完成し、最後に御盆に載せられて、私の昼御飯が完成する。

メインとデザートとドリンクが見事にマッチしてないわね……まあ、それも学食の醍醐味醍醐味♪気にしてたら、やってらんないわよね♪

「ほむらちゃん、先に席取っておくね♪」

「分かったわ」

私は、御盆を受け取り、箸とスプーンを御盆に載せた後、レジの方へと向かって会計を済ませる。

月見うどん（大盛り）が280円、ババロアが80円、エスプレ

ッソが80円と累計440円也。

学食とか社員食堂とかって安くて沢山食べれて良いよね〜♪
会計を済ませた後は、日当たり良好な4人くらいが座れる席を選
択し、椅子に座る。

「御待たせ」

「あれ、ほむらちゃんも月見うどんにしたの？」

約1分後にやって来たほむらちゃんの御盆には、月見うどん（サ
イズ的に並盛かなあ？）と御冷の入ったガラスコップが乗せられて
いた。

「ええ……アマタの真似をしてみようと思って……」

「にやる〜♪そんじゃまあ、いただきます〜す♪」

「頂きます」

割り箸を二つに割って、あつつあつのうどんを掴み、音を立てて
啜る♪

学食デビューも相まって凄く美味しく感じるよお♪やっぱり、普
通の学校って良いなあ〜♪

私も普通の女の子として生まれてたら、こんな風に御友達と喋っ
て、御飯食べて過ごせたのかなあ……

「ほむらちゃんは、私の契約内容については知ってる？」

「知ってるわよ。『眼球』でしょ？」

ふむう、これを知つてると云う事は、別の時間軸でほむらちゃんと接触した私は、ほむらちゃんとそれなりに仲良くなってたって事ね。

これは、使い魔と違って、仲の良い人間以外には話さない内容だしね……

「そうそう。だから、嬉しいんだ……例え今こうして、ここに居られるのが仮初だとしても、普通の女の子として過ごせる事が凄く嬉しいんだ……こうやって、制服を着て、ほむらちゃんと話して、御飯食べて……ほむらちゃんは、学食を食べに來ただけと聞いても、私の考えてる事が良く分からないって思うかもしれないけど、私にとっては凄く幸せな事なんだ♪」

「そう……ごめんな——」

「にやははは、謝らないでよ♪寧ろ、ほむらちゃんの御蔭で、こうして友達と楽しく学校で食事が叶ってる訳だし♪寧ろ、付き会わせて御免ね♪」

「いいえ、私もアマタと居るのは楽しいから、気にしないで」

「ありがとう♪そう言ってくれると、嬉しいな♪あつ、そうそう、昨日にまどかちゃんと接触したんだけど、私が言った言葉が、ほむらちゃんの発言と全く一緒だったらしいのよお」

「らしいわね。昨日、まどかが家庭科の授業が終わった後に、教えてくれたわ。アマタの事に関しては、一切話して無いわよ」

うむう、うどんが美味しい美味しい。麺もしっかりコシが有るし♪
ていうか、別にまどかちゃんに、私の事を話しても構わないんだ

けどねえ〜♪

あつ、でも、まどかちゃんなら確実に美樹さやかに話すと思うから、色々ややこしくなりそうだねあ……深く考えてみると、寧ろその行為が正しいのかあ……

「そうなんだ。ところでさあ、ワルプルギスの夜が襲撃するまでに、あと何体魔女が来るか分かる？」

「残念だけど正確な数は分からないわ。だけど、影の魔女と委員長
の魔女が出るのは確かよ。委員長の魔女は下手をすれば、もう見滝
原市に來ている可能性が有るわ」

正確な数が分からないと云う事は、毎回変動しているってことかな？

思い浮かぶ原因としては、この見滝原市に居る魔法少女が魔女になると云う事象かしら？ いやいや、深読みのし過ぎね……

「ふう〜ん、委員長の魔女ねえ？ 潜伏先が分かるなら、私が始末して来るよ？ 美樹さやかに戦闘はさせたくないでしょ？」

「残念ながら、そこまでは分からないわ。魔女も移動をするから……」

「ですよねえ……位置が分かれば苦労はしないわよねえ……しようがない、昼御飯食べた後に、地道に探して始末すると思いますかい……」

「平日の日中は学校が有って動けないから、助かるわ。委員長の魔女は、威力の低い広範囲への攻撃が多いから、アマタの能力との相性は非常に良いから楽勝だと思うわ」

確かに、魂之眼球の前に、広範囲絨毯爆撃系の攻撃は意味無いからねえ♪

「そんじゃあ、ちっと片付けてきますかい♪」

一気に残りの麺を啜り、スープの上にぷかりとたゆたう御月様をちゅるりと飲み込む。

喉を通る、プニプニとした触感がたまらないわねえ♪

次いで、ババロアを二口で食べて、エスプレッソを一気飲みする。
うげえ……エスプレッソ苦あ……

「それじゃ、ほむらちゃんまたねえ♪ちよいつと、委員長の魔女を駆除して来るよ♪」

「もうちよつと、落ち着いてから行けばいいのに？」

「善は急げってね♪それに、もう委員長の魔女の居場所を見つけたから♪」

委員長の魔女が見滝原市に来てるかもと云う情報が入り次第に、校舎内及び、見滝原市上空に設置した魂之眼球を既に探索用に回して居り、余程学校が好きなのだろうが見滝原高校敷地内のゴミ焼却炉付近に結界を作っているのを発見。

場所が場所だけに、急いで駆除に行かないと、犠牲者が出る可能性が有る。もしかしたら、何日か前から居た可能性もあるので、下手すれば既に出ている可能性もある。

て云うか、杏子ちゃん探す時にはこんな結界は無かったから、あの短時間の間に沸いたのかなあ？

「そう、アマタの索敵能力は流石ね……」

「まあ、その代わりに、私には皆程の戦闘能力がないからね♪」

「何を言ってるの？貴方程の力が有れば十分だと思うわよ？元々、見滝原市に集まった魔法少女のレベルが、美樹さやかを除いて異常なだけよ……だから、そんなに自分を卑下しないで……」

「そうかなあ、ちよつと元気が出て来たよ♪じゃあねえ、ほむらちやん♪」

私は御盆を持って返却口に返却し、そのまま学校の裏口より外へと急いで出る。

そして、委員長の魔女が居る結界が存在する見滝原高校へと向かう。向かいつつ、その間に結界内の探索をしっかりと行わせる。

結界内には、地面と云う物が存在せず、様々な種類のセーラー服が吊るされたロープが無数に張られており、それが地面の代わりの足場として存在する。

そのロープを伝って移動する、巨大な制服より6本の手を生やした魔女の姿。そして、スカートより脚が生えている下半身だけの使い魔。足には普通の靴ではなく、切れ味抜群のスケート靴を履いている。

使い魔の数は魚の魔女や猟犬の魔女と比べると少ないが、足場が悪いのがボトルネックとなる。

幾ら認識が出来ても、この足場の悪さでは、避けれるかどうかは分からない。オマケに、魂之眼球の一つを自由落下させてみるが、一向に地面に着く気配を見せない。

恐らく、落ちたら一貫の終わりであろう……

さあ、て、敵情視察も完了しましたし、結界の目の前まで移動したし……

いざ、戦闘と行きますかい♪

私は委員長の魔女の結界の中に飛び込んだ……

第二十話 委員長の魔女(前書き)

漸くアマタの夢の犬の顔の執事の伏線回収です。

Aチャンネルのトオルが可愛過ぎて、漫画を買う事を決意><
これで、本棚に漫画タイムズきららの漫画がまた増えるな(汗)
4コマ漫画しか最近買ってない気がする……あつ、そういえば、今
月は生徒会役員共の最新刊発売だ……

●新春アパートのポストに入って困った物

?ピザ屋のチラシ(同じのが3枚も……)

?光熱費の振り込み用紙(新春早々見たくもない……それでなくとも、参考書で出費が激しいのに……)

?女性限定の怪しい高額バイト冊子(自分は男だ……)

?宗教関連のチラシ(神を信じない者は愚かであると、チラシに堂々と書くのはどうかと……)

?怪しい薬品の通販のチラシ(必要ないので、御引き取りお願いします)

●逆に嬉しい物

?タクシー会社や眼鏡屋のチラシ(ポケットティッシュ付きだから許す)

?酒屋のチラシ(ふむふむ、試飲会を開くとな♪)

※執筆状況 4月14日分まで※

第二十話 委員長の魔女

ワンワンと、犬はいます

ニャーニャーと、ネコはいます

ブーブーと、豚はいます

チューチューと、ネズミはいます

ホーホーと、フクロウはいます

カアカアと、カラスはいます

ガーガーと、ガチョウはいます

では魔女は、なんというのでしょうか？

「マザーグースの Bow, wow, says the dog
より一部引用」

自身の頭上に位置する魔女は、スカートより大量の椅子や机を召喚して、私目掛けて降り注いで来る。オマケの使い魔もセットで……確かにほむらちゃんの言う通り、広範囲の絨毯爆撃で有る。

本来なら得意なタイプの相手だろうけど、思ったよりも足場が悪く動き辛いので、珍しく得意な相手で苦戦しそうである。

魔女の攻撃に関しては、躲せる攻撃は躲し、避けれない攻撃は召喚した拳銃で撃ち抜く。

使い魔に関しては、足のスケート靴でロープを切られたら非常に拙い事になるので、着実に迎撃する。

どうしても、使い魔が迎撃が出来ないと判断したら、別のロープへと急いで飛び移る。着地が難しく、少しバランスを崩しそうになるが、少年コミックで有り勝ちな気合いと根性で何とかする。

先程まで足場になっていたロープは、使い魔の攻撃で簡単に切れて結界から消滅する。矢張り、やっかいな敵である……

「こりゃあ、足場に慣れるまでは防戦一方かな……何が楽勝だよ、ほむらちゃん……」

と、ちよつと毒づいて、委員長の魔女へと敵意の眼差しと銃口を向ける。

銃口を向けた刹那、直ぐ様に魔女のスカートの中より無数の机、椅子が落下して来る。

この魔女の攻撃の恐ろしい所が、私の居る大体の位置に攻撃を降り注いで来ると云う、好い加減な点が一つ。

分かりやすく例えるならば、素人とプロの拳銃チャカの扱いの違いである。

プロならばがちゃんと照準が定まってる故に、弾道も読めるので避ける事が容易い。

だが、素人の場合は拳銃を持つ事に恐れが発生し、手と腕が震えて照準が定まり難くなる。故に、弾道を読む事が非常に難しい。

オマケに、例えハズレたとしても、予測もしない軌跡を描く跳弾を起こす可能性もある。

この魔女が落として来る大量の机や椅子は将にそれに値する。

好い加減故に、隣のロープ等に当たって軌道を変えて、こちらに飛んでくる恐れも有る。

まあ、唯一の救いは、足場ロープを切断する使い魔は、ちゃんと正確に私に向かって来ると云う事かしら？

使い魔までランダムに落下してきたら、戦闘どころか足場を気にするだけで精一杯になっちゃうよ……

休む暇も与えずに次々と私を狙って落下して来る、机や椅子や使

い魔やら……

「ああ！！もうっ！！何なのさあ、アンタは！！」

「魔女に決まってるじゃないか？」

返事がないのは分かってるが、叫ばないとやってられないので叫ぶ。

本来なら返事はない筈だが、何時の間にか結界内にやって来て、ロープの上に呑気に座っているキュウベえが返して来る。

「何っ？何しに来たの？」

「アマタを助けに来たんだよ」

「何い？アンタが私の代わりに戦ってくれるの？アンタじゃ、攻撃一発分の盾にしかないでしょ？」

「違う違う。アマタ以外の使い魔を召喚出来る魔法少女の事を調べていたら。面白い事が分かったんだ」

「手短に言って頂戴！！こっちも防ぐので手一杯で大変なのよ！！」

叫び返す間も迫って来る攻撃に、銃弾を叩き込み、時には回し蹴りを入れたりして防ぐ。

戦隊ヒーロー物と違って、実際の敵は話してる間でも容赦なく攻撃は叩き込んで来るので、悠長に会話する余裕なんぞ無い。

「うん、使い魔の容姿や能力に関しては、その魔法少女の想いが形になった物であり、1人に付き1体って決まりは無いんだよ。だから

ら、イメージして、新しい使い魔を生み出してみたらどうか？」

成程……鳥以外の使い魔を召喚する事が可能であるって事ね……
ふむう、新しい使い魔って言っても、どんなのにしようかしらね
え……

「ほら、魔女の結界や使い魔だって、その魔女の思い出が形になった物だろ？」

でも、そう簡単に言うけど、私の想いつて何だろう？

だって、現時点で召喚してる使い魔が鳥だよ？

私の想いと、どう関係するんだろう……

「でも、キュウベえ。鳥の使い魔と、私の想いがどう関係するの？」

「鳥の口に何を咥えてるか良く考えて御覧？」

鳥の口？

ああ……そう云う事か……眼球ねえ……私の想いは眼球に関係する事なんだ……

世界を見たいと云う事に、生まれながら執着し続けた故に、与えられた使い魔かあ……

今迄、何気なくに使ってた使い魔だけど、実はそんな深い意味が有ったのかと認識させられる。

でも、何故鳥なの？他の鳥でもいい気がするけど……

「で、イメージを思い浮かべた後に、どうやったら召喚できるの！
！」

イメージとして真っ先に浮かんだのが、夢の中に居た犬の執事。

夢の中に烏の使い魔と一緒に出て来たと云う事は、きっと私の想いに関係する使い魔なのだろう。

「さあ？僕には分からないよ。じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ」

だけど、その肝心な召喚方法を知らなかったら意味ないでしょ！！

「役に立たないわね……つうか、伝える情報がそれだけなら二度と来るな！！」

ロープに吊るされている制服を千切って丸め、一人逃走を開始したキュウベえへと投げつける。

が、丸めてても、空中で開き、空気抵抗の影響を受けて、キュウベえと当たる前に落下して、下へ下へと落ちて行く。

ちなみに追記だが、最初に落下させた眼球は未だに地面に着く様子がない……

こんちきしょお、召喚の仕方が分かんないなら……

普通にブチノメスダケヨ！！ヤッテヤルデス！！

空から私目掛けて降って来た机を掴み、魔女へと投げ返すが……残念なことに、魔女が居る高度まで届かず落下……

ううーん……これが杏子ちゃんだったら、簡単に届いたのかもしれないけど、私には無理みたいね……

おっと、そんなこんな考えてると、攻撃の餌食になっちゃう！！

拳銃を引き抜いて、使い魔目掛けて狙撃を開始。

使い魔の数を有る程度減らして、一気にティロファイナレで決めると云う何時もと変わらない戦法。

時間が掛かり、精神面にも肉体面にも厳しいが、結局はこれが一

番有効な手立てなので、諦めて実行。

何度も攻撃を避け、撃ち殺すの繰り返しをし、有る程度数を減らしたのと、両手に持っている拳銃の弾が切れた事を気に、手に持つ拳銃を投げ捨て、今度は両手にマスケット銃を召喚する。

マスケット銃と拳銃を使い分けてる理由だが、マスケット銃は拳銃と比べて威力が高いが単発式である。対する拳銃は威力が低い物の、カートリッジの中に弾が複数入っているので弱い敵を一掃するのには便利。

つまり、この場で、私がマスケット銃を使うと云う理由即ちそれは……勝負を決めに行くと言う事である。

足場がないこのステージでは、地面への大量召喚によって単発式の欠点を補う事が出来ないのです、的確に攻撃をせねばならない。

「何か知らないけど、手古摺らせてくれるねえ……だけど、これで終わりよ、委員長さんよお!!」

一気にロープを駆け登り、魔女の方へと向かう。

使い魔の数は既に殆ど居らず、上空より降り注ぐ机や椅子にさえ気を付けていれば、問題は無い。

「じゃあねえ♪委員長の魔女さん♪」

マスケット銃の撃鉄を落とす。火打石が擦れ火花が発生。

それが、火薬へと着火し、銃口より弾丸が発射される。

弾丸は魔女の腕を撃ち抜き、風穴を開ける。

撃ち抜かれた痛みに、魔女はこの世の物とは思えない程に不気味な悲鳴をあげる。

そして、魔女が耐え難い痛みに叫んでる内に、私の右手が巨大なマスケツト銃と一体化する。

あつ、言っておくけど、猟犬の魔女の時みたいに馬鹿デカイ物は召喚はしていなよ♪

「それじゃあ、委員長さ〜ん♪あの世への下校時刻ですよお〜♪テイロファイナーレっ!!」

そして、格好良い決め台詞と共に、巨大なマスケツト銃より発射された砲撃によって、魔女を跡形も無く消し飛ばした♪

魔女が死んだ事により結界も消滅し、黒字でグリーンシードも手に入り、ほくほくしてる矢先、見滝原高校の目の前に設置されている跨道橋に何処かで見た事がある2名の姿が……

「ごしごしと目を擦るものの、矢張り見間違えではないようだ……
当然、嫌な予感しかないので、疲れた体には酷だが、急いで跨道橋へと向かった。

第二十一話 ソウルジェム（前書き）

原作を見て、書きたかったシーンその2が今回含まれてます♪

今更だが、ほむらちゃんの「じゃあ、貴方の仲間はどうなのかしら？」の貴方の仲間って誰だよ……

もしかして、ほむらちゃんの事なのかなあ？

それか、実は杏子ちゃんには本編に登場していない、魔法少女の友達が居るのかなあ？

かなり気になってる台詞の一つだったりする。

※執筆状況 4月16日分まで※

第二十一話 ソウルジェム

跨道橋の上、杏子ちゃんと美樹さやかが戦闘態勢につて!!おいっ!!?

ほむらちゃんの言ってた事を、覚えてますかい!!

「待って、さやかちゃん!!」

美樹さやかが魔法少女へと変身しようとする、狙ったかのようにキュウベえと一緒にやって来るまどかちゃん。

もしかして、キュウベえが何かしらの方法でこの状況を作り出したのだろうか?

取り敢えずは、跨道橋の下で状況を観察する事にする。これだけの面子が揃っているのだ、当然ほむらちゃんもやって来るだろうし……

「まどか!?!邪魔しないで!!そもそも、まどかは関係ないんだから!!」

「駄目だよ、こんなの!!絶対におかしいよ!!」

「ウザい奴にはウザい仲間が居るもんなんだねえ」

必死に美樹さやかを止めようとするまどかちゃんを見て、それを利用して美樹さやかに先に自分へ手を出させようとするべく、煽る杏子ちゃん。

「じゃあ、貴方の仲間はどうかしら?」

だが矢張り、勃発しそうになった所に、颯爽と杏子ちゃんの後ろに出現するほむらちゃん。

「ほむほむ!! そりゃあ、どういふ事さあ!!」

そして、更にその彼女の後ろに神出鬼没に出現する私♪

「アマタちゃん!?!」／「アマタっ!?!」／「また、何か増えた!?!」

本当は様子見だけの予定だったけど、ほむらちゃんの言葉に反論しようと、ついつい飛び出しちゃった♪

そして、美樹さやか……何かって何よ!?!? アマタ様を何扱いするなら、スプーンで眼球抉るよっ!!

「あははははは、こんばんは、まどかちゃん♪ほむらちゃん♪あと、蒼い髪何か♪」

「蒼い髪のかかって何よ!!」

「貴方こそ、私の事を何か扱いしたでしょ? そんな貴方を表現するのに『何か』と云う呼び方だけで十分事足りるわ」

「何、こいつ!! すっごい、ムカつく!!」

「あら奇遇ね♪私も、そう感じているのよ♪何なら、杏子ちゃんやほむらちゃんの代わりに私が相手になるわよ♪」

そう言い、チラッと首にぶら下げたソウルジェムを見せて、私が

魔法少女である事をアピールする。

「ソウルジェム！？アマタちゃんも、魔法少女なの！？」

「そうなの♪御免ねえ、まどかちゃん♪」

「アマタやキュウベえが参加すると話がややこしくなるから、アマタは黙ってて」

鹿目まどかの驚きは他所に、ほむらちゃんは話を進める。

正確には、会話より私を排斥しようと話を進める。

「そりゃあゝ無いぜ！！ほむらちゃん！！私とキュウベえが同レベルってのは！！」

「いや、四六時中居てみる……確実にキュウベえよりウザいから……」

まさかの横槍が隣で槍を持つ杏子ちゃんより入れられる。

おお、槍使いだけに横槍を入れるのも上手いとな♪

「があゝん！！杏子ちゃんまで！？美樹さやかとの戦闘する前に、既に私のガラスのハートがブロークン(broken…壊れてしまった)だよ……」

「まどか……なんなの、アイツ……」

機関銃の如く喋り続ける私が理解出来ないと、まどかちゃんに私の事を尋ねる。

「えっと、星屑アマタちゃん。私達と同じ学校に通ってる子だよ。昨日の御菓子作りの時に、御世話になったの」

「あつ、私はあ実は〜♪不法侵入してたんだよ♪理由は、学食食べたり、ほむらちゃんのシフォンケーキぐふおあ!？」

鳩尾に入れられる強烈な一撃によって、続きの言葉を発する事をキャンセルされる。

「というか……ほむらちゃん、何でそんなにパワーが有るんですかい……あれだけの能力にその身体能力は反則でしょ……」

「だから、黙ってて……」

「いや、だからって、鳩尾に拳を入れなくても……確かに、ほむらちゃんの気持ちは分かる!!愛する人間の前で——」

「黙れ……」

おお、怖い怖い♪ほむらちゃんが単語のみの命令口調で喋るのは初めて聞きやしたぜ♪

取り敢えず、私の頬を掠る様に銃弾が飛んで来たので……命の危険性を感じ、続きを言うのを止めて……

「ごめんなサイ♪」

物騒な仲間が、ぽぽぽぽ〜♪

ってな、訳で180度ベクトル変換した、私なりの素直さで謝る。

「じゃあ、手持無沙汰な私は盆踊りを踊っておくから、その内に片

づけてね……」

「佐倉杏子……アマタを取り押さえていて……」

「ほいきたっ!!」

背中に素早く回り込んで、私を取り押さえる杏子ちゃん。

ねえ、二人とも真面目な顔してるけど、実は色々と悪乗りして楽しんでない？

「待たせたわね……美樹さやか……」

ほむらちゃんが長い後ろ髪を掻き揚げ、優雅にアピールする物の

……

「いや……真面目顔で待たせたわねって言われてもねえ……」

当然突っ込みが入る。

「私が代わりに相手するわ」

「舐めるんじゃないわよ!!」

明らかにこれから戦闘を繰り広げるとは思えないほど、ふざけ切っている私達に怒りを露わにする。

そして、手の平の上にソウルジェムを乗せ、いざ変身せんとするや否や……

「さやかちゃん、御免っ!!」

美樹さやかの後ろに居た鹿目まどかが、美樹さやかのソウルジェムを奪い取り、跨道橋の上より道路に向かってピッチャー投げましたあー！！

って、ええええええええ！！

「はあっ！？」

不幸中の幸いにも、跨道橋より落下したソウルジェムは地面に落下して壊れる事も無く、トラックの荷台に乗り、何処かへと出荷される。
ドナドナ

それと、ほむらちゃん、凄く驚いた顔して、時間を止めてトラックを追いかけて行ったねえ♪
ていうか、何か、拙いのですかい？

「まどか、アンタ何て事を！？」

「だって、こうしないと！！」

まどかちゃんが何か反論しようとするや否や、美樹さやかの顔より生気が一瞬にして消え失せ、瞳孔が完全に開きまどかちゃんの方に倒れる。

えっ？瞳孔が開いてる？もしかして、これって……死んでる？

「さやかちゃん？ねえ、さやかちゃん？起きてえー！！ねえ、起きてえー！！こんなの嫌だよおー！！」

友人が突如として生命活動を止めた事に、驚き泣き叫ぶまどかちゃん。

「何がどうなってやがんだ？おいっ！？」

そして、何故美樹さやかが動かなくなったのかが理解出来ず、キ
ュウベえに威圧的に尋ねる杏子ちゃん。

「君達魔法少女が体をコントロールできるのは精々100メートル
圏内が限度だからね」

「100メートル！？何の事だ！？どういう事だ！！」

「普段は当然肌身離さず持ち歩いているんだから、こういう事故は
滅多にある事じゃないんだけど」

普段持ち歩いている？ソウルジェムの事かしら？

「何言ってるのよ、キュウベえ！！助けてよお！！さやかちゃんを
死なさないで！！」

「まどかあ、そっちはさやかじゃなくてただの抜け殻なんだって。
さやかはさつき君が投げて捨てちゃったじゃないか？」

まどかちゃんの叫び声に、どうして自分の言ってる事を理解出来
ないのかと、出来の悪い生徒に溜息をする先生の様に優しく諭し始
める。

体が抜け殻？ソウルジェムが本体……それって、もしかして……

「な、何だと……」

愕然としている杏子ちゃんも、大体を把握したのであろう。怒り
か悲しみか、何かしらの感情が高まり、体が震えている。

「ただの人間と同じ壊れやすい体のままで、魔女と戦ってくれなくて、とても御願ひ出来ないよ。君達魔法少女にとって、元の体なんというのは外付けのハードウェアでしか無いんだ。君達の本体としての魂には、魔力をより効率良く運用できる。コンパクトで安全な姿が与えられているんだ」

だが、そんな私達を見ても、キュウベえは話を止めることなく、淡々と話し続ける。

「魔法少女との契約を取り結ぶ、僕の役目はね？君達の魂を抜きとってソウルジェムに変える事なのさ」

この言葉が止めとなり、まどかちゃん精神が崩壊しかける……地面へと座り込み、虚ろな眼を開く。今迄自分が憧れた物、そして被害に友達が有った事……

色々な事が津波となって、思春期の少女のか弱い精神を襲う。

このままでは、本当に精神が壊れてしまう可能性があるので、私が急いで近寄り優しく抱きしめる。

「てめえは……何て事を……ふっざけんじゃねえ!!」

跨道橋の手摺りの上に座って淡々と解説するキュウベえに怒りを露にし、詰め寄り掴み上げる杏子ちゃん。

「それじゃあ、アタシ達ゾンビにされた様なもんじゃないか!!」

「寧ろ便利だろ？」

だが、私達の気持を踏み躪る様に、悪魔は笑う。

キュウベえは、アクマデ、私達の事をモノとしか見てないのだ……

「心臓が破れても、有りっ丈の血を抜かれても、その体は魔力で修理すれば、直ぐまた動くようになる。ソウルジェムさえ砕かれない限り、君達は無敵だよ」弱点だらけの人体よりも、余程戦いでは有利じゃないか？」

「酷いよ！！こんなあんまりだよ！！」

その言葉に私の胸に顔を埋めているまどかちゃんが、嗚咽を漏らしながら反論する。

私の服が涙で濡れ、少女の悲しみの冷たさを直に肌で感じる。

「君達は何時もうそうだね。事実をありのまま伝えようと、決まって同じ反応をする。訳が分からないよ」

手前の後出しじゃんけんの方が訳分からねえよ！！
ちゃんと、最初に話しやがれつつうの！！

「どうして人間は、そんなに魂の在り処に拘るんだい？」

冷たい言葉を次々と浴びせるキュウベえ。その度に、まどかちゃんの涙が……そして、私の心に芽吹く怒りの感情……

しょうがない、口封じの為に、奴を殺そう……

私が考えを実行しようとする、車を追いかけた所為で、かなりの体力を消費した所為か、肩で息をするほむらちゃんが、手に美樹さやかソウルジェムを持って戻って来る。

そして、復活のアイテムを美樹さやかの手の平に置いた。

「はっう！？」

美樹さやかは生き返った。

と、RPGっぽく現状解説してみる。

「何？何なの？」

そして、抜け殻状態だった時の記憶が一切無かったのか、私の胸で未だに泣いてるまどかちゃんや、全速力で駆け抜けた所為で息を切らせているほむらちゃん、安心した表情を見せる杏子ちゃんを見て、呆気にとられる美樹さやかの姿があった……

第二十一話 ソウルジェム（後書き）

書きたかったシーンは「じゃあ、貴方の仲間はどうなのかしら？」の部分でオリキャラを登場させる事だったりする。

第二十二話 信じて（前書き）

現時点の高校生より下の読者には、ネタが分からないと思うので……
嘉門達夫さんの曲でハンバーガーショップって歌があります（笑）
DQNな客と店員をネタにした歌（？）です（笑）

youtubeか何かで聞いてみてください。
取り敢えず、カオスです（笑）

※執筆状況 4月16日※

第二十二話 信じて

杏子ちゃんが今朝に「美樹さやかと話して来る」と言って、御出掛け……

夕方まで待つ物の、帰って来る様子がないので、少しずつ心配になり始める。

恐らく昨日アレ程の事が有ったから、流石に戦闘は無いと思うが、心配になって探しに行こうかと考えた矢先……ほむらちゃんより念話でラブコールが入る。

そんな訳で、現在私はハンバーガーショップに上機嫌で居る訳だ♪

「ハンバーガーショップ♪ハンバーガーショップ♪熱い戦い♪
♪でえ、ほむらちゃん、私を呼んで何だい？」

珍しくほむらちゃんに、電波な客と店員の熱い戦いが広げられると、もっぱら評判のハンバーガーショップに來いと呼びだされたのだ……

「ええ、昨日のキュウベえの予想外の行動も有ったし、貴方には私の秘密と本当の目的を話しておこうかと思ったの」

「ああ、未来から來たって奴？」

万が一他の人間や生物に聞かれると拙いので、ほむらちゃんの耳元に顔を近付け、そっと尋ねる。

「気付いてたの？」

「うん♪っていうか、ほむらちゃんの行動を見てたら、鋭い人間な

ら簡単に気付けるよ。キュウベえとの契約内容とかもね♪」

「流石ね……どうして、そこまで分かったのか詳しく教えてくれる？」

おお、私の想像がまさかの大的中だよぉ♪
やったね、アマタちゃん♪

「先ずはほむらちゃんの『時間』に関する能力だね。魔法少女の使う魔法は本人の願いによる傾向が大きい。つまり、ほむらちゃんは時間に関係する御願いをした事が、能力が分かった時点で判明する」

「ええ、そこまでは簡単に思いつくでしょうね。私の契約内容はどうしてかしら？」

ほむらちゃんが、本当に知りたいのはここからだろう。
だから、懇切丁寧に説明する事にしよう。

「時間を止める程の魔法を発動して、何故ソウルジェムの負担が少ないのが今回の鍵よ」

「ソウルジェムの負担？」

今一、何の事か理解出来ていないほむらちゃん。

どうやら、ほむらちゃん的能力を当てたのは、この時間軸の私が始めてみたいね……

私は、ほむらちゃんが奢ってくれたウーロン茶（Mサイズ）のストローを口に加え、喉の渴きを潤す。

そして、再び開口する。

「そう。私の使い魔召喚ですら、かなりの負担が掛かり穢れが発生する。なのに、時間を止めると云う大規模な魔法をあれだけ発生させておいて、ソウルジェムが大丈夫な筈がないでしょ？だから、私は考えたの……」

再びストローを咥えてウーロン茶を飲む。

「ほむらちゃん的能力は、私では想像できない強大な何かへ立ち向かう為に、与えられた物ではないかと……次に、まどかちゃんにほむらちゃんは御執心でしょ♪これより、ほむらちゃんはまどかちゃんを、何かしらの脅威から守る為に能力を手にしたと推測できる」

「でも、それだと、私の能力は時間と関係しないわよ？」

「うん、私も確かにそこで少し引っ掛かったけど……もし、ほむらちゃんが契約する時に、その強大な何かの力の前に、まどかちゃんが死んでたとしたらどうする？」

推理がかなりの中していたのであろう、ほむらちゃんが愕然とする。

「まどかちゃんが死んだ上で『まどかちゃんを守る力が欲しい』と願ったらどうなると思う？」

「素晴らしい推測力ね……でも、そんな馬鹿げた考えに、どうして確信持てるの？普通の人間なら、思いついてもあり得ないと切って捨てると思うけど？」

「にゃはあく、何言ってるの？魔法少女って存在になった時点で、普通って概念は捨ててるよ♪魔法少女って存在自体、普通じゃない

でしょ？」

「それもそうね」

私の言葉に可笑しそうに笑う。

「それで、未来の事をちよっち教えてくれない？ 私はほむらちゃんが居た時間軸ではどうなったの？」

「話すけど、今から言う事を約束できる？ 1つ目、決して他人には話さない。例え、それが佐倉杏子であっても。2つ目、決して話を聞いても取り乱したりしない」

「ええ、約束するわ」

そして……ほむらちゃんは次々と衝撃の事実を話し始める。

先ず、ほむらちゃん的能力は砂時計の中の砂の流れを止めることで、時間を止めると云う物。この能力が発動できるのは砂時計の中に砂が落ちている間だけらしい。砂時計の砂は1カ月で落ち切り、落ち切った後は時を止める事が出来なくなる。

だけど、砂が落ち切った時に限り、砂時計を逆さにして時間をきっちり1カ月戻す事が出来るらしい。また、逆さにする事で能力が再び使えるようになる……

恐らく、杏子ちゃんにワルプルギスの夜のは任せると言ったのは、ここに有るのだろう……魔法が使えない魔法少女に魔女を倒す術はないからね……

そして、ほむらちゃんの目的は最大の強敵であるワルプルギスの夜を討伐するまでの間にまどちゃんをキュウベえと契約させないと云う事。

現時点でのほむらちゃんは18回の終焉を見た存在であり、その内の7回程私が出現したらしい。

そして、毎度の如く、マミさんが死ぬや否や、ほむらちゃんの妨害を仕出かすと云う非常に迷惑極まりない存在だったと云う落ち……
まあ、要するに、ワルプルギスの夜並みに迷惑な存在だったって事だね♪

「うん、色々と御免ちゃい♪」

「気にしなくても良いわ。彼女達はアマタであって、アマタじゃない存在だから……」

「つまり、言い方を悪くすると、キュウベえで云う別個体って意味かい？」

「最悪な例え方ね……しかも、合ってるようで合っていないわ……」

「うん、そいつは残念だわ。それで、私に全てを話す理由は何？」

「アマタの能力はまどかと美樹さやかを監視する上で非常に役に立つ。そろそろ、美樹さやかは大きな山場を迎える」

恐らく、ほむらちゃんの言いたい事は……美樹さやかの生か死か……

つまり、その山場を乗り越える為に、私に手伝って欲しいと……口には出さないけど、きっとほむらちゃんは、心から美樹さやかを助けたいとは思っていないだろう……美樹さやかが死ぬと、まどかちゃんの心が壊れちゃうから……

だから、私にそれを防ぐ為に動いて欲しいと云う事なのだろう。

きつと、ほむらちゃんとしても一種の賭けなのであろう。

私に全てを話した時に、それが吉と出るか凶と出るか……下手をすれば、別の次元で体験した事象……つまり、魔法少女の精神の崩壊による心中を図られる可能性もある。

「成程ね。分かったわ。私の力でまどちゃんと美樹さやかを監視すれば良いのね？」

「悪いわね……」

そう謝る様に言って、私のトレーの上にグリーンシードを3つ置く。

「これは、どういう事かな？」

「報酬よ。まどかと美樹さやかを見張る代わりの」

あつ、ちよつと脳の血管切れそうになった……

「ほむらちゃんさあ……ちよつと、怒って良い？」

「どういう事？」

私の言葉が今一理解出来ないのかキョトンと驚き顔。

「私達は友達でしょ？だから、こんなの要らない。何度も言うけど、私はほむらちゃんの味方であり友達だよ。だから、好きだけ甘えて、頼ってよ。その代わり、約束して……絶対に夢を諦めないで……」

そう言って、私はトレーの上に置かれたグリーンフィードをほむらちゃんのトレーに押し返す。

「ほむらちゃんは、何でも自分一人で解決しようとしてるでしょ？確かに、最初の頃は皆で解決しようと動いてたみたいけど、やっぱり、何処か皆に心を開き切れてなかったんじゃないかなあ？だからさ、私だけでも良いから、心を開いて頼ってよ♪」

一瞬、顔が怒りに溢れる。きっと、何も分からない癖にと思っ
ているであろう。

だけど、私は続ける……

「だってさあ……ほむらちゃんとまどかちゃんが約束した時って、まどかちゃんに全てを話して、一番心を開いた時でしょ？」

その言葉にほむらちゃんの顔が変わる。どうやら、表情変化より
当たりの様である。

「今、私がこうやってほむらちゃんを信用して、手伝おうとするの
は、何でか知ってる？」

「分からないわ……」

「ほむらちゃんが、私の事をちゃんと名前で呼んでくれるからだよ。
ほむらちゃんが私の名前を呼んでくれる限り、私はほむらちゃんを
信じるし助ける。だから……」

言葉を区切る。そして、笑顔で……

「私を信じて♪友達でしょ♪」

幕間　く黒色ノ眼球の詩くカンジョウヲワスレくく（前書き）

ちよつと謝罪……

今日執筆分が間に合わなかったので、本来は終盤で公開予定の詩を持ってきました（汗）

いやぁ、毎日投稿だけは守りたかったので（汗）

スミマセンが、今日はこれで勘弁（＞＜；）

初めて、高機能執筆フォームを使いましたが、何これ凄い……（汗）
これからは、携帯で執筆してメールで転送した文章は、メモ帳ではなく、これで編集する事にしよう＞＜

※執筆状況（一一一）※

幕間　く黒色ノ眼球の詩くカンジョウヲワスレくく

真っ暗な闇の中……

少女は駆ける翔る……トモダチ眼球を探して……

黄色い眼球……転がる、転がる……

小さな魔法少女さん

片方の眼をなくしたの

どうしたらいいかしら

もう片方に合う眼を

見つけてきたらいいのよ

そうすれば二つそろろうから

どうして、どうして消えちゃったの？

黄色い眼球は、どうして消えちゃったの？

代わりの赤い眼球はどうかしら？

要りません

じゃあ、蒼い眼球は？

もっと、要りません

じゃあじゃあ、桃色の眼球は？

絶対に要りません

それじゃあ、私の黒色の眼球は？

もう遅い、私は新しい眼球を見つけたの

ソレハ……絶望……

これが私の新しい眼球

世界の破滅を見る事が出来る眼球なの

「ごめんなさい……」

黒色の眼球は新しい眼球に謝る

そして、新しい眼球は失明した……

黒色の眼球は小さな涙を零しました

「次は綺麗な眼球を見つけてあげるからねと言って」

優しい黒い眼球は小さな小さな涙を零しました

でも、次第に黒い眼球は泣く事に疲れてきました

常に絶望に晒され、裏切られ、馬鹿にされ、誰にも信じて貰えず

……

そして、次第には涙を忘れ始めました……

感動の涙、喜びの涙、笑いの涙……様々な涙を……

ただ、悲しさの涙を除いて……

月曜日に生まれた
火曜日に憧れた
水曜日に洗礼を受けた
木曜日に約束をした
金曜日に絶望した
土曜日に笑いを忘れた
日曜日に泣けなくなった
黒い眼球は一巻の終わり

〽マザーグースのLittle Betty BlueとSolomon Grundyより一部引用〽

幕間　く黒色ノ眼球の詩くカンジョウヲワスレくく（後書き）

僕と契約して、まどか二次創作作者になってよ> m（? ? ? ? ? ? m）
（m）m。。。。カサカサカサカサ

後書きと云う名の愚痴

まどかの二次創作書く人が中々増えない……

ISはあんなに多いのに……

まあ、なのはの時みたいに、何時かは増える事を祈ろう……

第二十三話 敵か味方か（前書き）

昨日は友人とちよっとお出かけしてました♪↑昨日の投稿がアレになった理由

いやぁ、遂にシリコン鍋買ったぁ♪電子レンジで簡単に蒸し料理が作れるアレですね♪

早速、今晚は蒸し餃子を作って感嘆の声を♪

第二十三話 敵か味方か

その後は、今後の対策に関しての話をし、ほむらちゃんと別れる。今回手に入った情報はかなり大きい、魔法少女をキュウベえが生み出す目的を始め、ソウルジェムの意味、ほむらちゃんの目的、鹿目まどかの存在意義。

事の全貌がクリアになる事で、また新しく見えてくる事も増えて来る。そして、私の立ち回りの方法も……

最初の課題は、美樹さやか魔法化を防ぐ事である。

私の能力で、ほむらちゃんが見張れる学校に居る時間を除いた時間の間、まどかちゃんと美樹さやかを見張り続ける。

美樹さやか魔法化する可能性が高いのは、上条との恋愛沙汰らしい。

ブルジョワが、美樹さやかに上条の事が好きと告白するらしいのだが、そこから流れが一気に終焉と向かうらしい。

なので、私はブルジョワが美樹さやかに告白するのを発見次第伝える様に頼まれている。

しかし、上条ねえ。相変わらずフラグを乱立させると好評のある名前だけど、まさか現実には乱立させるとは思いもよらなかったよ。

こいつの取り合いで昼ドラ展開が発生して、美樹さやか魔法化ねえ……それにしても、上条の為に人間捨てたのに、報われないわねえ……

今晚でも襲撃を掛けて、美樹さやかに告白するように動かそうかしら？ そうしたら、美樹さやかもハッピーで魔法化せずに済むんじゃないかなあ？

でも、襲撃して、「アンタは美樹さやかと付き合いな」とか言っ

ても、逆に怪しさ全開だよね……

じゃあ、事故に見せかけてブルジョワを目も当てられない顔にするか？

この頃流行りの挟り魔よく♪眼球を挟る挟り魔よく♪こつちを向いてよ被害者♪だってなんだか、だってだってなんだもん♪こんなキャッチフレーズの犯罪者を産み出して、ブルジョワの方の眼球を挟り取っちゃえば、良いんじゃない？

そうすれば、上条っていう男に告白なんてする気にもならないでしょうね♪

まあ、流石に私の良心の呵責が耐えれないから、無理だなあ。それに、美樹さやかはどっちかと云うと、ムカつく存在だしね♪

美樹さやか of 魔女化を防ぐのは、まどかちゃんとほむらちゃんの為であって、美樹さやかの為ではないのだよ♪

私の事を名前ではなく、何かで呼ぶ存在は、魔女と同様に敵だらね……

敵には名前は要らない。敵には敵と云う代名詞が存在していれば十分なのだ……

だからこそ、私の名前を呼んでくれる人は……味方なのだ……

あつ、何で名前を呼んでくれる人は、味方と判別するか分かる？私がキュウベえと契約して眼球が手に入った後に、近所から石とか投げ込まれた時に近所の人間は言ったんだ……

「この悪魔が」、「この化け物が」、「人殺し」、「鬼」と、決して私の事は名前で呼ばず、罵声を飛ばした……

だから、私は気付けばその日から、私を名前で呼ばない人間を全員敵と見なし始めたのだ……

おっと、雰囲気を明るいい物に戻しましょうか♪
そろそろ、杏子ちゃんも帰って来てそうだし、日も暮れましたし、教会に帰るとしましょうかな♪

教会へ帰る道中の並木道、先も話題に上がった超新星問題児の蒼い彗星こと、美樹さやかが歩いて来るではないか？

この並木道の先には、杏子ちゃんの教会しかないのです、確実に先まで教会で一緒に何かをしていたと云う事になる……
気になるから、聞いてみるとしますかい♪

「ちょいとなあ、美樹さやかさんや♪」

「アンタ、昨日の!？」

私の姿を見るや否や、臨戦態勢を取ろうとする。
流石に、昨日の私の発言もあったか、かなり警戒している。

「アンタって何さあ？私の名前は星屑アマタって言うの。まあ、どつちかと云うと美樹さやかさんの味方よ」

正確には、貴方以外の魔法少女の味方何ただけどね♪
そのついでで、貴方を助るんだけどねえ♪そう、オマケよ♪
だから、貴方がこれ以上私の事をアンタ呼ばわりするなら、ポケットに入ってるスプーンで眼球抉るよ♪

「さやかで良いよ。その代わり、私もアンタの事アマタって呼ばせて貰うから」

「にゃはあく、命拾いしたね♪宜しくねえ、さやかちゃん♪」

「よ、宜しくね」

命拾いの意味が理解できてないさやかちゃんは、首を傾げつつも言葉を返してくる。

まあ、知らぬが仏って奴だから、一生首を傾げてな♪

「それで、聞きたいんだけど、杏子ちゃんと何を話してたの？」

「アイツとは……別に大したことは話してないわ……」

うゝむ、何か言い辛い事を話したのかなあ？

それか、私を信用できないから話さないのか？まあ、杏子ちゃんに聞けば済む事ね♪

「そっか。ねえ、聞くけど……さやかちゃんは、この世界が面白い？」

「行き成り何よ！？楽しい訳無いでしょ！！こんな体にされたんだから……」

「ふう〜ん……でも、愛しの上条君を治して貰ったんだから、諦めたら？私は、こんな姿でもすっごく楽しいよ♪だって、世界が見れるから♪」

「何が言いたいのよ？」

「内緒♪じゃあねえ〜♪」

「ちょっと、アンタ待ちなさいよ！！」

後ろでキャンキャンと吠えているが、無視。

うーん、どうもコイツは苦手だ……というか、一番ムカつくタイプね……

結局最後には、アンタに戻ってるし……この場で眼球を抉り取ってやろうかしら？

それで動けなくした後に、何処かに幽閉して……

「私の事をまたアンタって言ったでしょ？」

気付けば、ポケットのスプーンを取り出して、握り締め、動いていた……

素早く敵の眼球目掛けて振り降ろしたスプーン。スプーンの掬う部分の先端をコイツの眼球すれすれで寸止めする……

「ひっ!？」

眼前に突き付けられたスプーンに恐れなし、悲鳴。

「言っとくけどね……私を怒らせると……眼球を抉るよ? 私は貴方が死ぬとまどかちゃんと、死んだママさんが悲しむから、貴方を守る為に動く事にしたの……」

「ちょっと、アン……アマタ!! ママさんがってどういう事よ!？」

今、アンタって言いそうになったけど、言い直したから寛大な精神でセーフにしてあげよう。

「ママさんは自分の影響を受けて魔法少女になった人間に、無駄死にされたりしたら浮かばれないでしょ？」

「無駄死について何よ!!それに、何でマミさんの事を知ってるの!」

「私はまどかちゃんやさやかちゃん同様に、マミさんに魔女から助けられてるのよ。魔法少女になったばかりの時にね……これ以上は、悪いけどさやかちゃんには話せないわ。でも、一言言っておくけど……決して、この世界を恨まないで……」

「それって、どう言う事よ!!」

理解が出来ず、ずっと叫び続ける美樹さやか。

だけど、決して私は彼女の方を向く事は無く、教会へと歩みを進める。

まあ、顔は彼女の方には向けないけど、魂之眼球で後ろは見てるんだけどね♪

あっ、そうだ♪ここで出会ったが100年目だから、美樹さやかに魂之眼球を付けておこう♪

新たに召喚した魂之眼球の一つを、操作し、美樹さやかの鞆へと忍ばせる。こうする事で、操作しなくとも、彼女の家まで持って帰ってくれるからねえ♪

暫く経つと、叫ぶ事に疲れたのか、プンスカ怒って帰る。

うーん、ここで殴りかかって来てくれたら、面白い展開になりそうだったのに……

さてと、無事に忍ばせた事だし、取り敢えずほむらちゃんに御一報しておこうかな♪

『ほむほむ、美樹さやかの鞆に魂之眼球を忍ばせたから、これで監視の方は大丈夫よ♪』

ミッションクリアの報告を入れる為、ほむらちゃんに念話を繋げる。

『ありがとう。まどかの方は？』

『ああ、住所教えてくれる？今から、自宅に送るから♪』

『ええ、見滝原市<ピーーーーー>よ』

個人情報保護の関係で音声を入れさせて貰いました。

ここで、個人情報を紹介しちゃうと、「僕と契約して役所に婚約届を出しに行こうよ」と、まどちゃん好きの人間達が自宅に押し掛ける危険性があるからね♪

『あいあい、じゃあ、今からユーパックで発送するね♪』

届いても、中には何も入ってませんよ？

理由は、魂之眼球が入っても、私が見せようと思う人間以外は見れないから♪

『普通に送りなさいよ……』

『にやはは、ジョークに決まってるじゃん♪普通に飛ばすよ♪美樹さやか何だけど、良いアイディアが思い浮かんだんだけど、聞いた？』

『結構よ。どうせ、美樹さやかのソウルジェムを奪い取った後に、眼球を抉って拉致監禁とでも言う気でしょ？』

『正解正解大せうかい♪クイズに見事正解されたほむらちゃんに

は、J A L (J e a l o u s A m a t a t y a n ' s L o v e ..
嫉妬深いアマタちゃんの愛) で楽しむ2週間の旅をプレゼントです♪

『結構だわ。ボツシュートして頂戴』

流石はほむらちゃん、見事にスルーしたね……

『つれないねえ〜♪じゃあ、今晚にでもまどかちゃんの自宅に魂之
眼球を飛ばしておくから。まどかちゃんが何か行動を見せたら、即
刻連絡するね♪』

『御願いいね。じゃあ、悪いけど念話をそろそろ切るわね……今、魔
女の結界の中なの』

『ありゃっ!?! 魔女ですかい?』

『ええ、ハンバーガーショップから帰る途中に、運悪く鳥籠の魔女
の結界を見つけたからね』

鳥籠の魔女? なんだい、影の魔女じゃないのかあ……

まあ、別にどの魔女が来ようと、グリーンシードを落とすカモだ
から関係ないか♪

寧ろ、多い方が、沢山グリーンシードも手に入ってハッピーよね♪

『なるなる。じゃあ、頑張ってね♪』

『分かったわ』

そう言って、切断される念話と本日投稿文の御話♪

第二十四話 急転直下（前書き）

暫く休んで、まどか☆マジカのアニメを見直しました。

そして、当然その期間執筆活動放棄するという事態＞＜

さて、今回の最終話一挙放送を見た結果、今後の展開にかなりの修正を加える事にしました。

ちなみに、最終回を25日に見る人もいますので、それまでは出来る限りネタバレさせない方向で行きます。

感想の方も出来れば、ネタバレネタは25日までは我慢して下さいね＞＜

メッセージでしたら勿論ネタバレOKですので♪

では、5月以内に完結目指して再開するとしますか♪

訂正

完全に眠気眼を擦って執筆したので、色々と問題起こしてた（汗）なので、訂正を結構入れます＞＜

第二十四話 急転直下

「杏子ちゃんただいまあゝ♪」

と、教会に入るや否や杏子ちゃんに向けて大声で叫ぶ。

だが、何か怒りで歯ぎしりしている杏子ちゃんは反応してくれず……

うむう、やっぱり美樹さやかと何か意見の食い違いでもあったのかなあ？

「あんの馬鹿野郎……なんで、アタシの言ってる事がわかんねえんだよ……」

と、呪詛の如く言い、林檎の芯を教会の床へと投げ捨てる。

ああゝあ、こんなに地面にゴミを散らかしてえ……後片付けが大変になるなあ……

杏子ちゃんの付近には林檎の芯が散乱している。ていうか、あの体の何処にそんなに林檎が入るんだい？

私が後片付けを気にする理由は、杏子ちゃんが適当なので、住んでる場所は放っておくとゴミ屋敷へと化すので、綺麗な私がキチンと掃除をしているのだ。

しかし、生ごみを床に捨てると云う暴挙に出られると、拾ってゴミ袋に突っ込むだけでは済まず、雑巾掛けも必要になるわね……

床には林檎の果汁が……果汁って、ネチャネチャして気持ち悪いのよねえ……

「ほらほら、床に生ごみ捨てるのは止めて、Dust to Dust (ゴミはゴミ箱に) よ」

「うっせえな!!今ムシヤクシヤしてんだよ!!」

「だからって、私に当たらない。相談になら乗るから、美樹さやかと何が有ったか話さないな」

「何だよ？魔法で見てたのか？」

「違うよ。さっき、美樹さやかと並木道で出会ったの。本当に、アイツムカつくなあ……っていうか、完全に敵だよ……」

「違うんだよ……アタシと似てて、同じ道を歩もうとしてるから歯痒いんだよ……誰かの為に魔法を使って、自分を犠牲にして全てを破滅させたアタシに……なあ、アタシもアイツもどっちも間違ってる時って、どうすりゃあ良いんだ……」

そう云えば、私とマミさんって考えてみると仲間外れだよね♪
理由としては、叶えた願いの対象が自分か他人かって意味で。

まあ、まどかちゃんの場合は色々な契約内容が有るけど、大抵が『こんな私でも誰かの役に立てたら良いな』で、美樹さやかが『上条君がもう一度ヴァイオリンを弾けるようになって欲しい』、杏子ちゃんが『御父さんの話を皆に聞いて欲しい』、ほむらちゃんが『今度は自分がまどかを守る存在になりたい』

それに対してマミさんは『事故で死にかけた体を治して欲しい』、私が『世界を見てみたい』と、自分の為に契約をしている。

でも、マミさんは皆の為に思って魔女狩りをしてるから、どちらかと云えば他の人と同サイドになるので、結局私一人ぼっちじゃない!!

「まあ、簡単な話ね。一つ目は暴力で従わせる」

「早々に、最悪な答えだな……」

最も早い方法。勝てば官軍、正義は必ず勝つと、勝った人間が正しい。

その教えに従うならば、美樹さやかを徹底的に叩きのめして、無理矢理にでも従わせるのが一番早い。

「二つ目は美樹さやかの案に自分が折れる」

「絶対に嫌だ!!」

当然、案は上げただけで、誰もがこの案を実行するのは嫌だろう。杏子ちゃんからも、却下と封殺される。

「じゃあ、最後の答え。杏子ちゃんの思いを貫き通しなよ。今は、美樹さやかは間違えだと思うかもしれないけど、彼女が未来で落ち付いて考えてみると、結果的にはそれが正解だったと思う日が来るかもしれないからね。だから、杏子ちゃんは、自分の思いを曲げず貫き通して」

「やっぱり、そうか……そうだな……よしっ、ちょっと気分転換に魔女の探索行つて来る。アマタも来るか？」

「ああ、今から杏子ちゃんが散らかした生ごみの掃除をしないといけないから無理♪」

「うっ……す、すまん……」

「良いよ。じゃあ、気を付けて行って来てね♪」

「おうっ!!」

杏子ちゃんが教会から出て行くのを見届け、掃除を開始する。

また、同時にほむらちゃんから教わったまどかちゃんの住所と、杏子ちゃん追跡用にと、複数の魂之眼球を飛ばす。

脳内に次々と写り始めるヴィジョン。皆一様に、思い思い悩んでいる顔。

私がこの町に來た当初は、皆笑っていたのに、今では、そんな笑顔も消え失せている。

勿論、そんな雰囲気感化され、直に私からも笑顔が消えて行くのであろう……

願わくば、皆が笑える世界をキュウベえから取り戻したい。

事件の展開の進行が一気に加速したのは、翌日の夕方であった……
美樹さやかに憑けていた魂之眼球からの映像にて、美樹さやかとブルジョワがハンバーガーショップに二人きりで入るシーンが映る。
まどかちゃん抜きと云う事自体が怪しいので、ほむらちゃんに即座に念話で一報を入れる。

『ほむらちゃん!! 美樹さやかとブルジョワ女が先日のハンバーガーショップに二人きりで入ったわ!!』

『分かった。そのまま観察を続けて頂戴!!』

美樹さやかの焦る顔、ブルジョワの真剣な顔。明らかに、ただの楽しい会談な訳が無いだろう。

そして、一方的にブルジョワが喋り、呆ける美樹さやかをよそに

立ち去る。

これが、ほむらちゃんの言っていた、ブルジョワによるライバル宣言なのであろう。これから、如何にして美樹さやかを救うかである。

否、正確には、美樹さやかの魔女化と云う終末をまどかちゃんに見せないかである。

その後、美樹さやかは未だに現実が理解出来ないのだろうか、数分間同じ表情のまま、何一つ行動せずに居る。

そして、漸く動いたかと思うと、トレーの上のホットドックに手を付ける事無く、そのまま店を出る。

食べ物を食べずに無駄にする行為、確実に杏子ちゃんが見たら怒り狂うであろう……

はつきり言って、メンタル面がまどちゃん以上に脆すぎる……ほむらちゃんには悪いが、例え今回の件を乗り越えても、また魔女化する恐れがある。

それに、今はほむらちゃんが魔法を使えるから何とかなっているが、ワルプルギスの夜以降になると誰が面倒見るのだろうか？

ほむらちゃんが魔法を使えなくなった後だと、必然的に面倒を見る羽目になるのが、私か杏子ちゃんになる。まどかちゃんは魔法が使えないので、当然論外だ。

美樹さやかが強い魔法少女であれば、こんなに危惧する必要はないのだが、私と同様に戦闘面では下のランク故に、上位の魔女が出現すれば、一人では対応できなくなるのは目に見えている。

美樹さやかが負けそうになれば、当然キュウベえがまどかちゃんに契約を持ち掛けるので、何の解決にもならない。

唯一の解決方法としての、私か杏子ちゃんの見張りだが、当然私は嫌である。

杏子ちゃんは、どう反応するかは分からないが……

面倒見の良い杏子ちゃんだったら、嫌だとは言いつつも、裏で見守りそうな気もする。

『美樹さやかが自宅へ戻り始めたよ』

『まどかの方は？』

『えっとねえ、今の所特に動きは無いよ。自宅で、家族と一緒にご飯食べてる』

まどかちゃんに憑けてる魂之眼球のヴィジョンを見ると、家族で楽しそうに御飯を食べている光景。

ただ、まどかちゃんだけは何処か無理して笑っているような感じがする……

今日の晩御飯は、白御飯にハンバーグと野菜の付け合わせ、ポタージュスープかぁ♪

美味しそうだなぁ♪私も、もう一度、家族と一緒に御飯が食べたいなぁ♪

もし、人生をやり直せるなら、私は眼よりも、一生の家族との団欒と思い出が欲しいなぁ……

魔法で願いを叶える事で、こんな結末が待っていると分かっていたのなら、きっと私は契約をしなかっただろう。

自分の人生の選択ミスに後悔しながら、二人の観察を続ける。

美樹さやかも自宅に帰ると、両親が明るく出迎えてくれる。だけど、自身の娘が何処か元氣無いのを見て心配そうな顔をする。

家族や身寄りのない魔法少女なら、死んでもそこまで明るみ出る事は無いが、美樹さやかが万が一魔女化で死んだら後が大変そうである。

まどかちゃんだけでなく、多くの人間が悲しみ、キュウベえが持つて来た不条理な世界の法則に涙を流すであろう。

また、時と場合によっては死体すら出ない場合がある。

キュウベえは何一つ言っていないかったが、結界内で魔法少女が死んだ場合や、魔女化した際に結界の中に引き込まれた死体を誰かが外に持ち出さなかった場合は、魔法少女の死体は消滅し、二度と陽の当たる所に出る事は無い。

まあ、場合によっては結界と共に死体が消滅してくれた方が嬉しい場合も有る。

それが、私の様に誰も身寄りがない魔法少女である。誰にも気付かれる事無く、そのまま生を終える。

下手に死体が出て来て、騒がれるよりはマシである。

逆に美樹さやかの場合は、死体が出て来ないとそれこそ厄介な事になる。

両親がずっと死んだ娘を探し、やがてそれに疲れて何もかも失う事になるやもしれない。

なので、死体を回収して川にでも放り込んで置けば良い。外傷は一切無いので、溺死として扱われるので。

まあ、どちらにしろ両親が悲しむのは決定だけだね♪

待つ事3時間……深夜10時頃である……美樹さやかの住むアパートにキュウベえが侵入。

また、鹿目まどか自宅を出て、美樹さやかの住処へと走り始める。

『ほむらちゃん、二人が動いたよ!! 先ず、まどかちゃんが美樹さやかのアパートへ向かったよ。次に美樹さやかのアパートにキュウベえが出現したよ』

『佐倉杏子は？』

『杏子ちゃんも、さっき見回りって言って、何処かへ出掛けたよ…
…えっとねえ、今、コンビニで棒アイス買ってる』

『分かったわ。今から、美樹さやかを追跡を開始するわ。アマタも
手伝って』

『了解さあ〜♪』

火事にならないように教会の蝋燭の火を全て消して、私も教会を
飛び出した。

第二十五話 穢れ（前書き）

〔謝罪〕

うん、色々と急いで仕上げた所為か、かなりの間違えがありました（汗）

御指摘して下さい皆様、ありがとうございました＞＜

えっ？

昨日で総合200突破し一日のPV4932アクセス・ユニーク400アクセス？

何で、こんなに色々増えたんだ（汗）

先日までアクセスなんて2000も突破してなかったのに……

他の方の所もチェックすると、かなり数値が伸びてる点を見ると、最終回で読者皆のテンション→→なのかな？

ほむらの自宅ですが、あれはほむらの結界によるものと未だに思っています。

もし、家族所有の物なら『暁美』なのに、何故に『ほむら』になったのだろうかになっちゃいますので。

あと、あの部屋に関してもまだ何も分らないので、確かに色々設定に参ってたり（汗）

でも、あの自宅が結界なら何故……おっと、これは11話のネタばれになるか……

なんとも、難しい……

あと、最終話でとある魔法少女が食べてたケーキらしきものは、柳月（北海道）の三方六のバームクーヘン説がやっぱり強いですね。言われてみれば、確かにアレは三方六に見える＞＜

久し振りに食べたくなったなあ……三方六……

値段も高すぎず、抑えられてるので、意外と簡単に手が出ます。

ただ、好き嫌いは結構出そうだなあ（笑）

しかし、最後の最後で三方六とは……ちょっとしたミラクルが発生しましたよ。

過去のコンビニの話で北海道菓子ネタ（頭も御花畑とROYCE）

入れているというミラクルがね（笑）

まあ、公式が三方六ではないと言ったら、ミラクルではなくなるんですけどね（笑）

しかし、何故あそこで三方六を入れなかったのかが悔やまれる。

そういえば、バームクーヘンだったらROYCEもやってますので

（ただ、味は自分好みでは無かった……シナモンがきついかなあ）、それを利用して三方六を持ってくる事も出来たのに……

ちなみに、三方六とはバームクーヘンにチョコレートの掛かった物です。

確かモンドセレクション（笑）の最高金賞を受賞した記憶が有ります。

※どうしても良い話ですが、モンドセレクションを取ってない商品は劣っているという訳ではないので。あれって企業側が有料（1000ユーロくらいだったと思う）で申請して取る物ですから。申請するしない食品会社の方が比較的に多いです。オマケに日本が出品した商品の8割が受賞してるらしいですし、世界中からの応募商品の内半分が日本製品※

第二十五話 穢れ

位置に関しては全員把握しているので、美樹さやかが結界の中に入ったのも分ったし、杏子ちゃんが少し遅れて到着して美樹さやかが先に結界に入っていたので結界に入るのを止めたのも分ったし、ほむらちゃんが眠気眼を擦って出沒したのも全部把握。

ちなみに、そんな雰囲気の中に、少し遅れて出現する私♪

先に到着した両名は既に鉄塔の鉄骨の上に座り、会談をされている。

「黙って見ているだけなんて、意外だわ」

「今日のアイツは使い魔じゃなくて、魔女と戦っている。ちゃんとグリーンシールドも落とすだろう。無駄な狩りじゃないよ」

「そんな理由で、貴方が獲物を譲るなんてね」

「ちっ、あの馬鹿、手古摺りやがって……」

うんうん、確かに影の魔女に手古摺っているねえ。

影で作られた手に捕まったり、殴られたりとフルボッコじゃん♪

「本当だねえ♪ボコボコにされてるよ♪」

「しょうがねえな。ちょっと、手伝いに行ってくる」

これ以上美樹さやかが苦戦しているのを見てられないのか、口に咥えたアイスを一気に食べ終え、単独で結界の中へと飛び降りる。

ちなみに、私とほむらちゃんは完全に動く気がゼロである。

「中の状況を把握出来てる？」

「勿論。今、杏子ちゃんが影に捕まった美樹さやかを救出したわよ」

無数の影の手に捕まって圧死寸前だった美樹さやかを、華麗な槍捌きで間一髪救い出す。

だけど、ここで想定外の事件が発生した……

杏子ちゃんが代わりに魔女を討伐しようとしたら、美樹さやかが、ぬらりと立ち上がって真正面から再び魔女に突っ込んで行ったのだ……

そして、徹底的に魔女の攻撃を受けるが、死霊の如く何度も立ち上がり、魔女へと接近する。恐らくやってる事は、痛覚をシャットダウンしての狂戦士戦法である。

最後には、魔女に馬乗りして、何度もサーベルで叩く。サーベルって斬る物であって、鈍器じゃないよねえ……

「ああ……美樹さやかが暴走しちゃってる。痛覚をシャットダウンして戦闘してるよ？」

止めにはまどかちゃんが泣いて何かを祈っている。

きつと、「もう止めて」とかだろう……友人が壊れて行く姿をこれ以上見せるのは拙い……

「ほむらちゃん、これ以上は拙いと思うよ？まどかちゃんが泣き始めたよ？」

「そう……下手したら、美樹さやかはこの世界から切れ捨てないといけないかもね……」

結界を細い眼で見て、冷たく冷たく呟いた……

同時に、結界の中で美樹さやかが魔女に止めを入れ、結界を破壊した……

「終わったね、ほむらちゃん」

「みたいね……」

結界の有った場所の地面に突き刺さる様にグリーンフィードが出現する。

美樹さやかはそれを拾い上げるや否や、杏子ちゃんに投げて渡す。

「あげるよっ！！そいつが目当てなんでしょ？」

吐いた台詞は最低な台詞。杏子ちゃんは心配して助けに行ったのに、彼女の脳内ではその行為がグリーンフィードの為と認知されている……

頭に血が上った私が眼球を抉り取る為に、鉄塔から飛び降りようとするが、ほむらちゃんが制止する。

「駄目……今、私達が出ると余計にややこしくなる……」

「でも……あの態度は許せない……」

「御願い……我慢して……」

「ほむらちゃんがそう言うなら……」

命拾^{メダマ}いしたな美樹さやかとか物騒な事を思いつつ、鉄骨に座り直す。

その後、一方的に杏子ちゃんへ言葉を発した後、変身を解いた美樹さやかがまどちゃんに支えられて自宅へとゆっくりと帰り始める。

当然、魂之眼球でしっかりと追跡はする。

「アマタ、佐倉杏子を呼んで、今からワルプルギスの夜について、ちよっと話さない？」

「うい、じゃあ、杏子ちゃんに呼び掛けて来るね」

鉄塔より飛び降りて、杏子ちゃんの直ぐ傍に着地。

当然の如く、高所より飛び降りた事で足の骨が軋み折れ、複雑骨折するが、気にする事も無く再生。

「杏子ちゃん、ほむらちゃんが今から御茶しないかって？」

「どういう意味だ？」

「ワルプルギスの夜の対策に関してだと思うよ」

「そんじゃあ、行かないって訳にはいかないな」

犬歯をちらっと覗かして、何処からかカップラーメンを取り出して準備万端をアピール……

「じゃあ、結界を展開するわ」

はいっ？

ほむらちゃんのそんな声が聞こえるや否や、一瞬にして辺りが赤い結界に包まれる。

辺りの鉄塔等が全て視界から消え失せ、目の前にはレンガ造りの古臭い家が現れる。

家には『ほむら』と標識があるので、ほむらちゃん家^ちなのは間違いないであろう……私が字を読み間違えてない限り……

生まれてから眼が見えなかった事も有り、点字は完璧だけど、普通にかかれた字は未だに読めない物も多いので、間違えてたら怖いからあまり口に出して読んだりはしない。

「何だよ!! これは!?! 結界じゃねえか!!」

どう見ても、結界です。ありがとうございます。

まあ、魔法少女に使い魔の召喚できるなら、結界が召喚できても可笑しくは無いか……

「そうよ。私の結界よ。使い魔を召喚できる魔法少女が居るのなら、結界を展開できる魔法少女が居ても可笑しくは無いでしょ?」

「それはそうだけだよ。しかし、便利だなあ、この能力」

「それでも無いわ。展開の時に魔力を思った以上に消費するから、多様は出来ないの。さあ、中に入って」

自宅(?)に招待され、中に入ると、天井には巨大なシャンデリアの代わりにゼンマイ仕掛けの何かが、ギアの擦れる特有の音を奏でる。

恐らく、魔女の結界は魔法少女時代に関係するの定理に当てはめると、上のゼンマイは時計の中身を模しており、後ろでメトロノームの様に行ったり来たりしている宙ぶらりんな物体は、振り子時計の振り子だろう。

自宅中央には、円卓の座席があり、私達はそこに腰をかける。

「おい、御湯あるか？」

「はい」

腰を掛けてから開口一番が、杏子ちゃんのカップラーメンを食べるから『御湯くれ』発言。

他人の家（？）に招かれていると云う立場を、他者に感じさせないほどの図々しさ……

そして、何処からかポットを取り出して、杏子ちゃんに手渡すほむらちゃん。まるで杏子ちゃんがカップラーメンの湯を要求する事を知っていたかのような準備の良さ。

過去にも、何度もこのやり取りが有ったのだろうか？

「あんがとっ」

カップラーメンに御湯を注ぎ、暫し待つ事3分間。

その間は何故か不思議な事に無言である。

そして、杏子ちゃんがカップラーメンを食べる為に割り箸を割った事を皮切りに、会話が始まる。

「ワルプルギスの夜の出現予測はこの範囲」

ほむらちゃんがワルプルギスの夜の出現予測の位置をマーキングした資料を取り出し、中央の机に置く。

「根拠は何だい？」

未来から来たからです♪

まあ、杏子ちゃんには話さないつもりなので、取り敢えず私は何

も喋らずだんまりを決め込む。

実はワルプルギスの夜の出現等も全開のハンバーガーショップで聞いているので、迂闊な事を喋って誤爆するよりマシと、出来る限り黙り、偶に相槌を打つ程度にしている。

「統計よ」

「統計？以前にもこの町にワルプルギスが来たなんて話は聞いてないよ？一体何をどう統計したってのさ？」

ここは、だんまりを決め込むほむらちゃん。

まあ、確かに杏子ちゃんの突っ込みが的確過ぎて、『納得させれる答え』正体を明かす』だからね……

「御互い、信用しろだなんて言える柄でも無いけどさ？もうちょっと、手の内を見せてくれたって良いんじゃない？」

「それは是非、僕からも御願いたいね。暁美ほむら」

新たな乱入者ことキュウベエの声が響く。意外な事に、こいつはほむらちゃんの結界内に入ってこれるんだ……

建物内の影から飄々と自分の家の様に入って来て、杏子ちゃんの近くに座る。

「どの面下げて出てきやがった、手前？」

恐らく、この3人の中では一番危害を加えられないと踏んだ上なのかもしれないが、杏子ちゃんは怒りを孕んだ声を発し、即座に槍を召喚して突き付ける。

まあ、私だったら確実に殺しているので、確かにこの中では安置

だね。

「やれやれ、招かれざる客って訳かい？今夜は君達にとって、重要な筈の情報を報せに来ただけだね？」

「はあ？」

「美樹さやかは消耗が予想以上に早い。魔力を使うだけでなく、彼女自身が呪いを生み始めた」

呪いとは、恨み等の負の感情の事である。

私達魔法少女のソウルジェムは魔法を使う以外にも、負の感情を抱き世界に絶望する事でも、ソウルジェムに穢れを生んでしまうのだ。

つまり、キュウベえが言いたいのは、美樹さやかが魔女になり掛けていると云う事だ……

「誰の所為だと思ってるのさ？」

「このままだと、ワルプルギスの夜が来るより先に、厄介な事になるかもしれない注意していた方が良いでしょう」

「何だそりゃ？どういう意味だ？」

「どうやら、反応を見る限り、杏子ちゃんには魔女の元が魔法少女であると云う事を知らないみたいだ。」

「僕じゃなくて、彼女に聞いてみたらどうだい？君なら既に知っているんじゃないかな？曉美ほむら」

肝心なほむらちゃんはYESもNOも答えずにいる。

「やっぱりね……何処でその知識を手に入れたのか、僕はとても興味深い。君は」

その行為はYESであるとキュウベえは判断したのであろう。また新しく手に入った情報に嬉しそうな顔をする。

「聞くだけの事は聞いたわ。消えなさい」

イラつきを見せ始めた、ほむらちゃんに一蹴され、これ以上聞いても情報が得れないと判断したキュウベえは、早々に立ち去る。

「放つとくのかよ、アイツ？」

ほむらちゃんの行動が不満なのだろうか、槍をしまった杏子ちゃんが尋ねる。

「あれを殺した所で何の解決にもならないわ」

まあ、確かに殺しても次々に湧くからねえ♪

「それよりも、美樹さやかだ。アイツの言っていた厄介事ってのは何なんだ？」

「彼女のソウルジェムは穢れを溜めこみ過ぎたのよ。早く消化しないと、取り返しのつかない事になる」

そう答えるほむらちゃんの顔は陰りを見せていた……
もう、時間が無い……早く何とかしないと……美樹さやかが死ぬ

の
だ
…
…
…

第二十六話 亀裂（前書き）

ナマハゲ「もひもひ、ひねもす♪やあ、ナマハゲちゃんだよぉ♪
学校があるのに、24日放送のまどかをリアルタイムで見てる悪い子はおらんべかぁ♪」

ねんねんころりよ、おころりよ
ぼーやーはよいこ♪だぁ、ねんねえーしいーなぁ

まどかの二次創作数が漸く増え始めました＜＜
このまま作品数がIS二次創作超えないかなぁーとか思っている。
でも、ISも好きだからISの作品も頑張っって欲しいな♪

のほほんさん好きだし♪
ラウラ可愛いし、オルコット可愛いし、シャル可愛いし♪
何時か、のほほんさんの短編書きたいなぁ（笑）
のほほんさん御乱心的な作品を（笑）

※アホして、予約投稿の日にちを5月25日に……急いで修正して
この時間に変えました（汗）
次回更新日27日

最近のマイブーム『エイみりん（笑）』↑エイの鰭を味噌と唐辛子
に付けて干した物
友人に御前は親父かと突っ込まれました（泣）
いいじゃん、20歳超えたら親父なんだから（泣）

第二十六話 亀裂

ほむらちゃんの結界から帰る最中、杏子ちゃんは何度も私に訪ねて来る。

「奴の言ってる意味が分からない」とか「アマタは何か知ってるのか」と……

それには、私は全てNOで答える。杏子ちゃんに嘘を吐くのは心が痛むが、約束は約束である。

でも、何処か私が嘘を吐いていると杏子ちゃんは感じていたのだろう、その晩は、教会に帰っても会話一つ無く寢床に着いた。

ほむらちゃんとの約束を破り、杏子ちゃんに全てを話したら、良い方向に進むのだろうか？その晩に、私は自問自答しながら眠りに着いた……

そして、翌日の夕方に美樹さやかの人生は、破滅の歌を奏で始めた。

ブルジョワと上条が楽しく会話してるシーンを見るや否や、彼女の行動は狂気と化し始めたのだ。

手当たり次第に、使い魔を見つけ、暴虐。己のソウルジェムの心配等一切せずに暴れる事に、もう手段等選んでいる暇は無いと判断したので、私とほむらちゃんは念話で連絡を取り最悪のプランを立てた。

それは……美樹さやかが私達を信じるか信じないかである。

信じて受け入れれば、彼女のソウルジェムをグリーンフシードで回復させて、影より出来る限りの保護をする。

信じず受け入れない場合は……

美樹さやかを……

殺して、まどかちゃんにバレない様に処理する……

それが、私とほむらちゃんの決断。

私の役割は、何もせずに正確な位置を伝え、見届ける事……

そして、作戦での障害である杏子ちゃんを、二人に近付けない事……

杏子ちゃんは何処か自分に似ている美樹さやかに、自分と同じ失敗をして欲しくない故に、彼女の為に動くとする。

だが、それがほむらちゃんの作戦には障害にしかないし、悪い方向にしか進ませない。

だから……

「何のつもりだ……アマタ？」

「御免ね。美樹さやかを本当に救いたいのだったら、ほむらちゃんに任せてくれる？」

私は心を鬼にしてでも、彼女の前に立ち是因为ならなければならない。
い。

「無理だな。アタシはまだアイツを信用してない。だから、そこを
退^どけ」

「それは無理だよ、杏子ちゃん。だって、ここで私が退いたら、美樹さやかは魔女になり、まどかちゃんが悲しむ羽目になるからね」

「どういう事だよ？」

「魔女の正体って何か分かる？」

「そんなん、使い魔が成長したもんだろ？」

やっぱり知らないんだね……まあ、知ってたら昨日の晩のキュウベえの台詞を聞いた瞬間に、ほむらちゃんの結界を飛び出して、美樹さやかを探し出すに違いないしね。

「見当違いな回答だね。魔女の正体は私達魔法少女なんだよ。ソウルジェムが完全に濁り切った時に、グリーンシードを産み出して魔女になる。それが、私達の運命なんだよ」

「う、嘘だろ……アイツに何か嘘を吹き込まれたんだろ！？ そうなんだよな！！」

「本当だよ。私は一度、魔法少女が魔女になる場に立ち会った事が有るの……昨日、キュウベえが言っていた大変なことは、こういう事なの」

「じゃあ、何で昨日言わなかったんだよ！！」

「出来る限り、こんな情報は他の魔法少女に言いたくないの。発狂する子も居るからね……でも、もう手段は選んでられないの。美樹さやかが破滅すると、まどちゃんも同様に破滅する可能性が有るから、安心してハッピーエンドは迎えられない。だから、私はこ

ここで杏子ちゃんを止めないといけないの」

マスケット銃を召喚して杏子ちゃんへと向ける。

「悪いが、御前が騙されてるとしか私は思えねえな！！自分の目で見ないと信用出来ない達でよお！！」

対する杏子ちゃんは槍を召喚し、私へと向ける。どうやら、言葉で解決するのは難しい様だね……

しかし、どうするかなあ、私程度の魔法少女じゃあ、杏子ちゃんレベルの魔法少女を止めるどころか、傷すら与えれない気がするなあ……

『ほむほむ、杏子ちゃんと戦闘になりそうなんだけど、どうしたら良い？』

当然、念話をしながらも、気を抜く事は一切しない。

というか、杏子ちゃんレベルの魔法少女だったら、念話してる事自体が命取りなんだけどね……

『出来る限り時間を稼いで貰えるかしら？無理だと判断したら佐倉杏子を放置して良いわ』

『無茶言うねえ……私のレベルじゃあ傷すらつけれないよ？まあ、適当にやったら撤退するから。そっちはどう？』

『今、美樹さやかが使い魔と戦闘している、マンションに向かってるわ。あと2分くらいで接触出来る』

じゃあ、2分程度持たせれば丁度良いかな？

現在位置からマンションまで、どんなに肉体面が強化された魔法少女が頑張っても3分くらいは掛かるからね。

その間には事を片付けてくれるでしょう。

「悪いけど、ちょっとだけ時間稼ぎさせて貰うよ」

「なあ、最初に会った時にアマタ言ったよな……アタシに敵意を向ける事は一切ないって……寧ろ、好意を抱いてるって……」

「うん、敵意は無いし、杏子ちゃんの事は大好きだよ。でも、未来を良い方向に持って行く為には、杏子ちゃんでも武器を構えるしかないんだよ……」

「それを敵意つつうんだよ!! アタシはさやかを救いたいし、アマタとも戦いたくない!! 最終警告だ、そこを退け!!」

「ごめんね、杏子ちゃん……私も自分の思いを貫き通すよ……」

きっと伝わらない謝罪をして、私は銃口のトリガーを引いた。

2分間持つか分からないけど、未来の為にも私が汚れ役を引き受けよう。

杏子ちゃんに教会で言った言葉。自分の思いを貫き通せ、例えばそれが今相手に理解されなくとも、ずっと先に落ち付いて考えてみると、結果的にはそれが正解だったと気付く日が来るかもしれない。

まさしく、今私はその言葉通りの立場なのだろう……

私の拳銃より奏でられた撃鉄の音を皮切りに、一瞬にして杏子ちゃんが詰め寄って来る。

拳銃の弾丸は掠るどころか、空を切り虚しくも地面やコンクリート壁に減り込むだけである。

「おっせえよ!!」

槍の棒部分が複数の棍棒へと別れ、それらを鎖で結ぶ多節棍へと変化する。

多節棍の特徴は、扱う者以外には予測不可能な軌道での攻撃である。

恐らく、ほむらちゃんの時を止める能力レベルの魔法が使えないと、近距離での回避は不可能であろう。

当然、私にそれを避ける術は無い。

例え、魂之眼球で死角外に潜り込んだ軌道を読めても、体が当然反応しきれない。

魔女や使い魔とは速度がはつきり言って違う……

唯一出来るのは、肉体へのダメージを減らす為に、受け身を取る程度である。

地面すれすれより浮上した棍の先端部分は、私の脇腹を狙って挟り込むように突き刺さる。

「うぐっ!?!」

一応受け身を取ったつもりだが、想像以上の威力なのか、多節棍の性質かは知らないが、骨が悲鳴を上げ即座に痛みを遮断しなければならぬ事態に陥る。

この痛みが遮断できるゾンビみたいな体に、本当に感謝だよ……多分、骨が何本か折れたね♪今回ばかりは手加減は一切無いなあ

♪

「まだまだあゝ!!」

地面を強く蹴り、杏子ちゃんへと一気に接近する。

手に持った拳銃は投げ捨て、新しく散弾銃ショットガンを召喚。

散弾銃は拳銃以上に接近戦に特化した銃とも言える。

その力は50メートル以内で発揮され、銃口よりショットシエルが発射されると、ショットシエルが圧と振動で破れ、中に封入された小さなゴム弾が放射状にばら撒かれる。

幾ら動きが早いと云えど、近距離でならば回避する事は非常に難しいと判断しての選択。当然、銃火器は殺傷能力が高いので、中の弾丸はゴムを選択している。

自分は傷付いても良いけど、杏子ちゃんが大怪我をするのは頂けないからね♪

距離5メートル程度まで接近し、散弾銃の銃口を向け、トリガーを引こうとした時には……

既に銃口の先には、杏子ちゃんの姿は無く……

私の目の前が真っ暗になった……

チクタク チクタク ボーン

眼球が時計によじ登る

時計が一時を打ったとき

眼球は時計からずり落ちた

チクタク チクタク ボーン

マザーグースの Hickory, dickory, dock
より一部引用

第二十七話 失敗（前書き）

番外編のギリシア魔法少女軍団VSワルプルギスの夜の執筆を開始しました♪

まあ、当然ギリシア魔法少女の負けの結末で書いてますけどね♪
にやはあり、当初は完全にチート魔法少女軍団なので、互角の末に負けと云う設定にしようかと思いましたが、ワルプルギスの夜もチート魔女なんで、徹底的に凹して貰う事にしました。

ワルプルギスさんマジバないっす><

こちらの番外編は、書き終わったら、本編が当分更新出来そうではない時用に、保存しておきます。負けシナリオで、ワルプルギスさん無双になる話ですし……

マザーグースの詩って良いですよね♪

しかも、まどか☆マギカにピッタリな物も沢山ありますし。

The rose is red（薔薇は紅い）とかまさにそれで
すよね♪

マザーグースの詩の世界にどんどん引き込まれそう><

ちなみに、The rose is red は『薔薇は紅い、堇は蒼い、桃色は優しい 君も優しい』と、色とかを変更しなくても、そのまんま魔法少女達のカラーですので、普通に持って来れますし♪
まあ、流石にまんま持つてくるのは拙いので、少しは弄りますけどね（笑）

書き貯め・ゼロ（汗）

第二十七話 失敗

1人の蒼色の魔法少女が糸紡ぎ

そこに3匹のネコさんが通りがかりました

“なにをなさってるの 御嬢さん”

“正義の味方をしてるのさ”

“わたしもお手伝いをしましょうか”

“ご遠慮しますネコさん 頭をかじり切られてはいやですから”

“そんなことはありません 是非手伝わせてちょうだいな”

“そうかもしれないけれどネコさん 近寄らないでくださいな”

どうして、彼女はネコを拒むのだろうか？

食べられるからだろうか？

くマザーグースのSix little mice sat down to spinより一部引用く

「どうして分からないの？ただでさえ余裕が無いのだから、魔女だけを狙いなさい」

「五月蠅い、大きな御世話よ……」

さやかのは既に限界を超えており、肉体が悲鳴を上げて立つのが精一杯である。

肩で息をしながらも、ほむらには絶対に弱ってる所を見せまいと覇気を見せて反論をする。

「もうソウルジェムも限界の筈よ。今直ぐ浄化しないと……使いなさい」

そんな彼女を見て、既にさやかのソウルジェムが限界を迎えている事を悟ったほむらは、そう言ってさやかの足元にグリーンフシードを投げる。

だが、さやかはその行為を何かしらの陰謀としか取れず、グリーンフシードを後ろへと蹴り飛ばす。

「今度は何を企んでるのさ？」

「好い加減にして……もう人を疑ってる場合じゃないでしょ？ そんなに助けられるのが嫌なの？」

「アンタ達とは違う魔法少女になる。アタシはそう決めたんだ。誰かを見捨てるのも利用するのも、そんな事をする奴等とつるむのも嫌だ。見返りなんて要らない。私だけは絶対に自分の為に魔法を使ったりしない」

「貴方、死ぬわよ？」

「アタシが死ぬとしたら、それは魔女を殺せなくなった時だけだよ。それって、つまり用済みって事じゃん？ なら良いんだよ……」

地面に膝を着き崩れ落ちるさやか。かなり世界を恨み辛み、呪いを産み出した始めた結果。

それが、自虐……世界だけでなく、自身までも呪い始める。

「魔女に勝てないアタシなんて、この世界には要らないよ」

最後には眼に涙を浮かべて答える。

「ねえ、どうして？ 貴方を助けただけなの。どうして信じてくれないの？」

「どうしてかなあ？ ただ、なんとなく分かっちゃうんだよね。アンタが嘔吐きだって事。アンタ、何もかも諦めた眼をしている。何時も空っぽの言葉を喋っている。今だってそう、アタシの為とか言いながら、本当は全然別の事を考えてるんでしょ？ 誤魔化しきれもんじゃないよ……」

その言葉と先の行為に、ほむらは心の奥より憎悪が湧き始める。彼女は何時もそうである、幾ら手を伸ばした所でも、決して自分へと手を返そうともせず、刃だけを向けて来る。

「そうやって、貴方は益々まどかを苦しめるのよ……」

「まどかは関係ないでしょ？」

「いいえ、何もかもあの子の為よ」

完全に救う価値も無いと判断したほむらは、ソウルジェムを握り変身する。

「貴方ってするどいわ？ ええ、凶星よ。私は貴方を助けたい訳じゃない、貴方が破滅して行く姿をまどかに見せたくないだけ。ここで私を拒むのなら、どうせ貴方は死ぬしかない。これ以上まどかを悲しませるくらいなら」

アパートの長い廊下に明らかに異質な音が響き始めるが、怒りで外部の音が入ってすらいらないほむらは気にもせず……

「いっそ私がこの手で……」

さやかに手を伸ばす……

「今直ぐ殺してあげるわ、美樹さやか」

思いもよらぬ発言にさやかの顔が真っ青になるが、世界とは非常に面白く出来ている。

まるで、ほむらの思い通りには行かせないと、神様が示唆しているのだろうか、ここという場で邪魔が入る。

ほむらの体に多節棍が巻き付き、その後杏子の方へと引き寄せられ取り押さえられる。

「おおい！！さっさと逃げろ！！」

今将にさやかを殺そうとしていたほむらを取り押さえると、杏子は地面にまだ膝を着いてるさやかに逃げろと強く命令する。いや、命令ではなく思いやりによる忠告ともとれる。

その後、何を考えているのか分からないが、幽鬼の様な表情でゆっくりと立ち上がり、ふらふらな足で何処かへと歩き始める。

「本気か手前は！！アイツを助けるんじゃないのかよ！？」

さやかが無事に逃げた事を確認すると、ほむらにキツイ口調で尋ねる。

「随分早い登場ね……アマタはどうしたの？」

だけど、質問には一切答えず逆に質問を返す。

「眠って貰ってる。随分と変な知識を植え付けてくれたなっ!! 魔女の正体とか全部聞いたぞ!!」

「そう、真実を聞いた上で、貴方は美樹さやかを逃がしたの？」

「そんなん信じられるか!!」

どうして、彼女も信じてくれないのだろうか？

「そう……離してくれないかしら？」

そう歯軋りし、冷たく言い放つ。

「ほお、触れてたらあの妙な力は使えないのか？」

杏子の言う通り、ほむらは他人に接触されていると時間を止める事が出来ない。

正確には、時間を止めても接触しているモノの時間は動いているので、正確には意味が無いが正解である。

なので、手に着けたラウンドシールドから閃光手榴弾を取り出して、歯で安全ピンを抜く。

閃光手榴弾と云えど、見た目は手榴弾そっくりなので、自爆する気かと驚き、ほむらから飛び退く。

狙い通り、杏子が距離を取ったので、魔法を発動して時間を止めて、空中に閃光手榴弾だけを残してその場から離脱し、急いで美樹さやかを探しに行く。

本来なら、アマタによって常時位置が把握されているが、杏子によってアマタが気絶させられているので、念話が通じず、手当たり次第探す羽目になる。

また、目の前からほむらが消え、閃光手榴弾のフラッシュのオマケまで頂いた杏子は、舌打ちをし、彼女も同様にさやかを探しに行く。

「さやかちゃん……何処……」

心配して美樹さやかのアパートに行く物の、彼女の母親から昨日から帰って来ていないと返され、現在必死に探しているのだ。ちなみに、その肝心な探し人が今将に殺されかけた事なんて、まどかは露も知らず。

さやかが何処に居るかは分からないので、ひたすら彼女が行きそうな場所を探す。

学校、一緒に良く行く喫茶店……そして、次の目的地は公園。その公園に行く道中に、さやかではないが彼女の見知った顔の少女が倒れていた……

「えっと、アマタちゃん？どうしたの、アマタちゃん！？」

倒れたまま動く気配の無いアマタを頭から抱き起して、必死に呼びかける。

「ねえ、アマタちゃん！！アマタちゃん！！」

彼女が目覚めるまで、何度も呼びかけて、体を揺する。暫し揺すると、少しずつ意識を取り戻し始めたのか、呻き声を上げ始める。

そして、一定以上の意識を取り戻したのか、眼を一気に見開く。
行き成りの覚醒に驚き、アマタから飛び退く。当然、まどかが抱
き起してる訳で、そのまどかの支えが無くなったので、アマタの頭
が地面へとフリーフォールを開始して、地面にて強打する。

「いっつう……気絶しちゃったかあ……あれ、まどかちゃんヤッ
ホ♪」

「だ、大丈夫!？」

「うん、大丈夫大丈夫。骨が折れたくらいだから」

「骨えっ!？」

ちなみに、ここで会話の齟齬が発生している。
アマタが言っているのは、杏子の一撃によって骨が折れたという
意味であり、それをまどかは、自身がアマタの頭を落とし、後頭部
を強打させた事で、頭蓋骨の一部が折れたと取っている。

「ちょっと、杏子ちゃんとやり合ってね。まあ、もう回復したから
大丈夫大丈夫。で、まどかちゃんはどうしたの？」

「どうして? どうして、そんな事になったの？」

先日の跨道橋での杏子とアマタの関係から見ても、仲も良く、相
手の骨を折る程の戦闘を繰り広げるとは思えないので、恐る恐る尋
ねる。

「まあ、ちょっとね。で、まどかちゃんは、こんな夜遅くにどうし
たの?」

「うん、さやかちゃんを探してて……でも、どうしても見つからないの」

「そっかあ……じゃあ、悪いけど、私はそろそろ行くね。杏子ちゃん見つけないと拙いしね」

「そ……う……ですか……」

実は、気絶した際に、召喚していた全ての魂之眼球が消滅したので、美樹さやかに憑けていた魂之眼球も当然なくなり、現在位置が不明となっている。

また、まどかに現在起きている事の全てを話す訳にも行かず、ボロが出ない内に急いで別れようとする。

全てが終わってしまう前に……

……
だけど……そんな事も御構い無く、希望の数だけ絶望も生まれる

……
そう、何もかも終わってしまっているとも知らずに、少女は微かな希望を抱いて居たのだ……

まだ、美樹さやかは生きていると……

第二十八話 魔女化（前書き）

ㄟ（? ^ ω ^）ㄟ「携帯で見ると、一部の文字とかが文字化けしてるよ」

作者「えっ……（汗）」

ㄟ（? ^ ω ^）ㄟ「顔文字使うの止めたら？」

作者「……（汗）御前も、文字化けしちまえ……」

第二十八話 魔女化

ソウルジェムが砕けると

明かりは塵にまみれて消える

破片が飛び散ると

心と体は綺麗な形を失う

リユートが毀れると

美しい音色は戻らない

友情が言葉で言われると

中身は直ぐに忘れ去られる

音楽や光の輝きが

ランプやリユートなしではありえぬように

心が響かないと

魂の木霊は歌とならない

せいぜい廃墟を吹き渡る風のような

悲しい挽歌となるだけか

教会の死者を弔う鐘のような

絶望の音になるだけ

心と心が結ばれると

強い者から愛が消える

弱い者は一人残され

失ったものに耐えねばならぬ

おお愛よ！！

おまえはこの世のはかないことを嘆くが

なぜ弱いものを選んで

その人の心をもてあそぶのだ？

嵐が烏を揺り飛ばすように

熱情が人を揺さぶる

分別も役には立たない

冬空のくすんだ太陽のように

愛する者に寄り添って立つ

あらゆるものが崩れ落ち

人は裸で放り出される

ビルを吹き飛ばす暴風が来るというのに

（パーシー・シェリーのWhen the Lamp is Shatteredより一部引用）

見滝原市一帯に魂之眼球をばら撒き操作すると、思った以上に早く美樹さやか居場所を把握する。

電車の中でホストか不良か何か知らんが、あまり関わりたくない人間を2人も相手にして何か言っている。

相手の方は何か困惑するような表情なので、一方的に美樹さやかが絡んでるようにしか取れない。

そして、最後には美樹さやかはサーベルで彼等の首を切り落とす……

切り落とすと壊れた様に笑い、次の駅で降り、ホームのベンチに座る。

暫くして、そこに人影が見える。ほむらちゃんかと思いきや、現れたのは……杏子ちゃんだった……

ああ、と云う事は、ほむらちゃんの説得も駄目だったのだろうか？
きつと、杏子ちゃんを私が止められなくて……

私って駄目だなあ……ほむらちゃんを助けてあげる手伝ってあげ
るって、何度も偉そうな事を言って、結局一番大切な所では役に立
てないし……

願いや希望の数だけ絶望を生むなんて……本当に夢も希望も有ったもんじゃないわね……

そうやって、絶望していると、私のソウルジェムがゆつくりと穢れ始める。

これが、呪いを生むと云う事なのだろう。自分が成功しないと、世界の全てを恨み、呪ってやらんと云わんばかりに、湧き上がる負の感情。

今迄真っ白だった、ソウルジェムにゆつくりと真っ黒な濁りが浸食して、あっという間にどんよりした黒色に染めあげてしまう。

また一方では、一言二言少女達は会話を交わし、美樹さやかの人生は終わりを告げる。

そう、美樹さやかの魔女化である。

辺り一帯に膨大なエネルギーを放出し、ソウルジェムが砕けて魔法少女の行く着く先、負の化身と成り果てる。

その姿を目の前にして、初めて杏子ちゃんは自分の愚かさに気づき、急いで美樹さやかの死体を抱きかかえて結界から外界へと疾走する。

やっとの事で、杏子ちゃんが美樹さやかの死体を結界から持ち出すが、運悪くまどちゃんに発見されてしまう。

肝心なフォローを入れるほむらちゃんの姿もそこには無い。彼女は、今も現状を把握できずに何処かを彷徨っているのだろうか？もしくは、杏子ちゃんにやられちゃったとか？

「何もかもが悪い方向に進んで、終わっちゃったね……全部……」

そう呟いて、私はゆつくりと見滝原市から逃げ出して、自分の元居た町へと帰ろうと歩き始める。

きっと、ほむらちゃんに会ったら「役立たず」と責められそうな

気がして……何もかもから逃げ出したのだ……

美樹さやかが呆けた顔をして、移動していたのも、自分が体験すると本当に良く理解できる。百聞は一見に如かずとは云うが、私風に言うとは体験は百見に如かずってね……

人間とは、絶望すればやっぱり……何も考えられなくなっちゃうよね……

「ねえ、アマタ……何処に行くの？まだ、終わって無いでしょ？」

「ほむらちゃん？」

何もかもから逃げ出そうとした私の前には、一番会いたくなく、こんな姿を見られたくないほむらちゃんの姿が有った。

「頼って」、「信じて」、「助けてあげる」、「名前を呼んで」、「友達」……沢山の偉そうな言葉を彼女には掛けて、彼女を背中から支えていたつもりだった……

「御免ね、ほむらちゃん……私には、ほむらちゃんの背中を支えるには役不足だったみたいだね……杏子ちゃんの足止めも出来なかったし、結局、美樹さやかも魔女化しちゃうし、まどかちゃんに美樹さやかの死体を見せる事態にもなったし……」

「どうして、どうして、貴方は逃げようとするの……！」

「どうしてだろうね……きっと、私が弱いからかな？だって、ほむらちゃんの体験した世界では、私は弱かったから、何もかもから逃げて現実を直視できなくて魔女になったんでしょ？まどかちゃんを恨んだり、多くの魔法少女を殺したり……」

それに今、ほむらちゃんが私の事を名前を呼んでくれなかっただけで、物凄く心が折れそうなんだもの……

眼から涙を流し、今も世界を恨み呪い続ける……

「アマタは弱くなんかない！！それに、アマタが私の背中を支えてくれてるから、またこんな事態に直面しても私は挫けずに居られるの！！アマタがそんな事を言ったら、ここに居る私はどうしたら良いのよ！！」

だけど、それはほむらちゃんを悲しませるだけ……呪いとや絶望、悲しみとは周囲に居る人にも伝染するのだ……

前にも言ったけど、やがて私の顔からも笑顔が消えるだろうと……案の定、現にこうして笑顔が消え、泣いている……世界を恨み、呪っている……

鹿目まどかに興味を持って町に来なければ良かった、ほむらちゃんや杏子ちゃんに出会わなければ良かった、友達にならなければ良かった、魔法少女にならなければ良かった……自分の人生の歩みを何もかも全否定してしまう。

美樹さやかメンタルが異常なくらい弱いつて前に思ってたけど、人間のメンタルなんてこうも簡単に崩壊してしまうのだ。

ガラスのハートとは実能的を得た表現だね……

「だから、逃げないで！！今度は私がアマタの背中を支えるから！！」

「どうして？そんなにムキになるの？私が居ないと自分の目的が達成出来ないから？」

口から出てくる言葉は、将に美樹さやか杏子ちゃんに言った言葉と同レベル。いや、比べ物にならない位、私の言葉の方が酷い……

自分から手伝ってあげると言って、ほむらちゃんを最後の最後で突き放す様な事をして……

まだそれくらいなら、最初から最後まで敵対心をむき出しの美樹さやかの方が、私より何倍も優しい……

ああ、私って最低だ……どうして、こんな酷い言葉を言っちゃうんだろう……

このまま負の感情を抱き続ければ、私のソウルジェムが穢れ切ってしまつて、美樹さやか同様に魔女になつてしまうから、心配して言ってくれてるのに……

嫌われちゃったかな……私も美樹さやかと同類に思われちゃったかな……それとも、私に全て話した事を後悔されちゃったかな？

わなわな震えるほむらちゃんを見て、どんな罵声を浴びさせられるのかと思っていたが……

「違う！！アマトは私の少ない友達だからよ！！だから、まどかだけじゃなくて、アマトとも一緒に未来を見たいの！！だから、絶対に逃げないで！！」

そう言つて、私を抱き寄せ、首からぶら下げたソウルジェムに、彼女はグリーンフシードを押し当てる。

すると、穢れと一緒に、今迄あそこまでネガティブに考えていたのが不思議なくらいに、恨みや呪い等も一緒に消えてしまう。

そんな優しさに、自分の愚かさや馬鹿さ加減に涙が出始める。

「そっかあ……ごめんね、ほむらちゃん……迷惑掛けて……本当にごめんね……」

目から毀れ落ちる涙を服の裾で拭い、嗚咽を洩らしながら謝る。

「友達だから当然でしょ。アマタも言ったじゃない……好きなだけ甘えて頼れって……」

「本当に、私って馬鹿だよ……偉そうにほむらちゃんに自分が言っ
て、結局はほむらちゃんに言われちゃうなんてえ」

「本当ね。大馬鹿ね」

可笑しそうに返す言葉、『馬鹿』って言えば『大馬鹿』と何か一
文字増えて返って来る。

木霊でしょうか？いいえ、それが友達同士のコミュニケーション
です。

「ほむらちゃん酷いよ……でも、これからどうする……美樹さや
かが魔女化したけど——」

「大丈夫、分かってるわ」

私以上に現状を理解しているほむらちゃんに、言葉を途中で切ら
れる。

「佐倉杏子は美樹さやかの死体を結界から持ち出したのでしょ？な
ら、彼女の行く場所は大体分かっているわ。行くわよ、アマタ。次、
諦めたら承知しないわよ？」

ほむらちゃんが差し出した手を……

「うん!!」

私はギュッと握った……

薔薇^{きょうこ}は赤い

堇^{さやか}は青い

桃色^{まじか}は優しい

君も優しい

だから、私は枯れずに済んだのだ

くマザーグースのThe rose is redより一部引用く

第二十九話 救済算段（前書き）

やったね、なおちゃん♪前回の話は誤字脱字が無かったよ♪

最近、この言葉の元ネタの漫画（18禁）を興味本位に見て、鬱になった作者です（汗）

うん、そりゃあ、見るの止めとけて、皆止めるよねえ……

元々、18禁系は見たりやったりしませんので、耐性が無かったせいか、トラウマが大きすぎる……

プレイした事のある18禁ゲームは、戦国ランスと恋姫だけだったりする。

まあ、戦国ランスも鬼畜っちゃあ鬼畜何ですけどね（汗）

別のベクトルで……

昨日（4月30日）、LaLa全員応募サービスの『にゃんこ先生ピクニックセット（夏目友人帳）』が届きました（笑）

よし、これにゃんこ先生の可愛いペットボトルケースが手に入ったぜ＞＜

しかし、全員応募を頼むのは、本当に何年ぶりかなあ……

ARIAのARIA社長と、夏目友人帳のにゃんこ先生&黒にゃんこ先生は、本当に見てて和む（笑）

まあ、キュウベえは見てても、和むどころか殺意しか湧いてこないけどね（笑）

何で、同じマスコットキャラでもこんなに違うのだろうか（笑）

第二十九話 救済算段

魂之眼球を発動し、全てのホテルの部屋を確認した結果、ほむらちゃんの言う通り、杏子ちゃんは美樹さやか死体を、市内のホテルに持ち込んでおり、ソウルジェムを使って死体の鮮度を保つ作業を行っている。

「ほむらちゃん、部屋番号821に今杏子ちゃんは居るよ」

「分かったわ。フロントを一気に駆け抜けるから、私の手に掴まて」

フロントには職員がわんさか居る為、発見されないようにと、ほむらちゃんの時間操作で時を止めて、突き進むつもりだ。

普通に突き進んでも良いが、今の美樹さやかは死体であり、万が一、その死体を職員に見つけられた時は、当然真っ先に私達が疑われる。

同じ学校制服を着ており、利用客でも無いのにホテルに侵入である。

余計な騒ぎを起こさない為の、ほむらちゃんの思慮である。

少しフロントで寄り道をした後、階段を駆け上がり、部屋の前まで走る。

そして、扉に耳を当てる様に張り付き、中の様子を視覚だけでなく、聴覚でも手に入れる。

「そうまでして死体の鮮度を保って、どうする気だい？」

「こいつのソウルジェムを取り戻す方法は？」

中では、さやかちゃんのソウルジェムを取り戻す方法に関して、杏子ちゃんがキュウべえに訪ねていた。

「僕の知る限りでは無いね」

当然、私の知る限りでも無い。

というか、基本魔女は容赦なくサーチアンドデストロイなので、そんな事を考えた事もないからなあ……

でも、ほむらちゃんからキュウべえの企みが、魔法少女が魔女化する時の膨大なエネルギーの回収って聞いたんだけど。って事は、既に美樹さやかは魔女化した時のエネルギーは回収されており、美樹さやかを元に戻す事が出来るとすれば、それと同レベルのエネルギーを何処からか集めて来る必要がある……

魔女化する時にどれ程のエネルギーを生み出すかは知らないが、恐らくは火力や水力等の発電所とは比べ物にならないエネルギーって事は分かる。

でないと、ここまでキュウべえ達が固執して魔法少女を生み出す訳が無いしね。

「そいつは、御前の知らない事もあるって意味か？」

「魔法少女は条理を覆す存在だ。君達がどれほどの不条理を成し遂げたとしても、驚くには値しない」

「出来るんだな？」

「前例は無いね。だから、僕にも方法は分からない。生憎だが、助言のしようがないよ」

「いらねえよ。誰が、手前の手助けなんて借りるもんか!!」

「そうかい、じゃあ、外に居る彼女達の助けはどうするかい？」

キュウベえには既にバレてるみたいだね。

私とほむらちゃんは顔を見合わし頷く。意味は当然に部屋の外での盗聴を止め、中に入ると云う事。

「どういう事だ？」

「こういう事よ」／「こういう事だあ!!」

ドアを開き中に突撃する私とほむらちゃん。

えっ？ドアのロックはどうやって解除したのかった？

そりゃあ、フロントを一気に駆け抜ける際に、スぺアキーを拝借したのさぁ♪

だったら、ちゃんと描写しろって？そんなの、私に当たらないで、作者に当たってよ!!

「お、御前ら、どうしてここに!？」

「アマタの能力で見つけて貰ったわ」

「最強索敵能力を舐めないでよ♪私に覗けない場所は、地球の何処にも無いの。ほむらちゃんの御風呂シーンを覗く事なんて、の●太君がしず●ちゃんの御風呂場に、秘密道具を使って侵入するよりも容易いわ」

「だから、アマタが忠告した筈よ？こうなる前に、あそこで貴方が引いて居れば良かったのに」

うわぁーん！！相変わらず、皆が無視するぅー！！
折角、危ないネタまで使ったのに！！

「分かってる。こうなったのは全部アタシの所為だ、だからアタシがこの件に蹴りを着ける」

「美樹さやかを元に戻す気なのかな？悪いけど、一度壊れたソウルジェムは、もう復活できないよ。恐らく、キュウベえも知ってて、とぼけてるのじゃないかな？」

なので、皆に無視されなさそうな意見を発する。これなら、どう転んでも無視されまい……

ちなみに、これは鎌掛けも含んでの発言である。運良く凶星を突ければ、かなりの儲けものである。

「どうして、アマタはそう言い切れるのかい？暁美ほむらに何か言われたのかい？」

だが、相変わらぬのポーカーフェイスでいなされる。

何処かに読心術を得意とする魔法少女居ないかなあ………そして、キュウベえの思考を読み取って、色々と秘密が分かるのに……

「にやははあー、何で分かったんだろぅねえ？て云うか、これ以上アンタに調子に乗られるのも嫌なんだよねえ？だから、アンタの計画をぶち壊す。さっきも、アンタの所為で私まで魔女化しかけたしね♪」

「それは、僕の所為じゃないと思うんだけど……文句は佐倉杏子に言ってくれないか？」

「アタシの所為!?! えっと、もしかして、あそこでアマタを気絶させたからか?」

「杏子ちゃんの所為じゃないよ♪もう、何て言うか、こんな世界を作り出したこのフェレットもどきが、全ての元凶だから♪カラオケで100点が出ないのもキュウベえの所為、食べたかった御菓子が売り切れなのもキュウベえの所為、商店街のくじ引きで全部ポケットティッシュなのもキュウベえの所為、作品の誤字脱字が目立つのもキュウベえの所為なんだよ?」

「本当に不条理な話だよ……僕は変なレッテルを沢山貼られて、迷惑極まりないよ。それに、最後のは明らかに僕の所為じゃないよね?」

ちっ、キュウベえの癖に反論しちゃってさ♪
そっちが、その気なら♪

「じゃあ、まともなレッテルを貼ってあげるね♪ぺったんぺったん♪」

「うん、僕の体にシールを貼らないでくれるかなあ?」

杏子ちゃんが飲み食いしている包装についてるシールを綺麗に剥がし、取り敢えずキュウベえに張り付ける。

31円とか、半額とか、70%OFFとか、御勤め品とか♪

「なら、私も手伝うわ」

「君もかいっ!? 曉美ほむら!?!」

おお、ほむらちゃんノリが良くなったなあ♪
一緒にぺったんぺったん♪やったね、キュウべえ♪家族シールが増えたよ♪

コロちゃんと一緒に、半分引き千切って、ゴミ箱にぶち込んであげよっか♪

ちなみに、意味が分からない人は絶対に調べない事をお勧めするよ♪

調べた日には更新2日前の作者と一緒に目に会うから♪やったね、作者♪鬱になる人がまた増えたよ♪

「手前等、ふざけてる場合か!!」

「でもねえ、真面目にやっても美樹さやかが、蘇る訳じゃないんだよ？残酷な話だけど、本当に杏子ちゃんが美樹さやかの事を、考えているんなら、決断しなよ？魔女としてこれから彷徨い続ける運命から、彼女を開放してあげる可否かを」

「分かってるけど……でも……折角、さやかとは友達になれたのに、ここで別れたくないんだよ……もっと、アマタとみたいに話したりしたかったのに……」

やるせない悔しさを拳に乗せて、床を強く叩く。

その言葉に私達は何も言えず、彼女の悔しさと後悔を、黙って見る事しか出来なかった。

流石に、杏子ちゃんと美樹さやかの関係がそこまで行ってるとは、私は思っていなかったので、少々キツイ言葉を考えずに言ってしまったと、後悔してしまう。

「Little Bo Peep has lost her s

heep. And can't tell where to
find them. Leave them alone, A
nd they'll come home, Wagging
their tails behind them.」

だけど、その静かな空間を打ち砕かんと、ほむらちゃんが口を開
き、流暢な英語で詩を詠う。

「何だよ、それ？」

当然、学校に行っておらず、あまり知識の無い私には『アンド』
という言葉より言語が英語であると判断するのが精一杯であり、意
味までは理解出来ず。杏子ちゃんも、同様に理解出来てないようだ。

「羊は心配しなくても返って来るわって意味よ。だから、こんな所
で悩むのは道化^{ピエロ}のする事……本当に取り戻したいのなら、例え無理
でもやってみましょう。アマタも協力してくれるかしら？」

「えっ！？絶対に無理なのに、どうしてさあ！？」

「新しい可能性を見つけないの……」

にゃはあく、成程ね♪

この言葉の本質を見抜けるのは、ほむらちゃんが逆行者である私
だけ。

もし、この世界で目指す未来が万が一無理だったとしても、今回
の件が次回で何かしらの役に立つかもしれないからと云う事。

万が一、魔女を魔法少女に戻す方法を見つければ万々歳だし、
見つけなかったとしても今回手に入る知識は今後役に立つ。

でも、口ではそう言ってるけど、内心では杏子ちゃんの為に動い

てあげようとしてるのではないかなあ？

だって、ほむらちゃん、美樹さやかの事が私と一緒に大っ嫌いだし♪

普通なら、大嫌いな相手の為に、未知の領域にまで突っ込んでまで助けようとも思わない筈よね？

もしかして、杏子ちゃん的美樹さやか友達発言で、少し気が変わったのかな？

友達を助けたいと言う思いは、人一倍ほむらちゃんは理解してるしね♪

「成程ねえ、分ったよ♪じゃあ、ちっと作戦会議すると思いますかい？」

そして、作戦会議と云う名のティータイムが何故か始まってしまったのだ……

勿論、杏子ちゃんの持って来た食料を分けて貰って♪

真っ赤な服を着た羊飼いが羊をなくした

いったいどこへ消えたのでしょうか

心配しなくても かえって来るさ

尻尾を振り振り お前のところへ

♪マザーグースのLittle Bo Peepより一部引用♪

第三十話 そうだ学食に行こうII（前編）（前書き）

スラマツパギー（おはよう〜）（ハオハ）ノシ

カラオケのDAMにmagnet（ボカロ曲）が入ったので、かなりテンション高めのnanaoです♪

ダブルリアットとmagnetが揃い、後はマトリョシカが入れば最高だと思ってます。

最近の高い声が出なくなって来た代わりに低い声が出始めたので、色々曲の幅も狭まって来た（泣）

先日、本家の方（実家じゃないですよ（笑））に、枇杷^{びわ}を収穫（訂正…貰い）に行つて来ました♪良いですよね、枇杷♪

果物では、枇杷とザクロと桃と柿と梨が特に好きだったりする♪あつ、青森のリンゴとか、宮崎のマンゴーとか、愛媛の柑橘類も当然好きですよ〜！！

年がら年中、ドライマンゴーやらドライイチジクやら干し柿を口に啜ってますし。

まあ、マンゴーの産地は宮崎じゃないけどね（笑）

筍の方も序に行きましたが、まだ早かったのか、少ししか取れませんでした（泣）

と、田舎の良い所をアピールして、前書きを終了♪

ただし、本家から一番近いコンビニまで車で数十分（笑）

ママシ、イノシシ何でもござれですぜい（笑）

<最近のマイブーム>

Redbull

美味しいとは思わないが、カフェインが適度に摂取できるので、愛飲中。
ただ、値段が高いのがたまに傷……

第三十話 そうだ学食に行こうII（前編）

その晩に、美樹さやか復活案として出て来たのは……

？まどかを使って人間だった頃の自分を思い出して貰う

杏子ちゃん案だが、まどかちゃんが危険な目に会うのではむらちゃんに即効で却下された。

？魔女を拷問して、魔女として生きるのを鬱にさせたら、グリーンシードが破れてソウルジェムが生まれるんじゃないね

私の案だが、残念ながら両名より却下される。

？美樹さやかの死体を御神体^{まじよ}に捧げてみる

また私の案だが、死体が握り潰される恐れがあると却下された。

？取り敢えず、魔女を殺す

またまた私の案だが、遂に皆から無視をされ始める。

？上条とブルジョワの両名を、美樹さやかの魔女の前に連れて行ってみる

火に油を注ぐ事になり、死者を増やす気かと怒られた……

その後も沢山の案が出る物の、どれ一つとして上手く行きそうな物は無かった為、結局？の案で決定する事になった。

ただし、杏子ちゃんの魔法で、まどかちゃんを魔女から守る防壁を生み出し、その壁の向こうから美樹さやかの魔女に呼び掛けると云う物である。

更に、私とほむらちゃんがまどかちゃんの直ぐ隣で、しっかりと彼女をガードして、まどかちゃんに傷一つ付けられる事の無い状況

下と云う条件で。

また、万が一まどかちゃんが危険に晒されると判断した場合は、即座に作戦中止とし撤退をする。

話し合いが終わると、しっかりと睡眠を取って翌日に備える。

決行時刻は夕刻。まどかちゃんとほむらちゃんが学校を終わり次第、まどかちゃんを連れて、美樹さやかの結果に侵入して作戦を決定する。

まどかちゃんに大体の作戦内容は、ほむらちゃんが学校の方で話しておくらしい。

二人の学校が終わるまで、当然私と杏子ちゃんは暇になり、更に昼食をどうしようかとの話になった為……

「それで、貴方達は制服を着て、ここで何をしてるの？」

「おぎゃんおすう♪遊びに来たよぉ♪」

「よお、暇だったから来たぞ」

「杏子ちゃん、アマタちゃん!？」

恒例の学食へ再び潜入。

ちなみに、杏子ちゃんの制服を手に入れる為に、例の汚物ほけんいには再びオネンネして貰いました♪

ああ、やだやだ男って♪本当に汚らわしいんだから♪

学食の席に座るや否や、念話でほむらちゃん及びまどかちゃん両名を呼び出し。

それで、今に至る訳♪

あっ? 『おぎゃんおす』って何か分かるかなあ?

簡単に言うと、『もしもしひねもす』と同じような意味だよ♪

「ほらあ、弁当組の二人も座った座った♪」

早く両者には席に座って弁当箱を開く様に促す。

ほむらちゃんは私の襲撃が式度目なので、素直に諦めて席に座り、手に持った弁当を机に置いて、弁当箱を包む布を取る。

まどかちゃんは、未だ理解できてないのか、ちよっと困惑しており、戸惑いつつ着席し、弁当を机に置く。

うん、まどかちゃんの弁当箱の包みは桃色水玉かあ♪そして、ほむらちゃんは黒猫さんと♪

二人とも可愛いの使ってるじゃないの♪

ちなみに、私達の昼御飯は、私は坦々麺で、杏子ちゃんは御飯（特盛り※大盛りの進化系※）、チキンステーキ、塩サバ、林檎入りサラダ、味噌汁と豪い豪勢な事に……

しかも、お支払いは私に押し付けるし……後で体で代金を支払って貰おうかな？

厭らしい意味は勿論……ナイヨ？

「まどかちゃんは、ほむらちゃんからあの事聞いた？」

「はい、私頑張ります!!」

やる気は十分。まだ助けられる可能性があると分るや否や、多少は元氣になってるね。

「美樹さやかは本当に、皆に愛されてるんだねえ……」

「アマタもだろ？」／「アマタもでしょ？」

爺臭く茶を啜り呷くと、私も同様に皆から愛されてると、杏子ちゃんとはむらちゃんより言葉が返ってくる。

「えっ？きやあゝ、私にはマミさんって心に決めた人があゝ♪」

少し照れ臭く恥ずかしいので、照れ隠しにオチャラけて返答するが……

「シバクぞ？」

うん、言葉より先に手が出てるよ……

思いつきり、杏子ちゃんに叩かれたんだけど？物凄く良い音がしたんだけど！？

「もう、叩いてるし……杏子ちゃん、暴力はんたゝい！！」

杏子ちゃんに頭を叩かれました……

「ふふふ、アマタちゃんって本当に面白いね」

そんな私と杏子ちゃんの夫婦漫才が、面白かったのだろうか。

まどかちゃんの顔に笑顔が見える。

ならば、更に笑顔の花を咲かさんと、笑いの花咲か爺アマタちゃんが、皆が笑顔になる魔法はいをばら撒こうではないか♪

「むむうゝ♪そんなに、面白いかい？なら、更に面白くする為に、ちょっとしたマジックを見せてあげようか？その名も下着当て、ぐへっ！？」

「好い加減にしろ」／「好い加減にしなさい」

ふっ、二人の突っ込みで女の子らしくも無い悲鳴をあげてしまったわ。

この優雅で高貴で全女性の憧れの的のアマタ様が、こんな潰れた^{かえる}保険医がする様な悲鳴をあげるなんて……

「あははは、そんな殴る事無いじゃん。別にまどかちゃんの今日の下着が桃色ストライプだからって♪そう言えば、昨日は猫ちゃんプリントだっけ？あれも、可愛かったよお♪」

「きゃあああああ!!」

行き成り自身の下着を暴露されたのか、顔を羞恥心で真っ赤に染め、スカートを両手でしっかりと押さえて、可愛い悲鳴を♪

既にスカートの中に魂之眼球を潜ませてるから、別にスカートを押さえても意味無いけどなあ♪

それと、私って結構S気が強いのかなあ♪ちよっと、まどかちゃんの恥ずかしがる顔を見てると、ぞくぞくして萌えちゃった♪

「本当にキュウベえも、アマタに碌な魔法を渡さねえな……」

「アマタの願いが眼球に関係するから、こうなっただけ。アマタの願いが別だったら、こんな魔法じゃない筈よ」

「下着を覗かれる被害者も減ったって事かい？」

「そうね……まどかの下着も覗かれる事は無かったでしょうね」

「ほむらちゃんも杏子ちゃんも、下着下着連呼しないでよ!!」

「ほらほら、まどかちゃん声が大きいよ。皆、見てるよ？」

やったね、食堂の皆の視線を独り占めだよ♪

元凶である私が言うのも何だけど、流石に女の子が、大声で下着
って単語を言うのは拙いと思うなお♪

かなり涙目になって来たので、本格的に泣かれても困るから、取
り敢えずこれ以上辱めるのは、止めておこう。

「あははは、御免ねえ♪ちょっと雰囲気良くしようと思ってね
♪」

「逆に気拙くしてるぞ？」

「気にしちゃ駄目♪弘法にも筆の誤り、河童の川流れ、猿も木から
落ちるって言うでしょ♪」

「いただきます」

「えっ!？」

うん、普通に二人ともスルーして、御飯食べ始めたよ……

まどかちゃんは、二人の反応に驚き、どの様に反応して良いのか
悩んでるねえ。良いよねえ、こういう優しい性格の子って♪

まどかちゃんは私の嫁BEST20に入るくらい良い子だよ♪ち
なみに、1位はママさんだよお♪

「まあ、二人の無視は何時もの事だから気にしなくて良いよ。あつ、
処でまどかちゃんとはむらちゃんの弁当って自分が作ってるの?」

「御母さんに作って貰ってるわ」

「私の御弁当は、御父さんが作ってくれてるの」

二人とも残念ながら自分の手作りではないと。

でも、まどかちゃんの‘くれてるの’と云う台詞から、まどかちゃんの御父さんが毎回弁当を作ってるみたいに取れるのだけど。

御母さんじゃなくて、毎回御父さんが作っているのは、どういう家庭事情が有るからなのかな？

はっ！？まさかまどかちゃんの御母さんは、まどかちゃんが幼い頃に無くなってるのか！？それで、御父さんが男手一つで、娘を育て上げていると云うドラマチックで胸熱的な展開なのか！？

「そうなんだ、二人とも本当に美味しそうだね♪」

おっと、作戦前にまどかちゃんの御母さんの話は止しておこう。
もし、本当に男手一つな家庭だったら、その話題を出す事で場の雰囲気을暗くしたら拙いし……

なので、ここでは最善の返事として在り来たりな、こちらのメッセージで返信を行う事にする。

選択は正解。まどかちゃんは自分の御父さんの弁当が褒められて、照れくさそうに後ろ頭を軽く搔く。

さて、無事に雰囲気を保った所で♪

後編に続く！！

それと、メタ発言上等！！

「もしも」と「そして」が

メタ発言と誤字脱字だったら

作者（n a o n a o）はお役目御免

マザーグースの If ifs and andsより一部引用

第三十一話 そうだ学食に行こうII（後編）（前書き）

バイトがけいおんフェアの所為で何時も以上に疲れたnaonoです……

御蔭で、最新話の更新時間が8時では無く11時になってしまいました（汗）

←以下客とのやりとり……

「何時からうちわは出るんですか？（朝5時くらい）」↓「7時からです……」↓「いったい何人の客が聞いてきたやら……御願ですから、HPをしっかりと見て来て下さい」

「すみませんが、うちはは1回のお支払いで各キャラ1枚ずつとなってます」↓「ちっ（舌打ちされる）」↓（。＼＼＼）ピキピキ……

「遊びに来たぞ♪（怒り状態の数分後、友人が襲撃）」↓「（客が多いので相手にせず完全無視……）」↓「お会計2100円（正確な数値は忘れた……）になります」↓笑顔の友人に万札を出される↓その後も溜まり続けたストレス発散の為に、大学で友人に蹴りを入れる

「あずにゃんのうちわ無いんですか？」↓「申し訳ありませんが、あちらに飾られてないキャラのはもう有りません（実は午後から出すのが有るけど、出してはいけないと言われてる）」↓ムギちゃんとりっちゃん隊長涙目……

割愛しますが、他にも色々有りました（泣）

ちなみに、自分もちやつかり各キャラ1枚ずつちゃんと手に入れます♪

あっはっは、今晚は焼きそばとカレーパンだな（笑）

ちなみに、放課後ティータイムズの中ではりっちゃん隊長が一番好きかな♪

<今日のマイブーム>
チェリオのライフガード

第三十一話 そうだ学食に行こうII（後編）

食事中の会話は、美樹さやかを救う会話に関して。

当然、口を用いた会話で話すと、他の人間に聞かれてしまう恐れがあるので、念話での会話となる。

まあ、念話だと念話でキュウベえに聞かれてしまい、変な方向に作戦を持って行かれてしまう恐れも有るのだが、致し方ない。

ほむらちゃんの過去の体験で、まどかちゃんと契約する為に、ワルプルギスの夜が来るまでにほむらちゃんを除く全ての魔法少女を、情報等を与えずに魔女にぶついたり、魔法少女の秘密を突然暴露して魔女化させたりと、様々な悪意で死に至らしめたりした事も有るらしい。

その時に、キュウベえが敢えてほむらちゃんだけ生かした理由は、ワルプルギスの夜が攻めて来た時に、魔法少女が誰も居ないよりも、親友が魔法少女をやって危険な状況下に置かれている方が契約を取り易いかららしい。

『僕も混ぜて貰えないかな？』

当然、事象とは心配する方へと進む物である。

案の定、危惧していた通り、キュウベえが念話へ乱入して来るものの、この闖入者を当然快く迎える人物は居らず。

『帰れ、何しに来た？』

以前以上に刺々しく言い放つ杏子ちゃんに、声が聞こえた途端に少し怯えるまどかちゃん。

『僕が少しでも助けてあげれないかと思ってね。僕なりに他の知り合いに聞いて廻って調べたけど、過去に1件だけ助かった記録があるらしいよ』

『『本当!?!?』／『本当か!?!?』』

そのキュウベエの言葉に私を含めて、皆一様に喜びを見せるが、ほむらちゃんだけは全くその様子を見せない。

恐らく、理由としては、そのケースの条件の方であろう。

『まどかが魔法少女になるってのは駄目よ?』

現に、私の思ってた通りの突っ込みを入れる。

幾ら美樹さやかが助かったとしても、まどかちゃんが魔法少女になったのでは本末転倒である。

『勿論、僕としても、そっちの方が手っ取り早くて良いんだけどね』

『もったいぶらずに、さっさと教えなさい』

キュウベエの言い方から、契約以外で魔女から魔法少女に戻った者が居ると云うのが分かる。

なので、焦らさずさっさと言えと突っ込みを入れる。

『うん、実はね。救った魔法少女の能力が『言霊』と呼ばれる非常にレアな魔法だったんだ』

言霊とは、日本において言葉に宿ると信じられた霊的な力のことで、言葉自体が魔法で有り能力を持つと云う物。

例えば、『燃えろ』と発言すれば、対象物を燃やしたりする事を

可能とする。

恐らく、この魔法が手に入りそうな契約と云えば、言葉に関する契約だねえ……

『やっぱり、役に立たないわね……失せなさい……』／『だあ！
！そんな能力有る訳無いだろ！！』

案の定、結局は役に立たない情報だったので、杏子ちゃんとほむらちゃんよりヤジが飛ぶ。

でも、言霊ねえ……杏子ちゃんの契約が『父親の話を皆に聞いて欲しい』って感じだったから、杏子ちゃんが扱えても良さそうな魔法だよねえ♪

もしかして、まだ杏子ちゃんは魔法少女として成長段階にあるのかなあ？

だから、能力が……って、そんな訳無いよね。だって、初めから契約に沿った魔法や能力は使えるんだから。

でも、この間の委員長の魔女戦の時に、キュウベえが新しい使い魔の可能性を言ってたよね？

他にも、魔法少女が召喚できる武器は、成長と共に増える事もあるしね……

私が最初に使ってた武器は拳銃だけど、マミさんと出会った事でマスケット銃、ライフル銃と次々とヴァリエーションも増えたからね。

ただ、銃以外の刀とか槍とかは、幾ら召喚しようと頑張っても召喚が出来ないんだけどね……

ああ、折角希望が見えて来たと思ったのに……

絶望したっ！！この、役立たずのマスコットキャラに絶望したっ！！

『まあまあ、ちゃんと最後まで話を聞きたまえ。君達の悪い癖だよ？』

『じゃあ、最初から全部事を話さないよ。アンタの悪い癖だよ？』

『それは君達が聞いて来ないからだよ？僕だって、聞かれない事をペラペラ喋る趣味もないしね』

ああ言えばこう言う、こう言えばああ言う……今、ここが学食じやなかったら殺してる所だよ……

他の人が食べてる料理の中に、キュウベえの生肉が混入して、それが見えずに間違えて食べてしまった生徒達が、食中毒とか起こしたら困るからね。

学校の食堂の方達に多大なご迷惑をかけちゃう恐れがある訳だしね♪

そう言えば、前も言ってたけど、キュウベえって食用なのかな？そして、生食は出来るのかなあ？

ちっ！！作者がガミガミ言い始めたから、ここでこの話は終わり♪私の物語りなんだから、私の自由に進めて何が悪いのかしら？

苛立ちを抑えつつ、御茶を一啜り。

『最初にその子が、普通に魔法少女に戻れて言っても魔女は魔法少女に戻らなかったけど、別の方法で魔法少女に戻したらいいんだ』

キュウベえはピジョンブラッドの目を閉じ……

『それは、【感情を取り戻せ】って命令だったんだよ』

その言葉に、今から自分達が行う作戦の目的と似ていると、喜び

を顔に出す杏子ちゃんとまどかちゃん。

ちなみに、ほむらちゃんは、作戦成功までは笑顔は見せれない様子。

そして肝心な私は、全く別の事を考えている。

以前も言ったが、美樹さやかを元に戻す事が出来るとすれば、魔女化した時に放出したエネルギーと同レベルのエネルギーを、何処からかき集めて来る必要がある……

感情の起伏だけで、同エネルギーが集められる可能性は当然ないと思う。希望が絶望に満ちた時と同レベルのエネルギーが必要な筈だ。

キュウベえは口にしてないが、恐らく、その魔女を魔法少女に戻した魔法少女は、その命令を実行する際に相当なエネルギーを必要とした筈だ。

しかし、何処から同レベルのエネルギーを収集しようかねえ？

あれ？同レベル？

それって、もしかして……

私はちよっと思ひ浮かぶ事が出来たので、キュウベえと私のみの念話のチャンネルを開く。

皆に聞かれてない方が、好き勝手に出来るからと云うのも有るが、折角皆が意気揚々としている雰囲気壊したくないからってのが本音かな？

『ねえ、キュウベえ。思春期の少女の感情の、希望と絶望の相転移がエネルギーを産み出すでしょ？』

『そうだよ。常に目減りしている宇宙の枯渇を防ぐ為のエネルギーさ。宇宙のダークエネルギーにも限界があるからね』

ダークエネルギーとは、真空エネルギーやクインテッセンスや反重力性質物質等の事であり、まだ未知のエネルギーの一つである。

宇宙誕生後に一役買ったこれ等のエネルギーは、何も無かった宇宙空間に、有を生み出したエネルギーである。

これこそが、アインシュタインの質量保存の法則である『 $E=mc^2$ 』を打ち破るエネルギーである。

だけど、有を生み続ければ、当然無と云う列車は消滅する運命の路線へ乗せられる。無の存在していた場所には何かしらの有が陣取ってしまう。

それによって、無の空間と一緒にダークエネルギーも消滅してしまい、宇宙に残されるのは何の役にも立たないどころか、有害にしなければならないゴミの有だけが残る羽目になる。

キュウベえ達は、それを危惧して目減りしない新しいエネルギーを求めた結果、人間達と出会い、その人間達の感情と云う物を利用する事にしたのだ。

えっ？何でこんな専門的な事を私が知ってるのかって？

そんなん、作者に文句言ってよ！！

『じゃあさあ、逆に絶望が希望に変わる時は、エネルギーを産み出すのかなあ？』

『どうかなあ？魔法少女達の絶望が希望に変わるなんて所を、僕は一度も見た事がないから、エネルギーを産み出すか、それとも世界のエネルギーを飲み込むかは僕には見当もつかないよ。でも、結局は魔女化と逆の原理だから、同レベルのエネルギーを放出するなり吸収するなりはしそうだね。それが出来ればの話だけどね。魔女に話が通用するなんて事自体が、有り得ないし』

ふーん、でも、もしかしたら……まどかちゃんに呼び続けて貰うより、私が新しく思い浮かんだこっちの方が、作戦成功率は高いかもしれないね……

『キュウベえ、ちょっと面白い事を思いついちゃったから♪実行するね♪それと、今の質問は皆に内緒にしないよ♪もし、話したら……』

再度御茶で、一息つき……

『眼球を刮り抜くからね?』

スカートのポケットより銀色のスプーンをチラつかせた……

幕間　く幸せ探しく宗教と犯罪と幸せと心理くく（前書き）

本日はこちらです♪

次話更新は多分、明日か明後日に予約を入れる予定です。

この幕間に、意味なんて無い。

見る人読む人が、沢山の意味の取り方をしてくれれば良いという御話です。

それと、遂に次話であの男が登場します（笑）

漸くの出番ですよ（汗）

あっ？まどかであの男って言ったら、名前まで言わなくても誰だか当然分りますよね？

＜追記＞

「俺のチョップはCDを破壊する！！」こと、チョッパー上条君です（笑）

※笑顔でたつやとか中沢君って答えそうな人『達』に心当たりがあったので、やっぱり追記しました……

幕間　〈幸せ探しく宗教と犯罪と幸せと心理〉

先ず、諸君に幸せとは何だろうかと問わせて貰おう。

宝くじが当選する？テストが満点だった？結婚した？彼女が出来た？給料を貰った？

恐らく、沢山の意見が出て来るであろう。

だが、その中でも最も多いと思われるのが、何一つ不幸が無かったではなからうか？

では、今度は不幸とは何であるかと問わせて貰おう。

怪我をした？間違いをした？テストの点数が悪かった？財布を無くした？彼女に振られた？離婚した？盗難にあった？

こちらにも、十人十色、同様に多くの意見が出る事は言うまでもなからう。

だが、幸せも不幸も、その心理とは平均より上か下かとなる。

大多数の人間よりも自分が幸せで有れば、その人間は自分の事を幸せと思う。逆に大多数の人間よりも不幸せであれば不幸だと思う。特にそれは、宗教の布教活動で多くみられる。

何故、信者は宗教を布教しようとするか分かるかな？

「私はこの宗教を信じて幸せになった。貴方も入りませんか？」

信者共はこの様な愚の骨頂な台詞をばら撒く。

実はこの台詞の中に、自分をより幸せと信じ込める因子が詰まっている。

それは、何処の部分か諸君には分かるかな？

多くの人間は台詞の前の方だと思われるだろう。それもそうであろう、自分が幸せだと断言しているのだ。

だが、答えはNOである。

『貴方も入りませんか?』と云うこの台詞に、実は有るのだ。

貴方も入りませんかと問う意味は、何であろうか?

それは、その問い掛けた相手は自分より不幸であると思っているからだ。

つまり、それを問い掛けれる自分は、幸せの平均より上で居ると感じれる瞬間である。

自分が幸せだから、他の人も幸せにしてやろうと云う上から目線の台詞である。

他にも幸せになれる瞬間はある。

例えば、殺人等の犯罪である。犯罪を行った直後は、被害者は自分よりも不幸な人間だったと錯覚させられる。

そして、自分と同じ立場に恨んでいた人間が堕ちた時である……

人間とは幸せの為に運命に抗う愚かな生き物である……だが、同時に、未来を探そうとする探検者でもある……

だが、忘れないで欲しい。

決して正しい努力以外で手に入れた幸せは、脆く、儚く、他人を不幸に追いやった上で成り立つという事を……

<宗教と犯罪と幸せと心理より>

幕間　〈幸せ探し／＼宗教と犯罪と幸せと心理〉〈後書き〉

この文章の意味？

さあ、何でしょうね？

自分にも分りません（笑）

第三十二話 上条恭介（前書き）

ええ……ちよつと、本家の方で色々と有り、なろう所の騒ぎじゃ無かったので、更新が遅れました（汗）

長男って、こういう時はする事が多いんだよねえ……

まあ、あまり（訂正…確実に）明るい話ではないので、ここでぶつた切ります。

漸く、上条恭介の出番です。

あと、これは本日の朝の空いた時間に予約投稿セットしたものであり、自分はもうちよつとする事があるので、明日くらいには完全に復帰したいと思います♪

第三十二話 上条恭介

食事を早々に終え、図書室で本読んで来ると皆に伝えて私はある場所を目指す。

私の新しい作戦を満たすには3つの条件が必要となる。もし、この世に神様なんて物が居るなら、その全ての条件を叶えて欲しい物だよ。

奇跡も魔法も有るなら、私を中心に世界が廻りなさい！！

既に目当ての人物が居る位置は魂之眼球で確認済みである。それはとある教室のとある男子生徒。

その男子生徒が居る教室の扉の前に着くと、一気に扉をスライドし、教室の中に入る。

クラスの生徒全員は、闖入者である私へと一斉に視線を向けられ、一部の生徒からは「誰、あの子？もしかして、先輩？」と囁かれる。恐らく、先輩による生意気な後輩への制裁ではないかと勘違いされているのであろうか、私の進行進路に居る生徒は一斉に脇へと素早く避ける。

『雀の子 そこのけそこのけ アマタ様が通る♪』　　♪アマタ様♪

と、その光景を元我心中で一句詠みつつ、御目当ての人物こと上条恭介の元へと一直線に向かう。

その肝心な上条恭介は、「目玉焼きとは、固焼きですか？半熟ですか？ハイ上条君！！」
モブキャラと他の男子生徒より謎の質問攻めを喰らっている。

「どっちでも良いだろ？中沢……」

うん、物凄くどうでも良いと思った。

「そう、どっちでも良いんだよおおおおお！何で、毎回授業中に当てられないといけないんだよ！？しかも、上条が退院する前日は何だったと思う！？」

頭を両手で抱え粗ぶるモブキャラこと中沢。実に愉快的男子生徒ねえ……

ていうか、授業中に何でそんな質問ばかりされてるの……

「さあ？」

当然、上条恭介は入院しているので何を質問されたかは分かる筈もなく、首を傾げる。

「紅茶とは、ティーカップですか？マグカップですか？ハイ上条君！！！」

そして、そんな回答を待っていたかのように、上条恭介が首を傾げた直後に叫ぶ中沢。

しかし、これは聞き捨てならない質問だねえ？

「本当に紅茶が好きな人なら、常識的に考えてティーカップでしょ？」

紅茶好きの私としては、許せない見過ごせない質問なので、会話に乱入し答える。

「そう、どっちでも……って、えーっと、どちら様でしょうか？」

上条恭介が先と同様に「さあ？」と返して来ると頭の中に有ったらしく、即座に返すが、途中で明らかに上条恭介の声ではなかった事と目の前の私に気付いて、遠慮がちに尋ねて来る。

「気にしちゃ駄目よ。上条恭介、ちょっと話が有るわ。ツラを貸しなさい」

私の上条恭介の呼び出しに、騒然とするクラス。
特に上条の事が好きなブルジョワが、一番慌てた様子を見せる。

「ここじゃあ、駄目なのかな？」

「美樹さやかに関する話よ……今日彼女が学校に来てないでしょ？もし、彼女に迷惑が掛かってても良いなら、ここで大きな声で話してあげるわ」

明らかに私に対する警戒心全開なので、説得に時間をかけるのも面倒臭いし、ここは美樹さやかを使う事にしよう。

私は、上条恭介の耳元に顔を近づけて、小さな声で囁く♪
ふっふっふ、何か悪役っぽくて良いよね♪

「分かった……中沢、続きはまた後でな」

「お、おう……」

にこやかな私の笑みとは反対に、真剣な顔、少々敵意を含んだ眼差しで私を見て来る上条恭介。

まあ、別に私に敵意を向けるのは構わないんだけどね？
さってつと、取り敢えずは誰にも話を聞かれそうにない屋上に連

れ出すとしようか♪

「じゃあ、ついて来てくれる♪」

教室から上条恭介を連れ出す私に何か言いたそうなブルジョワだが、その勇気がないのか悔しそうに俯くだけである。

これが、美樹さやかだったら絶対に噛みついて来そうなんだけどねえ？

ちなみに、上条恭介はそんなブルジョワの様子に気付く事もなく、私の背中に視線を向け続け、まるで子鴨の様に親鴨わたしの後を歩いて来る。

ブルジョワに気付かないなんて、美樹さやかの事が相当心配なのかな？

まあ、それは私にとっちゃ好都合♪更に、異性として好意を向けてくれれば尚更好都合♪

あつ、そういえば皆にはまだ私の新しい作戦を話して無かったっけ？

あと少しで、屋上に着くから、新しい作戦についてはちよつと待ってね♪

今は、屋上へ上がる階段を登ってる最中だから♪

さあて、階段を上り終えたから、目の前には屋上へと通じる扉が見えたよ♪

私はその扉に手をかけて、屋上へと出た……

「さあ、話してくれ！？さやかに何をしたんだ！？」

屋上に出るや否や、先程まで静かだった上条恭介は口を開く。

てかさあ、私が美樹さやかに何か仕出かした様に取り立てるんだけど……

「美樹さやかなの事を凄く心配してるんだね？ やっぱ、幼馴染だから？」

まあ、良っか♪取り敢えず、私の作戦が実行出来るかをチェックしないとね♪

以前聞いたほむらちゃんの過去の情報では、上条恭介と美樹さやかが付き会ってた世界も有るらしいね♪

えっ？何が言いたいのかって？

簡単な話だけどね、希望が絶望に変わる時のエネルギーと絶望が希望に変わる時に移動したり、生まれるエネルギー量は、相反するだけに、同じじゃないかって、私は思ってるの。

キュウベえの話で魔法少女から魔女へは一方通行ではなく、魔法少女へ戻って来る事が可能である事が分かった。

なら、絶望して魔女になった美樹さやかを幸せにすることで、魔法少女に戻せるのではないのかと私は睨んだ。

つまり、上条恭介が美樹さやかなの事が本当に好きであり、人ではなくなっているても美樹さやかを愛せるのであれば、彼を魔女の前に連れて行って告白させようと考えているのだ。

まあ、あんまり好きじゃなくても、無理やり告白させれば良いや♪でも、無理やりの場合は、元に戻ったとしても、それが表面上の同様と美樹さやかが知ると、また魔女化しそうな気もするなあ……あっ♪ソウルジェムを私か杏子ちゃんが預かって、濁りを見せたら即浄化すれば良っか♪

ああ、そうそう安心して♪もし、成功しなくても、上条恭介の方の記憶は操作して、何も無かった事にするから♪

「何で僕とさやかが幼馴染の事を知ってるんだ？」

「何でだろうねえ♪」

「人をからかうのは好い加減にしろ!!」

おお、こわいこわい♪上条君激怒だよ♪

「からかってはいないよ？でさあ、美樹さやかの事はどう思ってるのさ？」

手を軽く振りながら、軽く尋ねてみる。

「さやかは、大事な幼馴染だ」

出たあ……恋愛アニメとかで定番な優柔不断な主人公の迷台詞

……

女の子が、一番聞きたくない回答だよねえ♪

そして、男友人キャラ達が切れやすい台詞♪

「ふーん？恋人とかじゃないんだ？」

「違う……確かにさやかの事は好きだけど……って、今はそんな話じゃないだろ!!」

おお、今本音ポロッと漏らしたぞ♪

警戒心で緊張してた所為か、今本音をポロッと♪

「にゃははは♪美樹さやかの事が異性として好きなの？さっきの、

志筑仁美って子が貴方に好意を向けてたと思うけど？ あっちの子は良いの？ 先日仲良く下校してけど？」

「どうして、君はそんな事まで知ってるんだ？ 僕に何を求めているんだ！？ そして、何が言いたいんだ！？」

アンタが、「僕は美樹さやかの方が世界で一番好きだ！！ 愛してる！！」って言う事だよ！！

「くすくす、貴方の思いをちょっと知りたいだけ。じゃあ、直球に聞くんね？ 美樹さやかと志筑仁美どっちが好き？ あっ、勿論異性としてだよ？ 友達としてとか答えたら、眼球抉るから♪」

ここで、さっきの教室の中沢が言っていた台詞をテンプレにして、「彼女にするなら、美樹さやかですか？ 志筑仁美ですか？ ハイ上条君！！」って言おうかと思ったが、絶対に雰囲気が悪化しそうな気がしたので止めた……

というか、そんな聞き方をした日には、もう何を聞いても、答えてくれなくなりそうな気がしたので……

「僕は……さやかが好きだ……」

彼は私の望んだ通りに答えた…… 神はまだ、私達を見捨てた訳じゃなかった……

見滝原のさやかちゃんが
あるとき魔女になりました
そこへ親切な魔法少女が
彼氏と恋を運んできました

マザードグースのLittle
Jenny Wren fell
sickより一部引用

第三十三話 **F o r w a n t o f L o v e**（恋さえあれば）（前書き）

久し振りの連続投稿です。

出来たてはやほやなので、中身が非常に崩れ変わりやすいです（汗）
中沢君全面押し作品、『一般生徒なかざわ☆ラックス』（※Lu
x…ラテン語で輝くの意味）を作りたいなあと最近思ってる。中沢
君の何気ない日常を綴る作品を（笑）
ただし、最後にはワルプルギスの夜の暴風で飛ばされてしまうエン
ドですが……

「ほむらちゃん、僕が助けに……うわっ、風に飛ばされてしまった
あゝ！！ 助けてえええええ！！」

的な？

うん、書くのは止めておこう。

ちなみに、サブタイトルは、今回はマザーグースの詩のタイトルを
振った物にしました。

<オマケ>

某ディズニーのアニメの話になった際の、友人と自分の大学でおふ
ざけ会話より

友人「鬼に？」

自分「もも太郎」

友人「猫に？」

自分「蓋の開いてない鯖缶」

友人「仏の顔も？」

自分「露知らず」

友人「八方？」

自分「菜」

第三十三話 **F o r w a n t o f L o v e**（恋さえあれば）

「うん、聞きたい答えが聞けたよ♪ さっきまで、少しからかって御免ね♪　じゃあ、単刀直入に言うね……」

「う、うん……」

行き成り真面目な顔と口調に戻した私に、先程以上に強張る上条恭介。

取って食う訳じゃないんだから、もっと気楽に聞いてくれにやいかなあ？

まあ、代わりと言っちゃなんだけど、美樹さやか命が世界の不条理に食われる可能性は有るけどね♪

「美樹さやかは……今、命を失う危機に面してるの……」

「何を言ってるんだ？」

顔には動揺、体が私から向かって後ろに動き、動揺で唾を飲み喉が揺れる。

「本当の事よ……ねえ、貴方の腕って、医者からも動かないって言われてたらしいね？　それが、こうして普通に動くなんて不思議だよねえ♪」

えっ？　何で、私がそんな事を知ってるのかって？

そりゃあ、勿論♪　ほむらちゃんから、美樹さやかの契約内容を聞いているからだよ♪

「さやかが僕の腕に関係？　そういえば、病室で『奇跡も、魔法も、有るんだよ！』』って僕に……その翌日に……腕が動くようになって気が……」

「そうそう、奇跡も魔法も有るんだよ？　上条恭介君♪」

一斉に魂之眼球を召喚し、上条恭介を視認可能対象にする。青空広がる屋上は一斉に充血した眼球で埋め尽くされ、異様な空間へと仕立て上げられる。

その浮世離れた光景に腰を抜き、足に力が入らなくなり地面にへたり込む

何故、上条恭介に魂之眼球を見せるのかと云うと、百聞は一見に如かずだから。

それに、次に見る事になるのは、彼の幼馴染で好きな女性の異形な姿。その時に今みたいへたり込まれても困るので、予行練習って意味でね♪

「これが魔法だよ♪」

「き、君は何者なんだい？」

「私の名前は星屑アマタ。魔法少女よ……」

「魔法少女？」

漫画やアニメ、小説等の空想上の二次元の世界でしか存在しないとされている魔法少女。

「そう。私達は人と云う存在からはみ出した存在。魔女と呼ばれる

存在を殺す為だけの存在なの……あつ、そうそう……魔女ってのは、魔法少女が負の感情溜めて世界に絶望したなれの果てだよ」

「人と云う存在からはみ出したって、どう云う事だ？」

「そうだね？　簡単に言うと、私達は死人ゾンビみたいな物だよ。魂が体に無い為、体がどんなに傷付いても痛みを感じないし、直ぐに治癒される。魔女を狩ると云う目的を実行するだけの存在。そして、日々、自身が魔女になると云う事に恐れるの。彼女……そう、美樹さやかもだよ？　美樹さやかも同じ魔法少女だよ♪」

「さやかが同じ？　どうして、さやかが……魔法少女になんか……」

自分の好きな人が、そんな存在にどうしてなったのかが理解出来ず、震える声で私に問い掛ける。

まあ、ぶっちゃけた話だけど、誰もキュウベえから、魔法少女になるとこんな体になるなんて聞いてないからねえ。

話を聞いてたら、大半の少女達は願いを諦めて、魔法少女にはならなかったのじゃないかな？

「実はね、私達は魔法少女になる時に一つだけ、どんな御願いでも叶えて貰えるの♪」

「まさか……さやかの願って……」

病院での彼女の言葉、自分の腕が治った事、そして美樹さやかが魔法少女になった理由が全て繋がったらしく、彼は物凄く悲しそうな顔をした……

きつと、自分が彼女を……魔法少女にしてしまったのだと……

「そう、もう二度と動かない貴方の腕を治して、もう一度ヴァイオリンを弾けるようにしてくれてね。美樹さやかは貴方の事が好きだった。だけど、運命って残酷ね。そんな事を露知らず貴方は志筑仁美と楽しそうに一緒に帰ってるんだもん？」

「違う!! あれは、大切な話が有るって言われて……」

「まあ、そんなのは美樹さやかには分かんないわよ……思春期の少女の恋心って難しいのよお? しかも、前日に志筑仁美に上条恭介の取り合いで宣戦布告されたらしいし」

「志筑さんが、さやかに？」

「そうそう。だけど、美樹さやかは『私は死人だから、恭介に好きって言って貰う資格は無い。抱きしめてなんて言えない』って言って、まどかちゃんに抱きついて晩に泣いてたんだよ?」

あれ、この台詞の時系列って何処だっけ?

ほむらちゃんから貰った情報が多過ぎて、時系列がこんがらがって来たよ……

まあ、どうせ上条恭介には分からないから、ここはアマタちゃんが、話を盛りに盛ってしっかりと美化しておこう♪

だって、私は恋のキューピットだもん☆

「そんでまあ、最後には、自分の恋が成就しない世界を呪い。穢れを生みながら無茶な戦闘してしまった結果……魔女になったとさ……悲しい悲しい一人の少女の人生でしたとさ」

この後は、魔法少女や魔女の知識に関して色々と説明する。魔女になったらどうなるかとか、ソウルジェムがうんたらとか、マスコ

ツト的ポジションの厄介な奴とか……

長くなるので、悪いけど色々と割愛するわね……

そして、紙芝居屋さんが話が終わった時にするように、手を叩いて話が終わった事を強調する。

ちなみに、この手を叩くと云う行為の意図は、物語りを聞きいつてた子供達を音でびっくりさせて、物語りの世界から現実の世界に氣を戻す為らしいね♪

「さあ、ここでクエスチョン？ 貴方は魔女になった美樹さやかを助けたいかい？ 私の様に、こんな怖い力を行使する化け物を愛せるかい？ ここには誰も居ない。今なら、私の話は達の悪い冗談だと思い、‘人間’である志筑仁美と仲良く過ごす日々に戻るよ？ 安心しなさい、この事は誰も知らない。貴方が普段通りの日常に戻っても、誰も責めたりなんかしないよ？」

最後の最後で上条恭介の本心をもう一度確かめるために、悪魔の囁きをする。

ちなみに、これで美樹さやかの事を助けなかったら、上条恭介の眼球を抉りぬくつもりで、既にスカートのポケットの中のスプーンの柄をしっかりと握っている。

「助けないに決まってるだろ！！ さやかが居ない日常なんて、普段通りの日常なんかじゃない！！」

あらまあ、格好良い事言うねえ♪

もし、これが本心ではなく同情による演技だったら、プロの男優物だと思っちゃいそうだよ♪

「グーッド♪ 宜しい♪ じゃあ、学校が終わったら助けに行こう

♪

「今からじゃ駄目なのかい？」

「ああ……まあ、他にも助けに参加する面子が居るからねえ♪
それに、私の呼び出しが原因で、貴方のクラスが凄い事になって
るよ？」

魂之眼球より送られて来る、上条恭介の教室の状況……

異様に騒いでいる中沢君。きつと、「上条とは、当麻ですか？
恭介ですか？ はい、インなんとかさん！！」とか非常事態に構わ
ず言ってる。

それで、大慌てでまどちゃんに何か言ってるブルジョワ。きつ
と「おっつほっほ、明日からおフランスに小旅行ザマス。上条君も
連れてくザマス」とか言ってるのかなあ？

最後に、机に座っているキュウベえに何度もデコピンをするほむ
ほむ。恐らく、「何を隠してるの？ 話さない」とか念話で言っ
てるのではなからうか……

「ちゃっちゃと戻って、静かにして来て。告白されたとかでも言っ
て、呼び出された理由は適当に誤魔化していいから。あと、分かっ
てると思うけど、この事は他言無用ね？ つつても、別に貴方が言
った所で、こんなふざけた話を誰も信じないと思うけどね……實際
に、目で魔法や魔女を見ない限り……」

「分かった。それに、これ以上、さやかに迷惑はかけたくないから、
元より言うつもりはないけどね」

なんか、この子は本当に良い子だねえ……ていうか、何で上条恭
介は美樹さやかなんかの事が好きなんだろう？

美樹さやかには、私には分からない何か魅力的な物が有るのだからか？

確かに、親しい人間には物凄い優しい雰囲気は有るからね……まどかちゃんとか、上条恭介に関してはね……

ただ、ほむらちゃんや私に対しては、かなり敵対心持ってるけどね。

「しかし、貴方は案外すんなり魔法の存在とか信じたね？」

人によっては魔法を見せても、そんな非科学的な事がある訳がないと、手品の類と思い込まれる事が有るからね。

「そりゃあ、あんな物を見せられたらね。それに、君の話が本当なら、僕の腕が治ったのも含めて全てにおいて合点^{がてん}が行くし……」

ああ、言われてみれば、流石に眼球で覆い尽くすのは手品じゃ無理だね……

「そっか。じゃあ、また後で上条恭介」

「分かったよ、星屑さん」

あつ、そうそう。最後に私から重大発表♪

それは♪

さっきの紙芝居屋の手を叩く行為の意図だけ♪

あれ、嘘だから♪　もしかして、信じちゃった人とか居るかな？

それじゃあ、次話に続く！！

きつかけがないので 本心を言えない
本心が言えないので 告白が出来ない
告白が出来ないので 少女の恋は実らない
少女の恋が実らないので 世界を呪う
世界を呪ったので 少女が滅びた
すべては恋心のせい

ゝマザーグースの F o r w a n t o f a n a i l より
一部引用ゝ

第三十三・五話 **F o r w a n t o f L o v e**（恋さえあれば）のB面

自分の御遊びで書いた御話です。

見ても見なくても、物語上影響は皆無。

寧ろ、見ると世界観自体をぶち壊しますので、それが嫌いな方は今回の話は見ないようにして下さい＞＜

ああ、このペースじゃ5月中に終わる気がしない……

まっ、良っか（笑）

一応、50話までには終わる予定ですので＞＜

しかし、何で話数が当初の予定と比べてこんなに伸びてんだ（汗）

あと、総合評価300突破しました（汗）

よくも、こんなキチガイ小説を……↑チャー研ネタ

＜最近のマイブーム＞

特濃4・5牛乳（笑）

第三十三・五話 For want of Love（恋さえあれば）のB面

へろへろへろへ、今回の御話は視点を、アマタからほむらちゃんに変えてみよっか？

えっ？ 自分は誰だって？

そんなの気にしちゃ駄目だよぉ♪

自分は何処にでもいるし、何処にも居ない存在。

男なのか、女なのか性別すら分からない存在。

0と1の2進法で組まれているかもしれない存在。

きっと、貴方は自分を知っているし、知っていない。

たゆたうそんな存在が自分だから。

自分は電子の世界を、沢山の創られた名前前で散歩する存在だから♪
そんな私はユビキタス♪

一体、これはどういう事なの……

私はアマタが図書館に行くと言ったので、特に気にする事無く向かわせたのだが、その結果がこの教室の現状である。

「さあさあー！！ 上条恭介はさっきの女の子の告白を受けるかどうか！！
倍率^{オッズ}は受けないが1・1倍、受けるが12倍だよぉ！！」

違法な賭けを始める中沢とか言う男子……

上条恭介とは友人関係に有った筈なのだが……どうして、友人を出汁に賭博行為をやっているのだろうか……

「鹿目さん!! 上条さんがっ!! 目玉のヘアアクセサリーを付けたツインテールの女性の方につ!!」

「落ち着いてえ!!」

まどかの肩を掴んでひたすら粗ぶる志筑仁美……

それ以上、まどかに危害を加えるようなら攻撃も考えようかしら

……

『それで、明らかにアマタが上条恭介を連れて何処かに行ったみたいだけど、貴方は何か知らないの?』

『例え知ってたとしても、教えてあげる事は出来ないなあ? 僕だって、また眼球を抉られるのは嫌だし……』

ちっ……

口を割りそうにないので、尻尾を左手で抑えつけて、右手でデコピンを何度もする。

『痛いよ!?! 暁美ほむら!! 君って、そんな性格じゃ無かったよね!?!』

『そうね。私も、こうしてる自分に疑念を抱いてるわ。アマタが原因かしら?』

『そうだね。アマタの影響の所為か、僕を一発で仕留めず、苦しめて……って、痛い痛い痛い!! 御願いだから、デコピンを連打しないでくれないか!?! 一応痛覚だって有るんだから!!』

あら、痛覚は有ったんだ? 感情が無いから、痛覚は無いと思っ

てただけど、意外な情報を得たわね。

『嬉しそうな顔をして、追撃するのは止めてくれないかな？　だから、痛いって!!』

キュウベえの要求を一切聞き入れず、デコピンを続ける。

しかし、アマタも何を考えて上条恭介を呼び出したのかしら？

彼女なりに、何か考えが有って動いてると思うのだけど、ちょっと心配になって来たわ……

探しに行こうかしら？

私が椅子から立ち、今将に探しに行こうとすると、上条恭介が教室に戻って来る。

何が有ったのか興味を持つ生徒達が群がり、上条恭介に尋ねるが、彼は「告白されたけど、断って来た」と手を横に振りながら説明する。

直後、歓声と怒号の沸く連中……何人かは『受ける』と書かれた紙切れを投げ捨て、上条恭介に飛び蹴り。

持てない男達も、上条に蹴りと、明らかにお祭り騒ぎになる教室……

今迄、何度も繰り返しているが、ここまでこのクラスって騒がしかったっけ……

と、冷や汗を流しつつ、中沢を筆頭に集団私刑リンチを受ける上条恭介を見る。

「何する!!　中沢!？」

「うるせえ、モテル奴は全員敵だあ!!」

『君達は本当に逐一する事が面白いね？　でも、そんな行動を取る理由が、僕には分からないよ』

嫉妬心全開で暴れる男子生徒を見て、キュウベえは首を傾げながらのうのうと宣う。

『私にも訳が分からないから安心しなさい』

『そうかい？　じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ。美樹さやかの場合は頑張ってるね♪　僕としても、魔女から魔法少女に戻す方法が分かれば、更に効率良くエネルギーを収集する事が出来るから、心から応援してるよ……だから、僕の尻尾を離してくれないかな……』

決して逃がさないとギュツとに握っている私の手を、猫(?)パ
ンチして来るが、痛くも痒くもないので決して離す気は無い。

『じゃあ、アマタが何を考えているのか教えなさい？』

『悪いけど、それは無理だよ、暁美ほむら』

『じゃあ、私もその願いを聞き入れる訳にはいかないわ』

『しょうがないなあ……本当はしたくは無いんだけど……節足動物やトカゲがする事で有名な自切って行動を、君は知ってるかい？』

自切とは、トカゲ等が外敵から逃げる為に、自身の体の一部を切断して逃げる物なのだが……

それを聞いた瞬間に、嫌な予感しかせず……急いで尻尾を引っ張るが、肉がちぎれる音と共に、ふさふさな尻尾を自身の肉体から切り離す。そして、キュウベえ本体は脱兎の如く逃げ出し、教室の開

いた窓から飛び降りる……

上条恭介が帰って来た事で大分落ち着いて志筑仁美だが、まどかがキュウベえの飛び降りを見て悲鳴を上げ、再び慌て始める。

「最悪ね……」

私は未だ手の中で、本体から切り離されてもなお激しく動き続ける、キュウベえの尻尾を握り潰し愚痴った……

手が、血特有の滑りで気持ち悪いが、気にせず思考の海に潜る……
何故、アマタは上条恭介を呼び出したのか？

上条恭介は告白されたと言ってるが、嘘の可能性が高い……
恐らく、美樹さやか^{から}の事を聞いてたか、美樹さやかの現状を話したかのどちらかと思う。

だけど、彼女の興味心による勝手な行動は、重々承知故に、美樹さやかが好きな存在である上条恭介に興味を持った為、^{から}揶揄った可能性も否定出来ない。

ではアマタ本人を捕まえて聞いてみると云う考えも有るが、アマタがキュウベえに話さないようにと口封じしていたので、彼女の口からも話す事は無いだろう……

きつと、何かアマタなりの考え故の行動かと思われるので、私は傍観するべきなのだろうか？

もしかしたら、彼女が新しい未来を切り開いてくれる可能性を信じて……

その日の授業は、その事で頭が一杯で、他の事は何も考えられなかった……

少女は歌う悲しみの詩を

叶わぬ恋を嘆く詩を

ああ、どうして私の恋は叶わないのだろうか？

少女は嘆く悲恋に

専用の舞台を用意して、彼女は歌う

世界を呪う歌を歌う

と云う訳で、今度は美樹さやかは魔女に視点を持って行ってみるね♪

文字数の関係上、これだけじゃ終われないんだよ♪

流石に、自分も魔女に近付くのは怖いから、遠くから見ての自分視点だけだね♪

題して、美樹さやかは魔女観察日記だよ♪

これからの小学生達の夏休みの自由研究に持って来いだね♪

朝顔やトマト等にとって代わる筈だよ？

10時20分

暇なのか、美樹さやかは魔女は歌を歌い始める。

彼女の歌に合わせて、ブルジョワに似た使い魔が踊り、上条恭介のシルエットの指揮者が指揮棒を振るうのだが……

彼女の音痴っぷりに耳が痛くなり始め、吐き気が……

新手の滅びの歌なのだろうか？ 3ターン後にこれを聞いた自分は死ぬのだろうか？

11時12分

何か、筆を持った変わった変わった魔女がやって来て、縄張り争いの喧嘩を始めようとするが、彼女の滅びの歌の前に耳を押さえて悶絶。

悶絶してる内に、彼女の使い魔の指揮者の使い魔と踊り子の使い魔達が、駆け寄りヤクザ蹴りを開始。

やって来た魔法の使い魔だろうか？ ラジコン飛行機に乗った子供の使い魔が、魔法を守ろうと動くが、美樹さやかの魔法のサーベルの投擲で簡単に撃墜される。

11時18分

やって来た魔法を撃退し、一息吐く一同。

そして、何処からか使い魔が持って来たポテトチップス（コンソメパンチ味）の袋を開け、ぼりぼりと食べ始める美樹さやかの魔法。魔法と云うよりは、何処か人間臭い行動。実は、まだ美樹さやかだった頃としての意思を持ってんじゃないのかと、思いたくなってしまう。

12時22分

再び合唱会開始……

流石に遠目に見ても、声は聞こえて来る為、自分もさっきの魔法同様に頭痛がし始める。

故にここで観察日記を終わる事にしよう……

第三十三・五話 **F o r w a n t o f L o v e**〈恋さえあれば〉のB面

やって来た魔女は、本編未出現の落書きの魔女です。

誰かは言いませんが、他の作者さんの作品で出現してたので、じゃあ自分も出しとくかと、こんな形で出現させました。

第三十四話 美樹さやか救出作戦（前編）（前書き）

こんばんは♪大学の講義中に、農薬の魔女とか云って、DDTの構造式で魔女っぽい何かを作ろうと落書きしてたアホです（汗）
勿論、あまりにも酷い物が出来たので、消しゴムで消しました♪

<最近のマイブーム>

タケノコの里

第三十四話 美樹さやか救出作戦（前編）

屋上、風に吹かれ靡くスカートと髪……私は目を瞑り、色々と思
いふける……

もし、今回の作戦が成功しなかったらどうなるのかと……
私一人が独断行動を取っている……

万が一、それが原因で最悪な結果を迎えた場合は、一斉に皆から
村八分されてしまう恐れを……

美樹さやかは、杏子ちゃんの友達でまどかちゃんの親友だ。

ほむらちゃんにとっては、未来を掴む為のピースの一つになりう
るかもしれない存在。

上条恭介にとっては、大事な大事な存在……

でも、私にとっては、どうでも良い存在。寧ろ、敵として認識さ
れる存在……

ほむらちゃんや、まどかちゃん、杏子ちゃんの為に助けてやる存
在……

もし、彼女達が居なければ、その場で容赦なく魔女を殺し、グリ
ーフシードとして私の糧かてにしているだろう。

「何、悩んでんだ？」

そんな悩む私の隣には、何時の間にか杏子ちゃんの姿。

口にはロリポップを咥え、学校制服を身に纏う彼女は、一昔前の
スケバンって感じがする。

「ちょっとね。ねえ、杏子ちゃんは、‘もし’、もしだよ……皆と
一緒に事をしろって言われても、自分の案が一番良いと思うとした
らどうする？ それで、独断専行したらどうなると思う？」

「さやか的事か？」

やっぱり、このタイミングで言うと、美樹さやかに関する作戦って一発でバレちゃうね……

「さあ、どうかな？ やっぱり、皆から責められるかもな……」

ですよね……

「でもな……悔いは出来ねえだろ？ もし、皆に合わせて失敗したら、自分の信じた事をすれば良かったって、一生悔やんじまう。だから……自分の信じる道を進むだけだ……っていうか、誰だっけな？ アタシに散々説法説いた奴は？」

ニヤリと犬歯を出して、笑いながら意地悪に聞いて来る。

「あははは、誰だったかな？ 私は覚えてないなあ♪ いやあ、教会の神父さんの娘さんに説法説くなんて、よっぽど徳の高い方なんだろうねえ♪」

なので、惚けつつ返す。当然、突っ込みが返って来るだろうけどね……

「アマタだろ！！ アタシだって、先日、アマタや暁美ほむらの奴の言う事を聞かずに、動いた事を確かに後悔はしてる。だけど、もし、アマタ達の作戦でさやかが助からなかったら、もっと悔やんだと思う」

ほら、返って来た……杏子ちゃんとほむらちゃんは絶対に突っ込

み入れて来るもんな……

「だから、もし、アマタが良いと思う事が有るのなら、それを実行すれば良いさ」

「うん、そうするよ……じゃあ、悪いけど、私抜きで作戦を進めててくれないかな？」

「分かった。だけど、アタシ達がさやかを助け終わった後に、このことやって来たら、学食奢れよ？」

「御財布に相談しつつ善処するよ♪」

こっちに來てから、食費とか2倍以上に膨れ上がってるし、銭湯の御金、コインランドリーで服を洗濯及び乾燥させる御金、エトセトラエトセトラ……と、予想以上の出費が嵩み、色々と財政を圧迫している……

でも、その代わりに、御金で買えない程に大切な友達や、思い出を彼女達から沢山貰った。

そして、これからも彼女達から沢山の思い出を貰うだろう……

『私よ。今から、美樹さやか魔女の元に向かうわよ。アマタと佐倉杏子は下駄箱に來て頂戴』

チャイムの鳴る音と共に、ほむらちゃんより下駄箱に來るようにと念話が入る。

『分かった。それと、アマタだけど、アタシがちょっと別に行動するように頼んでるから、アタシ達だけで行くぞ』

ほむらちゃんに独断行動をする事を告げようとするが、杏子ちゃんが自分が依頼したと言って、私が行動しやすいように擁護してくれる。

『貴方が！？ 一体何をするように頼んだの？』

物凄く意外そうな反応。というか、このほむらちゃんの反応の仕方、私が何かを仕出かすのを知ってたみたいだね。

やっぱり、あの教室の騒ぎの一件で気付かれてるね……でも、何をするのか全く把握できてないって事は、キュウベえは一つも口を割ってないみたいだね。

感心感心♪

『悪いけど、そいつは言えねえ。だけど、絶対に悪い事にはならないから、アタシを信じな』

『分かったわ。アマタ、頼んだわよ？』

『任しときなさい♪ タイタニック 大船に乗ったつもりでいなさいな♪』

『『『それ、沈没するっ！！』』』

一斉に三人に突っ込まれる……

って、あれ？ まどかちゃんにも念話繋がってたんだ……

『おりよ？ じゃあ、泥船だっけ？』

『幸先心配になって来てわ……』

うん、きつとほむらちゃんは、今頃頭のカチューシャの端の部分

付近を、拳でグリグリしながら頭痛を凝り解してるに違いないわね
……

『まあ、良いわ。じゃあ、早く来て頂戴ね』

念話が切れると、杏子ちゃんは八重歯をチラつかした笑顔を再び私に向ける。

「杏子ちゃん、ありがとうね」

「良いってことよ。それと……昨日はごめんな……怪我とかさせて……」

昨日？ ああ、昨日の杏子ちゃんとの戦闘の事か♪

「気にしなくて良いよ♪ もし、気にしてるなら今晚にでも体で払ってよ♪」

「ばっ!？ 人が真面目に言ってるのに、ふざけて返すな!！」

顔を真っ赤にして叫び返して来る。

むゝ、何を想像しちゃって顔を真っ赤にしちゃってるのかなあ♪

「にひひひ、私は何時も真面目だよ♪ あっ、そうだ♪ 美樹さやかを救った暁には、美樹さやかにも体で払って貰うとしようかな♪

ああ、見えてもあの子は着痩せしてそうな感じだし♪ そして、

ああ云う性格の子ほど乱れると——」

「だああああああ!？ アタシはもう行くからな!！」

私の発言を大声で打ち切り、顔を真っ赤にして屋上から飛び降りる杏子ちゃん。

意外と杏子ちゃんは、この手のトークは苦手みたいだね♪ 初うぶで可愛いなあ♪

さてと、顔を真っ赤にした杏子ちゃんは、下駄箱でほむらちゃん達と合流し、美樹さやかやかの魔女が引き籠っている結界の方へ向かい始めたから、私もそろそろ上条恭介と向かうとしようかな♪

『へろへろ、上条恭介君や？ 聞こえる？ 至急、屋上に来なさい♪』

と、念話を送る。

また、教室に呼び出しに向かっても良かったけど、また騒ぎになったら困るしね♪

私が念話で呼び出して2分後には屋上のドアを勢い良く開けて、屋上へ出て来る上条恭介の姿。

このキューティーアマタちゃんに発情してる所為か、ぜえぜえと荒い息を……

冗談冗談♪ 恐らく荒い息の理由は、教室からここまで走って来たからかな？

意外とこの学校が大きい事も有り、教室から屋上までの距離が結構有るからね♪ 階段も登らないといけないし♪

「早い御出ましありがとね♪」

「早く、さやかを助けに行こう!!」

「その前に、上条恭介。貴方に今回の作戦内容を話しておくよ。貴

方には、先ず美樹さやかが魔女になったモノに対峙して貰う必要が有るの。相手は例え貴方であろうとも攻撃してくる可能性が高い。いや、貴方だからこそ攻撃する可能性も有る……貴方は非常に危険に晒されるけど、覚悟は出来てる？」

「僕がさやかを魔女にしてしまったようなものだ。僕はさやかに殺されても構わないつもりでいる。だから、そんな事は気にしない」

さっきの台詞の後半部の、上条恭介だからこそ攻撃するは、これから起きる事に対しての半分脅しを含んだ物である。そして、覚悟して欲しいと云う意味も孕む。

けど、私の思いは杞憂だったみたいね。これなら、作戦内容を簡単に話すだけで、現状は問題無いみたいね……

まあ、口では言っても、実際に会うとどうなるかは分からないけど……

「美樹さやかの魔女に対峙して、貴方には彼女へ自分の思いを告げて欲しいの……もし、運が良ければ美樹さやかは魔女ではなくなり、元の生活を取り戻せると思う……そもそも、魔女から元の姿に戻れた魔法少女は一人だけで、それは超レアなケースだったって事だけは頭に入れておいてね」

「つまり、100%助けれるって訳じゃないんだね……」

「そうよ。あと、貴方は私が守るから、美樹さやかの魔女に呼び掛ける事に専念して良いわよ。じゃあ、行きましようか、上条恭介……美樹さやかを救いに……」

「うんっ!!」

< オマケの没ネタ >

「大丈夫、まどかは美樹さやかやかの魔女に呼び続ける事にだけ専念すればいいわ。まどかは私が守るから」

「ほむらちゃん……」

「さあ、ここに入って頂戴」

そう言っ、自分の腕に付けているラウンドシールドを指刺すほむら。

彼女のラウンドシールドは異空間と繋がっており、様々な物質を収納出来るようになっている。

「えっ!?!」

そんな彼女の行為に驚き、一歩後ずさるまどか。

誰だって、安全とは云えど、そんな場所に収納されるのは御免である。

いや、中には爆弾や銃火器がわんさか入っている。それを知っている人間なら、魔女に対峙する以上に危険と判断するので、尚更御免である。

「さあ、早く!! まどか!! ここなら、安全に美樹さやかに呼びかける事が出来るわ」

「わ、私……早く杏子ちゃんを探さないと。ごめんね、ほむらちゃん」

「待って!! まどかぁ……」

明後日の方向を向いて、何処かへと走り出すまどかを、地面に膝を着けて必死に泣き落としモードで呼びとめようとするほむら。

<～オマケの没ネタ～>

ってのを、一時期思いついてましたが、当然の如く没にしました。さやかは魔女がポテチ食べるよりは有り得そうなのに、何故没にしたんだろう……

第三十五話 美樹さやか救出作戦（中編）（前書き）

少し遅れましたが、完成したので投稿♪

バイトと大学で疲れてるので、今日はぐっすり寝ます＞＜

久しぶりに美味しい物が食べたかったので、手作りしました♪

あっ、味噌カツや海老フライは好きだけど、名古屋市民って訳じゃないからね♪

自分の住んでる場所は田舎とだけ言っておきます♪

味噌カツが、めっちゃうみやあゝがや♪

＜今日のマイブーム＞

御米・えびふりゃあ・味噌カツ・ワサビ漬け・インスタント御味噌

汁 ↑今日の晩御飯（総額500円くらい也）

第三十五話 美樹さやか救出作戦（中編）

空席が目立つ広大なコンサート会場……

アタシ達の目の前に居るのは、魔女になってしまったさやかと、演奏をする使い魔達……

さやかは、上半身はマントを羽織り赤いリボンをつけたブリキ人形で、両手にサーベルを持つ。下半身は、魚の様な尾を持っている。まるでその容姿は、狂気に満ちた人魚姫。

無機質な顔に付いてる口からは、この世界を恨む言葉にならない呪詛を、アタシ達には理解出来ない魔女の言葉で吐露する。

「暁美ほむら！！ この子を頼む！！」

作戦は、アタシがフォワードでさやかを傷付けない様に攻撃を防ぎ立ち回りつつ、バックで呼び掛けるまどかが狙われるのを最低限に抑える。

「分かったわ。気を付けて……」

そして、暁美ほむらはまどかが狙われた際に、アタシが防ぎきれなかった時の最終防衛線担当。

「おうっ！！ アマタが来るまでは、くたばる心算はねえよ！！」

アタシは槍を構えて一気にさやかの元へと走る。

当然、さやかを傷付ける事は出来ないから、武器をさやかへと向けるつもりはない。

さやかの使い魔を薙ぎ払ったり、アタシに対する攻撃を防ぐ為だけに構えているのだ。

「さやかちゃん！！ 私だよ！！ まどかだよ！！ ねえ、聞こえる？ 私の声分かる！？」

アタシの後ろの方では、暁美ほむらが展開した紫色の防壁の後ろで必死に呼び掛けを始める、さやかの友人の鹿目まどか。

そして アタシの最後の役目は、アマタが来るまで、場を保たせる事だっ！！

何度も大声で友人が呼び掛けるが、その呼びかけもさやかには届かず。さやかはサーベルを振り上げ、辺り一帯に大量の車輪を召喚する。

車輪を如何様に使ってくるかは、ど素人の魔法少女でも大体想像は出来る。

「さやかちゃん！！ 止めて！！ お願い…… 思い出して！！ こんな事さやかちゃんだって嫌だったはずだよ！！ さやかちゃん、正義の味方になるんでしょ？ 元のさやかちゃんに戻って」

「暁美ほむら！！ 車輪を飛ばして来るぞ！！」

「そんな事は分かってるわ…… 杏子こそ、気を付けなさいよ……」

「初めてアタシの事をフルネームじゃなくて名前だけで呼んだな？ ほむら？」

「そんな事を気にしてる場合じゃないと思うわよ？」

ほむらは恥ずかしいのかそっぽを向き、まどかを守る様に前に出、両の手に銃を握り締める。

そんなほむらの仕草が可笑しく、アタシは顔に笑顔を浮かべ、槍を召喚しアタシを狙い高速回転運動をし迫りくる車輪の迎撃態勢を取る。

「聞き分けが無いにも程が有るぜ!!」

アタシ達の呼びかけにも何の返事を見せず、只管攻撃を仕掛けて来るさやかに、つい愚痴ってしまう。

更に車輪を召喚し、攻撃を仕掛けて来た為、慌てて全ての車輪の迎撃を図るが、如何せん数も多く、アタシは車輪に翻弄されてしまう。

右の車輪を槍で防げば、後ろから攻撃が来てアタシに着弾。左を防げば頭上から……360度ありとあらゆる方向より襲い掛かる攻撃に、体があっちにゆらゆらこっちにゆらゆら。

「杏子ちゃん!？」／「杏子!!」

「アタシに気にせず、アンタ達は自分の役目に専念しろ!!」

そんなアタシを見かねて、叫び声を上げる二人に、アタシは自分達の役目に専念するようにと檄を飛ばす。

はんっ? 何時ぞやの御返しかい? そういえばアタシ達、最初は殺し合う仲だったっけねえ?

生温いって、あの時アタシがもっとぶちのめしても、さやかは立ちあがって来たじゃんかよ?

怒ってんだろ? 何もかも許せないんだろ?

分かるよ……

それで気がすんだら、目え覚ましなよ……

「好い加減、目え覚ましやがれ！！ アンタは信じてるって言ったじゃないか！！ この力で人を幸せに出来るって！！」

だけど……

さやかはアタシの叫びを聞き入れてくれる事も無く、地面にサ―ベルを突き刺し、結界の世界を改変する。

より深く、より暗く、より寂しい場所に……

これ以上進んだら、もう戻って来れなくなるような、そんな寂しい場所に……

自分と使い魔だけを連れて……

これ以上、さやかがこんな寂しい場所に居たら、本当に帰って来れなくなってしまう。

頼むよ神様……こんな人生だったんだ、せめて一度くらい幸せな夢を見させてくれよ……

もし、ただ一つだけ守りたい物を守りと通せるアタシの夢を叶えてくれるなら……

アタシはさやかを助けたいだけなんだよ……

あいつと友達になりたいだけなんだよ……あいつの笑顔を見たいだけなんだよ……

髪留めのリボンを解き、リボンの中に大切に仕舞ってた父親の形見のロザリオを取り出し……

「だから……」

ギュッとロザリオを握り締め……

「今、叶えてくれよ!!」

叫ぶ!!

すると、アタシの叫びに呼応して……

胸のソウルジェムより光が溢れ、世界が真っ赤に包まれた……

『ぐすん……ぐすん……』

「さやか!?!」／「さやかちゃん!?!」／「美樹さやかの声?」

世界が真っ赤に染まるや否や、アタシ達の脳裏にさやかが悲しうにすすり泣く声が響く。

何がどうしてこうなったのかは分からないが、アタシのソウルジェムより溢れた光がこうした事は確かである。

もし、これがアタシの望みを神様が叶えてくれたのだったら……神様が一度だけ、アタシに幸せの夢を見せてくれるって言ってるのなら……

「さやかあ!! 好い加減、目を覚ましやがれ!! アンタは皆を幸せにするんだろ!!」

アタシ達はさやかに呼び掛けなければならない。

『こんな世界なんて……こんな世界なんて……皆を幸せにすれば、幸せにするだけアタシは不幸になる……こんな世界なんて守る価値は無いのよ……』

「さやかちゃん、何言ってるの!! 目を覚ましてよ!!」

『だってさ……仁美を助けたのに、恭介を助けたのに……アタシはこんなに不幸な目に有ってるんだよ? アタシだけ不幸な目に有ってるんだよ?』

だけど、アタシの声もまどかの声も届かない。だけど、アタシ達は諦めてはならない。

これは、神様が与えてくれたチャンス。

だから、アタシ達は絶対にこれを物にしなければならない。

「違うよ!! さやかちゃん!!」

『何が違うって言うの? 前にも言ったよね? 同情なら誰にだって出来る……アタシと同じ立場に立ってから、もう一度その台詞を言ってみなさいよ!!』

怒号を上げ、手に持つサーベルをまどか目掛けて振り降ろすさやか。咄嗟に拙いと判断したほむらは、妙な能力を使って、瞬間的にまどかの位置をその場からずらしサーベルを振り下ろすと思われる軌道上から避難させる。

「じゃあ、アタシが言ってるよ!! まだ、アンタは完全に不幸になった訳じゃない!! さよかの幸せは取り戻せる!! アタシやアマタみたいに、大切な物を失った訳じゃない!!」

『無理よ!! 恭介に、人間じゃないアタシを抱いてって、キスしてって、好きだって言える訳がないじゃない!!』

その言葉に、恋心すら持った事のないアタシには辛さも、返答も分らず言い淀むが……

「アンタって本当に面白い事を言うよね? 何故、無理って決めつけるのかな? かの有名な偉人はこう言いました『諦めたら、そこで試合終了ですよ』ってね♪」

結界内に闖入して来た、1匹の巨大な鳥の使い魔の上に居る少女が、アタシの代わりに、返答をし問い掛けをする。

「さやかあ!!」

そして……その少女の隣に居る少年はさやかに呼び掛けた。

さやかが愛してやまない上条恭介が……

『恭介!? どうして……』

さやかには明らかな動揺が見え、動きを止める。

それは、周りの使い魔にも伝染し、踊り子の使い魔も指揮者の使い魔も、一斉に動きを止める。

「さやかに言いたい事が有って来た」

上条恭介は、地面に着陸した鳥の背中から飛び降り、異形な姿をしたさやかに恐れる事も無く、一步一步近付く。

『いや、来ないで!! こんな見難いアタシを見ないでえ!!』

だけど、アイツはそれを拒絶した。
好きな人に、見難い今の姿を見られるのが怖くて、拒絶の言葉を
浴びさせられるのではないかと……

「さやかは見難くなんかない!!」

けど、そんな心配はアタシ達は誰もしない。

何故なら、アマタが最善と思って上条恭介を連れて来たんだ……
だから、アタシは見守る事にした。

それは、他の二人にも当てはまる。まどかもほむらも、一步一步
歩み寄る上条恭介を見つめる。

「それは、例え姿が代わっても、例え人間じゃなくてもだ!!」

ちなみに、アマタの野郎はニヤニヤ笑いながら、烏の使い魔の上
で白い大きな袋を漁っている。

絶対に、上手く行った良い雰囲気、最後の最後でぶち壊す気だ
……

「さやか!! 僕は君が好きだ!!」

『恭介え……』

魔女の顔から一粒の涙が地面に落ちて跳ねると、世界に亀裂が入
り、崩れ始めた……

僕は君が好きだ

君は僕が好きだ

僕は君の為なら仕事が出来る
君は僕の為なら家事が出来る

僕は君の為なら剣を握れる
君は僕の為なら包丁を握れる

僕は君の笑顔が好きだ
君は僕の声が好きだ

優しい優しい君の為なら、命を厭わない
優しい優しい君は僕のために、命を厭わなかった

僕達の子供も僕達みたいに、良い人に巡り会って欲しい

<mutual love> 両想い >

第三十六話 美樹さやか救出作戦（後編）（前書き）

誰か「杏子」と「ほむら」を何度も間違える馬鹿を治す薬を御持ちの方は居りませんか？

ここに、重度の患者が居ますので（泣）

第三十六話 美樹さやか救出作戦（後編）

世界は壊れる。いや、正確には創り変えられるって言った方が良
いのかな？

ハロオー、皆の姫君^{アイドル}アマタちゃんだよおー♪

希望が絶望に変わる時には、大量のエネルギーを放出。

そして、絶望が希望に変わる時は……大量のエネルギーを吸収す
るみたいね。

辺りに居る大量の使い魔、魔力残滓等エネルギーになりそうな物
が、次々と蒼い光となって美樹さやかの魔女に集まり始める。

まるでそれは、闇夜に居る泣き虫な人魚姫に集まる^{ノクチルカ}夜光虫……

そして、そんな彼女を見ている少年は、人魚姫に出て来る王子様。
だけど、この世界の物語りは人魚姫みたいに、悲しい終わり方じ
やない。

ちゃんと、人魚姫は王子様と結ばれたのだ……通りすがりの娘さ
んじゃなくて、人魚姫自身が……

膨大なエネルギーを吸収すると、美樹さやかの魔女はボロボロと
結界と共に崩れ落ち始める。

ってあれえー？ 何で崩れ落ちてんの？

ここは、『人魚の魔女の仮面がポロツと落ちて、なんとその下に
は美樹さやかの顔があー！！』的な展開を期待してたんだけど？

っていうか、これ本当に大丈夫なの！？ このまま、成仏して死
ぬってオチは無いよね！！

「杏子、本当に大丈夫なの？」

「いやっ!?! アタシがそれを聞きたいよ!?!」

「貴方がアマタにする様に言ったのでしょ?」

「いやっ!?! 違うんだ、ほむら!?! あれは、口から出た出任せと云うか……何と云うか……」

結界と魔女が崩壊し始めたので、私と同様に焦り始める杏子ちゃん達。

しかし、あの二人何時の間に名前と呼ぶ仲になったんだろう? アタシの居ない内に、もしかして寝取られた!?!

って、寝取るものにも、二人とも私の嫁って奴だから、仲良いのは何よりね♪

「おいっ、アマタからも説明してやってくれ!! 本当に大丈夫なのか!?!」

「杏子ちゃん、御免!?!」

私の一言に、続きを聞く前から、一斉に上条恭介を含めて、全員が顔を青ざめる。

「美樹さやか復活御祝い用のクラッカーを100円均一に買いに行ったけど、人数分無かったの!! 美樹さやかが復活しても、大丈夫じゃないかも……」

白い麻袋の中を皆に見せて、先の言葉を続けると、冷たい視線を飛ばされ、逆に私の顔が青ざめる羽目に……

「って、んな事誰がしろって言った!？ それより、これはどう云う事だ!？ さやかは本当に大丈夫なのか!？」

「さあ？ 何とかなるって♪ 杏子ちゃんの力を信じて♪」

「アタシの力ってどういう事だよ？ もしかして、さっきの赤い空間に包まれた途端にさやかの声が聞こえた奴か？」

むう、杏子ちゃんには自分の能力がどんな物かは理解出来てないみたいね。

自分の契約内容を思い浮かべれば、直ぐに辿り着けそうな気がするんだけどな？

「もしかして、杏子のさっきの魔法は『意思疎通』の魔法かしら？」

「うん、恐らくその線が強いと思うね。他人に言ってる事を聞いて欲しい。その契約内容故に杏子ちゃんが手にした能力だね♪」

ほむらちゃんが私の想像と一致する回答をしたので、取り敢えず杏子ちゃんに簡単に説明。

「そっか……神様はアタシの言う事を聞いてくれたんだな」

家族を失う羽目になった契約内容。

だけど、その御蔭で彼女は親友を亡くさずに……

って、まだその台詞は早いか♪

これで、美樹さやかの魔女崩壊後にグリーンフィードが落ちてたりして、完全に美樹さやかが沈黙してたら拙いもんね♪

その時は、「返事がない、只の美樹さやかの様だ!!」って嫌味

を、死体の前で吐いてみよう♪

「さてと、そろそろ美樹さやか of 魔女と結界が完全に崩壊するけど……皆、覚悟は大丈夫かな？」

「うん」／「ええ」／「はいっ」

さっきの慌ては何処に行ったやら。強い何かを感じる四人の肯定の声。

きっと、美樹さやかは戻って来る……
彼等はそう信じているのだろう。

結界が崩壊し、私達の目に映る景色が、コンサートホールではなく、ビルの工事現場に移転する。

鳥の使い魔に乗って急いで飛んで来たから、結界の周りの景色を詳しく見てなかった所為で、今の今で、漸く結界がビルの工事現場の足組みの上にあった事に気付く。

そして、その足組みの数歩先には……

真 っ 黒 な グ リ

・ ・ ・ 声 く 泣 び 咽 く 響 の 皆 し 胆 落 ・ ・ ・ て し そ が ド ー シ フ

な～んてね♪

あははは？　ねえ、ビックリした？

おっと、読者をちよっぴりドッキリさせる冗談はここまでにしておいてっ♪

足組みの数歩先には、ちゃんと蒼い蒼い綺麗な美樹さやか of ソウルジェムが有ったよ♪

そして、それを見た私達は一斉に……作戦が成功した事に、歓喜の声をあげた！！

私はゆっくりとソウルジェムに歩み寄り、それを大切に拾い上げる。

「歓喜するのは良いけど、早くこれを美樹さやか of 元に持って行ってあげないとね♪　はい、上条恭介」

そして、上条恭介に手渡す。

「僕に？」

「御姫様を目覚めさせる役目は王子様って相場が決まってるでしょ？　だから、これは貴方に預ける」

「分かった」

彼は大事そうにギュッと美樹さやか of ソウルジェムを握り締める。

「そんじゃ、さやかの所に帰ろうぜ」

そう、これで美樹さやか魔女化事件は幕を終える……

筈だった……

いや、今度はドッキリ冗談じゃないよ!!
本当だよ!!

事件が終わって無い事に気付いたのは、私達が美樹さやかの抜け殻を置いてるホテルに向かう道中だった……

ファンファンとサイレンを鳴らして、私達の直ぐ傍をパトカーが何台も通り過ぎ、ホテルに向うではないか……

「おい……今のパトカーは何だ？」

「嫌な予感しかないのは、私だけかしら……」

大丈夫だよ、ほむらちゃん……私も嫌な予感しかないから……

「ねえ、ほむらちゃん。ソウルジェムの有効範囲って何メートルだっけ？」

「100メートル圏内よ。そう言えば、そろそろホテルまでの距離が100メートルに……皆止まって!!」

珍しく大声を出して制止をかける。

うんうん、恐らく次私に言って来る言葉、魂之眼球で探索してくれだろうから、言われる前に5個くらい飛ばしておくとするか。

魂之眼球を召喚し、パトカーの後を追跡させる。

ちなみに、ここで豆知識、私の魂之眼球の最高速度は毎時200キロメートルと超高速なのだよ!!

パトカー程度なら、簡単に追い越せるよっ♪

「アマタ、ホテルの中を調査して貰える？」

「うん、多分言うと思って、既にパトカーを追尾させてるよ♪」

「赤信号なんて、関係ないぜ、キリッ♪」とサイレンさえ鳴らせば怖い物無しの荒くれじゃじゃ馬を一気に抜き去り、ホテルの中に侵入させる。

入口は開いてなかったので、魂之眼球の内の4個を排気口から侵入させる。

1個だけは入口のガラスからフロントの景色を読み取る様に配置。スタッフが大慌てで何かしてるのが分かる。

何か大変な事件が起きてしまったと云うのは間違いない……

「うん、ホテルの中は大騒ぎみたいだね……大体、予想できるけど……」

「はぁ……美樹さやかの死体の移動をすっかり忘れてたわ……ホテルに置いてたら、翌日の清掃の時にバレると決まってるのに……」

「えっ!?!? それって、もしかして……」

「さやかの体が、ホテルの従業員に見つかったって事ですか!?!?」

いやゝ、大体騒ぎの原因は分かったけど……どうすっかなあ……案の定、入口付近にたゆたう魂之眼球に、さっきの警察のパトカーが一斉に映り、中から次々と警察が降りて来て、急いでパトカー

に駆け寄って来たホテルの管理人っぽい人からの話を聞きながら、中に入って行く……

そして、ダクトを登り821号室の扉の前に着いた眼球に映ったのは……ホテルスタッフがきつちりと部屋をガードしてる光景。

あっはっは、やっぱり、美樹さやか死体がホテルスタッフにバレてらあ〜♪

「うん、美樹さやかの死体を置いてた部屋の前を、ホテルスタッフがきつちりガードしてるね♪ いやあ〜、参った参った♪」

「アマタちゃん笑い事じゃないよ!?! ほむらちゃん、杏子ちゃんどうする!?!」

右往左往しながら大慌てするまどかちゃん。

いやあ〜、こうなった以上、回収は難しいのが本音。

普通に考えて、今殴り込んで回収すると、かなりややこしい事になるしねえ♪

「んじゃ、アタシがさやかを助けだして来る」

と、そのかなりややこしくなる選択肢を敢えて選択して実行しようとするチャレンジャー精神豊富な、杏子ちゃんが魔法少女の姿に変身し、槍を構えて走りだす。

が……即座に時間停止能力を発動したほむらちゃんによって、取り押さえられる……

「何しやがる!?!」

「美樹さやかの死体を回収した後どうする気なの? それこそ、美

樹さやかが社会復帰が出来なくなるくらいの大騒ぎになるわよ」

そうなんだよねえ……

行き成り死体が誰も借りてないホテルの一室（しかも密室）に出現し、警察が来るや否や死体が消失。

杏子ちゃんの事だから、入口の従業員を絶対に肉体的ダメージで眠らせそうだから、被害者が2人追加。

更に、その死体の御方が翌日元気に中学校へと、恋人の上条君とイチヤイチヤしながら登校と……

ミステリー作家も本当にビックリな事件になっちゃうよ……

「じゃあ、どうすんだよ!!」

「そうねえ……こんな時は……復活のアイテムは、世界樹の葉ですか？ フェニックスの尾ですか？ はい、上条君!!」

困ったときの神頼み^{カミじょうくん}♪

「そのネタは良いですから!？ えっと、でしたら、葬式とかの時に普通にソウルジェムを返したら良いのでは?」

ああ、、そーいや葬式するから、結局は美樹さやかの死体が棺桶に入れられて速達で帰って来るね。

すっかり、忘れてたわ♪

「成程。アンタ、頭良いなあ」

「常識的に考えて、この発想になる筈よ……」

上条恭介のアイディアに感心する杏子ちゃんに、ほむらちゃんが

グサツと刺さる言葉の釘を一発。

ふっ、私の心にもダイレクトアタックされたよ……

そして、先程から右往左往して慌ててたまどちゃんにも……

「じゃあ、今日はこれで解散って事で良いかな？ 死体は警察が有る程度は調べるから、戻って来るまで2日か3日くらいは掛かるでしょ？ 恐らく通夜か葬式の時は仲の良い上条恭介や、まどかちゃんのに連絡が入ると思うから、ほむらちゃんに連絡してよ。それで、ほむらちゃんが私達に念話してくれたら、最後の救出作戦を実行するだけだから」

こうして私達は、美樹さやかやのソウルジェムを復活させる事に成功したのだった。

条理があるなら、その条理を不条理にしてしまえば良い。諦めたらそこで試合は終了。

諦めなかった皆への、神様からの御褒美が……

きつと……

上条恭介の手に大事に握られてるソウルジェムなのだろう……

町に少女が暮らしてたとき
正義があるともっぱら評判
魔法の世界に飛び込んで
絶望しちゃったとき

これは大変少女が居ないぞ

知恵を絞って考えると

魔女の結界に飛び込んで

少女を取り戻したとさ

　　マザーグースの There was a man in our town より一部引用

第三十七話 魔女の御願（前書き）

はい、御久し振りです＞＜

PCが治り、魔女の絵を含めて3日で仕上げました＞＜

前の御話でかなりやっちゃった感もありますが、Going my wayで続きを書きあげました♪

先日ちょっとしたアクシデント（講義の終了に気付かず爆睡して、眼が覚めれば別の講義が始まった）で、出るにも出れず御酒の作り方を勉強する事に。

意外と簡単で、作ろうと思えば誰でも簡単に♪

おっと、注意事項ですが密造は犯罪行為なので、作らない様にしましょう＞＜

（最近のマイブーム）

柿の種（※ピーナッツは要らない。柿の種だけで良い＞＜）

追伸……

読者様の中に、誤字脱字に聞く御菓を御持ちの方は居りませんか？
居られるようでしたら、是非この阿保作者に投与してやってください……

第三十七話 魔女の御願

「いやあ、しかしソウルジェムが無事に戻って来て本当に良かったね♪ それに、ほむらちゃんも新しい知識が手に入ってラッキーだったね♪」

「ええ、今回の事は凄く参考になったわ……まさか、このような方法で魔女になった魔法少女を元に戻せるなんて……そして、その鍵が杏子だった事もね」

今回の件で、万が一この世界が失敗したとしても、ほむらちゃんは魔女から魔法少女に戻す方法を知った。

故に、さらに次の世界での、夢への達成率が高まった。

もし、今回の世界で、私の協力で分かる事が有れば、もうちょっと探してあげれないかしら？

今回は、ほむらちゃんから聞いてた過去の記録と比べ、私と杏子ちゃんがほむらちゃんに非常に協力的である。

次回も私達が協力的であるとは限らないからね……

特に私は、ほむらちゃん曰く、暴れまくってるらしいからね……
魔女化して暴走、マミさんを除く他の魔法少女を虐殺……

いやあ、こうして美樹さやかを除く他の魔法少女達と仲良くや
ってるだけに、私が別の時間軸で、他の子たちを虐殺したなんて、
今一信じれないんだよねえ。まあ、美樹さやかを殺したのは信じ
れるけどね♪

現に、この世界でも何度か殺そうかなあって思っちゃったし♪

しかし、ほむらちゃんとまどかちゃんを殺しに掛かった理由は恐
らくマミさん絡みって云うので納得出来るけど、杏子ちゃんを殺し
た理由が今一分からないなあ……

まあ、過去の私なんて別に良っか♪
今の私が本当の私なんだから♪

現在は、上条恭介とまどちゃんを自宅へ届け終え、私達は一服しようとファミレスへ向かってる最中だった。

そういえば、ファミレスと云えば、目玉はドリンクバーだよね？
私も凄く好きで、全部制覇を掲げて、突撃して注文してるよ♪
でも、字が読めないことが原因で、一度悲惨な目にあってるんだよね……

『梅^{うめ}』って漢字が読めなくて、グラスに並々と梅ジュースを注いで、一度口をバツテンにしちゃったんだよね……

ドリンクバーのマシンに点字が付いてたら本当に楽なんだけどねえ……

ドリンクバー以外でも、そんな経験は他にもあるけど、今回は割愛しておこう……

「ほむら、アマタ、飯屋はまだかあ……御腹空いちまった……」

「杏子……ハンバーガーを食べながら言う台詞ではないと思うわよ？」

ちなみに、美樹さやかの魔女戦後3個目のハンバーガーです……
私なら、2個もあれば御腹一杯で、暫く何も食べたくなくなるよ……

ちなみに、作者は10個くらい食べれるよ。この間、友人と100円マックで10個早食い勝負して勝ってたから。

その代わり、その後暫く席から動かなかったけどね……返事がな

い、ただの美樹さやかのようにだ♪
本当にヤムチャしやがって♪

あつ、ヤムチャしやがっての意味は、某人気漫画の『龍玉（英語読みしてください）』のキャラの一人のヤムチャが無茶ばかりして、毎回御臨終しているの、それと掛けた言葉だよ♪

決して、キョンシー帽子被って「ニンハオニンハオ！！ キュッポイ♪」とか言いながら、饅頭とかシユウマイとか蒸し餃子とかを食べながら御茶を飲むヤムチャの事じゃないよ♪

「だってよお……御腹が空いちまったもんはしょうがないだろ？」

「杏子は何時も御腹を空かせてるでしょ……」

「まあな♪ ところで、ほむらとアマタは気付いてるかい？」

「勿論よ……」

「ああ、後ろを尾行してる魔女か何かの事？」

ファミレスに向かう道中、ずっと何かにつけられている様な気がしてたのだが、どうも気配が希薄で、弱いので気のせいと思ってたが、他の二人もその気配を感じるといことは、何かがいるのは間違いではなからう。

「晩飯前に、いっちょ運動と行こうか！！」

残りのハンバーガーを一気に口の中に入れ、魔法少女に変身して槍を構える。

「そうね……放っておく道理なんてないしね……」

ほむらちゃんも同様に頷き、変身してラウンドシールドの中より拳銃を取り出す。

そう云えば、あの中って色々と物が収納出来るようになってるんだよね？

私をあの中に収納して貰って、私が安全に索敵を行い、ほむらちゃんに情報を念話で転送する。

どう、これ？ 最高の作戦じゃない？

「一狩り行こうぜ!!」

私も変身し、索敵を開始する。

この3人でパーティーを組んだ場合は、杏子ちゃんがアタッカー、ほむらちゃんが杏子ちゃんの補助、私が索敵ってところかな？

私の戦闘能力の低さは美樹さやか並みだからね……

ちなみに、今回の魂之眼球は二人にも視認出来るように設定している。

魂之眼球を飛ばして辺りを探索するものの、そこに微かな気配があっても魔女の姿や結界がない。

恐らく、相当な潜伏能力を保有しているのだろう。

だけど、それは一般の魔法少女に対しての話♪

索敵特化の魔法少女を舐めないでね♪

魂之眼球の眼がカッと開き充血を増すことで、脳内に移るヴィジョンに赤みがかかる代わりに、世界が温度で表示されるようになる。所謂、サーモングラフィーって奴だよ♪

あれ、グラフィーの前って、サーモだっけサーモンだっけ？

まあ、いいや♪

眼には映らないが、温度でチェックすると、後方40メートル付近の樹の陰に、人型の何かが居るのが分かる……

『人型の何かが居るのが確認出来たけど……温度で見てるから、体型以外は判別出来ないから、魔女か魔法少女かは分かんないな……』

『でも、ソウルジェムが反応してないのを見ると、魔法少女の気もするけどなあ？』

ソウルジェムには、どんな魔法少女でもある程度魔女を探索出来るように、探知する機能が付いている。

杏子ちゃんは、自身のソウルジェムを覗き込んで、ソウルジェムの輝き具合で魔女を探知しようとするが、何も反応がないので、魔女の可能性を否定する。

『そうとは限らないわよ……魔女によってはソウルジェムで探索が出来ない事もあるわ。だから、アタミみたいな探索特化の魔法少女の力無しに撃退する事が出来ない魔女も存在する』

だが、そこは経験の多いほむらちゃんが、杏子ちゃんの意見は断定することが出来ないと言定。

『ふう〜ん？ で、結局のところ、後ろの奴はどうすんだい？』

『そうね……私の能力で確かめて来るわ。アタミ、正確な位置を教えてください？』

『現在は、後方約30メートル付近の右側の街灯に居るよ。でも、確かめるのは良いけど気を付けてね?』

『分かってるわ』

そう言った直後に姿を消し、一気に街灯付近に出現し、街灯付近に居た見えない何かを掴み、地面へと組み伏せる。

その鮮やかな一撃によるダメージで、姿を隠していた何かは姿を現す。

俗に言う魔法少女の被っている三角帽子。多色のパステルカラーで鮮やかに彩られたローブを身に纏い、絵筆を手に持つ小さな少女の姿。

だけど、少女は顔にムンクの叫びに類似した仮面を付けているので、残念ながらその真の容姿を拝見出来ない。

まあ、言えることは一つ……こんな真夜中にこんなふざけた格好で、こんな仮面を被ってる彼女は……

9割9分9里魔女だろうねえ……

「この子は……落書きの魔女ね……」

案の定、過去に出会った事があるのか、正体を知っているほむらちゃんが、少女の正体を教えてくれる。

「そんなら倒しても良いよな?」

槍の穂先を魔女に向けて、一步一步詰め寄る杏子ちゃんだが、魔女は手と首を横に振って戦う意思は無いとアピールをし始める。

「Nifunia bide lunias visacantalia!」

そして、必死に何か良く分からない言語で必死に伝えようとする。

「ねえねえ、杏子ちゃんの魔法で会話を通じさせれないかなあ?」

「成程……魔女との意思疎通には持って来いの能力だから、試してみる価値はあるわね」

「へいへい……でも、あれってどうやって発動すれば良いんだ?」

「出て来い……って念じてみたら?」

そう云えば、私も最初の頃は有ったなあ……

使い魔を召喚する時とか、拳銃の派生でマスコット銃を召喚する時とか♪

どうやって出せばいいのか分からないから、「●●出ろおー!!」とか言って念じてさあ♪

まあ、慣れちゃえば、手や足を動かす感じで召喚出来るようになるんだよね♪

難しい顔をして、何かを念じ始める杏子ちゃん。そんな彼女を見守る私とほむらちゃんと魔女。

数分後、漸く魔法の発動に成功し、赤い結界に包まれる。

赤い結界に世界が包まれると……

『これが、さっきの魔女に使ってた能力ね? 本当に、面白い、能力だね♪ 貴方達はさっきの人魚の魔女をソウルジェムに戻したよ

うに、魔女を魔法少女に出来るのでしょ？ 悪いけど、私を魔女から魔法少女に戻してくれないかな？』

と、落書きの魔女は声を発する。

「あら、隠れてさっきの現場を見てたの？」

『うん、私の魔女での能力は、気配を遮断したり姿を消す事だから。ていうか、昔から貴方達を密かに観察してたよ♪ 薔薇園の魔女の辺りから、密かにね♪』

薔薇園の魔女って言うと、まどかちゃんと美樹さやかが、この時間軸で最初に会った魔女だね。

そして、マミさんと二人が出会う切っ掛けとなった魔女……

「それで、隙さえ有れば私達を襲うつもりだったのかしら？」

『違うわよ。私は魔女の生活に飽き飽きしてるから、人間観察してるだけ。隠れん坊しても、使い魔は馬鹿だから探しに来ないし……』

ほむらちゃんの厳しい問いかけに、魔女は激しく首を横に振って否定する。

しかし、自分の使い魔と隠れん坊するなんて、凄じ寂しい事してるわね……

「だけどさあ？ 貴方の肉体が無い事には、ソウルジェムを復活させても意味ないと思うんだけど……」

さっきから魔女との会話には参加してないので、取り敢えず疑問を訪ねてみる。

何か、黙ってばかりって性に合わないから……騒がしくて雰囲気
を盛り上げるのが私のキャラだからね。

『大丈夫大丈夫♪ 私の魔法は、描いた物を実体化する能力だから、
肉体は描けば手に入るし』

流石、落書きの魔女……

「ていうかよお、人間っぽい姿してるし、意思もちゃんと保ててる
なら、魔女のまんまでも良いんじゃないのか？」

杏子ちゃん、その突っ込みは私も思ってたけど、突っ込んだじゃダ
メ!!!

『良くないしい!! 色々と不便なんだよ!!』

顔が御面で隠れているので表情が相手に伝わらないから、両手を
挙げて不満を表すジェスチャーと声色で、今の生活の不満を露わに
する。

「まあ、良いけどさ……でも、魔女になった原因とか分からないと
無理だよ？ さっきの魔女は連れの二人の知り合いだったから、恋
愛沙汰が原因だと事前に分かってて、K君を拉致して告白させる事
で解決したけど……私達は、貴方の事は全然分からないし……」

『魔女になった原因かあ……何だろうね？ キュウベえと契約して
魔法少女になってえ……魔女と戦ってて、気付いたら魔女になっ
たの』

そうになると、単純にソウルジェムの維持のミスかな？

でも、美樹さやかのように絶望した原因が分からない事には、どうしようも無いんだよねえ……

それは、杏子ちゃんとはむらちゃんも同じようで、頭を悩ます。

この魔女には義理も糞も無いけど、困った人を見過ごせない2人は、落書きの魔女を元に戻す為の答えを必死に探そうとする。

「今のところ、希望が絶望に変わるエネルギーと、希望が絶望に変わる際のエネルギーが一緒に、絶望が希望に代わって魔女化する際に放出したエネルギー分が手に入れば、元に戻せるって事しか分かってないんだよねえ……」

と、私が自分の知ってる条件をぼそつと呟くと……

そして、それが切っ掛けで、この難題を解決する道が開けて、一気に進展するのであった……

「ねえ、それってつまり……希望から絶望へ移行した度合いが低い場合は、少量のエネルギーで元に戻れると取って良いのかしら？」

「うーん、それは分かんないや。まだ、美樹さやかしか成功してないし」

「もし、私の仮定通りなら、一切負の感情を抱かずに単にソウルジェムの維持を失敗して魔女になった魔法少女、つまりこの子は簡単に戻せると思うわ……」

確かに、少量のエネルギーなら、美樹さやかの時のように、大好きな人からの告白みたいな事は必要としないだろう。

つまり、この子が今したい事とか未練を解決してあげれば、案外元に戻るかもしれない……

あと、今気付いたんだけど、もしかして魔女の強さとか凶暴性は
ここの絶望具合に比例してるのかな？

いや……でも……確か魔女の能力は、魔法少女の頃の才能や能力
に比例するんだっけ？

だから、まどかちゃんが別の時間軸で魔女になった時に、キュウ
ベえが「ワルプルギスの夜を超える最強の魔女」って言ったんだっ
け？

今一、この辺の事が不透明なんだよねえ……

「成程ね。じゃあ、この子のしたい事に付きあってあげれば良いの
かな？ 何かしたい事はある？」

『じゃあねえ、隠れん坊がしたい!!』

『落書きの魔女』

>i25911—2802<

第三十八話 隠れん坊（前編）（前書き）

まずは、投稿が遅れた理由ですが、家庭の事情です（汗）

簡単に云うと、久しぶりに自宅に帰ると、弟（高三）が今年は受験なのに、あまりにも勉強しないので、土曜日の昼に親にネットをブチギリレマシタ……

それで、下宿先に帰るまでネットが出来なかったので、投稿が遅れました（汗）

さてさて、今回は星屑アマタを暇零さんに、書いて貰いました＜＜そして、自分ももっと上手に絵を描きたいと云う事で、相談に少々乗って貰い、木曜日に2000円の参考書を購入！！
今晚から練習に取り掛かるぜ！！

アマタ「あんた、執筆は？試験は？」

……（沈黙）

ぐすん……試験勉強してきます……

<最近のマイブーム>

グリコのセブンティーンアイス

駅で電車を待ってる時に、食べると地味に美味しい（今一番ハマってるのは、マカダミアナッツ）

第三十八話 隠れん坊（前編）

『隠れん坊』

それは、新入りの坊やが、敵幹部の命を取った後に、眼にバツテンマークの切り傷が入った怖いおじちゃん達から逃げ、警察署にかけ込むゲーム。

もし、見つかって捕まったらコンクリに詰められて、東京湾に沈められてしまうという、まさにデスゲーム。

さあ、闇のゲームの始まりだっ！！

「全然、違えよっ！？　　つうか、この隠れん坊のくだりを使うのは色々と拙いだろ！！」

「行き成り大声を出して、どうしたの杏子？」

突如として叫ぶ杏子ちゃんに、驚き体を条件反射で震えさせてしまった……

「いや、今、訳の分からない解説をされた気がして……」

「メタ発言はダメだよお？」

「アマタに言われたくはないつつうの！！」

最近私はメタ発言を控えてるのに……
そんな事を言われるのはちょっと心外だよお……

「そろそろ5分経つわ。探しに行くわよ……」

落書きの魔女との隠れん坊のルールを先ずは解説するね♪

落書きの魔女が隠れる場所は、見滝原市内の何処かに作った自分の結界の中……

制限時間は5時間で、その制限時間の間に自分の新しい依代よりしろと私達が勝った時の賞品として、私たちにとって有益な何かを用意しておくらしい。

賞品は勝ってからのお楽しみらしい。ちなみに落書きの魔女が、私はあんまり貰っても喜びはしないかもと言ったので、自分グリーフシードの命や可愛い女の子ではないのは確かだね。

ああ、マミさん描いて実体化してくれないかな？

最近俗世では流行ってるんでしょ？ 美少女キャラの抱き枕を抱いて、夜な夜な「●●たん可愛いよお、はぁはぁ」って言うのが？

更に、ちゃんと死ぬ前の意思や記憶とかも有れば最高なんだけど……

でも、ちょっと死者を冒瀆してる気がして、流石に実行に移そうとは思わないけどね……

そう云うのは、妄想の世界だけで留めておかないと♪

「おうっ!!」／「りょくかぁい♪」／「僕も手伝うよ♪」

私と杏子ちゃんと+aがやる気を露わに……

うわっ、キュウベえがエンカウントしたし……

「何時の間に来やがった!？」

「まあ、そんな些細な事は良いじゃないか。しかし、僕の知らない所で君達は想像もしない事をしてるね。他の魔法少女と比べて目が離せないよ」

「こっちとしては、眼を放して欲しいもんなんだけどね〜」

「君達魔法少女を見守り手助けするのが僕の役目だから、それは無理だね」

見守る？ あんたの目的は私達が魔女化する時のエネルギーでしょうが……

「何をぬけぬけ言ってやがる。手前の目的は別物べつものだろうが！！」

「そうだね。勿論、その言葉に反論はしないよ。だけど、君達が死ぬのは僕としても見過ごせないから、当然手助けはするよ。まあ、今回の場合は死ぬ事は無いと思うけど、一応手助けになればと思って色々と情報を持って来たよ」

「k w s k、t m j kお願いね」

先ずは落書ききの落書き魔女の名前だが『パステル』。魔法少女の時の名前は『絵意えいしクレイ』。

魔女になった原因は、さっき本人も言っていたように、ソウルジェムの維持を怠っていた事。

キユウベえに叶えて貰った御願いは、『自分の絵を皆の記憶から消して欲しい』らしい……

絵が上手故に、友人等に描いてくれとせがまれ、それが断り切れず、自分の好きな絵を描く時間を増やしたかった為の契約らしいが……

私から見ると、物凄いくだらな契約内容ね……そんなくらい、断わりなさいよね……

なんか、「それが出来ない心の弱い人間も居るんだよ」って突っ

込みが聞こえた気が……

どうせ、私はガサツな女だよ……ふんっ……

「で、それが分かったら、今回の隠れん坊の何か勝利の糸口になるのかしら？」

「何を言ってるんだい？　なる訳ないじゃないか」

「よし、ここに御墓を建てよう」

「アマタ、笑顔で僕の首を絞めながら、召喚したマスケット銃の先端で地面に穴を掘るのは止めてくれないかな？」

ふむ、言われてみれば確かに止めた方が良いわね。

マスケット銃の先端に砂が詰まって発射する時に内部爆発する恐れもあるし、何より穴を掘る効率が悪いよね♪

「ねえねえ、杏子ちゃんの槍で穴掘ってくれない？」

でことで、マスケット銃よりは穴を掘り易い武器を所有する杏子ちゃんに御願いしてみる。

「アタシの武器はシャベルやスコップじゃねえよ!!」

あつ、ここでシャベルとスコップの豆知識ね♪

シャベルとスコップの違いは形や大きさで、両者の言葉の意味は実は同じで、英語かオランダ語の違いだけらしいよ。

「二人とも、漫才してないで、落書きの魔女を探しに行くわよ……」

「アタシは関係ないだろ!!」／「ほむらちゃん、漫才の前に『夫婦』を付け忘れてるよ」

「君達は本当に訳が分からないよ……」

その一言を皮切りとし、マスコット銃から発せられる銃声と、一匹の獣の断末魔が響き、落書きの魔女探しが開始された。

そして、祝キュウベえ殺害30体目♪ そんな訳で、銃声には半分祝砲の意味も含まれているよ♪

ちなみに、今回は戦闘ではないので、固まってではなく、各個人エリア分けしての探索である。

まあ、当然の事だけど、私の担当エリアが見滝原市の4分の3もある事は言うまでもなからう……

私の能力の場合は、自分がその場所に移動しなくても探索が可能なので、その場から一步も動く事無く、魂之眼球を36個召喚し、上空からの探索を開始。そして徐々に高度を落としつつ、窓ガラスから見える範囲の建物の中の検索も同時に行う。

完全な建物の中の検索は、非常に時間が掛かるし、魂之眼球を侵入させる為に、人間の手で窓を開けたりしないといけないので後回しである。

探索するものの、当然の如くそんな簡単に見つかる場所には隠れている訳もなく、発見は出来ない。

不幸中の幸いにも、結界の中に居ると言っていたので、サーモグラフィー状態にする必要がないから、探索は大分楽になってる。

あの赤色の画面を沢山処理すると吐き気が……

他にもMAX200km/hの速度のヴィジョンの大量処理等も挙げられるわね……

脳が処理しきれず拒絶反応を起こすみたい……

少女探索中

そして1時間後……私の担当エリアの建物を除いて全部の搜索を完了したので、取り敢えず一報。

ちなみに、さっき殺したキュウベえの死骸は、後から来たキュウベえが美味しく頂きました。

『こちらアマタだよお、建物内部を除いて担当エリア全部チェック終わったよ♪』

『だあゝ!! こんなチマチマした作業やってられるかっ!!』

『落ち着いて、杏子……』

杏子ちゃんの方は、かなりイライラしてるね……

まあ、性格上否めないのだが……しょうがない、早めに私の担当エリアを終わらせて、手伝いに行こう……

嘆息し、自分のエリアの探索効率を高める為に、鳥の使い魔を召喚する。

鳥の使い魔はある程度は自動で行動するし、足や翼等を使っ^{オート}てドアの重量にもよるが開け閉めも可能。

まあ、ソウルジェムへの負担は大きいが、この間の委員長^の魔女のグリーンシールドが残ってるから、少々は無駄遣いは出来るから4匹程召喚する事にしよう。

「使い魔まで召喚かい？ ソウルジェムへの負担も大きいと思うけど？ 昔の君なら、こんな事では決して使い魔を召喚しなかっただろうに」

「そうかなあ？　自分が面白いと思えば、基本は召喚するけどなあ？」

口ではそう言うが、内心はYESともNOとも言えない。

これがほむらちゃんや杏子ちゃんだから、自分の担当を使い魔を用いて早めに終わらせ、手伝おうという気になってるのかもしれないし……もし、美樹さやかや嫌いな魔法少女だったら、手伝わないか、使い魔を使って妨害に走りそうだからね……

あっ、結局使い魔を召喚するのは誰だろうと関係ないね♪　用途は別として♪

「そうかい？　君がそう言うなら、そうかもしれないけど……そうそう、少し遅れたけど美樹さやかのソウルジェムの再生の成功おめでとう。まさか、あんな方法で元に戻せるとは思ひもなかったよ。それに、杏子のまさかの能力にも驚きを隠せないよ」

「だよねえ、杏子ちゃん的能力がまさか意思疎通だったなんてねえ♪　まあ、でも契約内容からそんな気は前々からしてたんだけどね」

と、私が言うと、キュウベえは顔を傾げ、「何を検討違いな事を言っただこいつ」みたいな表情で私を見る。

「杏子の力は意思疎通なんかじゃないよ？　彼女の能力は実に凄いのよ。僕にはまさか彼女があんな力を持っていたなんて、思ってもいなかったよ」

と、明らかにこっちに詳細を伝える気ゼロな杏子ちゃん絶賛の独り言を開始したので、める前の鶏の首を持つようにキュウベえの首

を左手で掴み上げ、私に分かるように言うように命令する。

「杏子の力は暁美ほむらやアマタとは比べ物にならない魔法だよ」

「なんなのさあ？ ほむらちゃん以上って事はそういう魔法って事になるよ？」

時を止めたり遡ったりするチート級の能力よりも凄い魔法って何だろう……

というか、何時の間にこいつにほむらちゃん的能力がバレたの？
もしも、知ったふりをして、私の口から洩れるのを待っているの
だったら拙いから、ほむらちゃん的能力はアレとか言って誤魔化し
つつ、キュウベえが正確な能力を言うまで待つ事にしよう。

「幻惑さ。しかも、それも魔女にまで通用する高位の」

「なんで、それがほむらちゃん以上の能力になるの？」

「考えてもみたまえ。どんな相手にでも強力な幻惑を見せれるんだ
よ？ プラシーボ効果って知ってるかい？」

こいつ、私が知識が無い事を知ってて、わざと難しい言葉を使っ
てるのかしら？

それとも、自分の知識の多さをひけらかして悦に入るのが好きな
のかな？

「知らないに決まってるでしょ？」

「思い込みによって、それが体に作用することだよ。つまり、杏子
の力は強い幻惑を見せることで、それと同じ事を実現化させる事が

出来るんだよ」

「つまり、死ぬ幻惑を見せたら、相手が死んでる的な？」

「そうそう」

何て、チート能力……と云うか、何故そんな事に……

杏子ちゃんの契約内容は『父の話を皆に聞いて欲しい』だから、
どうして幻惑や幻覚の方向に進む事に……

ま、まさか……杏子ちゃんの御父さんの話を信者が聞きに来たのは、
集団催眠か何かの結果って事になるのかな……

キュウベえの教えてくれた杏子ちゃんの本当の能力より推測する
に、魔女のくちづけと一緒に現象を起こす事で、杏子ちゃんの願い
を叶えたって事になりそうだね。

願いの叶え方が、少々捻くれてるけど……

あれ、魔女のくちづけと同じ現象を幻惑で可能にさせれる？　っ

て、事は……！

もしかして、激ムズ早口言葉を簡単にクリアとした暇潰し人形が
作成し放題って事！？

あ、意味が分からない人は『第四話　こんなの絶対に面白いよ』
を参考にしてね♪

まあ、杏子ちゃんだったら絶対にその様な行為には嫌悪を抱くか
ら、御願いの気はないけどね♪

「じゃあ、魔女と会話できるようになるのはどうして？　何か、能
力と効果が異なりすぎて、色々と納得いかないんだけど？」

「僕も確定を持つまでには至ってはないけど……恐らくは魔女に、
自身が半分人間であると疑似認識させ、人語の会話を可能にさせて

るのじゃないかな？」

全然分からん……もう、面倒臭いから、取り敢えず便利な能力って認識でイイよね？」

『私よ。担当区域を全て探し終えたわ。魔女の結界は無かったわ』

おっ、ほむらちゃんより入電♪ あっ、でも電話じゃないからどうなるんだろ？」

念話だから、入念かな？ 何か、別の意味を持つ言葉になっちゃってるけど……

しかし、それにしても、さっきの念話から時間が数分も経ってないのに……えらい早いなあ……もしかして、あの念話の後に直ぐに魔法を使って探索をしたのかな？

時間を止めることが出来るほむらちゃんなら、時間の早い遅いは関係無しだからね……やろうと思ったら1秒とかも可能だし……ただし、ソウルジェムの負担も馬鹿にはならないけど……

『御疲れえ〜♪ 私の方は追加部隊の鳥の使い魔を飛ばしたから、後20分もしない内に担当区域を終わらせる事が出来ると思うから、杏子ちゃんの担当区域の手伝いに行って貰える？』

『分かったわ。杏子、担当区域のどれくらい終わった？』

『東側から攻めてて、まだ半分くらいだ』

『なら、杏子の担当区域の西側の方から私は探索するから、そのまま探索を続けて』

『すまない』

さて、こっちも使い魔を投入した事で、建物内部の探索も細かく出来る様になったので、多く見積もって後30分くらいあれば完全に探索が終わるかな？ さっきは20分とか言ったけど、やっぱり見落としとかしたら、また探し直すのは面倒くさいし……

そんな訳で、30分後の世界と次話にキングクリムゾン！！

【キングクリムゾン】

キングクリムゾンはジョジョの奇妙な冒険に登場するスタンド名の一つ。

その能力は、自分以外の生物の時間を数秒間消し去り、「結果」だけを残すというもの。
時間すらも飛び越えるので、ネコ型ロボットもA級ジャンパーもびっくりな能力です。

<有り難き！！>

『暇零』さんが書いてくれた『星屑アマタ』です♪

>i26088—305<

にゃあ……上手過ぎて、自分のアマタがリアルで子供の落書きに見える><

てな訳で、色々と相談に乗って貰い、キャラの参考書を購入しました！！

何時かは、自分も他の作者様の絵を自信持って描けるくらいに上手くなりたいです><

幕間　く七夕くナニヲネガイマス?>>> (前書き)

少し遅れましたが七夕番外編です<>

7月7日とある作者様の作品で、七夕ネタを思い出したので、急いで書く事にしましたが、大学とかで少々完成が遅れました<>後、来週から期末試験とかで忙しいので8月までドロンします (汗)

く nao のオススメく

沖縄県『ブルーシールアイス』の紅芋アイス

京都府『祇園小石』の鼈甲飴めづかしあめ

島根県『竹風軒』の源氏巻

どれも上品で凄く美味しいです♪

幕間　く七夕くナニヲネガイマス?>>

TANABATAそれは、ジャパニーズ文化の一つで、願い事を書いた短冊を吊るして、彦星と織姫にお願いする物。

当然、一年に一度しか会う事の出来ない二人は、自分達の幸せで貴重な時間中に、そんな願いを聞き入れてくれる訳も無く、届けられた願いは眼を通すだけ通してシュレツダーに掛けると言う俗説もある。

「僕と契約すれば手っ取り早く願いが叶うのに。本当に訳が分からないよ?」

そして、そんな雰囲気を開始早々ぶち壊してくれるのが、魔法少女物には欠かせないこのマスコットキャラ。

正直、私もちよくちよく「イラツ☆」として、殺害する事が度々。ごほんごほん♪ 折角の番外編なのに、最初から読者の気分を悪くさせるのもイケないし、私ってホラッ?

可愛い系の明るくて弱いツインテールのウルトラ美少女じゃん♪ イメージ壊すのも何だなぁ〜とか思うので、キュウベえへの文句はこの辺で終わらせといてっ♪

「ねえ、ママさんは何をお願いするの?」

「そうねえ〜、何にしようかしら?　ところで星屑さんは、どんな御願いにするの?」

なので、話を七夕に戻す為に、ママさんに何をお願いするか問にかけてみる。

ちなみに、天界のお偉いさんが、織姫と彦星に重圧を掛けて、今

日一日だけマミさんを復活させてくれました♪

流石は七夕。空気も存在しない無重力下で何千年も機織りとか農業とかする人間離れした能力の持ち主である、彦星と織姫の御利益は伊達じゃない。

でも、ロマンチックよねえ♪ ババアになってもジジイになっても、一途にずっと愛し続けるなんて。

「私ですか？ 私は、『マミさんを天界から連れ戻す事を可能にするドラゴンなボールを全部セットにして、私の前に作者自ら献上する』です♪」

「あら、私の事を思ってくれてるの？」

「勿論です!!」

「あら、ありがとう♪」

ああ、お礼は結構です。その代わりに、御美しく立派なサイズのその御胸に、私の顔を……ゲフンゲフン、おっとマミさんを前にして喜びのあまりに、キャラが可笑しくなっちゃったわね。

しかし、マミさんの胸って凄いいねえ……本当に中学生かよって突っ込みたくなるくらいに。

と、私は寄せても上げてもCが限度な自分の胸を見つつ、溜息。サイズとしては中学生にすれば十二分に大きいサイズなのかもしれない。

だが、あの胸を前にすれば、流石に貧相に見える。

あっ!？ でも、愛でるのなら真っ平らなのも好きだよ♪

Aカップ、Bカップ、Cカップ、Dカップ、Eカップ、Fカップ、Gカップ、Hカップ!!

8組のバストを選ぶとしたらあゝ♪ 貴方はどれが好きいゝ♪

さてさて、マミさんはニコニコと天使のような笑いをしながら、楽しそうに願い事を考えているので、その100万ドル出しても惜しくない天使の微笑みを邪魔するのもイケないから、今度はひよこひよこ談話中の杏子ちゃんと美樹ゾンビの元に向かう事にする。

「ねえねえ、杏子ちゃんと青いのは何を御願いするの？」

「誰が青いのよ！？ この白いの！！」

「じゃあ、人魚の魔女。あと、何か呼び方がムカつくから、沈^{チン}するわよ？」（※沈^{チン}…生きたままコンクリに詰めたり、手錠をしたりして、湖や湾等に沈める事。良い子は絶対に真似しないでね？）

「何よおおおお！！ 先に喧嘩を吹っ掛けて来たのはアンタの方でしょ！？」

「御前ら好い加減、仲良くしろよ……」

顔を合わせるや否や喧嘩を吹っ掛ける程の犬猿の仲の私達に溜息、勿論言っても聞かない事は分かり切っているので、杏子ちゃんもそれ以上は言う気はゼロである。

「安心して、これが私なりのスキンシップだから♪」

「アンタの中でのスキンシップは、喧嘩を吹っ掛ける事なの！？」

「青いの限定でね♪ 青い色とキュウベえを見ると、つい喧嘩を吹っ掛けたくなるの♪」

「むきやあああああああ!!」

おお、猿のように怒った。色は青いの、顔は赤いのね♪

まあ、青いのを揃^{から}うのは、尺の都合でここまでにしといてっ♪

「それで、杏子ちゃんは何を御願ひするの？」

「あん？　アタシか？　アタシは、『美味しいもんが食いたい』だけ
ど？」

ですよねえ♪　なんか、そんな気は聞く前からしてたよ……

ここで、『アマタと友達以上の関係になりたい』とか書いてくれ
たら、テンションが物凄く上がるのに……

まあ、良いけどさあゝっと、少々妄想通りに行かなかった事に、
膨れっ面になってしまう。

「美味しい物なら、私が作ってあげよっか♪」

なので、来年こそは妄想通りになるようにと、ここで好感度を上
げる為に、笑顔で料理が出来る事をアピールしてみる。

勿論、腰に手を当てちゃって、胸を少々前にやり腰をやや反らし
て、自慢げに♪

「あれ？　アマタって、料理出来るのか？」

「うん♪　人並みにはね♪　得意料理はマグロの目玉の――」

「ああ、もう何も言うな……」

うう、会話を途中でキャンセルされたよ……マグロの目玉はDH
A豊富で頭に良いんだよ!!

「マグロ、二夜連続!! 御期待下さい!!」って、ドラマ化されちゃうくらいに素晴らしい食材なのに……

「まだ言ってる途中なのに……あつ、青いののは尺の都合でヤッパリ言わなくて良いよ。どうせ、『上条君とこれからもずっと一緒に居られますように』とかでしょ?」

「うっ、うっさいわね!! アンタには関係ないでしょ!!」

顔を真っ赤にして反論する辺りを見るに、多分凶星だね♪

しかし、本当に青色の彼氏としては上条恭介はもったいないわね……青色には中沢君で十分よね?

「ありゃあ、もしかして凶星だった? ひゅう、ひゅう♪」

「うるさああああああああ~~~~い!!」

半分涙目で顔を真っ赤にして、魔法少女状態に変身。そして、サ
ーベルを私に向けてきたので、取り敢えずスタコラサッサと逃走。
迎撃しようかとも考えたが、今日は七夕。折角の天の川に、美樹
さやか星を打ち上げる訳にもイケないので、今日は素直に逃走する。
ちなみに、打ち上げた日には、一人じゃさみしいだろうから、上
条恭介星も一緒に打ち上げてあげるつもりだよ♪
私って本当に優しいよねえ♪

ねえ?~

ねっ!?

よし、最後の恫喝……ゲフンゲフン、問い掛けで全員が首を縦に振ったので、次に行ってみよう♪

次は、楽しそうに短冊に願いを書く、まどかちゃんとほむほむの所だよ♪

うーん、皆が私服の中、風情あるまどかちゃんはピンクの生地に金魚の絵が入った浴衣かぁ♪

ほむほむは相変わらぬの学生服……こんな時くらいは、可愛い私服や浴衣で決めて欲しかったなぁ……

「二人は何書いてるの？」

「あつ、アマタちゃん。えっと、私は、『皆が仲良く過ごせますように』だよ♪ アマタちゃんは？」

なあってんだ、『新世界の神になる』とかじゃないんだね？

原作最終話では、『平伏せ愚民ども、私が神だ』と魔女を全て消し去ると云う、暴虐を尽くしたのに……あれで、可哀そうな落書きの魔女は、骨も残さず消滅させられちゃったと云うのに……

「私はね、『世界平和』だよ♪ この世に蔓延る悪を全て滅し、貧困や飢えを無くして、世界中の人々が笑って暮らせるような世界になりますようにって♪」

「笑顔で嘘を吐くのも大概にしなさい……『マミさんを部屋に引き込んでくピー』（不適切な発言の為書く事が出来ません）>』って書いてあるわよ？」

ほむっ！？ 時間停止能力を発動して、私の短冊を奪い取ったほむらちゃんが、冷たい視線を飛ばしながら、私の書いた願い事を読

み上げる。

ちなみに、そのあまりにもR18で過激な御願い事に、耐性の少ないまどかちゃんは顔を真っ赤にして、途中から耳を塞いでいた。しかし、こういう初心^{うぶ}な女の子を墮^うとすのも、色々の良いよね？えっ？ どう墮^うとすのかって？ そんなの、ググりなさいよ！！

『神無月の巫女』とか『桃花月憚』とか『百合』とかで！！

「流石はほむらちゃんね。まさか魔法を使ってまで、私の短冊を奪い取るとは……」

「そう云うアマタも、平然とした顔で魂之眼球を、まどかの浴衣の中に侵入させるのは止めてくれないかしら？」

「いやあ、浴衣にはノーパンって言うじゃん♪ まどかちゃんはどうなのかなあ〜って♪」

残念ながらちゃんと履いてたけどね……

「もう、アマタちゃん止めてえええ！！ どうして、毎回毎回私の下着を覗くの！？」

うむう、今日は良く人を涙目にする日だなあ……しかし、S気有りの私の心を揺さぶり高揚させるので、涙目は止めた方が良いと思うよ♪

まあ、取り敢えずは回答だねえ……うむ、『何故下着を覗くか？』ねえ……

「『そこに美少女が居るから』かな？」

「とある登山家みたいに答えても駄目です！！」

「大丈夫!! まどかちゃんの胸は登山しようにもまだっ!? ゲ
フェ!?!」

刹那、灰色の影が疾走し、私の続きを見事にキャンセル。

杏子ちゃんと違い、凶行手段こうげきで私の口封じを図って来ている……

「取り敢えず、落ち着きなさい」

ほむらちゃん、その台詞は私の顔面を狙ったドロップキックを決
めて言う台詞じゃないと思うよ。

しかも、さり気無くオマケの強力な膝蹴りを、顎に食らわしてく
るし……

もしも私が一般人だったら、病院送りだよ……

「今の普通の人が食らったら、逝っちゃうレベルの一撃だよ……」

「大丈夫。私達の本体はソウルジェムだから……」

さらっと、怖い流し方をしたね……それって、ソウルジェムさえ
壊さなければ、どんなに凹しても死にはしないって意味だよね……
つまり、これ以上変な事を言ったら、殺しはしないけど、肉体言
語で語るって意味だよね……確かロシアかどっかの国にこんな言葉
が有ったよね?

『肉のカーテン』……

あれ、何か違うような気もするけど、まあ良いや……これ以上は
黙っておこう……

「分かったよお……それで、ほむらちゃんは御願い事に何を書いた
の?」

「私？ 私は『まどかとの約束が守れますように』と書いたわ」

「そっか♪ 願いが叶うと良いね♪」

「でもね、ほむらちゃんが、どんな約束かって何か教えてくれないの。私、ほむらちゃんとどんな約束をしたのか思い出せなくて…」

うん、思い出したら、それは時間の壁をブチ破ってるから、思い出さなくて結構。

さてと、私はマミさんをこれ以上一人ぼっちにするのは拙いので、退散しようかな。

噂では、一人にしたり、現実を目の当たりにさせたりして、情緒不安定にすると、「もう皆死ぬしかないじゃない!!」と言って半狂乱にマスケット銃を乱射するらしいので（ほむらちゃん談）。

いやはや、H波沢村特有のLV5に感染されてたとは……

でも、そんなヤンデルマミさんも可愛くて好きだよ!!

私が白馬の王子様で、マミさんはヤンデレラ♪

12時の爆撃音と避難勧告と共に、二人は別れるけど、また出会い恋に落ちる!!

まさしくフォーリンラブって奴う〜♪

おっと、テンションが上がり過ぎて……変な事を口走ってたわね……

じゃあ、そろそろマミさんの所に戻ろつと♪
それで、笹の葉に括って、ぶら下げるんだ♪

あつ、今一瞬「マミさんの首を？」って思った人が居たでしょ？

アンタの首をぶら下げるわよ？

勿論、短冊だよ。

それで、御願いのするの。

私の願いが叶いますようにって♪

私はスカートの内ポケットから、別の御願が書かれた短冊を取り出して、マミさんの元に駆け寄った。

『皆の願いが叶いますように』と願い事が書かれた短冊を握って♪

第三十九話 自虐するなんて……私って本当馬鹿？（前書き）

1月ぶりです（汗）

まあ、何がありましたかと言いますと……普通に夏休みを謳歌してました（笑）

てのも有りますが、実家に帰宅するや否や、家事で忙しくて（汗）共働きの両親に代わって晩御飯を作るのが自分しかないの……姉貴にやらしたら、鍋の底が焦げて皿洗いが酷い事になったり、弟にやらせると晩御飯がホッ○モットのから揚げ弁当になったり（汗）

そう云えば、先日カレーライスを作りましたが、カレーライスって好みが凄く分かりますよね♪

シーフードが自分の中のジャステイス!!

それと、ケレマさんより星屑アマタのイラストを頂きました><

執筆のやる気メーターが凄く上がりました><

本当にありがとうございます><

<最近のマイブーム>

・ひよこ饅頭（半分に割って食べるのではなく、そのまま頭から食べるのが普通だと思う）

第三十九話 自虐するなんて……私って本当馬鹿？

まさに時は戦国時代。日本は群雄割拠で、多くの魔女と魔法少女たちの熾烈な戦いが……

って、ノリで始めてみるのはどうかな？

あっ？ てへっ、もう始まっちゃってるね♪

さて、あれから30分程探索した結果だけど、私の担当エリアには残念ながら落書きの魔女は居らず。

なので、残された場所は杏子ちゃんのエリア。ほむらちゃんが手伝いに入ったけど、杏子ちゃんの担当区域の一部のエリアは高層建築物が非常に多い為、私達の想像以上に探索に時間が掛っているようだ。

取り敢えず、私もそちらに向かうと連絡を入れ、先に魂之眼球と烏の使い魔を飛ばし、肩にキュウベえを乗せて、後をゆっくりと追って走る。

「ところで、キュウベえ。あの子について一つ聞きたい事が有るんだけどイイかな？」

「何だい？」

「あの子の魔法少女としての才能はどれくらいのレベルなの？」

「ワルプルギスの夜の戦力として役に立つかって意味かい？ 少なくとも、彼女なら君や美樹さやかよりは上手く立ち回れると思うよ」

最後に美樹さやかと同列にされたのはイラッとしたけど……ちゃんと、私の質問の意図を見越しての回答をしたから殺すのは勘弁し

てあげよう。

自分で自分と美樹さやかとの戦闘能力が同レベルと評価するのは良いけど、他人に、特にこいつに評価されるのは流石にイラッ☆と来る物がある。

おっと、まあ、そんな個人的な話は止しといてと♪

落書きの魔女こと、キレイちゃんの戦闘能力が高いか否かは、矢張り気にはなる。気にならないと云ったら、それは地獄で閻魔様に舌を抜かれるレベルの嘘になっちゃうくらいにね♪

正直な話、ほむらちゃんの持つ情報では、ほむらちゃん単騎で戦った限り勝てた事は一度も無いらしく、毎回の如くラストでまどかちゃんのマダンテもしくはメガンテで止めを刺されてるらしい。

ちなみに、私が原因で、ワルプルギスの夜が来る前にまどかちゃんが死んでた場合は、相手にする事も無く、スタコラサッサと過去に時間に戻しているしてるらしい。

つまり、ほむらちゃん単品では勝利は不可能であり、またそのほむらちゃんクラスがどうやっても勝利が出来ない相手に、杏子ちゃん、私、美樹さやかの3人が加わったところで勝てるのかどうやら？そうになると、矢張り新しく増える戦力は気になってしまう。

そして……

「ふうりん？ そう云えば、キュウベえってワルプルギスの夜の事は何か知ってるの？ アレも、あんたが生み出した魔法少女のなれの果てなんですよ？」

その敵勢力の情報もね♪

と、自然な感じを装い、話をワルプルギスの夜に上手い具合にシフトする。

正直な話、ほむらちゃんの結界の中で見して貰った資料には、ワ

ルプルギスの夜の攻撃方法や出現予測位置等の情報しか載っておらず、生まれ等に関しては一切情報が無かった。

ほむらちゃんが結構な数逆行しても見つけれなかった、ワルプルギスの夜の生まれに関しての情報。知って何の得になるかと聞かれれば、何も無いとしか答えようが無いが……

そんなくだらない事でも、気にしてしまうのが私の性格。

「ワルプルギスの夜は、魔法少女が魔女化した物じゃないよ？ 勿論、使い魔が魔女に成長した物でも無いんだ……だから、僕にもあの魔女がどうして誕生したのかって事は一切分からないんだ」

うーん、キュウベえが分からないと云う事は、もしかしてワルプルギスの夜も、ほむらちゃんみたいに、未来や過去からやって来た存在なのかな？

まさか、ほむらちゃんが未来で魔女化した姿とか！？

それなら、何回やっても何回やっても倒せる訳が無いから、辻褄は合うしね……

または別の可能性としては、キュウベえ達すら知らない別生命体とか？

うむうー、謎がより深まるばかりだね……

「じゃあ、自然発生したって考えるのが一番なのかな？」

取り敢えず、無難な回答を返す事にする。

「普通に考えるとそうだね。でも、僕達が叶えて来た願いの中に、ワルプルギスの夜を誕生させてしまう様な願いが有った可能性も否定出来ないし……」

いや、どんな願いを叶えさせたら、あんな物を誕生させるのよと、心の中で毒吐きつつ適当に相槌を打つ。

願いの副産物として魔女を生み出す可能性が有るとしたら、矢張り『怨み』だよねえ……でも、それで誕生したのなら、キュウベえが把握してないはずがないし……

本当に、訳ワカメだよ……

「て云うか、あんたは何時から多くの少女達を毒牙に掛けて来たの？」

「毒牙とは酷いなあ？　僕は普通なら叶う筈もない願いを叶えてあげる代償として、魔法少女になって貰ってるんだから。本来なら叶わない物を叶えるのだから、それなりの代償は払って貰って当然だと思うよ？」

「はいはい。で、何時からなの？」

「そうだねえ……凄く凄く昔からかな？　歴史の教科書に名を残した多くの少女達は、僕が関わっていると思って貰っても構わないよ」

その肝心な歴史の教科書を見た事が無いから、どんな人物が居るのかさっぱり分からないけど、相当昔から蔓延ってるガン細胞って事は良く分かったわ。

こんな訳の分からないエイリアンに、地球の歴史が昔から動かされている事に、非常に腹が立つ。

でも、そんな奴に持ち掛けられて眼を貰った自分に、嫌悪を抱いてしまう……そして、家族を失った事に悲しむ半面、友達が出来た事に喜びを抱くパラドックスが産まれてしまう。

両方の窪みに眼球が無いカタワな私に、誰が振り向くだろうか？　否、誰も振り向いてくれはしない。（片輪…^{カタワ}体の一部が欠損して

いる人を刺す言葉。差別用語)

皆、気持ち悪がって触れる事すらしない……決して出来る事の無い友達……それは、窪みが埋まってもそうだ……

だけど、そんな私に遂に、遺伝子すら繋がっていない赤の他人である友人が出来た事が、肉親である家族を失う悲しみを打ち消す。凄く不謹慎なのに……友達が出来た事を喜ぶ自分が居る。

馬鹿を言い合える赤色の友達、私の事を支えてくれた黒色の友達、明るくて可愛い桃色の友達……

この友達も友情もキュウベえが居なければ、出来る事は決まらなかった。

言い換えれば、キュウベえによって与えられたも同然である。

つまり、私も歴史上に登場する人物同様に、キュウベえに動かされた一人って事だよ……

本当、私って馬鹿だよ……って、おっとおろ!! この台詞は美樹さやか台詞だから取ったらアウトだったね♪

ていうか、これ以上ネガティブモードに入ったらソウルジェムが汚れちゃうし、落書きの魔女の探索作業も滞るじゃない!!

危ない危ない……

早く心を平常にし、ほむほむと杏子ちゃんと合流しないとっ♪

それに……

私は地面を蹴る勢いを強め、歩きから走りにシフトし、急いで向かう事に。

理由の一つとしては、さっきからずっと後ろを、変な荷物を持った男につけられてるから……

ちなみに、私が走り出すや否や、男も何か叫びながら大慌てで追いかけて来る……

「アマタ、本当に走って良いのかい？」

「何が？」

「だって、今追いかけてきてるのは、上条恭介じゃないか？ 素直に待ってあげたらどうだい？」

そう、変な男とは美樹さやか王子様こと上条恭介である。なので、当然の如く無視である。

理由としては、最初の段階で声を掛ければ良い物の、何も言わずにずっとついて来てるから。

その式としては、あの変な荷物は何なの？ 黒いビニールシートに包まれた人一人分の大きさの荷物。

明らかに怪しさ全開で、一緒に居るだけで国家権力之犬けいさつから、「君達ちよつと良いかい？」と巻き添えで声を掛けられるのは間違いないし！！

幾ら、知人とは云え、三十六計逃げるに如かず。

怪しい事には関わらないのがベスト。それが、生きる為の処世術なのよ！！

「じゃあ、アンタだけ待ってあげなさい。何なら、サービスで腕と足を？ぎ取って、動けなくして置いて行ってあげるわよ？」

「それは結構だよ。僕も腕と足を？がれるのは嫌だから、アマタのしたいように任せるよ」

「じゃあ、走るからしつかり掴まってなさいよ!!」

「星屑さん!! 待って下さい!! 僕です!! 上条恭介です!!」と遠くから声が聞こえるが、待ってくれと言われて誰が待つもんですか♪

寧ろ、そんな事言われたら、逆に置いて行きたくなるじゃない♪

そして、私は後ろで何か叫び追いかけて来る上条恭介を無視し、全速力で杏子ちゃん達の元まで逃げるのであった……

ちなみに、結局最後の最後まで上条恭介は生身の癖に、私の走りについて来ると云う偉業を達成。運動部じゃない癖に、意外と体力有るんだね♪

<有りがたき頂き物>

>i28130—3201<

ケレマさんより頂きました、星屑アマタです><

物凄くアマタの小悪魔チックさが出ており、背景が自分好み><

自分は絵の方は上達したのかと聞かれますと……忙しくて実は放置状態だったりしますOTL

夏休みなんて実家に帰ると無かった……毎日のように、家の家事をさせられ休みすらない現状……

親が共働きの、姉貴が役に立たないので、飯を作れるのが自分しかないOTL

第四十話 少しお話ししよっか♪（前書き）

本当に御久し振りです>>

夏休みを謳歌してた為に、全然執筆すらしてなかった故の結果がこれです（汗）

次の更新作品は『あの頃』を予定しています。『シルフレ』の方も今年中に再始動したいなぁと考えてます。

<追記>

先日まだマジのマグネットガチャを引いたら『さやか』が出てきました……

マミさんかQBが欲しかったのに……しよぼん……

<追記?>

まだマジキャラをサーヴァントとして例えると……

『さやか』は絶対にバーサーカーだと思う♪

ちなみに、物語中で弄ってたら徐々に『さやか』が好きなキャラになって来ました。

なんか、愛着が湧くと云うか何と云うか……

<追記?>

Skypeチャット大会やります。

話題はアニメや漫画、小説等となります。詳しくは自分の活動報告をチェキして下さい>>

読者さんでも大歓迎>>

第四十話 少しお話ししょっか♪

私は悪戯が好きなんだ 誰かが構ってくれるから
私が意地悪しなければ 誰も私に向かってこない
でも相手をつかんだり 殴ったりしないもの

だって、私は誰かと一緒にいたから
だって、一人ぼっちは寂しいから

♪マザーグースの like little Pussyより一部引用♪

「酷いですよ……置いて行くなんて……」

「ごめんねっ♪ 私って天邪鬼だから♪ ついつい、苛めゲフンゲフン、反対の事をしちゃうの♪」

じゃあ、置いて行っても構いませんって言われたらどうするのかって？

その時は、蹴り飛ばして置いて行く。

ちなみにそのシチュエーションが、囚われの姫を救出に敵の城に仲間と共に乗り込み、大きな部屋で敵の幹部クラスとの戦闘になって、仲間に言われた場合は、その場は先に進む振りをするが、二人が弱ったところを見計らって乱入し、味方諸共全力全開で攻撃して、手柄を全て奪い取る！！

それが私、星屑アマタ様よっ♪ キラッ☆

「で、何でこいつがここに居るんだ？」

「それに、その大きな荷物も凄い気になるわ……」

そして、上条恭介は私の疾走について来て疲れてる所に、二人からの質問攻め。

休まる暇もないとは将にこの事ね♪

「えっと、その……ちよっと、さやかの方に……」

「美樹さやかのアパートは、こっちじゃなかったと思うけど？」

「いえ、そうじゃなくて……その、司法解剖の事をすっかり忘れてて……」

「ああ、穢れを知らない美樹さやかの体が、知らぬ男達の手によって触られると云う行為が耐えられないと……でも、寝取られで何か欲情しなケファッ!？」

素早くほむらちゃんが、私の体の両脇に真正面から持ち上げる様に手を掛け、そのまま後ろに倒れる力を利用し、私の体に回転を加えて投げ飛ばす……

って、まさかのタイガードライバーとは……中々マニアックなプロレス技じゃない、ほむらちゃん……

「アマタは黙ってて。大体事情は把握出来たわ。美樹さやかの死体が司法解剖で傷付けられるのが嫌なのね？」

仰向けに地面に倒れ、手を天に向けて伸ばしピクピクしている私を余所に、技を繰り出したため目茶目茶になった髪を治す為に、髪をかきわけつつ会話を再開するほむほむ。

「おいっ、司法解剖って何だよ!？」

「杏子ちゃん、司法解剖も分からないの？　じゃあ、今から私が教えてあげよっか？　ほら、ぬぎぬぎしてえ〜♪　って、冗談冗談……だから、槍をこっちに向けしないで……」

先の一撃でまだ地面に倒れている私の眼前に槍を伸ばして来たので、流石に閉口する。

「アマタは本当に訳が分からないよ……」

そして、キュウベえはキュウベえで、遂に『君達』ではなく私单品になっちゃったじゃない……

「司法解剖は、事件に巻き込まれた可能性のある死体を解剖して、何かしらの証拠を得ようとする作業よ。別に気にしなくても良いわ。私達魔法少女は、例え体を切り刻まれても、ソウルジェムが無事な限り幾らでも体は再生出来るわ」

「でも……それでも……僕には、誰かの手によって、さやか体が傷付けられると思うと、心が痛み耐えられません……」

なら、司法解剖の存在を忘れるなよと非常に突っ込みたくなる。

まあ、流石にこれ以上突っ込みを入れると、またほむほむからタイガードライバーを食らいそうなので、止めておく事に……

いや、今度はビルの屋上から断崖式タイガードライバーを使われ、そのまま地面へ急降下しそうな気もする……

しかし、回を増す度に、ほむらちゃんによる扱いがどんどん酷くなってる……

まあ、どこぞの『透明でおっぱいミサイルを飛ばし、効果音が\

アツカリ／＼』な少女と比べると、存在感は有るのでそっち方面では問題はないが、扱いが酷いという路線では如何せん問題が……存在が薄いのが良いか、扱いが酷いのが良いか？

て云うか、私って主人公だよね？

何で主人公なのに、こんなに酷い扱いをヒロインから受けないといけないの？

もしかして、本作品は登場人物全員がツンデレもしくはヤンデレですって云う設定付きの作品なのかな？

まあ、ゾンデレ（ゾンビデレの略）はデフォで付いてるけどね♪
もしくは死ンデレラ設定とか♪

あっはっはっは、笑えない冗談だけどね♪　でいいいず、ぶらつくじょーくって奴だね♪

「そう……分かったわ……丁度都合の良い事に、探索されてない場所の一つが美樹さやかの方が安置されてる大学病院……」

「何で、御前はそんな事を知ってんだよ……」

「秘密裏にアマタに調べる様に頼んだのよ……こんな事も有るかと思っ
てね……」

そんな命令を受けた記憶は微塵もないので少々困惑するが、ほむらちゃんが私に目配せをして、話を合わせる様に指図するので、即座に全てを理解。

考えてみれば、未だ杏子ちゃんとかには未来から来た事を伝えてないからね……

しかし、何度も心の中で読者に向かって言うけど、そろそろ私以外にもちゃんと明かした方が良いと思うんだけどね？

そっちの方が、ほむらちゃん自身も動き易いと思うけど……でも、過去のマミさんや美樹さやかの一件が有るから、明かすのにも勇気

が要るし……

でも、ここまで来たら皆信じてくれると思うんだけどね？ 美樹
さやかも含めて……

「うん、ほむらちゃんの御願いだったからね♪ 私としては探すのも面倒だったんだけどね……さあ、御約束のほっぺにチューを頂戴♪」

まあ、何時かほむらちゃんも決断して私に話してくれたように皆に話してくれるだろう……その日まで私は静かにほむらちゃんのフオローをする事に徹しよう。

彼女の願いが成就するようにと……

「はいはい……後でね……」

こんな時だからとニコヤカにキスを要求する私をジト目で睨みつつ、キスをしてくれると約束。

まあ、多分有耶無耶にされるか、キスの代わりに拳が来するような気もするけどね……

「そんなじゃあ、先ずは私が下調べした方が良いかな？ 警備員とか監視カメラとかも有るだろうし♪ 突破する時だけほむらちゃんの能力で御願い♪ こうすれば、ほむらちゃんの負担も少ないでしょう？」

「助かるわ。正直、時間をずっと止めてたらソウルジェムの負担も半端ないから。でも、アマタもずっと能力を使いつ放しだけど大丈夫？」

「私は大丈夫だよ。私の能力は召喚時に負担が掛るだけで、維持に

関してはソウルジェムに影響は殆ど出ないと言っても過言じゃないからね」

ただし、脳への負担は有るけどね。勿論、それは口には決してしない。

口にすれば当然皆から使用の制限を掛けられるから。自分を犠牲にして皆を助けるなんて、ほむらちゃんとか杏子ちゃんは決して反対するだろう。だからこそ、彼女達には知られてはいけない。

つつても、死に至るとかじゃないから気にする事も無いけどね♪ただ単に、脳が疲労して眠たくなったり糖分を欲したりするだけだから。

そして、甘い物を御腹一杯食べて体重が増えるうゝ！！乙女として大切な物を犠牲にしてるような気がしてきた……

「それじゃあ、魂之眼球2個と烏1羽を突入させるね」

現在、他の場所を捜査している魂之眼球と烏の一部を操作し、大学病院に侵入させる。

正直な話、夜の病院って不気味だよねえ……何か、今にも動く死体が出て来たりして、って、それ自分じゃん！！

と、笑えない一人突っ込みを脳内でしつつ、監視カメラや警備員の探索を行う。勿論、美樹さやか探索も忘れてはいない。

そう云えば、死体は全裸にして上に白衣っぽい物を着せて司法解剖するって聞いたけど、もしかして今美樹さやかはノーパンなのっ！？

性格は嫌いだが、容姿は可愛い部類に入る。ふむ……ここは、少し私が得しても良いよね？

と、そんな冗談はさておき、次々と烏と魂之眼球を高速移動させ、監視カメラの位置と警備員の人数を把握して行く。

監視カメラの数は建物全体で20個。警備員は入口に1人、監視カメラから送られる映像を見る正式名称は分かんないけどそんな部屋に1人。巡回しているのが3名の計5名である。

そして、美樹さやか死体の死体が安置されてるのは地下1階に降りて、一番奥にある部屋である。矢張り事件性のある死体を置く部屋だけあって、監視カメラ等もしつかりと設置されている。

また、その美樹さやか死体の死体が安置されてる部屋の中に飛び込んだ私の鳥が、誰かからじっと見られてるような違和感を感じる。監視カメラが多いからそのように感じる可能性もあるのだが……まあ、実際に中に入って肉眼で見れば問題はないだろう……

この数の魔法少女が居れば、そこら辺の魔女には後手に回っても負ける気はしないし……時間を止めて侵入する訳だし。

「うん、大体の位置は把握し終わったよ。それで、今から向かうけど……美樹さやかの死体を回収した後、上条恭介はどうする気なの？」

「一旦、自宅に連れて帰り、二人でこれからどうするかを話そうかと……」

「その間は美樹さやかの死体は監視カメラに映らない事になるけど、それに対してはどうする気なの？」と云うか、そこまで一人でどうやって侵入する気だったの？」

「うっ……後者の方は考えてませんでした」

「無計画ね……」

上条恭介の無計画さが浮き彫りになるたびに、ほむらちゃんが次々と突っ込みを入れる。

と云うか、前者に関しては対策してたんだ……もしかして、そのビニールシートに包まれた中身って……うん、大体何かは想像できたが聞かないでおこう……

「まあまあ、ほむらちゃん。だけど、この無謀無計画馬鹿^{かみじょうきようすけ}の御蔭で良いアイディアが思い浮かんだよ♪」

「嫌な予感しかしないけど聞いてみる事にするわ……」

「うん、私も嫌な予感しかしないからその拳銃の銃口を下げてくれる？」

変な事を言ったら撃つ気満々なほむほむを宥めつつ、平和的交渉を提案。

うん、まあ……無理っばいけど……

「アマタの会話の冒頭部分がまともと判断したら下げる事にするわ」

「まあ、提案なんだけど。どうせ復活させるなら早い方が良いのはと、私は発言してみる」

「どういう事かしら？」

「美樹さやか^{ミツサカ}の死体を司法解剖する前に復活させれば良いんじゃないかな？ 時間を止めた状態で美樹さやかを復活させ、架空の人物に襲われて気付いたら病院のベッドの上だったと、美樹さやかに発言するように求めれば良いんじゃないかなって♪」

「それは無理ね。私の能力の対象になるには発動時に触れてなければならぬ。つまり、次の魔法を発動するまでのほんの一瞬の間

は監視カメラに映像が残されてしまうわ」

「あつ、実はちゃっかりそんなルールが有ったんだ……」

初耳過ぎる設定に、少々驚き。でも、その反面であれだけ強力な能力だから当然それくらいのちっぽけな制約は有っても当然とは思うけど。

「へえ、ほむらの能力って時間操作だったのか。どおりで、ぽんぽんあっちこっち移動した訳かあ」

そう云えば、まだ杏子ちゃんには能力教えてないんだっけ？ て云うか、気付くの遅っ！？

「時間を止める力ですか？ 暁美さんの魔法って凄いですね」

「そうよ。上条恭介、この能力があれば全国の女湯で覗き放題よ！
！ 私の能力や透視に並んで思春期の男子には羨ましさすぎる能力ベ
スト3に入るわよ！！ つまり、愛しの美樹さやかのもあれも無い
無防備な姿を拝見し放題と云う……ほむほむ、冗談だからトリガー
を引くのは止めてくれないかな？」

「アマタ……ちょっと、御話しましょうか？」

二人へと助けを求めようと顔を合わせるが、杏子ちゃんはやや呆れ顔で取り出した御菓子ロッキを食べ始め、上条恭介は何か妄想してんのか顔を赤らめて顔を伏せる。

つまり、現状孤立無援と来たか……

「ほむほむ、その御話は長くなるかな？」

「大丈夫、次話の冒頭までには終わらせてあげるから……」

私の頭を鷲掴みしニコヤカに笑うほむほむ。正直、目だけは物凄く細く睨みつけてるような感じが非常に怖い……

「ほむほむ、メタ発言はでっかい禁止っ！！ あっ、私を引き摺って何処に連れてく気！？ あっ、ど、何処を触ってるの！！」

「頭蓋骨よ？」

「じゃあ、その手に持ってる黒い物は何!？」

「拳銃よ？　じゃあ、ちよつと御話しましょうか？」

「おっ、御願いだから……や、優しくしてね……」

脳天に走る衝撃。まあ、その後の事は語るまい……R15指定になっちゃいそうだし……

では、次話に続く！！

第四十一話 隠れん坊（中編）（前書き）

先日初めてアイスワインに手を出して、ハマってしまいました（予約投稿を入れた11月24日現在の話）。

コルクを抜くと瓶から漂う果実の香り、味は非常にフルーティーで甘く、冷蔵庫で冷やして飲んだのでまるでジュースを飲んでいるかのよう。非常に自分には相性が良かったです。

ただ、チリ産のワインと比べると少々御値段が張るのが……375mlしか量が無いのに普通に値段が1本1000円越えとか……正直、バイト代が入ったら偶に飲む程度の贅沢品です……

（※アイスワインとは、氷点下の中収穫されたブドウより作られるワインで、通常のワインの約8倍の量のブドウを必要としている。主にドイツ等で作られているらしい）

ただ、美味しい故にがぶ飲みして、二日酔いしました……夜中に1本開けて全部飲んでしまった上に、チリ産の白（1本598円）とロゼ（1本598円だったかな？）で更に2杯追加し、晩御飯の醤油とニンニクで漬けて作った竜田揚げと昆布のオニギリでウマウマした所為も有り……何じゃかんじゃ言って、アイスワインってアルコール度数11%も有るんだよねえ……「チュウハイの様に甘くて飲みやすい癖して、アルコール度数が高いから、正直急性アルコール中毒が怖いよお」とか自分が言ってる傍で、一緒に宅飲み中の友人がドライジン（アルコール度数40%近く）をウマウマ言いながらロックで煽るように飲んでたりしたのは、キット自分が酔っていたからと思いたい……

（最近のマイブーム）

薩摩蒸気屋のかるかん

ドイツ・ラインヘッセンス産ジョセフ・ドラーテン社の2009年物ロゼのアイスワイン

<雑談>

先日中古本屋でうらバンと云う4コマ漫画の1巻（100円）を購入しました。

そして、帰宅後に今年の10月に全4巻で完結しちゃってたと云う事が判明……面白いだけにもうちょっと、続けば良いのにとnao naoは嘆いてみたり……

やっぱり、4コマ漫画は見ててのほほんとする……そう云えば、ひだまり4期放送されるらしいし、来年は凄く楽しみ♪

第四十一話 隠れん坊（中編）

ほっぺにチューなんて無かったんだよ！！ キスもチューもありやしないわよ！！

えっ？ 作品が違うって？

じゃあ、奇跡キスも、魔法チューも、有るんだよ！！ って、そんなシーンは無かったよ！！

折檻せっかん政治も、有るんだよ！！ 主に肉体言語で叱られる場面しか無かったよ！！

摂政も関白もビックリだよ！！

「まあ、取り敢えず美樹さやかの居る部屋に違和感を感じたから、行くだけ行ってみようよ」

「そうね。でも、アマタでも発見出来ない事って有るの？」

脳内に保存される記憶の引き出しから、幾ら引き出したり探したりしても、私に発見できなかった魔女及び使い魔、魔法少女はゼロである。

例え相手が結界内に隠れてたり、姿を消していてもである。

「そりゃあ普通の魔女なら楽勝だよ。今、ちょっと特殊モードを使って、その美樹さやかの死体が安置されてる場所を探索してるけど、見つからないんだよねえ……何かに見られてる感じはするんだけど……」

特殊モードこと熱源で探知するサーモグラフィモード。前回、落書きの魔女を見つけたのもこのモードである。

ちなみに現在の美樹さやは体温が一切無い為、真っ青な状態で

ある。髪が青いだけに、体も青いのね。

「監視カメラが有るからじゃねえのか？」

「うーん、ヤッパリそうなのかなあ……」

「行ってみれば分かると思いますので、取り敢えず行ってみましようよ？」

「上条恭介♪ 調子こいて私に指図してると眼球を刳^くり貫いちゃうぞっ♪」

力皆無、計画性皆無、そしてリア充。調子をこいて、先陣を切ろうとする上条恭介にちよつとイラッ^{えぐ}と来たので、スプーンを取り出して眼前でちらつかせる。

ちなみに、私が眼球^{えぐ}を挟^{えぐ}るのにスプーンを使うのは非常に効率的だからである。スプーン以外の道具だと眼球を綺麗に挟^{えぐ}り取る事が難しいからね♪

やっぱり、何かと有ると他人の眼球を狙うのは、自分がそこにコンプレックスを持っていたからだと思う。それで、自分が持ってなかった物を持ってる人が羨ましいから……

「す、済みません……」

「じゃあ、ほむらちゃん能力の発動を御願いできる？」

「分かったわ……もう一度言うわよ。能力の発動中に私から手を離すと、その瞬間にその人の時間が止まってしまうわ。だから、決して何が有っても手を離さない事」

「でもよお、ほむらの手は二つしか無いだろ？　で、アタシ達は3人だ。どうすんだい？」

「それは大丈夫。間接的に私の体に触れてるのなら大丈夫だから」

つまり、誰かを通してほむらちゃんに触ってるのもセーフって事だね♪　なんか、電気の伝導みたいだね♪

「じゃあ、私のソウルジェムをほむらちゃんが持つてる場合はどうなるの？　体は触れてないけど魂は触れ合ってる事になってるし」

「試した事が無いから確信は持てないけど、それでも大丈夫だと思うわ」

「じゃあ、私のソウルジェムを飲み込んで試してみる？」

服の胸部分に取り付けられているソウルジェムを取り外して手に取り、ほむらちゃんに挑戦してみないかと見せる。

「そんな事したら体内でソウルジェムが消化されて死ぬわよ……」

まあ、案の定却下され、現実的な意見で返される。でも、あれよね……自分の魂がちよっとちよっと消化されていくのを味わうのってどんな気分になるんだろう……

いやいや、案外消化されずに……おっと、食事前の人が居たら拙いからこれ以上の発言は止めておこう。

「でも、ほむらちゃんなら、腹上死じゃなくて腹中死しても良いかな……私の魂はほむらちゃんの血となり肉となり」

「まだ懲りてないようね……冗談でもいい事と悪い事があるでしょ？」

前話最後から今話の開始までの間の御説教が脳裏にフラッシュバックしたので黙りこむ事に……

「脱線した話を元に戻すわよ。だから、絶対に時間を止めた状態で私と離れないで」

「おう」／「分かったよ♪」／「分かりました」

三人が頷いたのを確認し……

「それじゃあ、行きましょう」

私達は美樹さやかの居る場所へ向かう事にした……

「そう云えば、前に杏子ちゃんとスーパーに弁当を買いに行ったときにね。半額シールが貼られるや否や、惣菜弁当コーナーが無法地帯と化してたんだよ」

向かう道中矢張り無音では寂しいので、場の雰囲気盛り上げる為に杏子ちゃんとの思い出話を一つ。

あ、それとだけど、手を繋いでる順番だけど、何が起きても良いようにと、私が上条恭介にちよっかいを掛けないようにという事で、左から杏子ちゃん、私、ほむらちゃん、上条恭介と並んでいる。

両手に華ってこういう事だね♪ まあ、端っこに1匹余計なのが居るけど♪

「ああ、そう云えばそんな事も有ったなあ」

「それで杏子ちゃんと私が突撃して、半額弁当全部持って帰ったの」
♪

「ふっ、茶髪と坊主頭の男が粹がってたが、アタシ達の相手にもならなかったな」

え？ 半額弁当の話は止めろって？

作品が違う？ さっきから一々煩いわね……どんなネタを使っても良いでしょうか？

「二人とも……御願いだから……時間は止まってると言っても、もう少し緊張感を持ってくれないかしら？ あと、弁当は自分達が食べる分だけ買うのがルールよ？」

「でも、私と杏子ちゃんてちゃんと全部食べたよ？ 弁当12食分」

「「って、食べすぎでしょ!？」」

当然の突っ込みが上条恭介とほむらちゃんから返って来る。

いやあ、確かにあの時はおなかパンパンになって暫く動け無かったよ♪

私が4食分で杏子ちゃんが8食分食べたんだっけ？

「食べ過ぎって？ 食わないといざという時に動け無いだろ？」

「いや、食べすぎたら太り過ぎて動けなくなると思いますよ!？」

最近上条恭介は突っ込み役が板についてきたね。

ボケも突っ込みも出来る汎用キャラとは……新しいジャンルとキヤラを確立する気なのかな？

「アタシ達魔法少女は体力使うんだよ」

うん、接近戦をする魔法少女は特にね♪ 杏子ちゃんが昔に魔教会でも言ってたけど、相当カロリー消費してるらしいしね♪

あ、ここでちょっとした豆知識だよ♪

人間が一日に生きる為に必要な最低エネルギーが体重×3kcalって言われてるの。つまり、体重50kgの人なら1500kcal必要って事ね。

これは一日中全く動かない時の値で、この数値に一日に動いたりした際に消費したカロリーがどんどん加算されていくの。

だから、逆の発想をすると、この数値より少ないカロリーしか1日に取らない場合は、逆に体重がどんどん減って行くわけ。

でも、筋肉が分解されて脂肪になるから、逆に体系的には太ってしまう事は有るけどね。

ほら、良く聞かない？ 筋肉質な人だとBMIの数値が非常に高くなってしまいう話とか？

「でも、そんなに食べてるのは貴方だけと思うわよ……私も美樹さやかも食事量は人並みよ」

「だから、胸が貧相なんだと思うよ」

ママさんの場合は少食だけど高カロリーなケーキとかを好んで食べてたから、あんな胸になったんだろうね。

御腹の脂肪の方はどうなってるか知らないけどね♪ どっちかというと、ママさんってぽっちゃり系だよね？

「アマタ、折檻しばくわよ？」

おっと、胸に関してのワードは拙かったらしく、遂に使う単語が綺麗な単語ではなくなって来た。

と、この様に最終的にはほむらちゃんも緊張感無しの状態で、次々と病院を進み、美樹さやかダンジョンの元へと歩を進める。

道中で固まってる警備員にマジックで落書きしようとする、私と杏子ちゃんがほむらちゃんから頭突きを喰らったのは内緒にしておこう……

両手が塞がってる故の攻撃方だが、正直拳骨より痛かった……私は杏子ちゃんに「落書きは日本文化。YOU書いちゃいなよ」と勾引かただけなのに……

そんなこんな様々なハプニングは有った物の、美樹さやかの死体が安置されてる部屋に無事に到着し、真っ先に部屋の中を確認する。

部屋の中には、簡単なベッドの上に横たわり顔と体ににシーツを掛けられている美樹さやかの死体。そして、天井の監視カメラと壁には少し不思議な絵が掛けられてるくらいだった。

絵には『Please find me』って書いて有るけど？
何て読むんだろう？ 結構最近まで眼が見えなかった故に、漢字とか外国語とかは未だに分かんないんだよねえ……ローマ字もちゃんと読めないし……

まあ、正直な話だけど、雰囲気こそぐわない絵くらいしか怪しげな点は見当たらない。

「さやかとカメラと変な絵しか無いじゃねえか？」

「そうね……でも、この絵……プリーズ・ファインド・ミー、『私を見つけて』って書いてあるわよ？」

ああ、プリーズファインドミーって読むのねアレ。

発言しないで良かった良かった♪ 私の無知っぷりを晒す所だったよ♪

「どう云う事だよ？」

「もしかしたら落書きの魔女の隠れん坊と関係有るかもしれないから、絵を持って外に出るわよ。杏子、外してくれる？」

「持って出たら、監視カメラ有るから拙いんじゃないのか？」

杏子ちゃんに絵を壁から外すように求めるが、杏子ちゃんが脳裏に浮いた疑問を投げかける。

「大丈夫よ、この監視カメラは固定されたまま動かない固定型だし、カメラが向いてる先は美樹さやかであって絵ではないから、問題無いわ」

が、ほむらちゃんもしっかりと確認してから発言してた様で、間髪いれず大丈夫な事を伝える。

「じゃあ、外すな」

手が絵が掛けられている高さに届かないし、手を繋いでる状態では自慢の機動力も発揮できないので、武器やりを召喚し、先端部分を絵の掛け軸の凹凸部分に引っかけてゆっくりと手元へと降ろす。

長獲物だと、こう云う時とか背中が痒くなった時とか便利だね。孫の手的ポジションって云うのかな？

マスケット銃だと、背中が痒いからって銃口で掻こうとすると、

ちょっとした拍子にトリガーを引いてしまいそうで冷や冷やするんだよね……

今、そんな危険な物を孫の手代わりにするなって突っ込みが聞こえたような？

まあ、気にしない気にしない♪

杏子ちゃんが絵を外したのを確認したら、再度ほむらちゃんは部屋をすみずみまで見渡し、撤退の合図をする。

ちなみに、一切上条恭介の発言が無かったのは、美樹さやかを見るのに夢中で、会話に参加してなかったようだ。

あっ、上条恭介の沽券に関わるので、別に体に掛けられている布を剥いで、裸を見てムラムラとかはしてなかった事を追記しておく。

そして、私達はまたもや呑気に帰り道をわいわい騒ぎながら謎の絵を片手に練り歩き、出口を目指した。

ちなみに絵に関しては杏子ちゃんが片手で担いで持って帰る事になった。理由は手が空いてるのは端に居る杏子ちゃんと上条恭介だけなのだが、上条恭介は謎の物体を片手で抱えているため塞がっている為、持てる人が杏子ちゃんだけになって強制的に持って帰る事になったのだ。

「女の子に荷物を持たせるなんて、男として最低よねえ」とか弄りながら帰ってて、帰り道にほむらちゃんが腕の骨を粉砕する気でギュッと私の手を強く握ってくれたのは良い思い出だった……

漫画とかに良くついている軋む擬音と同じ物が静かな空間に鳴り響いたよ……というか、ギュって擬音よりゴリゴリゴリって万力で締めるような擬音の方が良いのかな？

あっはっは、まあ、痛みに関してはシャットダウンできるので痛くは無いんだけどね♪

そんなこんなで病院の敷地内から脱出した所で、ほむらちゃんは

魔法を解除し、時間の流れを正常に戻す。

「杏子、さっきの絵を貸してくれる？」

「ほらよ」

いの一番に行った事は、先程病院から回収した絵の確認。真剣なまなざしで凝視。

絵の表面を何度も触ったりして執拗に確認をする。

確かにあの部屋の中で浮き過ぎだったとは言えども、ここまでほむらちゃんが執着するのは可笑しいので、私も魂之眼球を召喚し、サーモグラフィーモードにして集中して観察する。

だが、ほむらちゃんが触れてる場所以外の温度は一定で不審な点は見られない。

「ほむらちゃん、そんなにその絵が不思議なの？」

「ええ……過去にはこんな絵は無かったもの……」

最後の方はぼそっと私にだけ聞こえる様に発する。まあ、過去に無かった物が今回だけ出現するのは可笑しい。ましてや、こんな謎の絵がと云う事である。

今度は絵を額縁から外し、絵の裏面を見ると、ほむらちゃんの顔つきが変わる。

「思った通りね、落書きの魔女の結界を見つけたわ……」

絵を自分の方から裏返し、絵の裏面を私達に見えるようにしてくれる。

そう絵の裏には、黒く渦巻く結界の入口が描かれていたのだった

……

「どうりで、私の能力に引っかからない訳だ……」

と云うか、絵の裏面に結界を作るなんて、正直誰も思うまい。私達も、ほむらちゃんが体験した過去のデータが無い限り、あんな場所から絵を持ち出して額縁から取り出すなんて真似はしないから、一生見つからず仕舞いに終わってたのは目に見えてる。

「ちっ、こんな場所に結界作りやがって……うんなん、誰も気がつかねえよ!!」

「アマタ、残り時間は？」

「後1時間ちよつとは有るよ。結界の中の探索をする為に魂之眼球を侵入させるね」

ほむらちゃんが持つてる絵の結界の入口に次々と魂之眼球を飛び込ませて、先行部隊として内部の確認を行う。

結界の中の壁には沢山の可愛い絵が描かれており、結界はまるで巨大な美術館のようだった。

その巨大な美術館の置くにちよこんと置かれているパイプ椅子に目的の人物は居り、大きなキャンバスに美樹さやか絵を描いて私達が来るまでの時間つぶしをしていた。

美樹さやかの絵はまるで本人が絵の中の世界に入ったのかと錯覚してしまう出来であり、またあまりに精巧な出来に、絵から出て来そうに感じしてしまう気持ち悪さも有った。

まあ、取り敢えずは発見報告だね。

「見つけたよ。結界の中に普通に居るよ。トラップとか見当たらないし、絵を描いて遊んでる辺りから戦闘意思は感じられないよ」

「分かったわ。それじゃあ、行くわよ」

短いようで長い長い隠れん坊に終止符を打ちに、私達は結界の中に飛び込んだ。

さあ、絵を描こう。

落書きでも良い、下手でも良い、描く事に意味が有るんだから、僕は空を描きたい

鉄の鳥が飛んで居るあの赤い空を

後世の子供達に同じ過ちをしないように見せる為に

例え抑圧されても僕は描かないといけない

絵だけは自由で無いといけないから

（ Draw the sky ）

<有りがたき頂き物>

>i34702—3257<

棚方さんより星屑アマタ（魔法少女ver）を戴きました><
め、滅茶苦茶可愛い……おお、ドレスの裾や皺も凄く丁寧に描か
てる。

と云うか、服の拘りっぷりが凄い……目玉模様や、レース等もしつ
かりと綺麗に描かれていますし><

本当に細部まで拘って描いて下さってありがとうございます><

正直……最近は読者に申し訳ない気持ちで一杯です……

活動自体かなり疎かになってますし、中々他の方の活動報告にも顔
を出せてませんし……

早々と全てを終わらせ、完全復帰したいです。

今年は恐らく、正月三が日を除いて冬休み返上になりそうだなあ（
泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4975r/>

魔法少女あまた☆マギカ

2011年12月1日20時55分発行